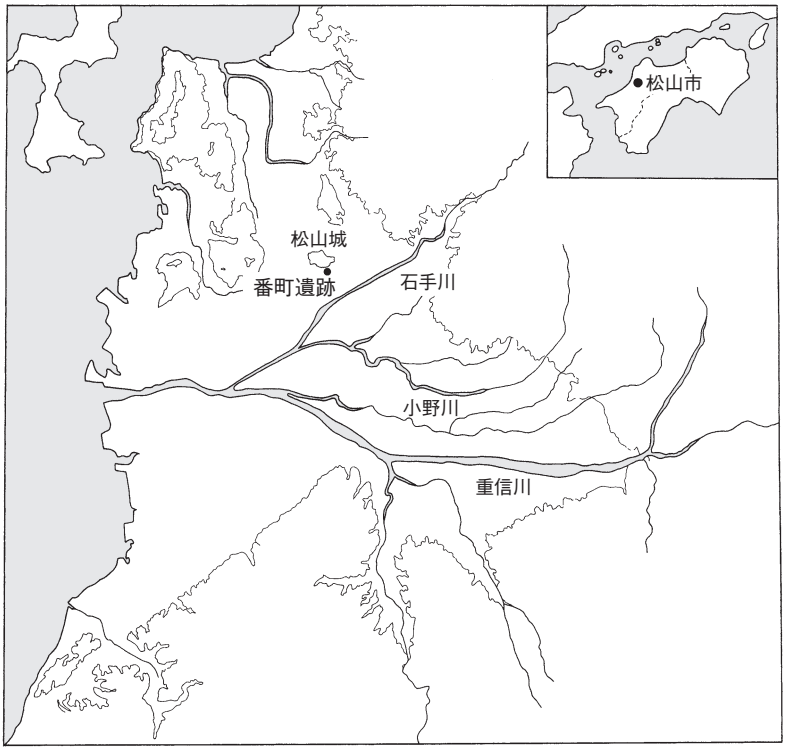
番　町　遺　跡

2006

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

番　町　遺　跡



2006

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　上空より望む松山城と調査地

序

「春や昔十五万石の城下哉」という正岡子規の句のとおり、松山市は、勝山丘陵にそびえ立つ松山城を中心に開けた城下町です。この松山城のすぐ南麓で、子規にもゆかりの深い小説、「坂の上の雲」をテーマとした記念館の建設が進んでいます。この事業に伴って行われたのが今回の調査です。調査では、城下町らしく武家の屋敷跡の建物や遺構、なかでもとりわけ状態の良好な園池遺構が発見され、注目を浴びるところとなりました。また、これらの遺構とともに出土した多くの遺物は、江戸時代の武家の暮らしの一端をうかがい知る貴重な資料となっています。

このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまものと感謝申し上げます。

本書が、今後各方面でご活用いただければ幸いに思います。

平成18年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本報告書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが、平成15年から16年の間、松山市一番町三丁目20番において、「（仮称）坂の上の雲記念館」建設に伴い実施した番町遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に使用した方位は座標北である。

3．遺物の実測・製図、遺構の製図は、丹生谷道代、矢野久子、多知川冨美子、萩野ちよみ、矢鋪妙子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者および大西朋子が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物の縮尺は、土器・土製品を１／３、瓦を１／４にすることを原則としたが、大型品については１／６で掲載している。金属製品・銭貨・装身具は１／２とした。

6．調査に伴う基準点測量は㈱GIS四国に、航空写真撮影は㈱パスコに、また写真測量については国際興業株式会社にそれぞれ委託した。

7．調査および報告書作成においては、次の方々に貴重なご教示をいただいた。記して感謝いたします。井汲隆夫、岡村道夫、奥村信一、小野健吉、下條信行、鈴木正貴、田崎博之、中野浩幸、長井数秋、名本二六雄、前園実知雄、村上恭通、山中功（敬称略、五十音順）

8．松山城下絵図の掲載については、所蔵者である藤村悌氏に特段のご高配をいただいた。記して感謝いたします。

9．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。

10．本報告書の執筆、編集は栗田茂敏が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
１．調査に至る経緯……1
２．調査・刊行組織……2
３．環　境……2
（１）　地理的環境……2
（２）　歴史的環境……3
１）中世以前……3
２）中世以降……5
第２章　調査の成果……8
１．試掘調査……8
（１）　概　要……8
（２）　試掘調査出土遺物……9
２．遺構と遺物……13
（１）　土　層……13
（２）　中世の遺構と遺物……14
１）土坑ＳＫ６……14
２）建物跡ＳＢ５……21
（３）　江戸時代以降の遺構と遺物……21
１）建物跡……21
２）井戸ＳＥ１……25
３）地下蔵ＳＫ３……28
４）土　坑……32
５）不明遺構・埋甕……73
６）柱穴出土遺物……78
７）園池遺構ＳＧ１……79
８）攪乱出土および採集遺物……121
９）包含層出土の遺物……135
第３章　まとめ……151

挿　図　目　次

図１　調査地と周辺の主要遺跡（Ｓ＝１：30,000）……4
図２　試掘調査のトレンチ配置……8
図３　調査地区割り図……9
図４　試掘調査出土遺物(1)……10
図５　試掘調査出土遺物(2)……11

図６　試掘調査出土遺物(3)……12
図７　調査区南壁土層図……13
図８　遺構全測図……15
図９　土坑ＳＫ６……17
図10　ＳＫ６出土遺物(1)……18
図11　ＳＫ６出土遺物(2)……19
図12　掘立柱建物ＳＢ５……20
図13　ＳＢ５出土遺物……21
図14　掘立柱建物ＳＢ１……22
図15　掘立柱建物ＳＢ２……23
図16　掘立柱建物ＳＢ３……24
図17　掘立柱建物ＳＢ４……25
図18　井戸ＳＥ１……26
図19　ＳＥ１出土遺物……27
図20　地下蔵ＳＫ３……28
図21　ＳＫ３出土遺物(1)……29
図22　ＳＫ３出土遺物(2)……30
図23　ＳＫ３出土遺物(3)……31
図24　調査区南東部土坑群……33
図25　土坑ＳＫ１……34
図26　ＳＫ１出土遺物……34
図27　土坑ＳＫ２……35
図28　ＳＫ２出土遺物……35
図29　土坑ＳＫ21……36
図30　ＳＫ21出土遺物……36
図31　土坑ＳＫ22……37
図32　ＳＫ22出土遺物……38
図33　土坑ＳＫ33……38
図34　ＳＫ33出土遺物……39
図35　土坑ＳＫ39……39
図36　ＳＫ39出土遺物……40
図37　土坑ＳＫ51……40
図38　ＳＫ51出土遺物……41
図39　調査区西部土坑群……42
図40　土坑ＳＫ４……43
図41　ＳＫ４出土遺物(1)……44
図42　ＳＫ４出土遺物(2)……45
図43　土坑ＳＫ５……46

図44　ＳＫ５出土遺物……47
図45　土坑ＳＫ８……48
図46　ＳＫ８出土遺物……48
図47　土坑ＳＫ９……49
図48　ＳＫ９出土遺物(1)……50
図49　ＳＫ９出土遺物(2)……51
図50　土坑ＳＫ10……52
図51　ＳＫ10出土遺物……53
図52　土坑ＳＫ11……54
図53　ＳＫ11出土遺物……55
図54　土坑ＳＫ12・13……55
図55　ＳＫ12出土遺物……56
図56　ＳＫ13出土遺物……56
図57　土坑ＳＫ14……57
図58　ＳＫ14出土遺物……57
図59　土坑ＳＫ15……58
図60　ＳＫ15出土遺物……58
図61　土坑ＳＫ17・18……59
図62　ＳＫ17出土遺物(1)……60
図63　ＳＫ17出土遺物(2)……61
図64　ＳＫ18出土遺物……62
図65　土坑ＳＫ19……63
図66　ＳＫ19出土遺物……64
図67　土坑ＳＫ34……65
図68　ＳＫ34出土遺物……65
図69　土坑ＳＫ36……66
図70　ＳＫ36出土遺物……66
図71　土坑ＳＫ37……67
図72　ＳＫ37出土遺物……68
図73　土坑ＳＫ38……68
図74　ＳＫ38出土遺物(1)……69
図75　ＳＫ38出土遺物(2)……70
図76　土坑ＳＫ44　……71
図77　ＳＫ44出土遺物……72
図78　土坑ＳＫ45……72
図79　ＳＫ45出土遺物……73
図80　土坑ＳＫ46……73
図81　ＳＫ46出土遺物……73

図82　ＳＸ１出土遺物……74
図83　ＳＸ２出土遺物(1)……75
図84　ＳＸ２出土遺物(2)……76
図85　ＳＸ３出土遺物……77
図86　埋甕１……78
図87　柱穴出土遺物……78
図88　ＳＧ１・ＳＤ１接続部検出時の状況……80
図89　ＳＧ１検出状況……81
図90　ＳＧ１・ＳＤ２接続部検出時の状況……83
図91　改修後ＳＧ１出土石臼(1)……84
図92　改修後ＳＧ１出土石臼(2)……85
図93　改修後ＳＧ１埋土出土遺物(1)……86
図94　改修後ＳＧ１埋土出土遺物(2)……87
図95　改修後ＳＧ１埋土出土遺物(3)……88
図96　ＳＧ１改修状況断面図……89
図97　改修時ＳＧ１造成土出土遺物(1)……90
図98　改修時ＳＧ１造成土出土遺物(2)……91
図99　改修時ＳＧ１造成土出土遺物(3)……92
図100　ＳＧ１全測図……93
図101　ＳＧ１護岸測量図(1)……95
図102　ＳＧ１護岸測量図(2)……96
図103　ＳＧ１護岸測量図(3)……97
図104　ＳＧ１護岸測量図(4)……98
図105　ＳＧ１護岸測量図(5)……99
図106　ＳＧ１護岸測量図(6)……99
図107　ＳＧ１護岸測量図(7)……101
図108　ＳＧ１護岸測量図(8)……102
図109　ＳＧ１護岸測量図(9)……103
図110　ＳＧ１護岸測量図(10)……104
図111　ＳＧ１護岸測量図(11)……105
図112　ＳＧ１護岸測量図(12)……106
図113　ＳＧ１護岸測量図(13)……107
図114　ＳＧ１池底堆積土、池底包含層出土遺物……109
図115　ＳＧ１石組み遺構１……110
図116　ＳＧ１石組み遺構２……111
図117　ＳＧ１魚溜ＳＫ52……112
図118　ＳＧ１土坑ＳＫ53……113
図119　ＳＧ１土坑ＳＫ54……113

図120　ＳＧ１土坑ＳＫ55……114
図121　ＳＫ55出土遺物……115
図122　水路ＳＤ１……116
図123　ＳＤ１出土遺物……117
図124　水路ＳＤ２……117
図125　ＳＤ２出土遺物(1)……119
図126　ＳＤ２出土遺物(2)……120
図127　ＳＤ２出土遺物(3)……120
図128　ＳＧ１周辺採集遺物(1)……122
図129　ＳＧ１周辺採集遺物(2)……123
図130　攪乱１出土遺物……124
図131　調査区西部採集遺物(1)……125
図132　調査区西部採集遺物(2)……126
図133　調査区西部採集遺物(3)……128
図134　調査区西部採集遺物(4)……129
図135　調査区西部採集遺物(5)……130
図136　調査区南部採集遺物……131
図137　調査区北東部採集遺物……132
図138　調査区東部採集遺物……133
図139　表採遺物……134
図140　包含層出土弥生土器……135
図141　包含層出土土師器(1)……136
図142　包含層出土土師器(2)……137
図143　包含層出土土師器・黒色土器……138
図144　包含層出土黒色土器・瓦器・土師器……139
図145　包含層出土須恵器(1)……141
図146　包含層出土須恵器(2)……142
図147　包含層出土須恵器(3)……143
図148　包含層出土須恵器(4)……144
図149　包含層出土須恵器(5)……145
図150　包含層出土須恵器(6)……146
図151　包含層出土須恵器(7)……147
図152　包含層出土緑釉陶器……147
図153　包含層出土埴輪……148
図154　包含層出土土製品……149
図155　包含層出土金属製品・石製品……149
図156　調査地に池の描かれた古絵図（藤村悌氏蔵）……153

図　版　目　次

巻頭図版　上空より望む松山城と調査地

図版１　調査地調査前全景(1)（西より）　調査地調査前全景(2)（南東より）
図版２　遺構検出状況（東より）　調査状況（東より）
図版３　遺構完掘状況（東より）　調査区南西部土坑群（北西より）
図版４　ＳＫ６遺物出土状況(1)（北より）　ＳＫ６遺物出土状況(2)
図版５　ＳＥ１完掘状況（東より）　ＳＥ１半裁状況（東より）
図版６　地下蔵ＳＫ３完掘状況(1)（南より）　地下蔵ＳＫ３完掘状況(2)（北東より）
図版７　ＳＫ４遺物出土状況（東より）　ＳＫ17遺物出土状況（東より）
図版８　ＳＫ36遺物出土状況（東より）　ＳＫ38遺物出土状況（南西より）
図版９　ＳＸ１遺物出土状況（南東より）　ＳＸ２遺物出土状況（南より）
図版10　包含層遺物出土状況(1)　包含層遺物出土状況(2)
　　包含層遺物出土状況(3)
図版11　ＳＧ１検出状況(1)（西より）　ＳＧ１検出状況(2)（南東より）
図版12　ＳＧ１検出状況(3)（西より）　検出時のＳＧ１とＳＤ１接続部（西より）
図版13　ＳＤ２検出状況（西より）　ＳＤ２調査状況近景（西より）
図版14　ＳＧ１とＳＤ２接続部（東より）　ＳＧ１敷石施設近景（北西より）
図版15　改修後のＳＧ１完掘状況（西より）　改修後ＳＧ１池底遺物出土状況
図版16　改修後ＳＧ１雨後の滞水状況（西より）　ＳＧ１改修部の断ち割り（北東より）
図版17　ＳＧ１敷石施設下面給水管検出状況（南より）　ＳＧ１改修埋め立て土遺物出土状況
図版18　ＳＧ１敷石施設撤去後の護岸(1)（南東より）
　　ＳＧ１敷石施設撤去後の護岸(2)（東より）
図版19　ＳＧ１完掘状況(1)（南上空より）　ＳＧ１完掘状況(2)（南西上空より）
図版20　ＳＧ１石組み遺構１と魚溜ＳＫ52（北西より）　ＳＧ１石組み遺構１近景（南西より）
図版21　ＳＧ１北護岸とＳＫ53・54（南西より）　ＳＧ１ＳＫ53完掘状況（南より）
図版22　ＳＧ１ＳＫ54完掘状況（南西より）　ＳＧ１ＳＫ55甕出土状況
図版23　ＳＧ１完掘状況(3)（南東より）
図版24　試掘調査出土遺物(1)
図版25　試掘調査出土遺物(2)
図版26　ＳＫ６、地下蔵ＳＫ３出土遺物
図版27　地下蔵ＳＫ３、ＳＫ１・２出土遺物
図版28　ＳＫ４出土遺物
図版29　ＳＫ４・５出土遺物
図版30　ＳＫ８・９出土遺物
図版31　ＳＫ９・10出土遺物
図版32　ＳＫ11・13・14・15出土遺物

図版33　ＳＫ17出土遺物
図版34　ＳＫ17・19・21・36・37出土遺物
図版35　ＳＫ38出土遺物(1)
図版36　ＳＫ38出土遺物(2)
図版37　ＳＫ44・46・51、ＳＸ１・３出土遺物
図版38　ＳＸ２出土遺物
図版39　埋甕１、改修時ＳＧ１造成土出土遺物
図版40　ＳＧ１池底、改修時ＳＧ１造成土、改修後ＳＧ１埋土出土遺物
図版41　ＳＧ１周辺採集遺物
図版42　ＳＧ１ＳＫ55、ＳＤ１・２出土遺物
図版43　ＳＤ２出土遺物
図版44　調査区東部・北東部採集遺物
図版45　攪乱１出土、出土地点不明表採遺物
図版46　調査区西部採集遺物(1)
図版47　調査区西部採集遺物(2)
図版48　調査区西部採集遺物(3)、金属製品

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

『坂の上の雲のまちづくり』は、松山市が21世紀のまちづくり基本構想に基づき推進している事業である。このまちづくりの中核を担う施設として、市内中心部、松山城南西麓に建設が計画されたのが『坂の上の雲記念館』である。

平成15年３月11日、松山市産業経済部観光振興課より、『坂の上の雲』記念館建設工事に先立って、埋蔵文化財の試掘・確認調査申請が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地のうち「№74　城ノ内古墳」に属している。申請地の一角を占める北東部の丘陵斜面上方に存在が予想されている古墳関連の遺物の出土や、松山城の存在する勝山丘陵南東麓という申請地の位置関係や古絵図から、近世城下関連の遺構の存在が予想された。

申請をうけた文化財課は、同年６月２日・３日の両日、申請地内に８本のトレンチを設定することによって試掘調査を実施した。その結果、申請地の全域にわたって、中世あるいは江戸時代の遺物を包含する層や遺構、また部分的に古墳時代～古代の包含層などが確認されるとともに、申請地北寄りで、園池の一部と考えられる石組みや貼り石が検出された。これらのことから、当申請地内の建設工事によって影響が及ぶ部分については本格調査が必要と判断された。

産業経済部内では、平成15年４月より「坂の上の雲まちづくりチーム」を発足させ、記念館建設をはじめとするまちづくりに関する諸事業をこのチームが担当することとなった。そこで、以上のような試掘結果をふまえた遺跡の取り扱いに関する協議が、坂の上の雲まちづくりチームと文化財課との間で行われた。その結果、該当エリアについての本格調査を㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となって実施し、記録保存することとなり、同年８月１日より本格調査が開始された。

さて、調査では本報告において報告されるように、江戸時代の武家屋敷跡が検出された。この屋敷地には江戸時代の建物跡のほか、屋敷に伴う園池遺構が存在しており、江戸時代以降何度かの改修を加えられながら、昭和の中頃まで存在し続けたことがわかった。遺構の遺存状況としては、遺存状況の悪い建物跡等の遺構に対して園池遺構は良好に遺存しているといった状況であった。このような状況をふまえて、館建設担当部署である坂の上の雲まちづくりチームと松山市教育委員会は、この園池遺構の取り扱いについて協議を重ねた。その結果、館建設にあたってはこの園池遺構を保存し、場合によっては活用しながらという方針がまちづくりチームより示されることとなった。

15年度末までのこの遺構に関する調査は、このように保存が前提となったため、数度の改修を受けた最終段階の園池の姿の状態までにとどめた。しかし、チームとしては、活用するにしても、より築造当初に近い姿での活用を望み、また、この段階では必ずしも明確にはなっていなかった築造年代をより正確に把握して活用につなげたいとの方針から、当初15年度一杯で終了する予定であった調査を16年度もさらに継続し、池を嵩上げして設置した新しい段階の各施設を撤去しながら江戸時代池底までの調査を実施することとなった。結果、すべての調査が終了したのは、当初の予定を３ヶ月オーバーした６月30日のことであった。

2．調査・刊行組織（平成18年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居貴美
事務局	局長	石丸　修
	企画官	松本義文
	〃	江戸通敏
	〃	仙波和典
文化財課	課長	篠原忠人
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	一色　巧
	次長	石丸允良
	次長	丹生谷博一
	調査監	杉田久憲
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一
	学芸係長	大北冬彦
	次長兼管理係長	重松幹雄
	次長兼調査係長	西尾幸則
	調査員	栗田茂敏
	〃	吉岡和哉

調 査 地　松山市一番町三丁目20番
遺跡名称　番町遺跡
調査期間　平成15年８月１日～平成16年６月30日
面　　積　1,017.5㎡（1,924.63㎡のうち）

3．環　境

（1）　地理的環境

松山平野は、重信川・石手川・小野川の３大河川をはじめとする大小の河川の沖積作用によって形成されたいくつかの扇状地と氾濫原からなっている。番町遺跡は、このうち石手川扇状地上の扇端より約１㎞遡った地点付近、分離丘陵勝山の南東麓直近に位置する。勝山は、国指定史跡となっている平山城、松山城が所在する丘陵であり、その地質は、北西部は花崗岩、東南部は和泉砂岩からなっている。現在、道後平野を北東から南西に流れ、同じく平野南部を西流する重信川と出合で合流する石手川は、17世紀初め頃といわれる足立半右衛門重信による改修までは、現流路よりもやや北、一説には現松山市街中心部の湯渡から持田町の中央、さらに二番町付近を西流し、今の市役所前あたりから三番町妙清寺近辺を抜け、吉田浜に注いでいたといわれている。そのルートの詳細はともかく、調査地の遺構面は、山側である調査地北東部は先述の和泉砂岩の地山からなるが、その他の大部分は、改修以前の石手川旧流路の氾濫による堆積土砂や砂礫、および、勝山の丘陵斜面を流下した土砂の堆積によって成り立っている。この堆積土砂には、石手川の氾濫によって運ばれてきた遺物群、また、勝

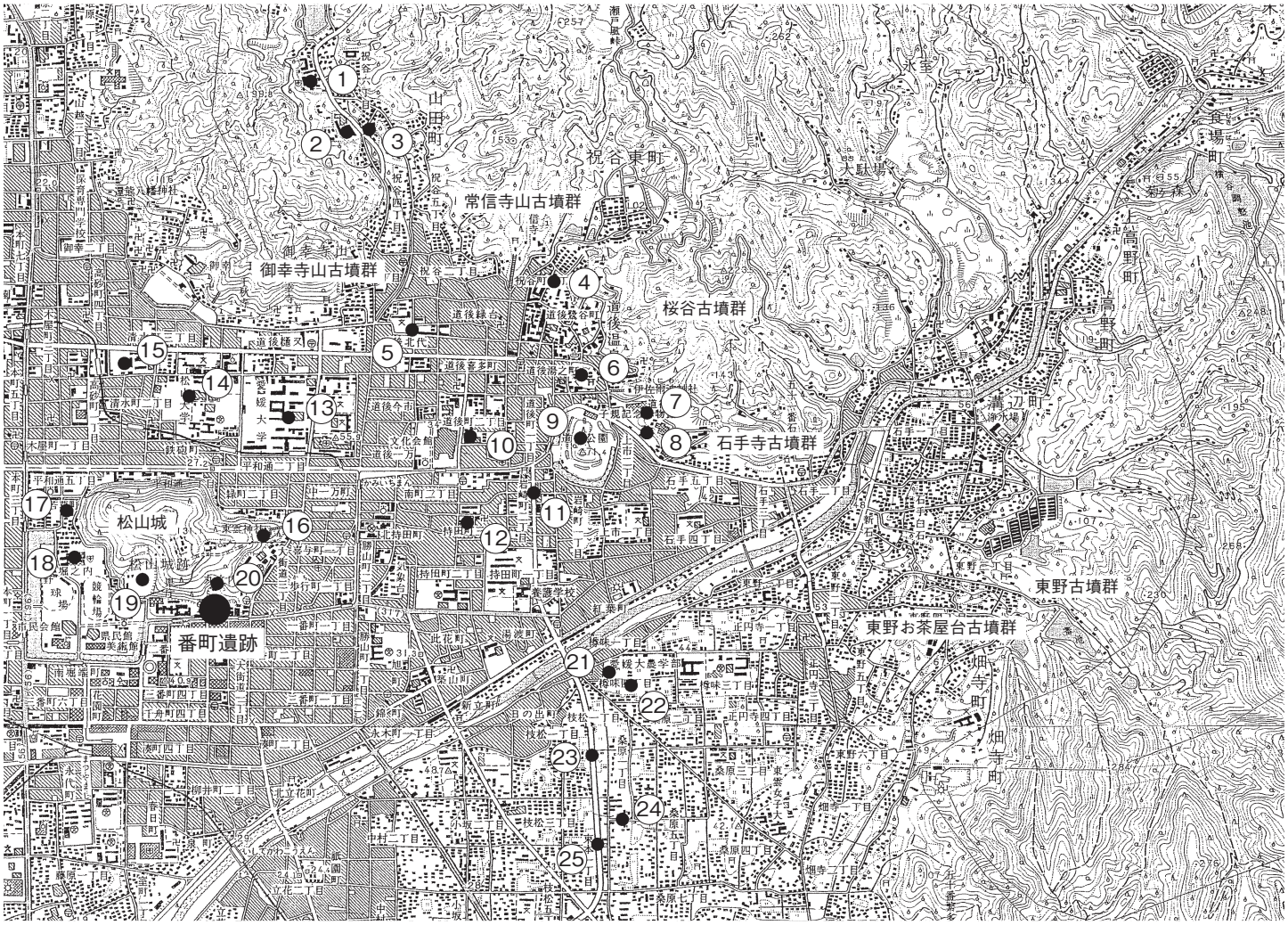
山丘陵上に存在する弥生時代、古墳時代やそれ以降の遺跡群から流下した遺物群が含まれている。

（２） 歴史的環境

１）中世以前

ここでは、遺跡が位置する石手川扇状地上、およびその周辺域での遺跡分布をみていくことにする。このエリアで、遺構や遺物として遺跡が確認できるのは、縄文時代後期以降のことである。文京遺跡は、勝山（松山城）北方の愛媛大学を中心にひろがる弥生時代中～後期の拠点集落としてつとに名を知られているが、この文京遺跡の11次調査において縄文後期の屋外炉が検出されている。また、その近隣の南海放送遺跡でも後期の包含層が確認されている。この遺跡では、後期のみならず晩期後葉の包含層も確認されているが、同様に文京遺跡内の８次･９次調査でも晩期の包含層が検出されている。調査地北東約1.5㎞の扇状地扇央付近に位置する道後今市遺跡では11号土坑より22点の晩期後葉の遺物の出土があり、一括遺物として基準資料となるものと評価されている。その他、この道後今市遺跡近隣の持田町三丁目遺跡では晩期中葉の遺物の出土があり、また同様、近隣の岩崎遺跡では後・晩期の遺物の出土がみられている。

弥生時代前期の遺構としてよく知られているのは、松山東中学校構内で行われた文京遺跡４次調査での前期前半の松菊里型住居がある。また、先述の持田町三丁目遺跡では、前期前半～後半の土坑墓･木棺墓・土器棺墓群が、一部、副葬子壺や石剣を伴って検出されており、弥生前期の墓域の調査例として稀少な資料となっている。その他、前期では御幸寺山出土の綾杉文壺が学史的にはよく知られているが、遺構等の詳細はよくわかっていない。弥生時代も中期以降になると遺跡数は格段に増加する。まず、前期末から中期初頭の遺跡には道後冠山遺跡、姫塚遺跡、土居窪遺跡等、学史的によく知られた遺跡が多い。また、近年では岩崎遺跡でもこの時期の溝や土坑が多数検出されている。中期中葉の遺跡は、主に扇状地縁辺の丘陵あるいは分離丘陵上で検出されている。扇状地北の祝谷地区の丘陵には六丁場遺跡、大地ケ田遺跡が分布し、また、本調査地直近の勝山丘陵上では東雲神社遺跡がよく知られている。平地部でのこの時期の遺構は、文京遺跡３次調査や岩崎遺跡で散見されるが、やはり丘陵部に比べると希薄であり、大きくみるとこの時期における集団の丘陵部への移動という傾向を認めることができる。中期後半から後期前半にかけては、先述の文京遺跡が盛期を迎える時期である。集落の中心部に超大型の掘立柱建物や、溝を伴う方形の祭壇とされる方形周溝状遺構を配置し、東西300ｍ、南北200ｍの範囲に大小の竪穴住居・掘立柱建物が密集している。出土するものには、多量の土器･石器のほか、鉄製武具･工具、鉄滓･ガラス滓、破鏡、石製指輪、多量の炭化米といった具合で、松山平野にあって盟主的な拠点集落であったものと考えられている。後期中葉～末にかけての遺跡は、やはりこの文京遺跡西方直近の松山大学構内遺跡や松山北高遺跡、あるいはさらに西方の若草町遺跡など勝山丘陵の北～北西部や（松山平野における弥生時代を通じた遺跡群のうち、勝山の北側に文京遺跡を中心としてひろがる遺跡のまとまりを「道後城北遺跡群」と呼んでいる）、石手川を南に越えた桑原・枝松・束本遺跡や釜ノ口遺跡など、扇状地上の各地域に拡散している。これらのうち、若草町遺跡では弥生時代終末の墳丘墓に伴って大量の土器が出土し、また包含層資料ではあるが、ほぼ完形の重圏日光鏡が出土している。束本遺跡周辺には大型の竪穴住居が密集して存在することが知られており、４次調査では周提帯を持つ直径12ｍにも及ぶ大型円形住居ＳＢ203が調査されている。また、直径8.9ｍの円形住居ＳＢ302からは舶載破鏡の出土があり、やはりこの束本遺跡を含めた桑原・枝松



1．祝谷六丁目遺跡
2．祝谷六丁場遺跡
3．祝谷大地ケ田遺跡
4．湯之町廃寺
5．土居窪遺跡
6．道後冠山遺跡
7．道後姫塚遺跡
8．内代廃寺
9．湯築城跡
10．道後今市遺跡
11．岩崎遺跡
12．持田町三丁目遺跡
13．文京遺跡
14．松山大学構内遺跡
15．松山北高等学校遺跡
16．東雲神社遺跡
17．若草町遺跡
18．松山城三之丸
19．松山城二之丸
20．萬翠荘
21．樽味高木遺跡
22．樽味四反地遺跡
23．枝松遺跡
24．桑原遺跡
25．束本遺跡

図１　調査地と周辺の主要遺跡（Ｓ＝１：30,000）

遺跡には後期後半の有力集団が想定されている。

古墳時代の集落は、弥生時代にくらべるとこの扇状地上ではやや希薄で、道後城北の文京遺跡や松山大学構内遺跡、松山北高遺跡、道後今市遺跡などに中～後期の集落が存在するが、弥生時代ほどの濃密さはない。近年、この扇状地上の古墳時代集落で注目されるのが、扇頂付近石手川左岸の樽味高木・四反地遺跡等である。これらの遺跡では、古墳時代前期から後期にかけての集落遺構が濃密な分布を示していることに加えて、さらに注目される遺構に樽味四反地遺跡６次・８次調査で検出された２棟の超大型掘立柱建物がある。これらはともに前期に属する総柱の建物で、首長居館の一部である可能性を指摘されている。

古墳は、石手川に開析された高縄山系南西麓に後期を主とした古墳群が多く分布している。東野古墳群、石手寺古墳群、桜谷古墳群、常信寺山古墳群、御幸寺山古墳群などがそれであるが、一方、石手川南の中位段丘上にも東野お茶屋跡古墳群などの中～後期の群集墳が存在している。また、調査地直近の分離丘陵勝山にも城之内古墳群、東雲神社１～３号墳など多くの後期古墳の存在が確認されている。

古代では、白鳳時代の寺院址である湯之町廃寺、内代廃寺が道後地区に存在していることが知られているが、発掘調査により注目される遺物を出土したのは樽味四反地遺跡５次調査である。この調査で出土した奈良三彩子壺は、県内唯一の三彩出土例である。また、この調査では複数の陶硯や緑釉碗・皿を出土しており、先ほどの三彩も含めて流路出土資料ではあるが、通常の古代集落とは異なった遺跡の存在を推定させる資料である。

２）中世以降

昭和63年・平成元年度以来十数年にわたる大小の調査を経て整備に至った国指定史跡湯築城跡は、南北朝以降250年にわたって伊予を支配した河野氏の居城である。河野氏の没落による1585年の湯築開城以降、河野氏に代わって伊予国の領主となった小早川隆景や福島正則がこの城に居をかまえたが、いずれも短期間を伊予で過ごしたのみで、それぞれ筑前や清洲に転封となった。その後、文禄の役の功によって伊予国正木六万国の城主となった加藤嘉明は、慶長の役の戦功により所領を十万石に加増された。後に関ヶ原の合戦で徳川方につき二十万石の大名となった嘉明は、1601年松山平野の中心をなす勝山への築城を家康に具申し、認められるところとなり、当地の政治・文化の中心が湯築城の所在する道後から勝山周辺に移ることとなった。この築城に際して嘉明が最初に着手したのが、先述の湯山川（現石手川）の改修である。計画される城下町を氾濫から守り、また、城の要害にも備え、加えて近郷の田畑の灌漑に資するためでもある。その任にあたったのは、家臣足立半右衛門重信であった。改修は、湯山川の流路を南へ変更し、平野南方を西流する伊予川（現重信川）に合流させるというもので、半右衛門の名は改称された伊予川の名称として現在まで残っている。勝山築城の普請奉行を務めたのも足立半右衛門重信であった。城は、慶長７（1602）年の起工から20余年の歳月をかけて、寛永４（1627）年、城郭としての一応の完成をみた。これに併行して城下町の整備も進められた。その構想は、まず、勝山の麓に二之丸をはじめとして武家屋敷を設け、城西ならびに城南・城東の三方面に商家町を置き、寺院を城北の山越の地に集約して寺町を形成するといったものであった。

以上のような経緯で城下町松山の礎を築いた加藤嘉明は、寛永７年、会津転封を命ぜられ、松山の地を離れた。この後を受けて藩主として松山に赴いたのは、出羽の国上ノ山の領主であった蒲生忠知

である。忠知は松山藩領と近江国日野の地とを併せた二十四万石を領有していた。忠知は、松山に在城すること７年４ヶ月、寛永11（1634）年、参勤交代の途中京都で没したが、嗣子がなかったため蒲生家は断絶した。この忠知の治世の間に、二之丸藩邸が完成をみている。忠知亡き後、城主を失った松山城は、幕命によって11ヶ月の短期間ではあったが、大洲藩主らの預かるところとなった。これを松山城在番時代という。

寛永12（1635）年、伊勢国桑名城主であった松平定行が松山藩主十五万石に任ぜられ、幕末まで15代にわたる松平（久松）家の治世が続くことになる。明治２（1869）年の版籍奉還による松山藩設置後も、旧藩主を藩知事とする政治体制は不変であったが、明治４（1871）年、廃藩置県により松山県が設置されるとともに、旧藩主は東京への移住を命ぜられ、これに伴い官選の県令もしくは権令・参事が首長として就任することとなった。松山県は、翌年の今治、西条、小松、川之江の併合による石鉄県への改称を経て、明治６（1873）年、愛媛県が誕生した。

旧松山藩主、久松定昭の養子であった伯爵久松定謨（さだこと）は、大正12（1923）年、政府から松山城郭･城地･城濠の払い下げを受け、そのいっさいを松山市に寄付した。彼は、翌大正13（1924）年、東京から松山に移り住むことになるが、移り住んで間もない大正15（1926）年、本調査地はこの久松定謨のものとなっている。また彼は､これに先立つ大正11（1922）年､調査地直近の勝山南麓に、フランス式の洋館「萬翠荘」の建設も行っている。昭和18年（1942）年、定謨が没したことにより、調査地は昭和29（1954）年まで長男久松定武が所有することとなった。ちなみに定武は、第二次世界大戦後２代目の公選知事として昭和26（1951）年から42（1967）年まで５期にわたって政権を担当した人物である。昭和29年以降、調査地は平成13（2001）年に松山市に所有権が移転するまで、複数の所有者の手を経ながら､近年は造成､アスファルト舗装され､駐車場として利用されていたものである。

【文献】

『松山の歴史』松山市 1989

『松山市史 第二巻 近世』松山市 1997

宮本　一夫ほか『文京遺跡第８･９･11次調査』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990

『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1991

西尾　幸則　「道後城北 RNB 遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1989

西尾　幸則ほか『来住廃寺』松山市教育委員会 1979

多田　　仁　『道後今市遺跡Ｘ』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994

真鍋　昭文　『持田町三丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1995

栗田　茂敏　「文京遺跡４次調査」『道後城北遺跡群』松山市埋蔵文化財センター 1992

西田　　栄　「冠山遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

阪本　安光　『道後姫塚遺跡』愛媛県教育委員会 1979

『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会 1979

阪本　安光ほか『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会・愛媛県立松山北高等学校 1981

岡本　健児　「愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会・東京堂出版 1961

宮内　慎一　『岩崎遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
宮内　慎一ほか『松山大学構内遺跡Ⅱ－第３次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1995
宮崎　泰好　『祝谷六丁場遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
梅木　謙一　「祝谷大地ケ田遺跡」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994
『東雲神社遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2001
梅木　謙一ほか『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
『桑原地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992
『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994
栗田　茂敏　『文京遺跡－第２・３・５次調査－』愛媛大学・松山市埋蔵文化財センター 1992
田崎　博之ほか『文京遺跡Ⅲ－文京遺跡第13次調査報告－』愛媛大学埋蔵文化財調査室 2004
『文京遺跡Ⅳ－文京遺跡第20次調査・文京遺跡第23次調査－』愛媛大学埋蔵文化財調査室 2004
高尾　和長ほか『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
『釜ノ口遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
高尾　和長　『樽味四反地遺跡－５次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002
相原　浩二ほか『東本遺跡６次調査地・桑原遺跡２次調査地・桑原遺跡４次調査』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2005
「若草町遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
「若草町遺跡３次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅵ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994
長井　数秋ほか『釜ノ口遺跡調査報告書』釜ノ口遺跡発掘調査団・松山市教育委員会 1973
土井光一郎ほか『若草町遺跡Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996
岡田　敏彦ほか『道後今市遺跡』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1985
小玉亜紀子　『樽味四反地遺跡－６次調査－弥生時代～古墳時代編』松山市教育委員会 2003
『樽味四反地遺跡Ⅱ－６次調査－古墳時代中期～中世編』松山市教育委員会 2005
加島　次郎ほか「樽味四反地遺跡８次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報16』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2004
『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
森　　光晴　「東野お茶屋台古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986
石田　茂作　『飛鳥時代寺院址の研究』1936
中野　良一ほか『湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998・2000・2002

第２章　調査の成果

１．試掘調査

（１）　概　要

試掘調査では、対象地に図２のような配置でトレンチを設定した。その結果、対象地の西部に設定したＴ３、４、７において土坑状の掘り込みが多く検出され、また中央部を南北に掘り抜いたＴ２や、北よりでこれに直交する東西トレンチＴ６で庭園施設と考えられる石組みや敷石遺構が検出された。これらのトレンチに対して、南部に設定した東西トレンチＴ５では目立った遺構もなく、これに直交して設けたＴ８でも現代の造成土中から若干の遺物の出土はみられたが、明確な遺構は検出されなかった。出土遺物には、後述するように18～19世紀代の陶磁器が多く、中世以前の土師器や須恵器が下位の包含層遺物として出土している。これらの結果に基づき、本格調査では対象地に対して図３のような調査区を設定し、５ｍメッシュを切った。調査区は当初、北側がもっと狭い形状であったが、後述されるように園池遺構が検出され、この遺構の北護岸の調査のため、調査途中で北部数回を拡張したので図のような最終形となった。

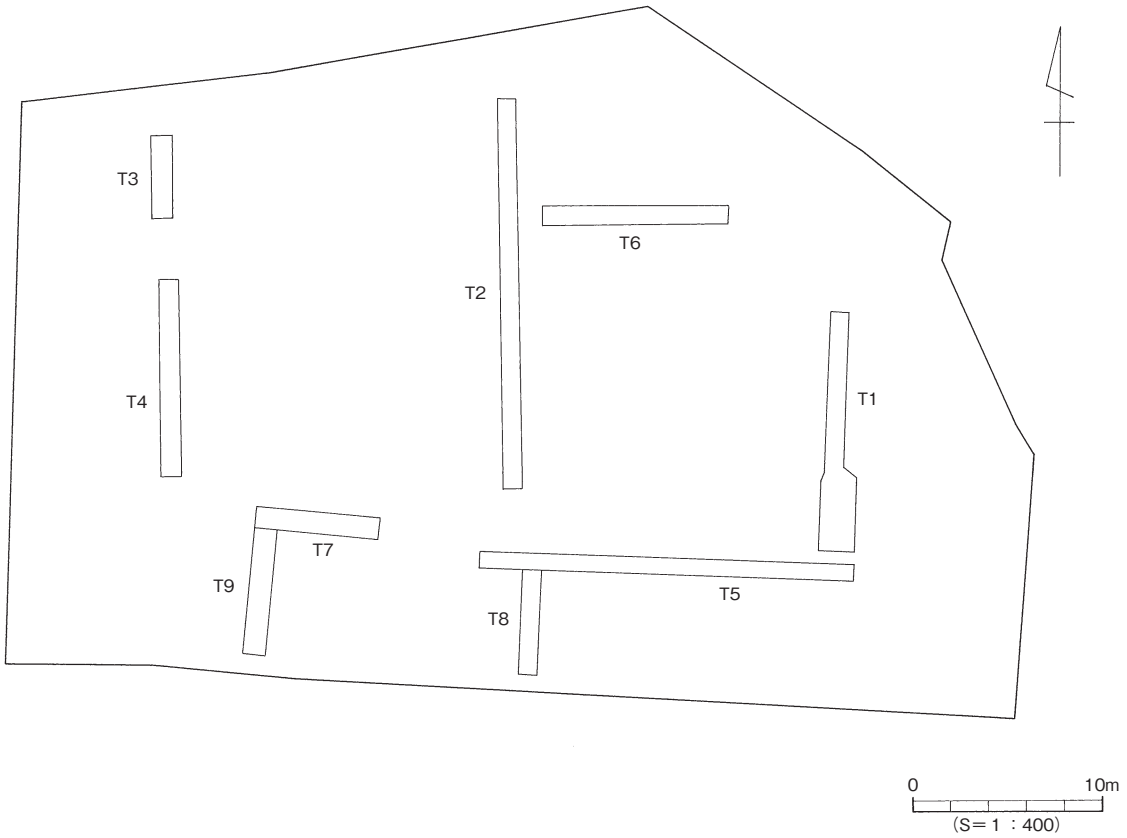


図２　試掘調査のトレンチ配置

図３　調査地区割り図

（２）　試掘調査出土遺物（図４～６）

Ｔ１出土遺物（１～６）

１は瀬戸美濃系の陶器、拳骨碗である。器高7.1cm、口径10.4cm、高台径5.4cmを測る。丸みを持った腰部から口縁が直上に立ち上がる。胴部中位には親指大の窪みが連続して横位に巡る。内面は鉄釉、外面は鉄釉と銅緑釉がかけ分けられている。腰部以下、広い面を持った高台までは露胎である。18世紀後半から19世紀前半頃のものであろう。２は肥前系の磁器染付碗、口縁部外面には四方襷、内面には雷文が施される。３は肥前系の青磁皿、高台畳付の釉ははぎ取られている。４は産地不詳の陶器甕の底部で、外面高台畳付以外の部分に鉄釉が施されるが、内面は無釉である。５は底部糸切りの土師器皿、６は土師器椀底部、貼り付けの輪高台を持つ。

Ｔ２出土遺物（７～９）

７は肥前系の染付入りの色絵素地碗で、呉須により唐草と丸窓が描かれている。８は型打ち成形による肥前系の染付小鉢、外面に「寿」字文様が施される。９は土師器椀底部である。

Ｔ３出土遺物（10）

肥前系の染付磁器小坏片で、外面に「お」「町」の文字を散らしている。

Ｔ４出土遺物（11～21）

11は京信楽系の陶器碗、高台は露胎。12～17は肥前系染付磁器である。12は焼き継ぎが施された小坏で、内面は見込みに十字花、口縁部に変形の櫛文、その間に意味不詳の文様が素描きで施される。

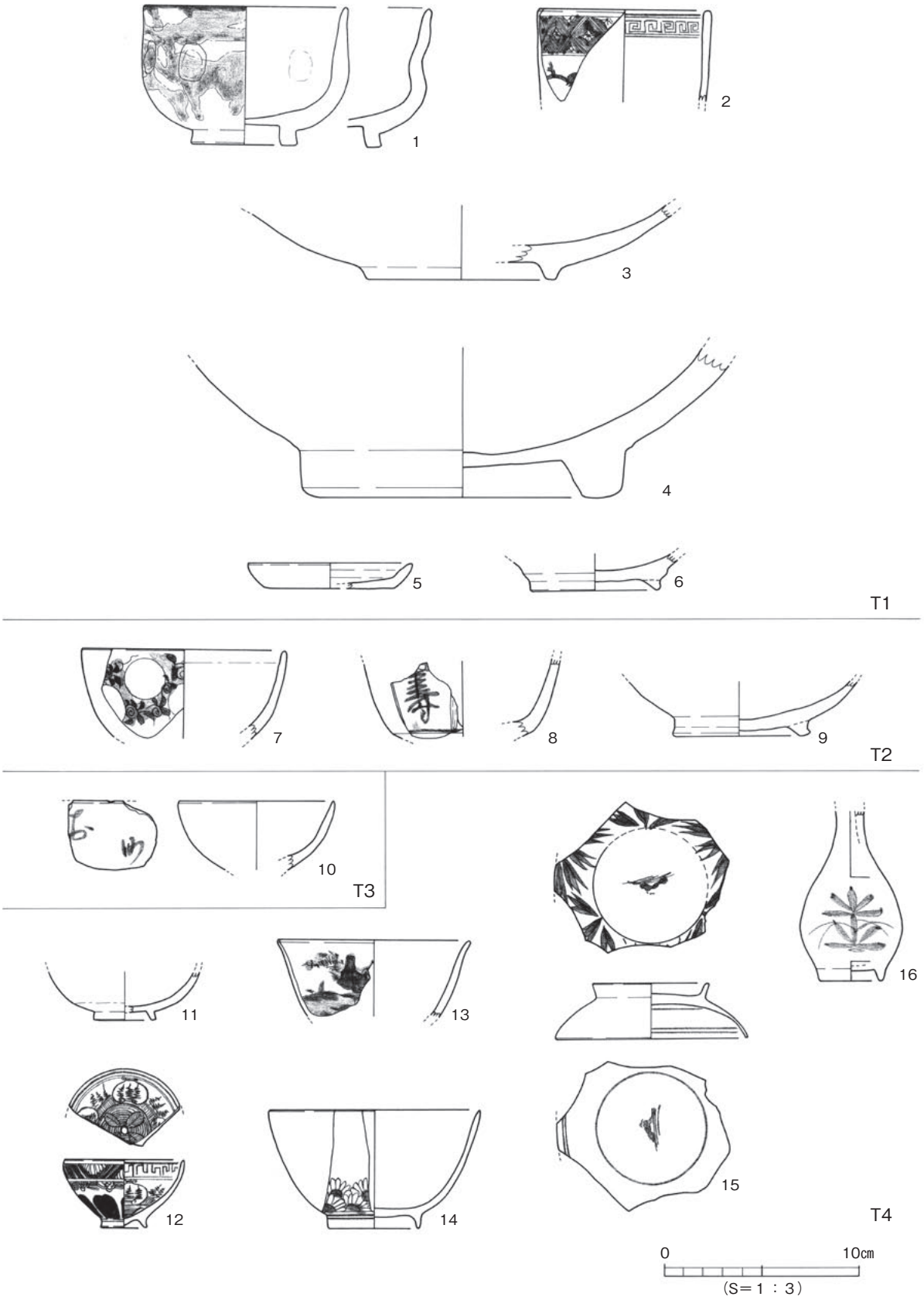


図４　試掘調査出土遺物(1)

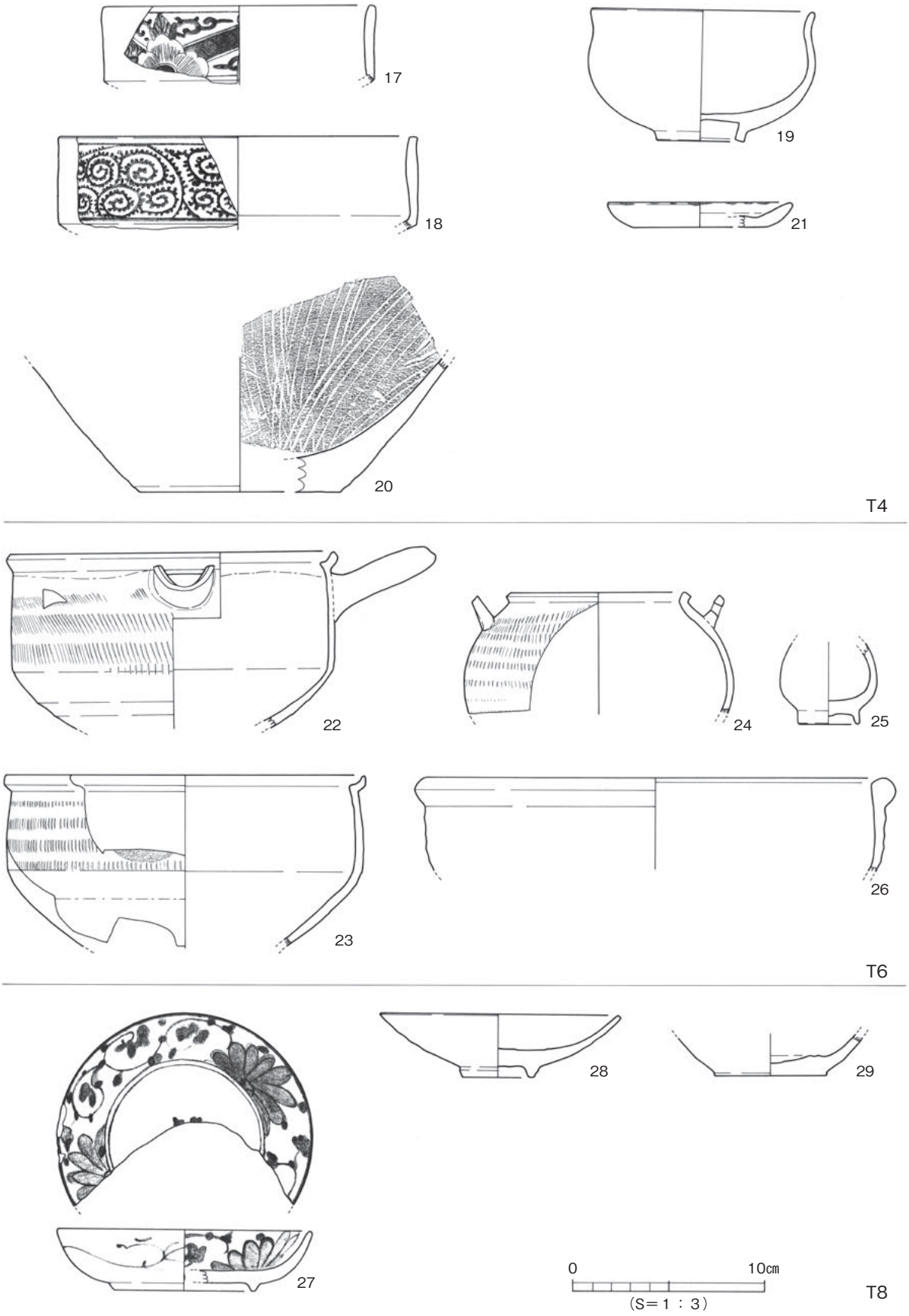


図５　試掘調査出土遺物(2)

外面は高台脇に濁みで菊弁を描き、口縁部には襷を菊弁で充塡した文様を描き、その下位に素描きの花卉繋ぎ文を施す。高台内面は兜巾状に突出している。19世紀前半。13は外面に岩、島、松などの山水文が描かれた端反り碗。14は腰部に菊花重ね文が施された碗で、高台脇と高台内面に２条の圏線が巡る。15は、つまみ径5.8cmを測る笹文の蓋で、つまみ外面中央部と内面の相当位置に同様の岩島文様を持つ。16は小型の鶴首瓶で、正面に若松と松葉をあしらい、背面には笹文様が描かれている。19世紀前半。17、18は段重で、17には牡丹とみられる花と唐草の組み合わせ、18は蛸唐草が描かれている。18世紀後半～19世紀前半。

19は産地不明の陶器鉢で、丸みを帯びた胴部から一旦くびれて口縁部が外反する。内外面に黄味を帯びた灰釉がかかる。高台は露胎で、内側を深く削り取られている。20は肥前系擂鉢の底部片。平底の底部には回転糸切り痕が残る。間隔のあいた８本単位の擂目が斜め方向に施されている。21は土師器灯明皿で、口縁部内外面には煤の付着がある。

Ｔ６出土遺物（22～26）

22、23は陶器の行平で、胴部外面に飛びカンナによる施文が施され、鉄釉がかかる。底部から胴部の下位の外面には施釉されず、23の底部付近には火にかけた痕跡が残っている。内面は蓋受け以外の部位に灰釉がかけられている。24は行平と同様の技法による土瓶で、内面は無釉である。25は肥前系磁器の小型鶴首瓶。26は陶器灰釉捏鉢の口縁部片である。

Ｔ８出土遺物（27～30）

27は口径13.0cm、高台径7.2cm、器高3.2cmを測る肥前系染付皿で、口端部に口銹、内面に半菊唐草、二重圏線で区画された見込にコンニャク印判五弁花、裏文様は唐草である。高台内に一重圏線を入れて裏銘を施すが、判読できない。波佐見、18世紀前半。28は見込蛇の目釉剝ぎの肥前系白磁皿で、高台も露胎である。復元口径12.4cm、高台径3.7cm、器高3.3cm。波佐見、18世紀。29は、底部回転糸切りの坏底部片。30は備前擂鉢口縁部片で、器壁、断面ともに暗紫色に焼成されている。口縁部外面には、浅い沈線様の凹線が２本巡っている。

出土地点不明遺物（31、32）

31は肥前系染付碗、復元口径8.8cm、高台径3.8cm、器高4.8cmを測る。外面には宝文。腰部に１条、

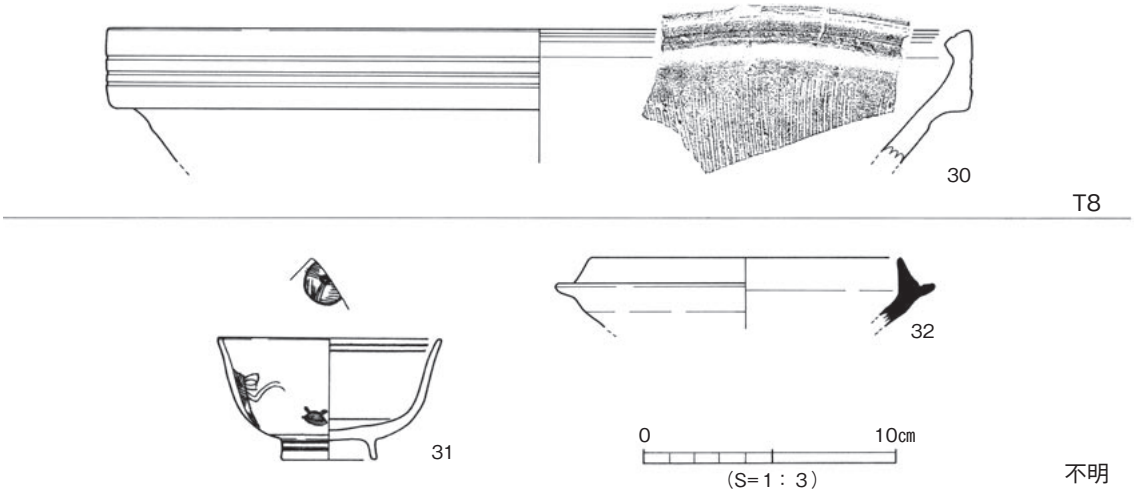


図６　試掘調査出土遺物(3)

高台に２条の圏線が巡る。内面は口縁部に２条の圏線、見込を１条の圏線で区画し、花文を施している。19世紀前半～中頃。32は焼成不良の須恵器坏身の口縁部片。

２．遺構と遺物

（１） 土　層（図７）

調査地は北東方向から南西方向に下る勝山の丘陵麓にあたり、調査地北部には丘陵の基盤面をなす砂岩質の地山の存在を認めることができる。この北東から南西下る斜面を埋めるように暗褐色系のシルトやその下位の砂や砂礫が堆積しており、遺構面はこのシルトの上面、あるいは平坦にカットされた砂岩系の地山の上に載っているというのが基本である。この暗褐色系のシルト中には弥生時代から中世、12世紀頃までの遺物が含まれている。明治以降、昭和の駐車場造成にいたるまで頻繁にくり返された造成、攪乱により、特に調査地西部では、近現代の大きな攪乱によって遺構面がかなり破壊されていた。比較的深く掘った調査地南壁中央部以西の層位で概要を説明しておく。調査地の土層は、細かく分けると調査地全体で41種類程度に分層されたが、大きく括ると４つの層にまとめることができる。第Ⅰ層は、現代の駐車場のために造成されたアスファルトや砕石、マサ土で、地表面からおおよそ15～20cm内外のところにある。第Ⅱ層は地表面から30～40cmのところまでで、昭和中頃まで存在した建物や瓦製の井戸を埋めた造成土で、壁土を多く含んだ層である。その下位の第Ⅲ層がこの建物

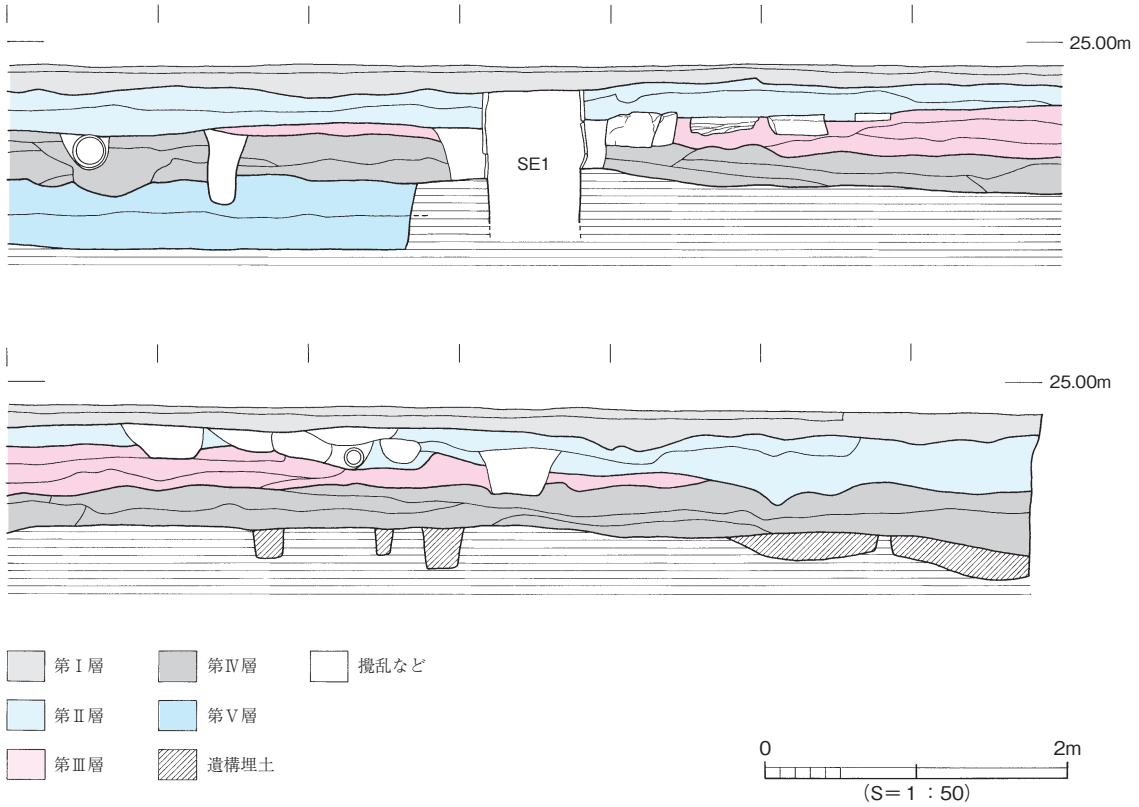


図７　調査区南壁土層図

が載る基盤となった層で、明治以降の整地土。この層にも部分的に壁土を含む層が入っている。その下位の第Ⅳ層は明治以降の造成土と考えたが、一部もっと古い段階の整地土や造成土もあるのかもしれない。しかしながら、面として詳細がよく把握できなかったので、その下位の第Ⅴ層上面で遺構を検出することにした。第Ⅴ層は、先述の包含層となる暗褐色系のシルトや黄灰色の微砂で、弥生時代から中世12世紀頃までの遺物を含む層である。

（２） 中世の遺構と遺物

１）土坑ＳＫ６（図９）

調査区西端で検出された。直径2.2ｍのほぼ円形で、深さ0.8ｍの擂鉢形断面形状を呈する。図化はされてないが埋土上層から磁器片や平瓦、下層を中心に土師器皿がまとまって出土しているところから、プランとして明瞭にはできなかったが、近世の遺構に切られているものと考えられる。土師器皿のうちには、使用痕のある灯明皿があり、また、京都系の土師器皿１点がともに出土している。なお、数点の須恵器・土師器片は基盤面となっているより古い段階の包含層の遺物が混入したものである。出土土師器から16世紀後半～末の遺構と考えられる。

ＳＫ６出土遺物（図10・11）

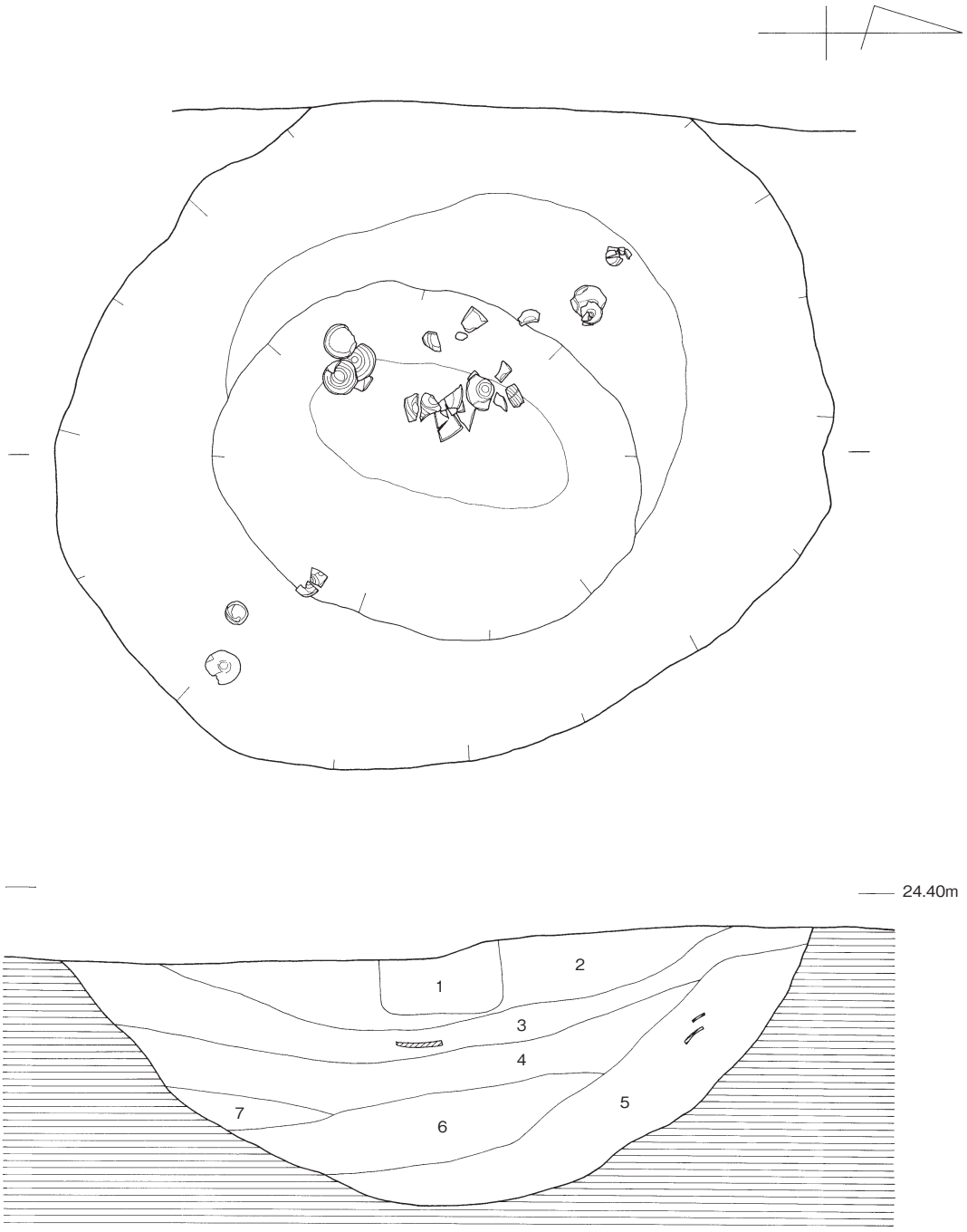
33～46は土師器皿、そのうち33～39は、口径11.5～12.0㎝、底径5.0～6.3㎝、器高2.1～3.1㎝の範囲に法量があり、静止糸切りによる平底の底部から、若干内湾気味に外上方に開くものである。いずれも焼成は良好で、内面底部から体部中位まで轆轤目が残る。36の口縁部内外面には顕著に煤が付着している。38の内面にも煤状の滲みが残っている。40もやや口径や底部径が大きいが、これらと同様の特徴を持つ。41は、比較的広めの底部から短く内湾して立ち上がるもの。42は小型の皿である。43は底部が大きく体部が大きく開かないもの。44は底部からの立ち上がりの外面を面取りするものである。45、46は轆轤成形しないもので、45は口径11.2㎝、器高2.0㎝を測る。底部中央を底面から窪ませる京都系の皿で、口縁部の一部にのみ煤の付着がある。46は、口径10.8㎝、底径3.6㎝、器高2.3㎝を測るもので、他のものよりも白っぽく、口縁部を輪花に成形されているのが特徴である。47～50は土師器坏、口径9.5～10.0㎝、底径5.5㎝前後、器高4.0㎝程度のもので、やはり底部静止糸切りによるが、軽いナデ調整を施されている。内面には轆轤目が残っている。51は焼塩壺蓋で、皿を伏せたような形態のものである。52は備前焼擂鉢で、直立する口縁部外面には凹線が３本巡る。

53～55は、ベースの包含層からの混入遺物である。53、54は須恵器高坏のそれぞれ坏部と脚部で、非陶邑系須恵器と呼ばれているものである。55は土師器甕の口縁部片。

56、57ともに平瓦の縦半裁品で、長さは56で27.7㎝、57で28.7㎝、厚さはそれぞれ2.2㎝、1.5㎝を測る。暗灰色に焼成された56の凹面は幅広く横撫でされ、凸面は斜め方向に粗く撫でられている。57は灰白色の焼きで、やはり、凹面を横撫でされているが、鉄線切りの痕跡も一部に残っている。凸面は縦方向に軽く撫でられている。

Y=67410
Y=67400
Y=67390
Y=67380
X=93230
X=93220
X=93210
SD2
SG1
SD1
SK6
SE1
SB3
SB1
SB4
SB2
SB5
SK3
0
10m
(S=1：150)

図８　遺構全測図



1．攪乱
2．灰茶褐色砂質土
3．２＋黄色小角礫ブロック
4．３よりも角礫ブロック多量
5．３＋木炭片
6．灰色微砂＋黄色小角礫ブロック
7．６よりも角礫が大きく多量

0　1m
（S=1：20）

図９　土坑 SK6

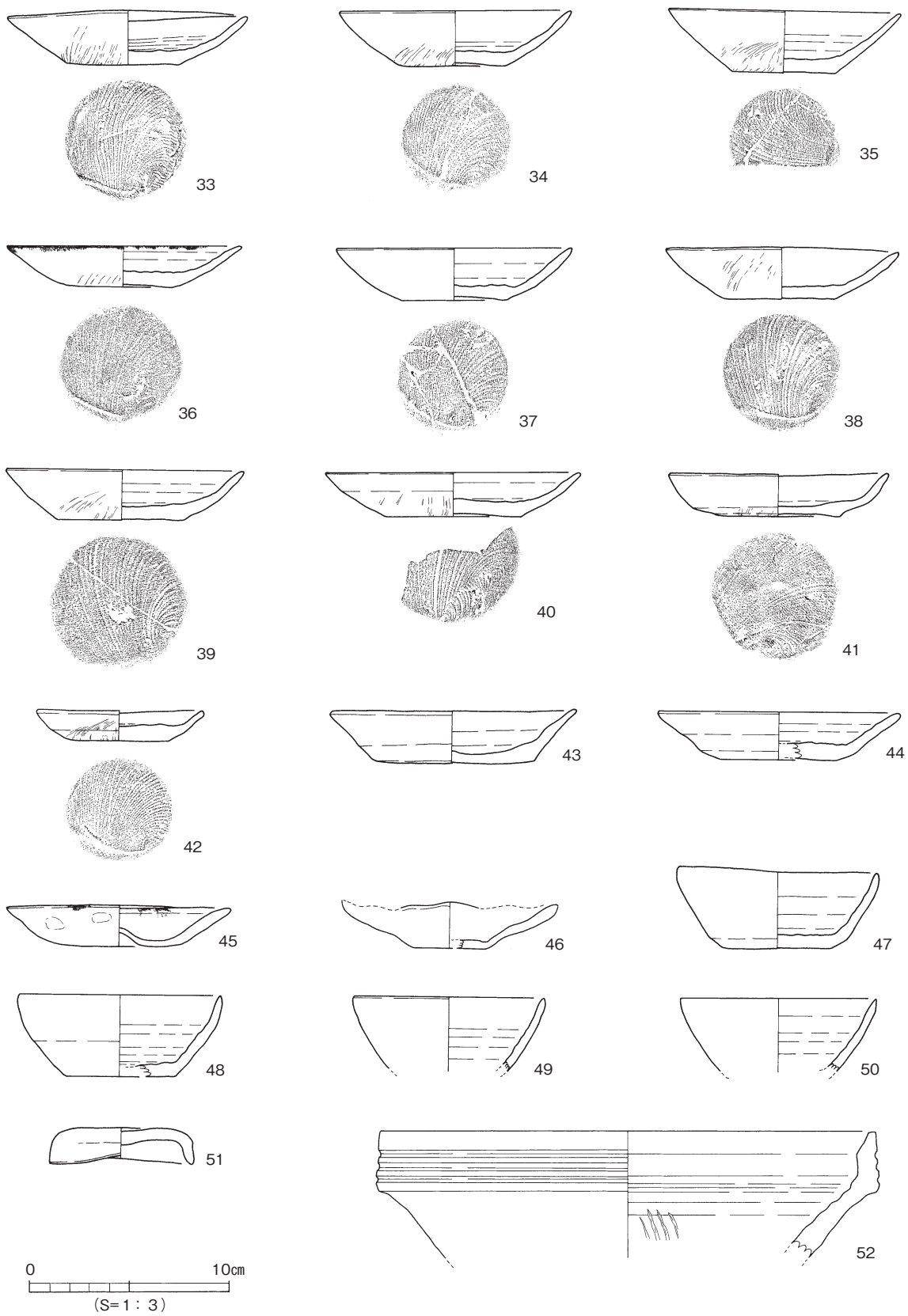


図10　SK6出土遺物(1)

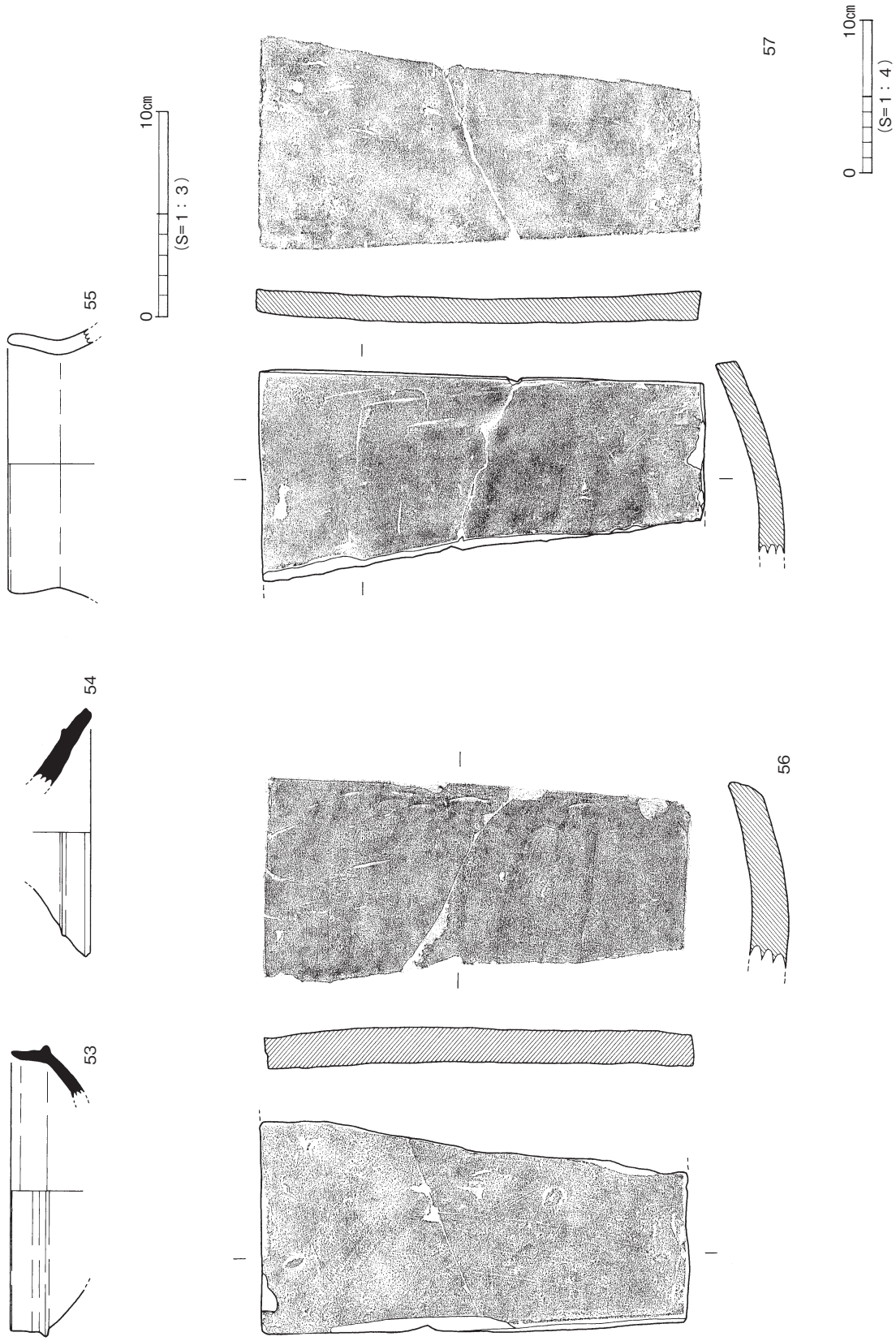


図11　SK6出土遺物(2)

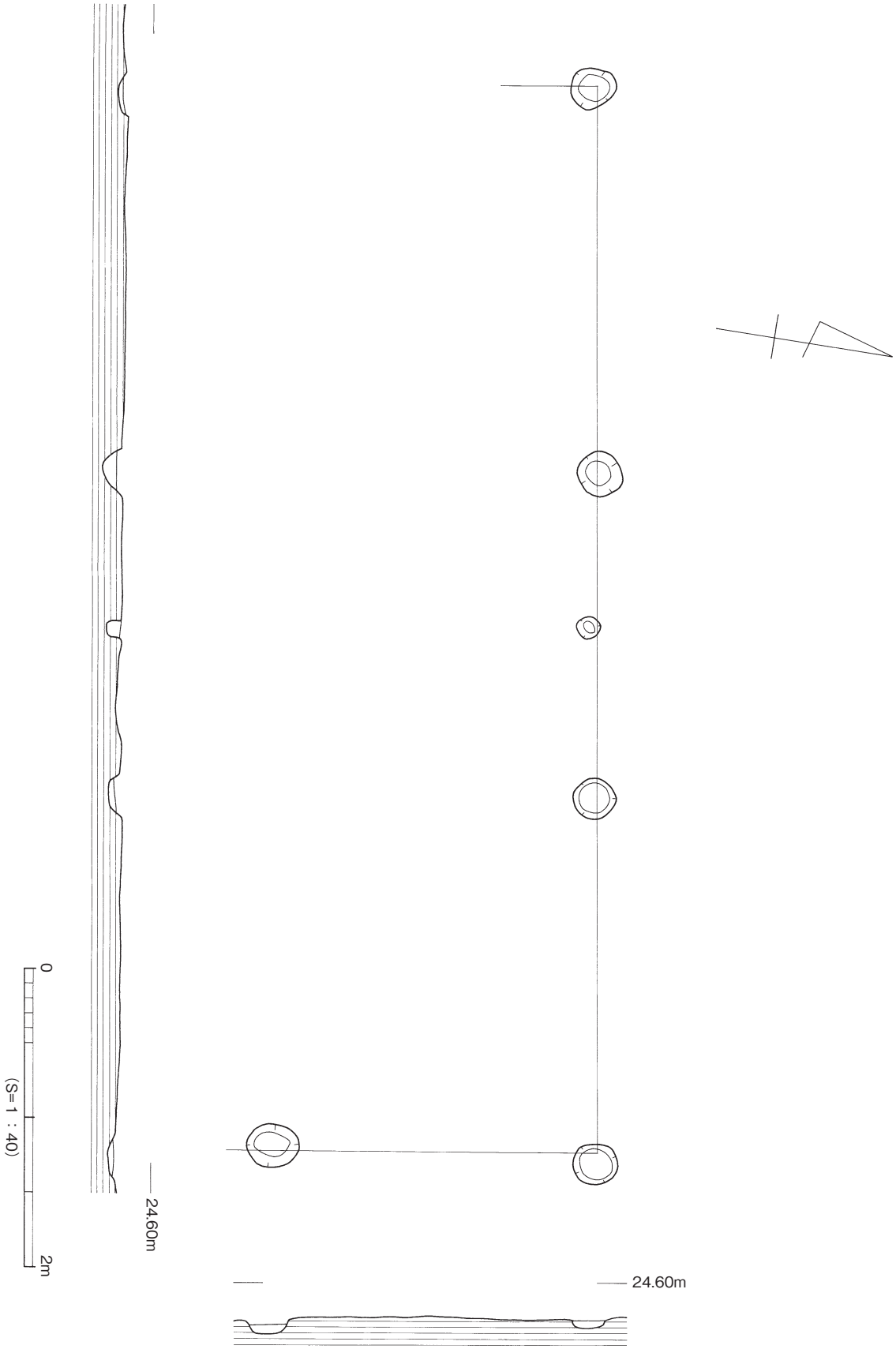


図12　掘立柱建物 SB5

２）建物跡ＳＢ５（図12）

調査区南端で、その一部が検出された掘立柱建物である。正方位から若干振っている。東西３間、総長7.2m、南北１間以上というところまでしかわからない。柱間2.2～2.5mを測る。直径30㎝前後の柱穴で構成され、暗褐色シルトを埋土に持つ。

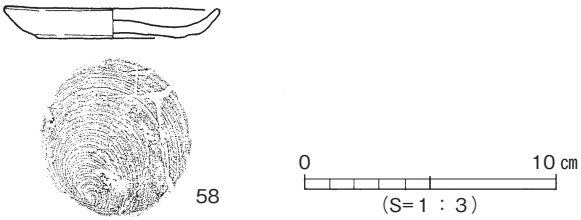


図13　SB5出土遺物

ＳＢ５出土遺物（図13－58）

北西隅の柱穴から出土した土師器皿、器高1.3㎝、口径8.4㎝、底径5.8㎝を測る。底部切り離しは回転糸切りによる。

（３）　江戸時代以降の遺構と遺物

１）建物跡

江戸期以降の建物跡としては、４棟が検出された。いずれも、その方位を正方位にとる。攪乱や削平が著しく、いずれもその一部しか確認できなかった。

ＳＢ１（図14）

ＳＢ１は、13.8×4.1mの長方形プランとして検出された建物跡で、昭和28・９年まで久松家の住居として存在していた建物の基礎の一部である。削平され、ところどころに残った浅い窪みに拳大から人頭大の河原石が詰めらた状態で検出された。礎石建物の基礎である。

ＳＢ２（図15）

掘立柱建物の一部で、北東コーナー部が検出された。この建物を覆うように、５㎝程度の厚さで、周辺に部分的に存在した整地土を除去した段階で検出された。柱穴埋土は、この整地土と同じ暗黄褐色の砂質土である。南北方向の柱間1.3m、東西2.0mを測る。ある程度の深さを持った、しっかりした柱穴を持っているにもかかわらず、建物として完結しないので、建物ではなく目隠し塀のようなものであったのかもしれない。

ＳＢ３（図16）

北辺と、東西の柱列とがコの字型に検出された。ＳＢ２を覆う整地土を切っているので、ＳＢ２よりは新しい建物である。東西、南北方向ともに、1.3mの柱間を測る。柱穴埋土は暗黄褐色粘質土で、ＳＢ２同様、建物として完結しないが、柱穴底には荷重に耐えうるよう根石が設置されているので、やはり建物の一部とみたほうがよかろう。礎石建ちの建物と組み合っていたのかもしれない。

ＳＢ４（図17）

調査区南東部で検出された掘立柱建物と考えられる柱穴列で、北東コーナーを含む北辺と東辺の一部が検出された。柱間は、南北方向で1.35m、東西方向で2.2m、柱穴埋土はＳＢ３と同質のものである。

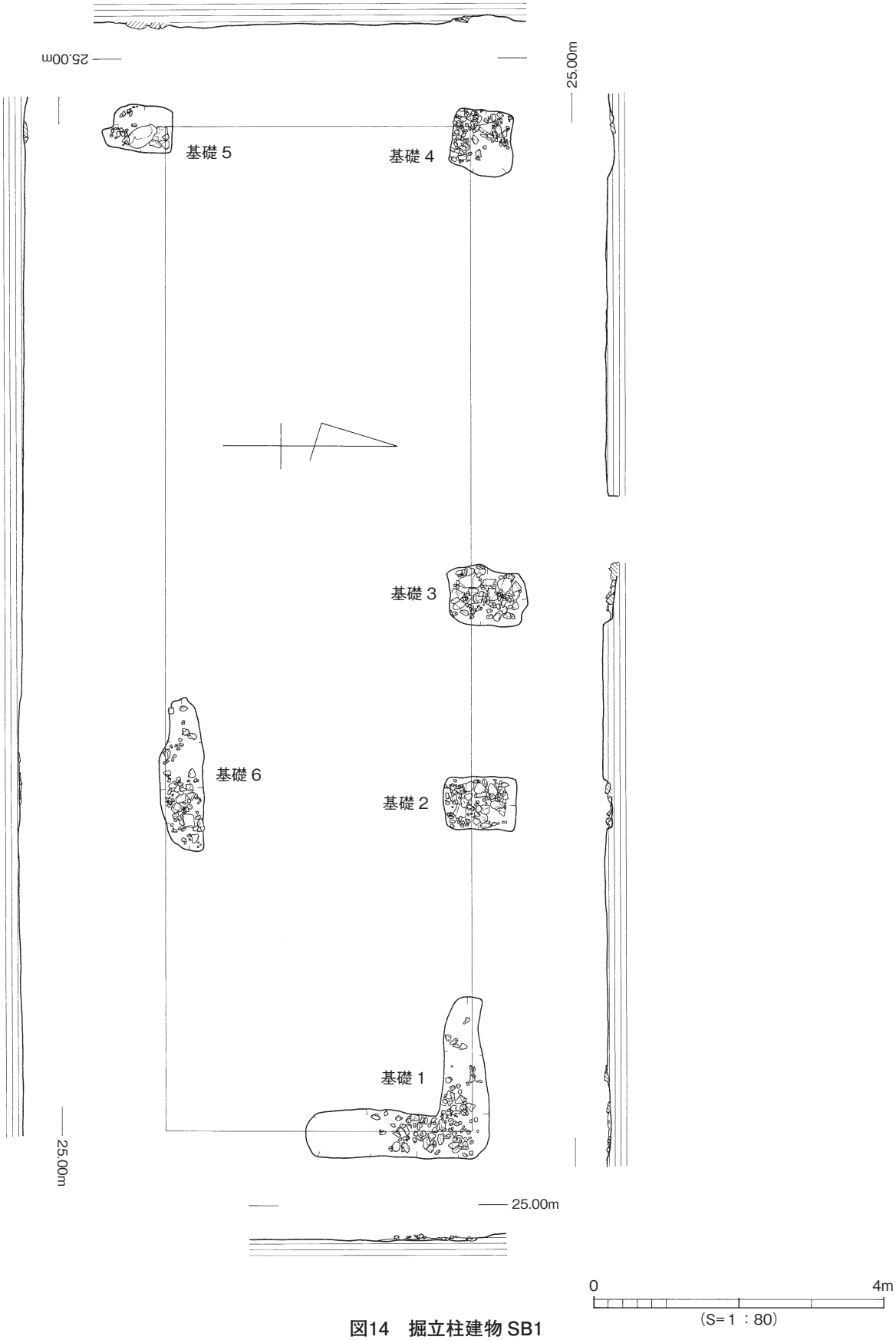


図14　掘立柱建物 SB1

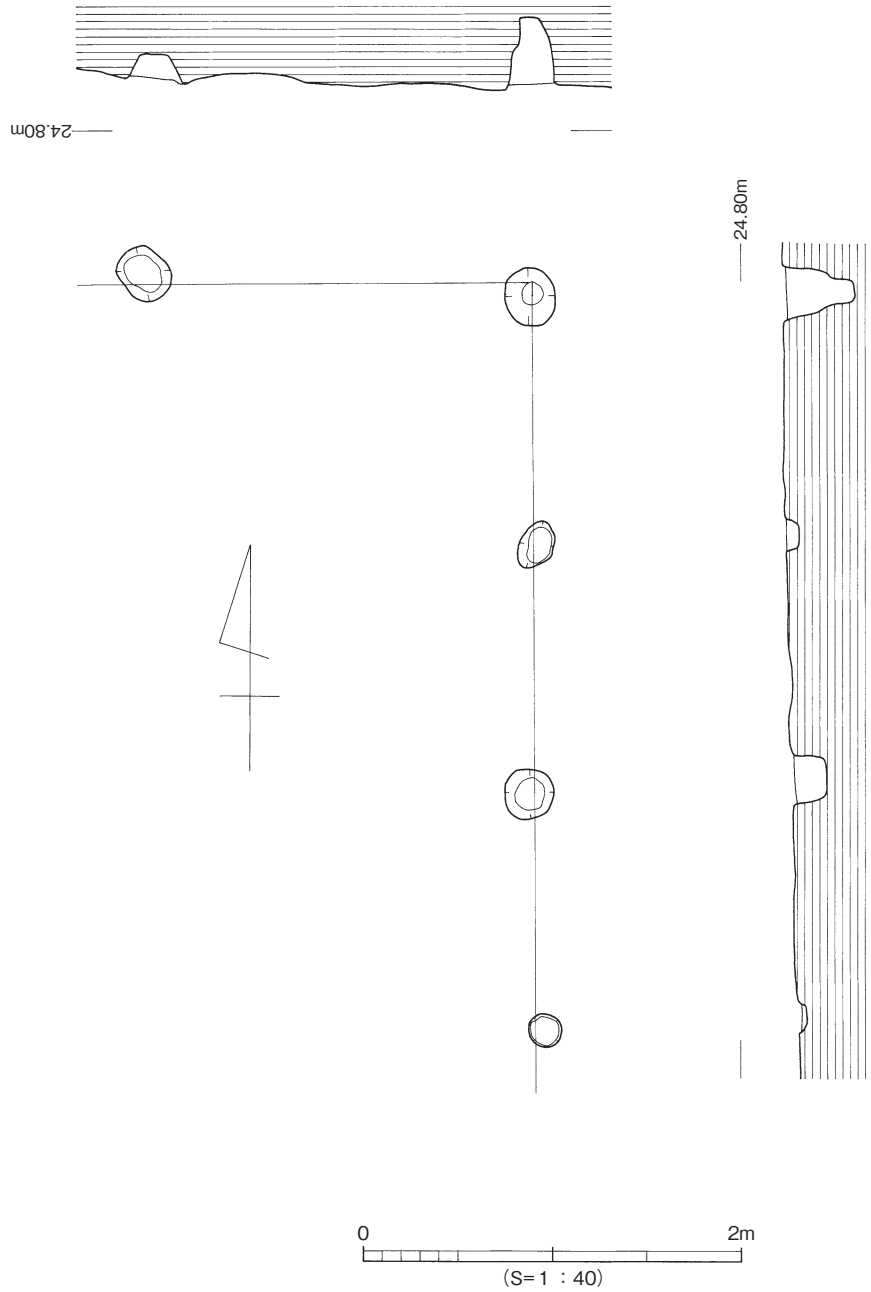


図15　掘立柱建物 SB2

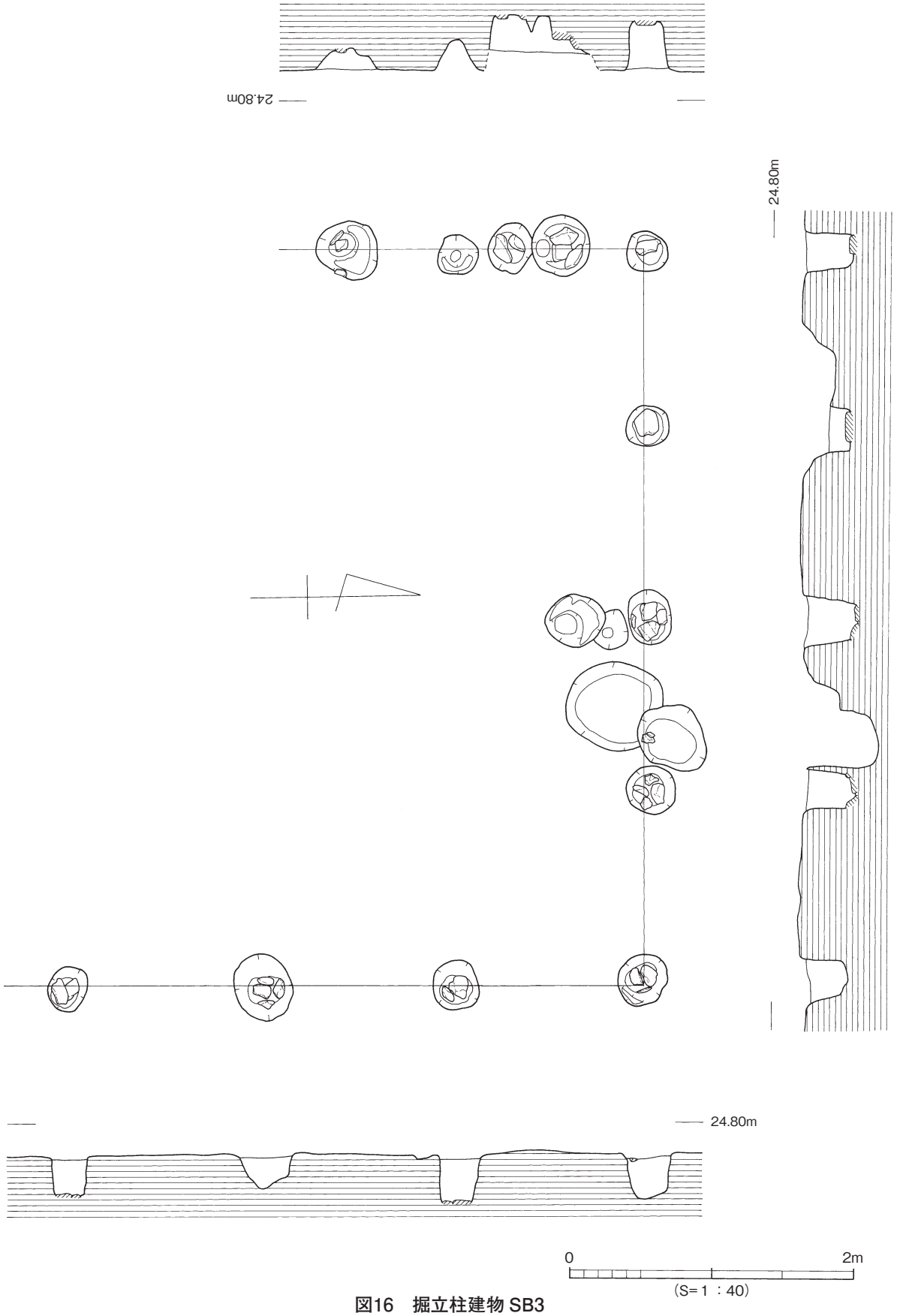


図16　掘立柱建物 SB3

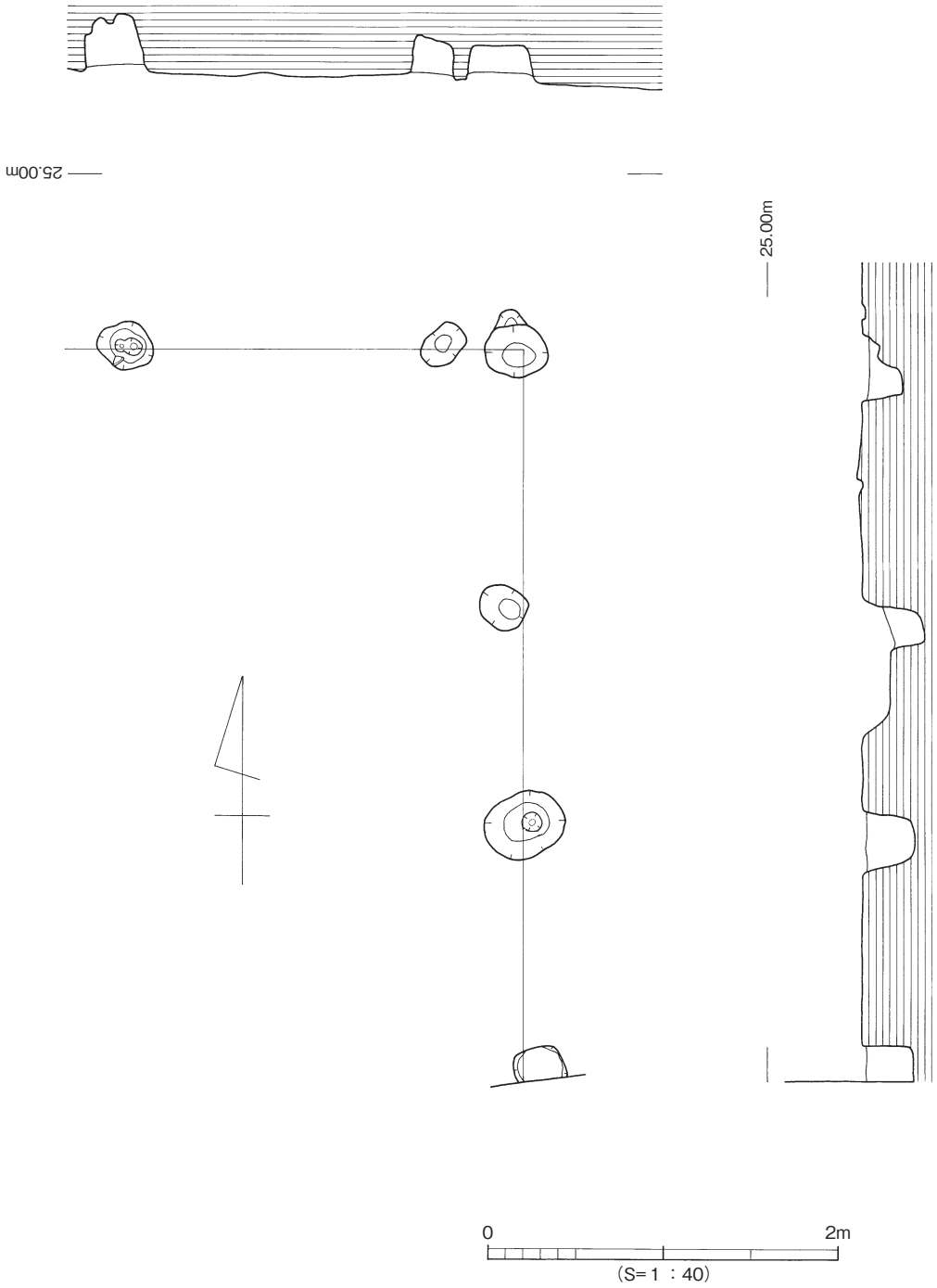
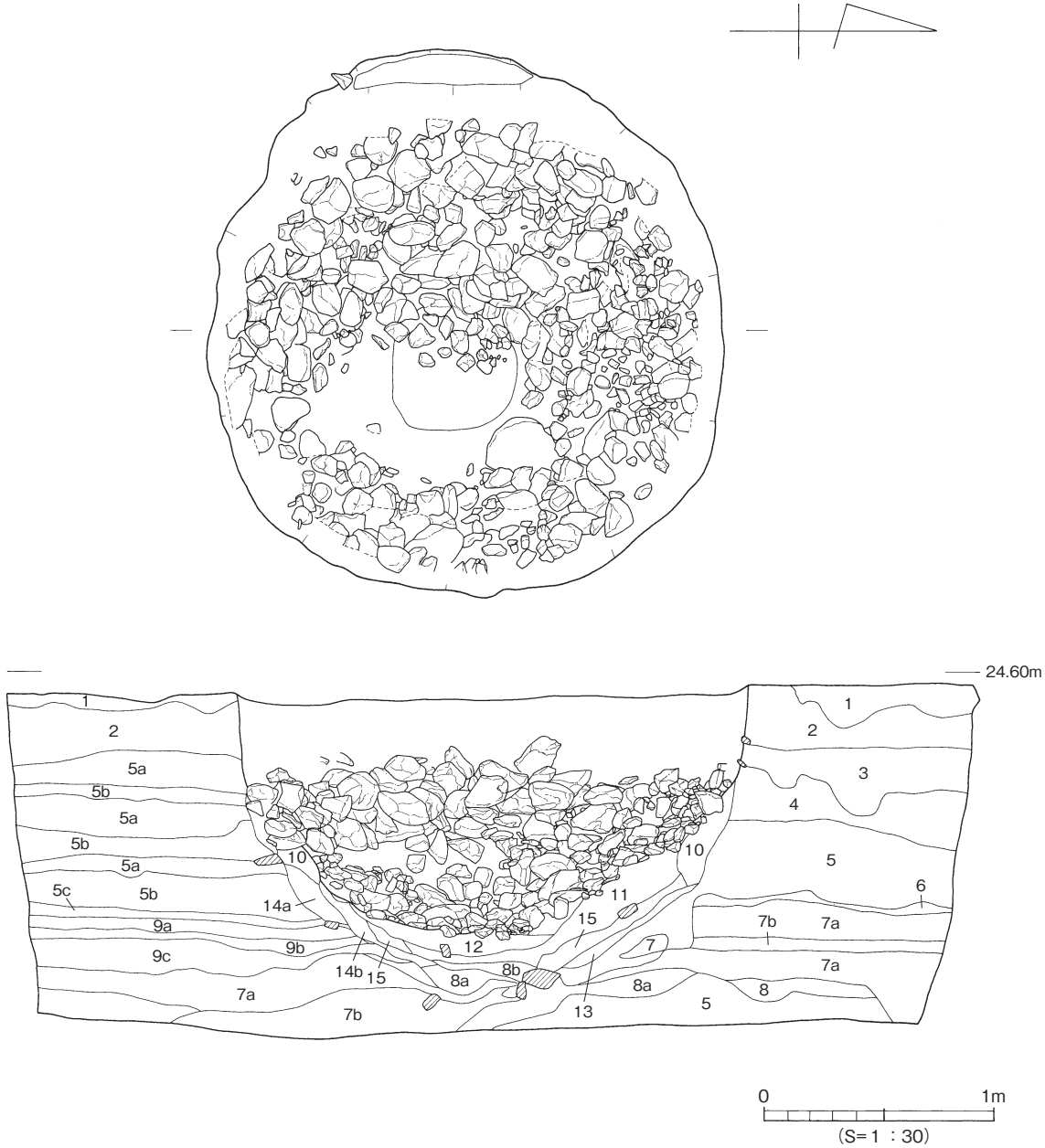


図17　掘立柱建物 SB4

２）井戸ＳＥ１（図18）

２基の井戸が検出されているが、調査区南壁で検出されたものは、瓦製の井戸側を積み上げたもので、明治以降に掘削され、近年まで使用されていたものである。

調査区中央付近で検出されたＳＥ１は、石積みのもので、現況で深さ1.1ｍの遺存である。直径2.3ｍの円形の堀方の壁面に人頭大程度の川原石を積み上げているが、底部分には特別の施設を持たない。層位的には砂礫層まで掘り抜いている。



1．暗褐色シルト
2．１＋河原礫
3．暗褐色砂質土＋河原礫
4．淡褐色砂質土＋河原礫（多量）
5a. 灰白色砂礫
5b. ５aよりも砂が少ない
5c. ５bよりもさらに砂が少ない
6．灰色粗砂
7a. 灰色微砂
7b. 灰色粘砂
8a. 灰黄色砂
8b. 8aよりも白っぽい
9a. 黄灰色粘土
9b. 9aよりも黄味が強い
9c. 9bよりもさらに黄味が強い
10. 灰褐色シルト＋河原礫
11. 暗褐色粘質土
12. 暗灰褐色シルト＋河原礫（少量）
13. 暗灰褐色シルト＋粗砂
14a. 明灰茶褐色砂礫
14b. 14aよりも茶が強い
15. 灰茶褐色シルト

図18　井戸 SE1

ＳＥ１出土遺物（図19）

井戸の埋土中から少量の遺物が出土している。59は、復元口径24.8cmを測る須恵器甕口頸部片。60、61は須恵器で白っぽく焼成されたものである。60は坏、器高3.7cm、口径19.7cm、底径15.6cmを測る。61は器高2.1cmを測る皿の小片である。両者ともに８世紀代のもの。62は瓦質の皿で、胎土に１～２mm大の石英・長石粒を多く含むが、焼成は比較的堅緻である。やや凸状の面を持つ底部から稜を持って口縁部が短く外反しながら直上に立ち上がっている。器高2.3cm、口径13.6cmを測る。内面に磨きは看取できない。12・３世紀のものか。63は土師器円盤高台の坏底部片、摩滅が著しいので、所属年代は不詳である。64は底部回転糸切りの土師器皿片、ＳＫ６出土の一群と同様のもので、16世紀代のものであろう。65は焼塩壺の底部片。66は瀬戸内系の焙烙口縁部、内耳部分の片、17世紀中頃から18世紀代のもの。67は1068年初鋳の宋銭「熙寧元宝」で、井戸底から出土した。

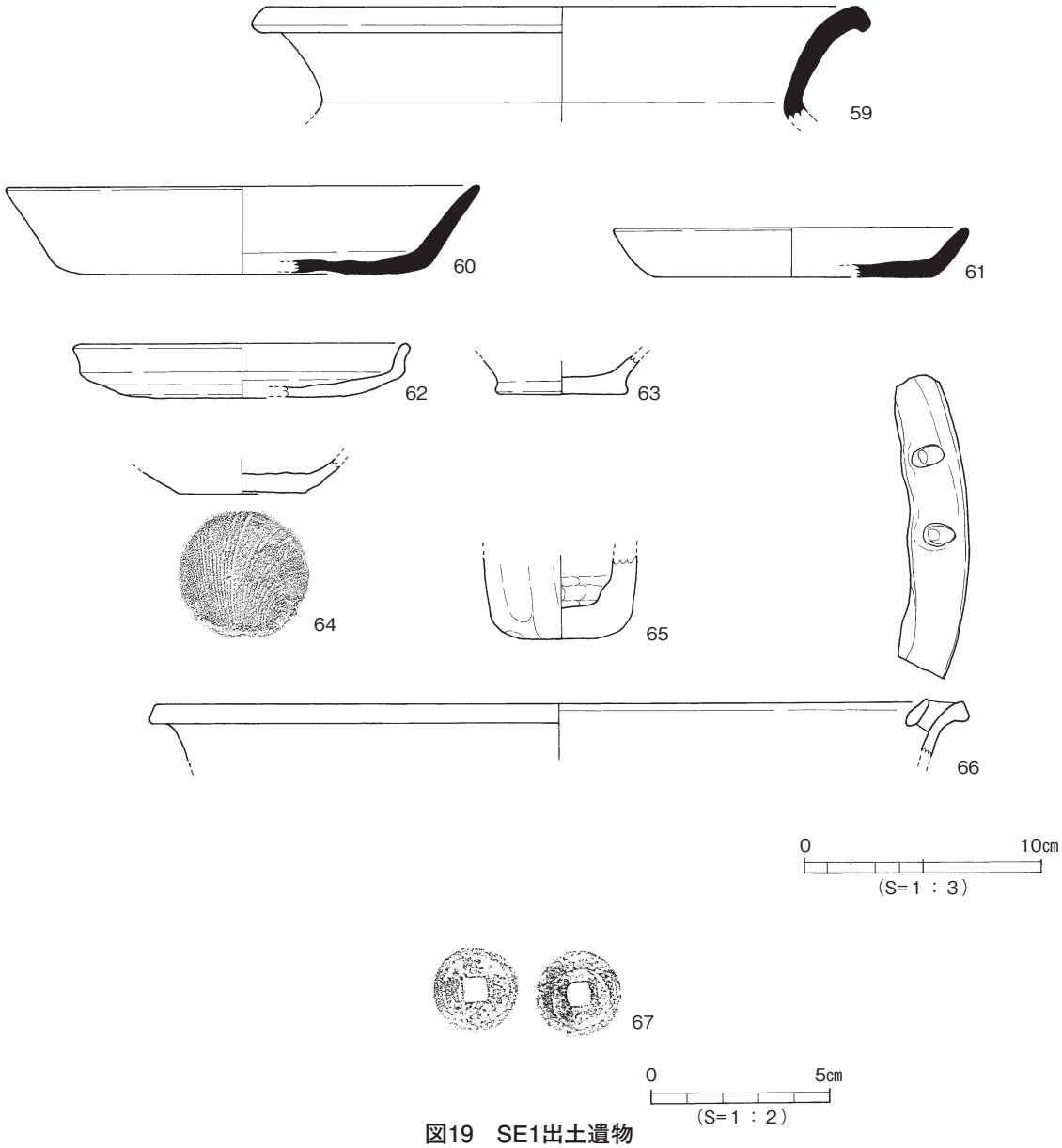


図19　SE1出土遺物

3）地下蔵ＳＫ３（図20）

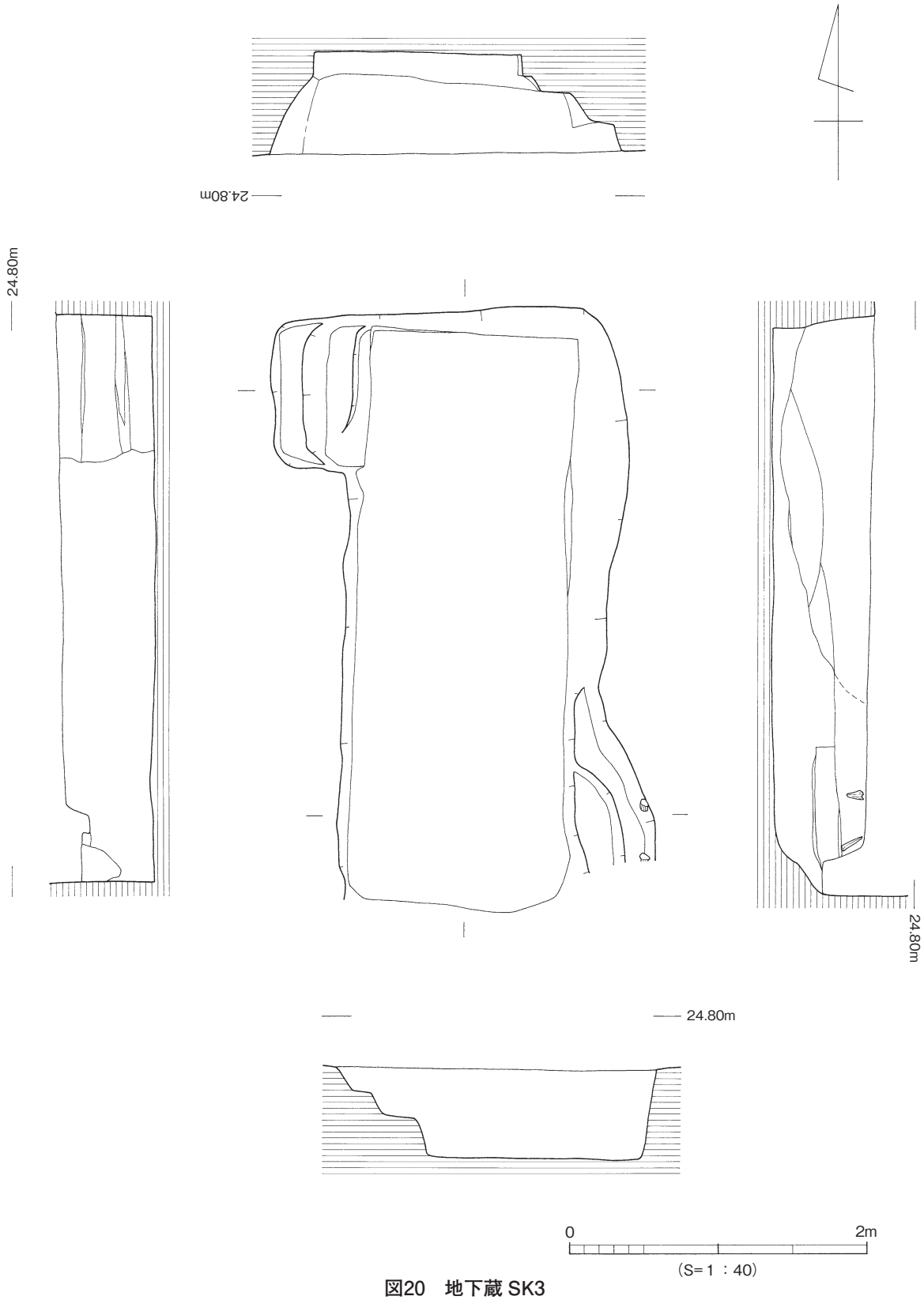


図20　地下蔵 SK3

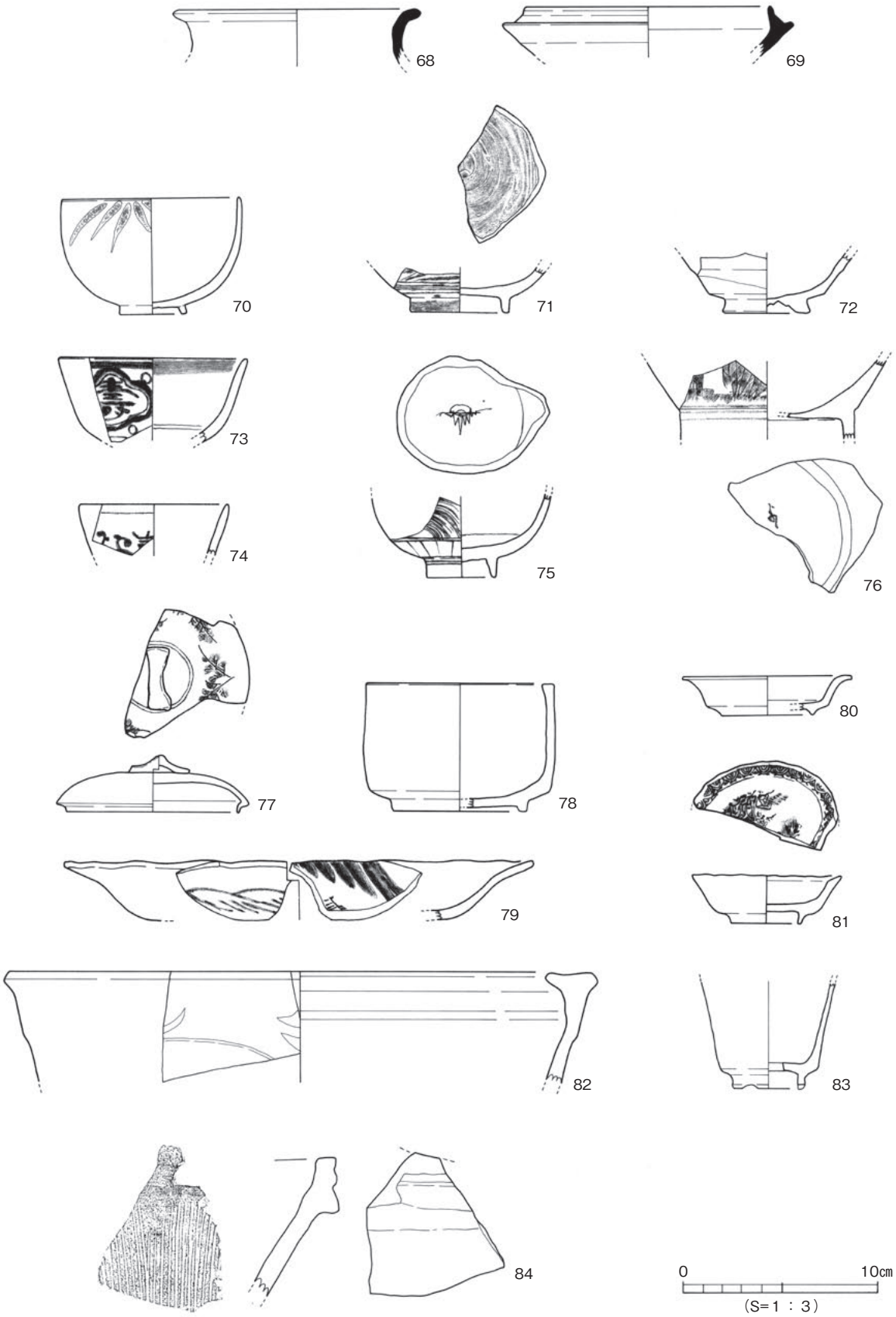


図21　SK3出土遺物(1)

ＳＫ３としている土坑は、４×1.5mの長方形プランの竪穴の北西コーナーと南東コーナーにそれぞれ張り出しを設け、この部分に階段を削りだした地下蔵である。深さは0.8mの遺存である。この施設に伴う上屋は検出されていない。出土遺物から、明治以降に廃棄されたものと考えられる。

ＳＫ３出土遺物（図21～23）

68、69はそれぞれ須恵器壺口頸部片と坏身の小破片である。70は器高5.9㎝、口径9.0㎝、高台径3.4㎝を測る京信楽系の陶器碗。高台以外の内外面に透明釉をかけ、外面の口縁部に笹文を上絵付けするが、絵の具は剝落している。71は肥前系陶器碗底部片、白化粧土の刷毛目文様を施し透明釉をかけるもの。72は産地不明の陶器碗、内外面に藁灰釉、兜巾状の高台から腰部は露胎である。73は瀬戸美濃系の磁器染付碗の片、口唇部内面に幅広の横帯、外面にこれより細い帯を巡らせ、その下位の窓内に寿字文を施すものである。19世紀。74は肥前系の磁器蓋付き鉢の片、外面に変形の寿字文と唐草の一部が看取できる。口唇部内面に釉はかからない。75は砥部磁器染付碗で、外面の腰部を二重圏線と一重圏線で区画し、その間を縦縞で埋める。主文様は草束のような斜め方向の細線が確認できるが、不詳。内面見込文様は火炎宝珠の変形か。幕末。76は在地、西岡焼の染付鉢、高台内に草書の「与」の字が確認できる。呉須はやや緑色を帯びた紺色に発色している。18～19世紀前半。77は肥前系磁器染付蓋、熨斗形を貼りつけた鈕を囲む二重圏線の外側に羊歯文が巡る。79は肥前系磁器染付輪花中皿で、内面口縁部文様は笹か。裏文様は遠山。80は瀬戸美濃系の寿字文白磁皿の片、見込に意匠化された「寿」字が印刻される皿であるが、この文様を囲む一重、二重圏線の一部のみが遺存している。また、破断面には焼き継ぎの痕跡が残っている。19世紀。81は磁器染付皿で、小型の楕円形、口唇部は輪花となっている。見込の山水文や口縁部内面の連続文は銅板転写による印判手による。先の鉢76同様に呉須が発色しているところから明治以降の西岡焼であろう。

82は瀬戸美濃系陶器の水甕で、灰釉、鉄釉、銅緑釉がかかっている。83は明治以降の磁器植木鉢で、外面に黄土色の釉がかけられている。84は備前擂鉢の注口部の片で、口縁部外面には２条の凹線が施されている。85は陶器、萩と思われる土瓶で、外面には白色系の藁灰釉、内面には土灰釉がかかる。86は陶器鉄釉土鍋で、底部外面以外には施釉されている。底部外面には煤が付着、脚は底部より突出している。

87は土師器皿小片、88は型押しの土人形片で、内外面に雲母の付着がみられる。89は土師器の玩具、

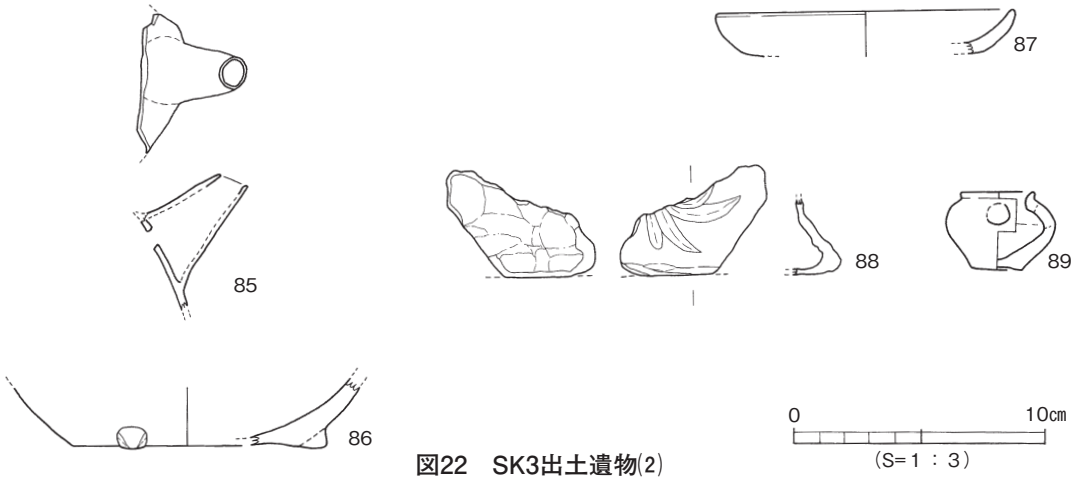


図22　SK3出土遺物(2)

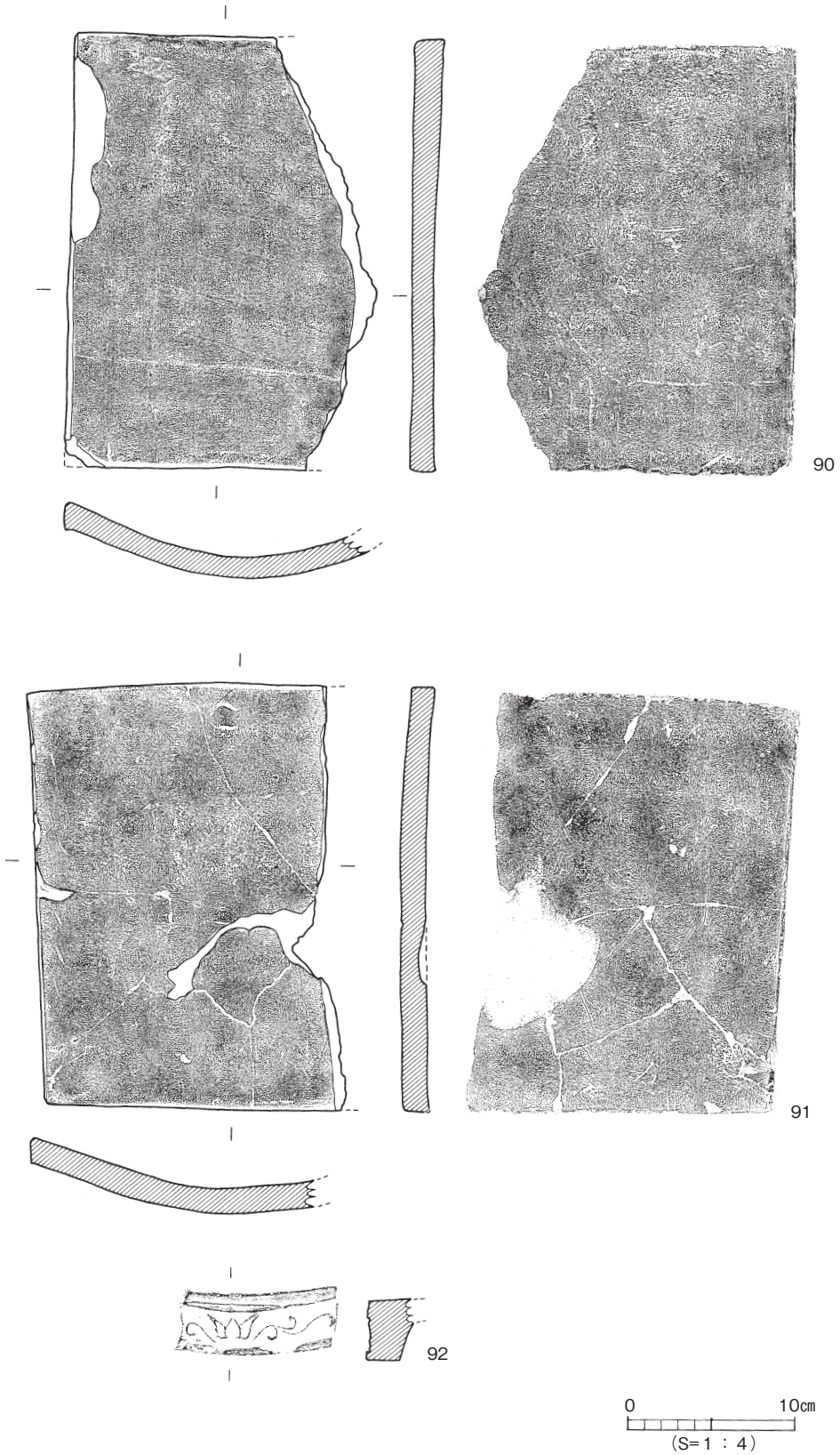


図23　SK3出土遺物(3)

所謂「つぼつぼ」といわれるもので、器高3.1cm、口径2.8cm、最大径4.3cmを測る胴部のやや上に直径0.9cmの円孔が焼成前に穿たれている。

90、91は平瓦、90は長さ25.5cm、厚さ1.5cm、91で長さ25.1cm、厚さ1.5cmを測る。両者ともに凹面を横撫での後、粗く縦方向に撫でられている。凸面には斜め方向の撫でが施されている。92は軒平瓦、陽刻線で輪郭を表した三葉文を中心飾りに、唐草が三転するところまで確認できる。顎頭面は顎貼り付けによる。

4）土　坑

主に調査区の南西部で、複雑に切り合った状態で多数が検出された。そのほとんどが、廃棄土坑つまりゴミ穴である。大小さまざまで、プランは楕円形になるものが多いが、不整形のものもある。特に調査区南西部に群れているものは、深さもさほどなく削平されていることから考えると、それぞれが単独のものではなく、実際はいくつかの大きな穴の底近くの凹凸であった可能性がある。実際に、単独で扱った穴どうしの遺物が接合した例もあるが、ここでは一応それぞれの穴を単独のものとして扱った。どの穴も、概ね暗青灰色系の砂質土で埋まっている。出土するものには、瓦、陶磁器、土師器、瓦質土器や、焼き塩壺、灯明皿、土製玩具、食材残滓などがある。総数で50数基検出されているが、江戸時代の遺物を出土したものについて報告することにする。

a．調査区南東部の土坑群（図24）

ＳＫ１（図25）

Ｓ２Ｅ３区で検出された明治以降のもので、多量の瓦やホーローの洗面器などとともに土師器の坏、皿片や軒瓦片が数点出土した。0.7×0.9m程度の長方形に近いプランで、深さは10～15cmを測る。

ＳＫ１出土遺物（図26）

93～96は土師器、93は器高1.6cm、口径12.2cmを測る皿。94、95は回転糸切りの底部片で、坏、皿の区別はわからない。96は坏の口縁部小片である。

97は軒桟瓦で、十字に配した剣菱を中心飾りとし、三転する唐草を配するものである。98は軒平瓦の小片で、下向きの三葉文を中心飾りとし、その上端から唐草が延びる。

ＳＫ２（図27）

ＳＫ１の西直近で、ＳＫ１とともにＳＫ７を切っている。1.2×1.6mの隅丸長方形プランで深さ15cmを測る。

ＳＫ２出土遺物（図28）

99は京信楽系の陶器徳利の上半部、鉄絵による施文は折松葉か。釉は内面の頸部やや下位と外面にかけられている。100はミニチュアの陶器花入れ、外面の底部よりやや上、赤褐色の素焼きの肌に薄く透明釉をかけ、イッチン描きによる梅を描いている。101は陶器土瓶蓋で、外面を飛びカンナで仕上げ、鉄釉をかけている。内面に煤の付着が顕著にみられる。102は瓦質火鉢の片で、内面に焼け焦げの痕がある。

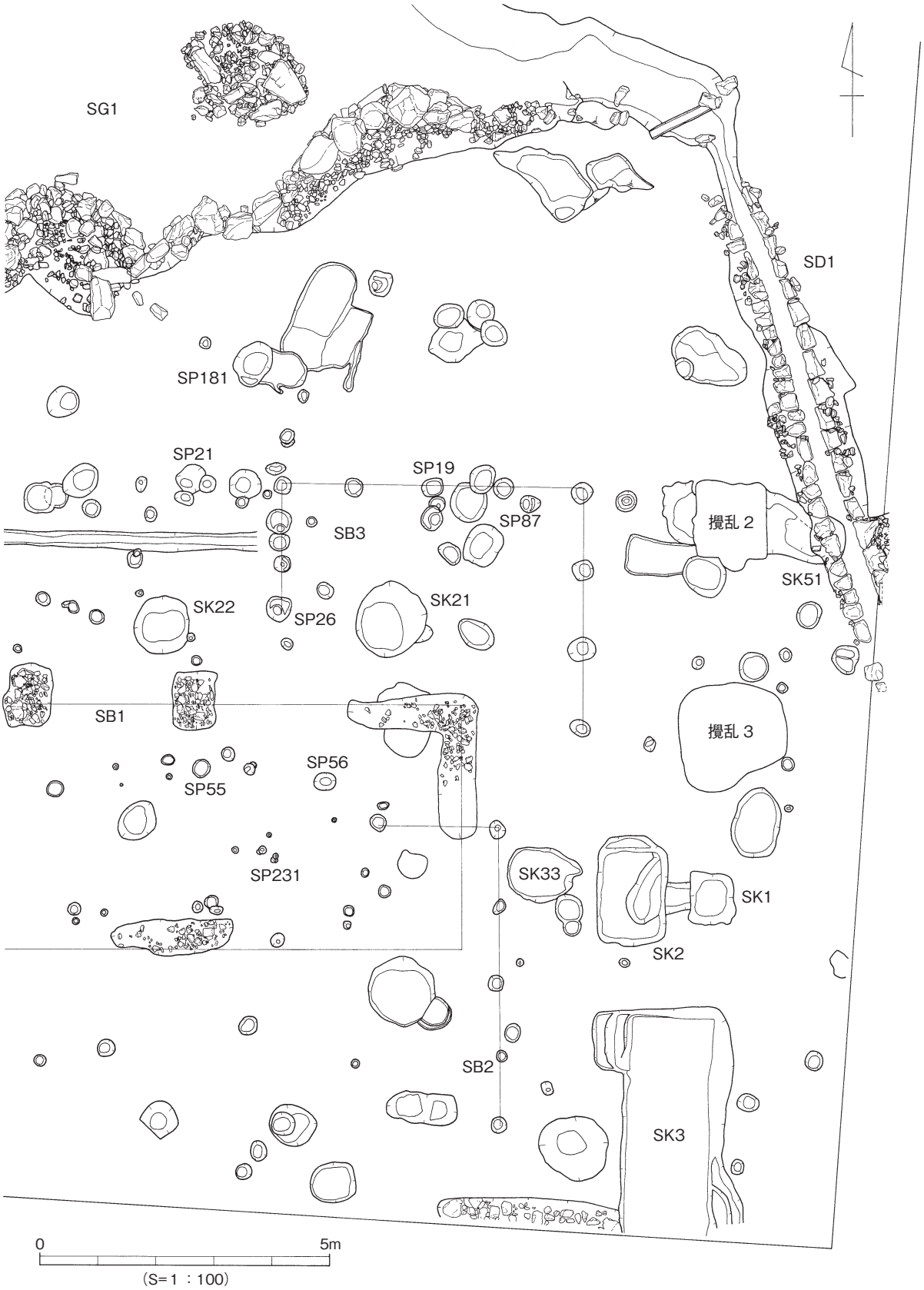


図24　調査区南東部土坑群

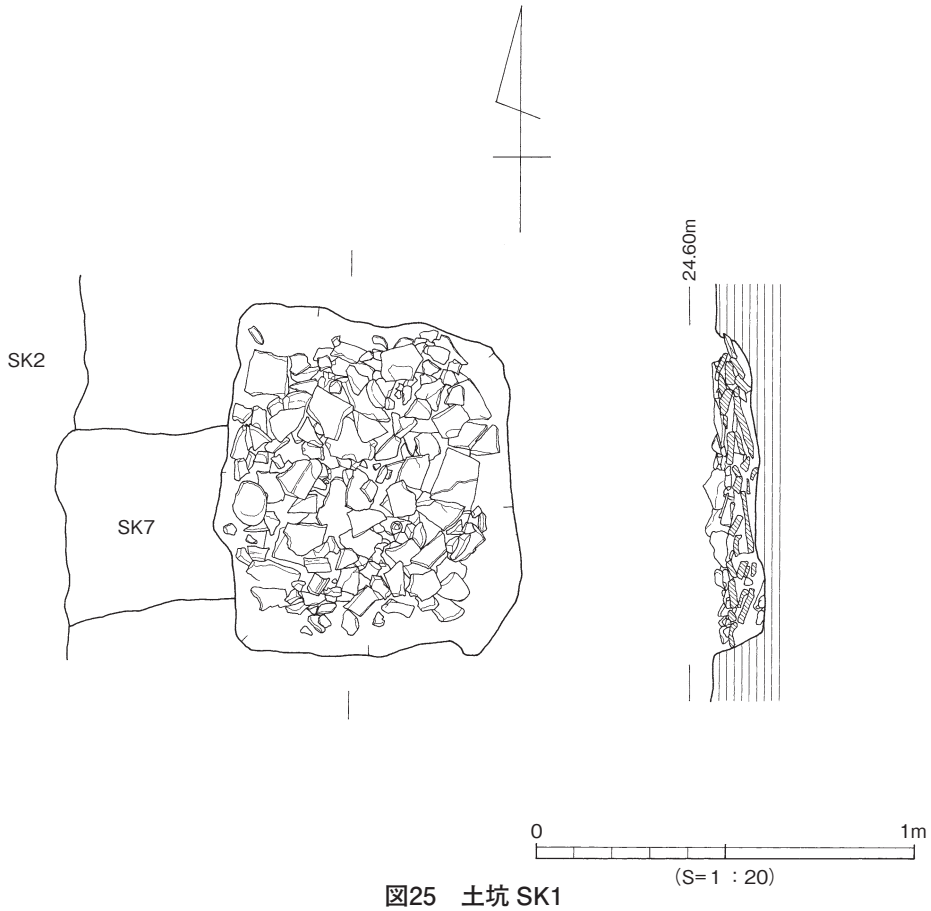


図25　土坑 SK1

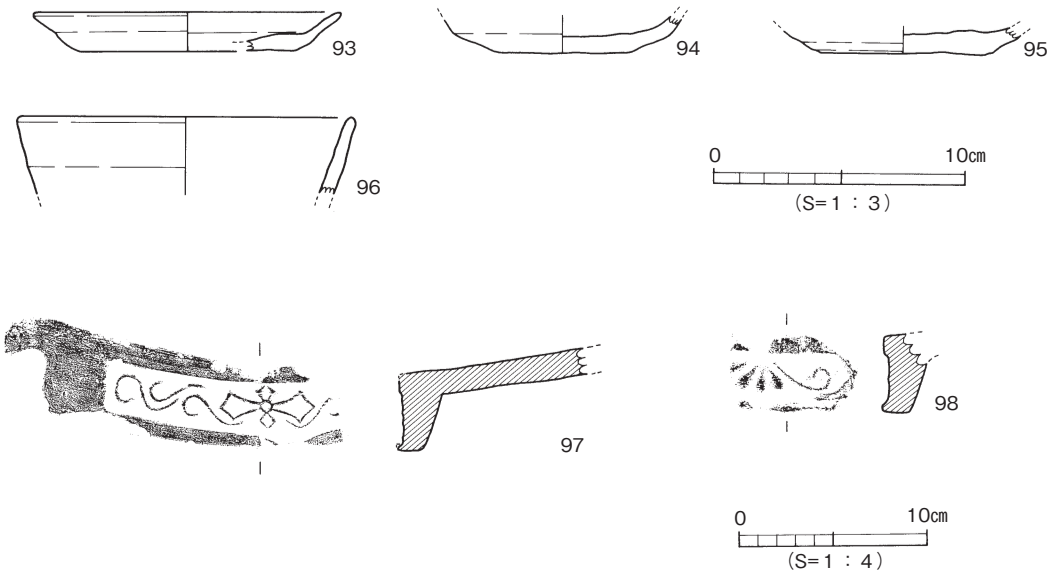


図26　SK1出土遺物

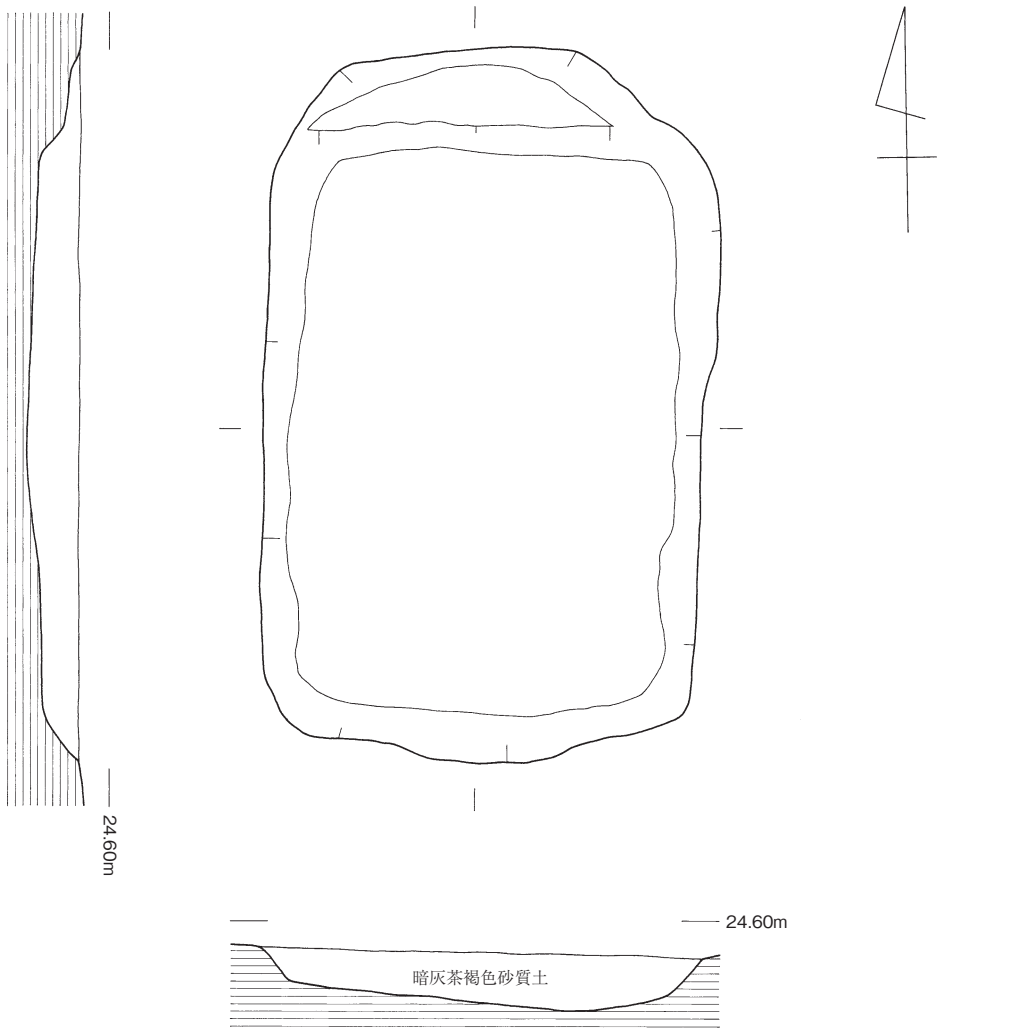


図27　土坑 SK2

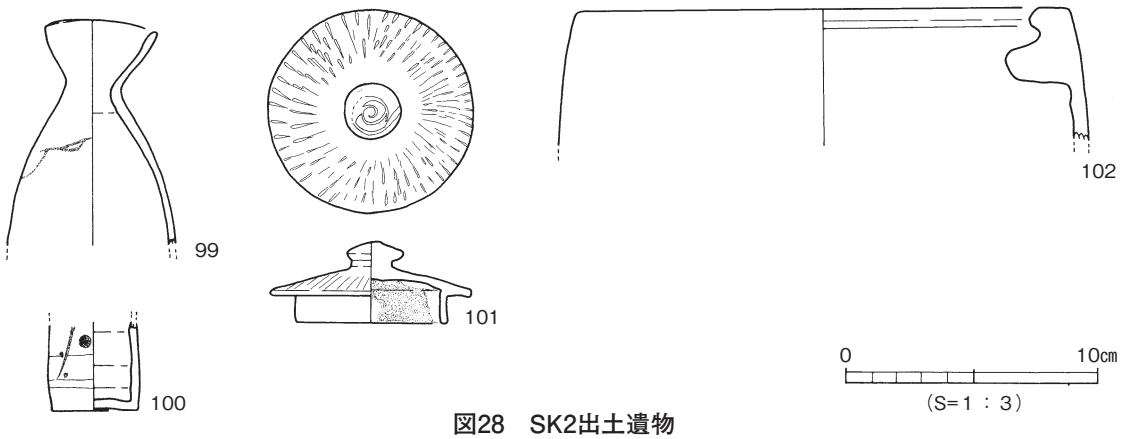


図28　SK2出土遺物

ＳＫ21（図29）

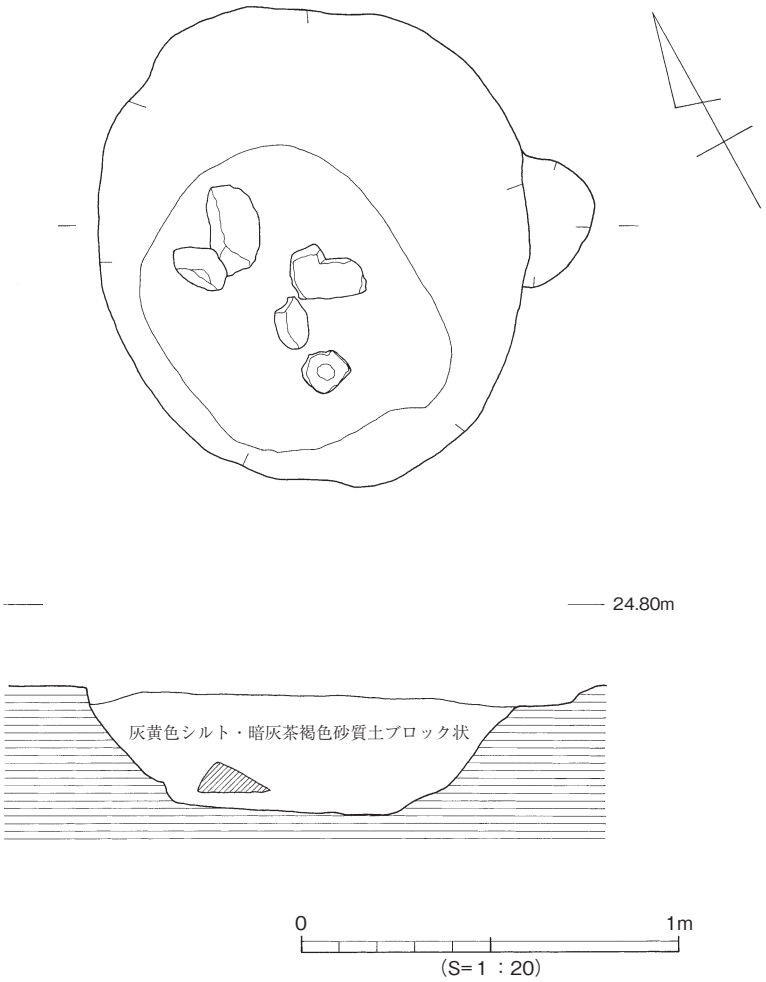


図29　土坑 SK21

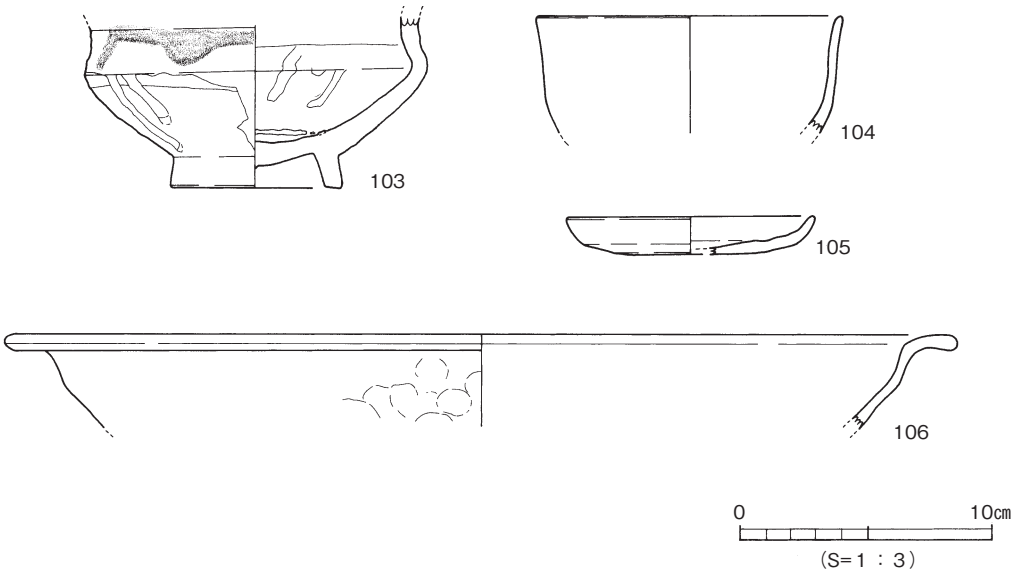


図30　SK21出土遺物

Ｓ１Ｅ２区検出、直径1.2mの円形プランで、深さ30cmを測る。坑底に数個の河原石が入っている。一部に古い遺物を含んでいるが、遺物総体からみれば18世紀後半頃の遺構であろう。

ＳＫ21出土遺物（図30）

103は肥前系陶器の火入で、外面は胴部屈曲部のやや下より上位の部分、内面は屈曲部よりやや上に施釉しているが、部分的に流れ下っている。釉は、長石釉、銅釉が用いられる。内面見込には、重ね焼きの痕跡が残る。灰落としに転用したものとみられ、残存する上端面には敲打の痕跡が巡っている。17世紀後半。104は京信楽系の陶器碗の口縁部片である。105は底部回転糸切りの土師器皿。106は瀬戸内系の土師器焙烙口縁部片である。

ＳＫ22（図31）

Ｓ１Ｅ１区検出、直径1.0mの円形プランで、深さ30cmを測る。この土坑の底や壁にも河原石や瓦片が貼りつくように入っていた。

ＳＫ22出土遺物（図32）

平瓦107を１点出土している。長さ31.0cm、厚さ1.5cmを測り、凹面は横、斜め方向に撫でられるが、側縁に近い部分は縦撫でされている。鉄線切りの痕跡が部分的に看取できる。凸面には縦や斜めの撫でが施されている。

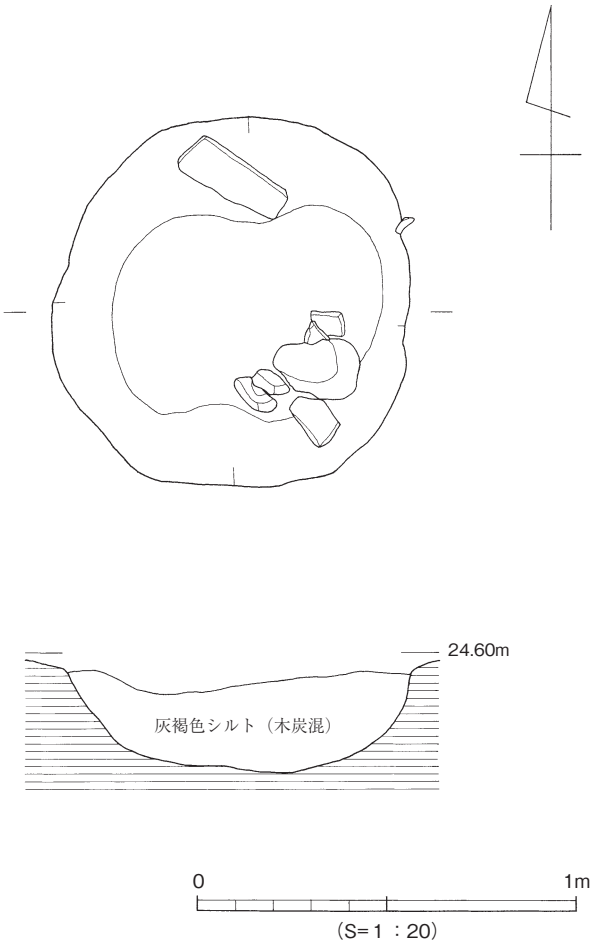


図31　土坑 SK22

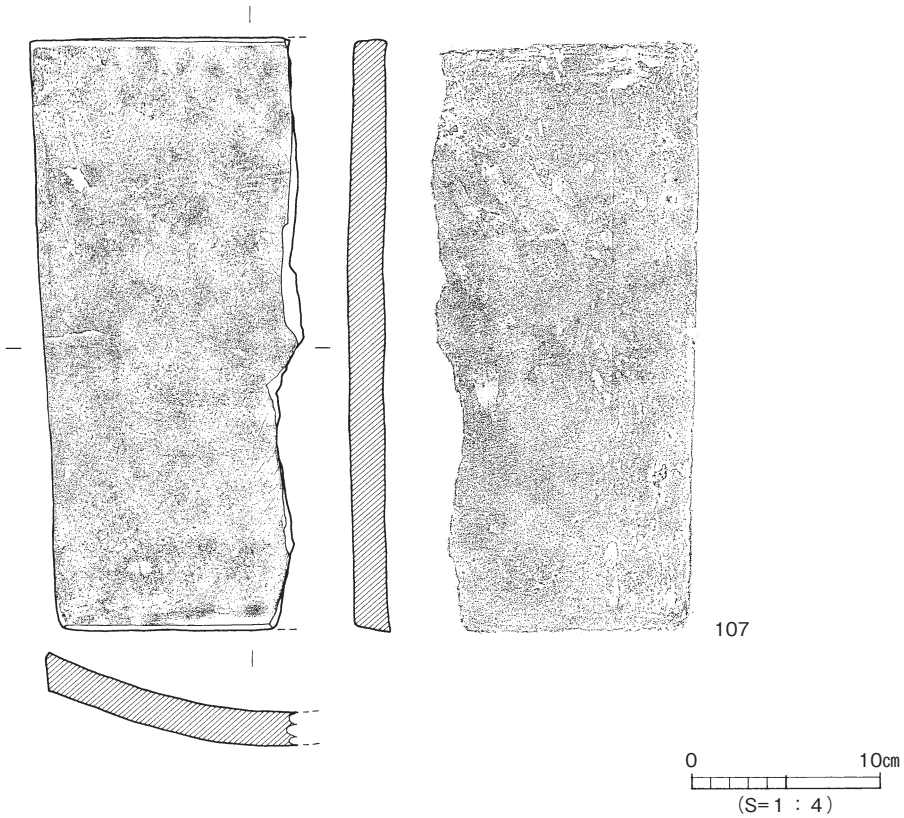


図32　SK22出土遺物

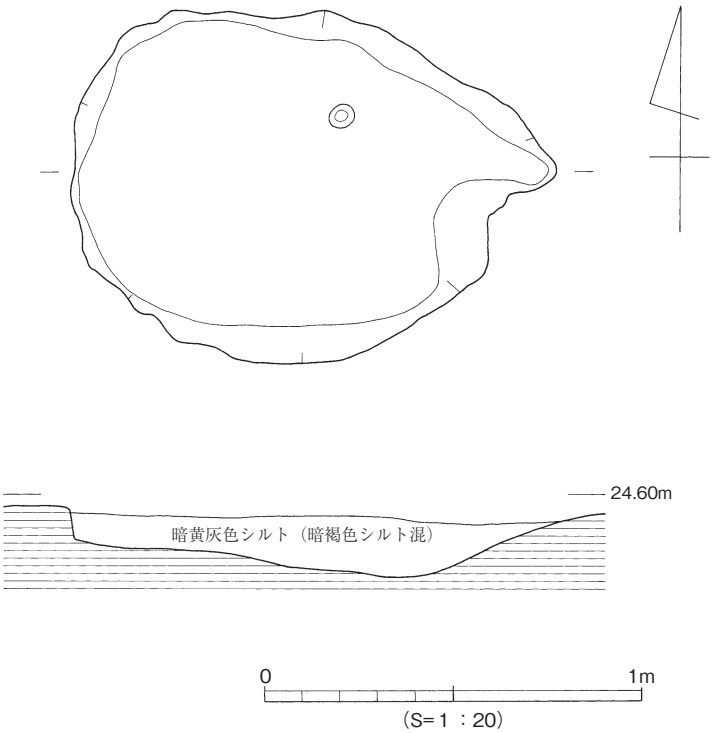


図33　土坑 SK33

ＳＫ33（図33）

Ｓ２Ｅ２区検出のもので、長径1.3ｍ、短径0.9ｍの不整楕円形プラン、深さ15㎝を測る。

ＳＫ33出土遺物（図34－108）

底部回転糸切りの皿、器高1.8㎝、口径8.4㎝、底径5.4㎝を測る。

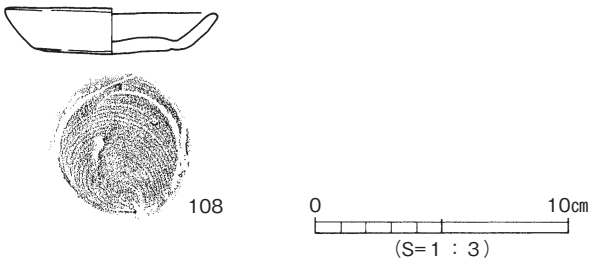


図34　SK33出土遺物

ＳＫ39（図35）

Ｓ１Ｅ３区検出、直径0.7ｍの円形に近いプランで、深さ15㎝の遺存である。ＳＫ40を切り、攪乱２に切られる。フラットな坑底から桟瓦一枚の出土がある。

ＳＫ39出土遺物（図36－109）

桟瓦１点が出土した。幅25.1㎝、厚さ1.3㎝を測る。焼成がやや甘く、部分的に乳白色に焼かれている。

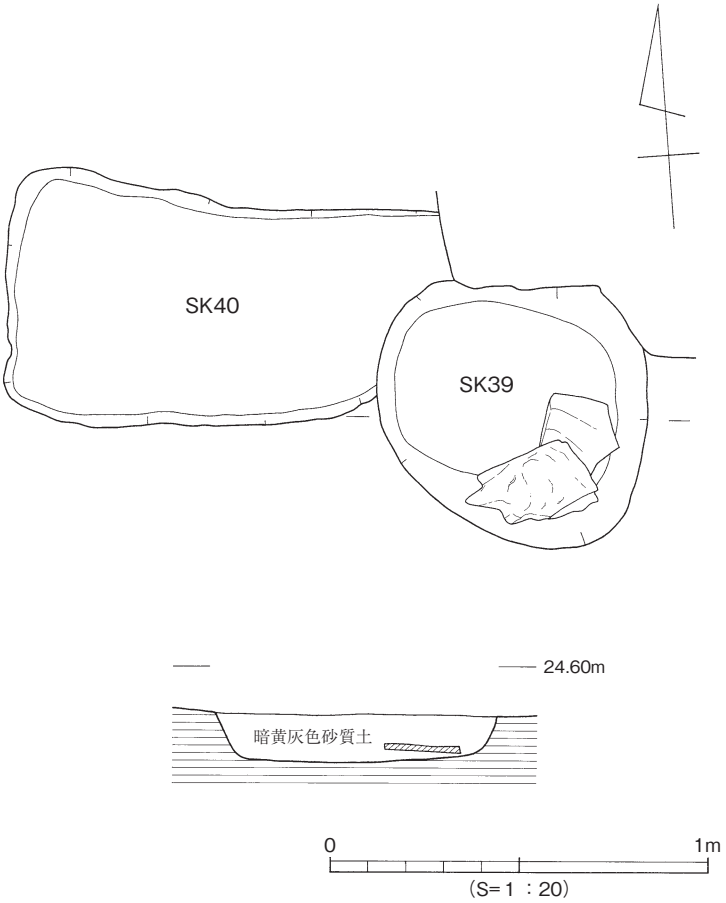


図35　土坑 SK39

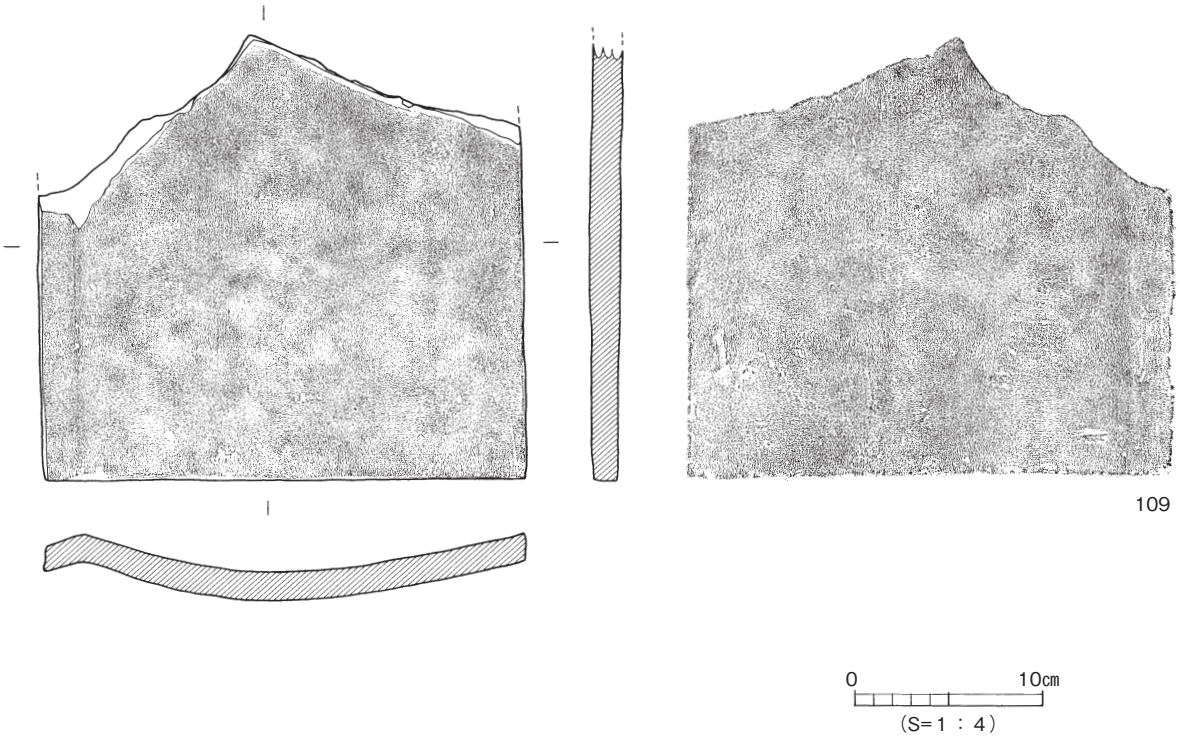


図36　SK39出土遺物

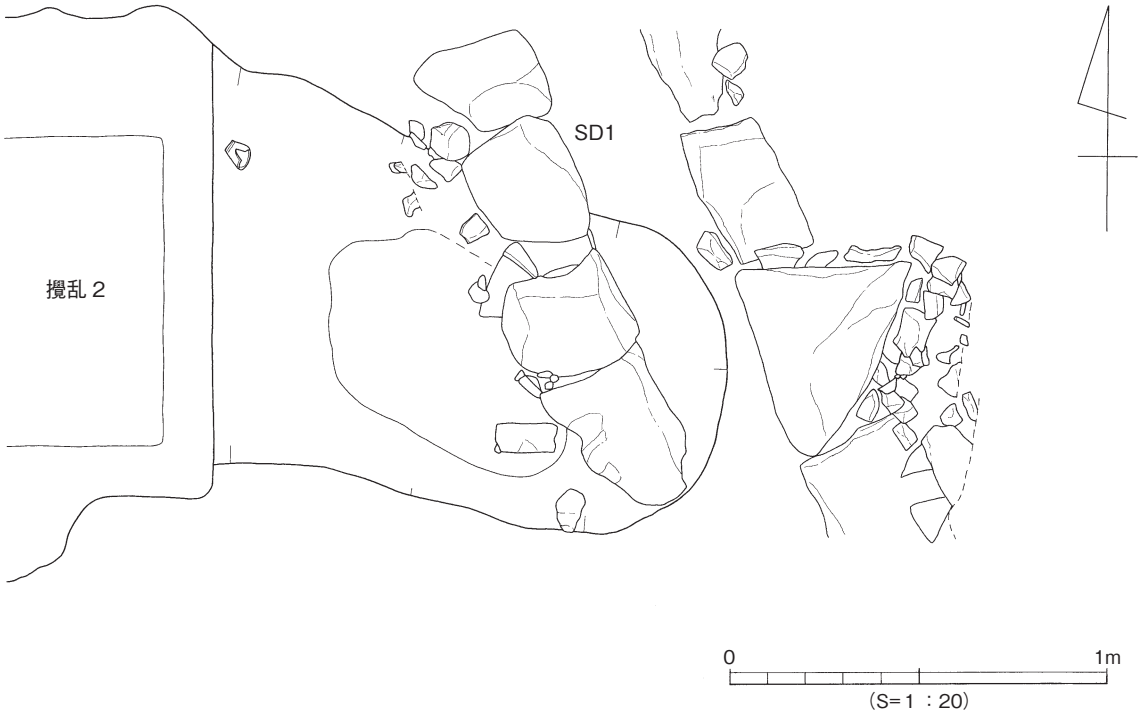


図37　土坑 SK51

ＳＫ51（図37）

Ｎ１Ｅ３区、Ｓ１Ｅ３区にまたがって検出された遺構で、ＳＤ１に切られたり、攪乱２に破壊されたりしている。

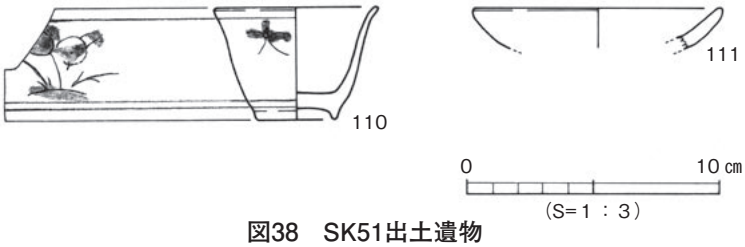


図38　SK51出土遺物

ＳＫ51出土遺物（図38）

110は肥前系磁器染付小坏で、端反の器型である。器高4.5㎝、口径6.4㎝、高台径3.1㎝を測る。外面口唇部に１条、腰部に２条の圏線を引き、その間に蝶に草花文を描いている。17世紀末～18世紀前半。111は土師器灯明皿の口縁部片、外面が煤けている。

ｂ．調査区西部の土坑群（図39）

ＳＫ４（図40）

Ｓ２Ｗ３区検出、長径1.5ｍ、短径１ｍの瓢形に近い不整形プランを呈する。深さ20～30㎝程度の遺存で、ＳＰ31に切られている。出土遺物から、18世紀後半～19世紀前半の遺構である。

ＳＫ４出土遺物（図41・42）

112は肥前系磁器外青磁の染付碗、内面口縁部に四方襷文、体部には雪輪に竹梅文、二重圏線で区画された見込に五弁花を施す。高台内には二重方形枠銘款の一部が確認できる。18世紀後半。113、114は肥前系磁器染付小碗。113で器高3.9㎝、口径7.6㎝、高台径2.8㎝を測る。外面に濃みによる岩松文が描かれている。18世紀。114は器高4.0㎝、口径7.7㎝、高台径3.0㎝、灰色がかった釉に鈍い発色の呉須で草花文が施されている。波佐見、18世紀中頃。115は肥前系磁器染付小坏、器高5.2㎝、口径7.8㎝、高台径4.0㎝を測る。端反の器型で、外面に松竹梅が散らされている。松は折松葉、松かさとで表現されている。高台内には圏線が１条巡り、不詳ながら方形枠の銘款が確認できる。18世紀。116も肥前系磁器染付筒型碗、器高6.8㎝、口径8.6㎝、高台径4.6㎝を測る。外面の文様は家屋山水図。底面高台脇に雨龍が巡る。内面口縁部には横帯と圏線の組み合わせ、二重圏線で区画された見込には手描き五弁花を描いている。18世紀中頃。117は肥前系磁器染付蓋、復元口径10.6㎝を測る。薄い灰色の釉にやや黒っぽく発色した呉須で、外面に椿や草文を描いている。

118は瀬戸美濃系陶器の腰折碗、内外面に灰釉、外面には鉄釉による笹文を施し、さらに緑や赤で笹文を上絵付けしている。破断面に焼き継ぎの痕跡が残っている。18世紀後半～19世紀前半。119も瀬戸美濃系陶器の腰折碗、外面に呉須、長石釉、緑釉による淡い施文がみられる。120は産地不詳の陶器鉢、緋色の胎土に透明釉をかけている。121は備前擂鉢口縁部小片、外面に２条の凹線が巡る。122、123は備前灯明皿、どちらも返りを持つタイプで、口径10.3㎝、器高1.8㎝、いずれも煤の付着があるが、特に122に顕著である。18世紀後半～19世紀前半。

124～133は土師器皿、法量の大小にかかわらず底部回転糸切りである。126、127の口縁部に煤の付着が著しく、また大型の133は内外面の大部分が煤けている。134は復元口径15.3㎝を測る小型の土師器土釜である。内面は漆黒色に近く焼け焦げている。135～137は瀬戸内系の焙烙、最も残りのよい137でみてみると、器高10.0㎝、口径36.0㎝、口縁は水平に近く延びている。内耳には２孔が穿たれ、外面の底部付近は刷毛目、その他の体部には指頭痕が残り、内面は粗く磨かれている。

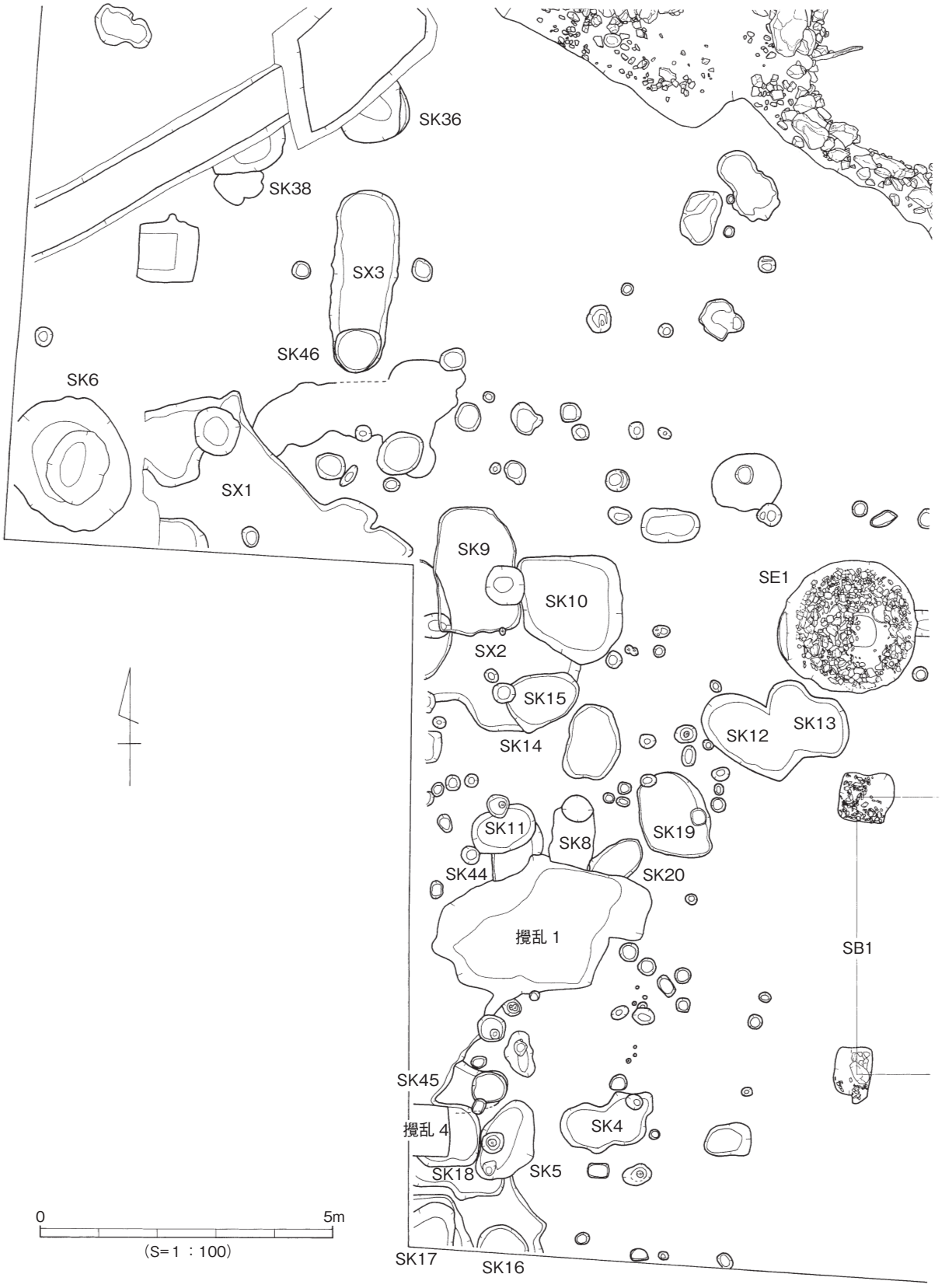


図39　調査区西部土坑群

ＳＫ５（図43）

Ｓ２Ｗ３区、ＳＫ４の西側で検出されたもので、長径1.5m、短径１ｍの楕円形プランを呈する。最深部で深さ20cmを測る。出土遺物に年代幅はあるが、18世紀後半～19世紀前半の遺構である。

ＳＫ５出土遺物（図44）

138、139は土師器皿の小片である。140は肥前系陶器の刷毛目碗、17世紀後半～18世紀前半。141は器高9.5cm、口径15.9cm、高台径6.8cmを測る肥前系染付の丸形の鉢である。外面に雲竜が描かれ、内面にも見込み文様のごく一部が看取できるが、詳細は不明。142、143は肥前系磁器の蓋、142は白磁、143は染付である。143は外面天井部に帯と圏線の組み合わせ、口縁部に２重圏線を施し、これらで区画したスペースに梅花唐草を描いている。18世紀後半。144は堺擂鉢、器高16.1cm、口径39.0cm、高台径20.0cmを測る。高台は、平底から体部の立ち上がり部分に断面三角形の幅広の粘土帯を貼り付け、畳付の内側の部分を強く撫で窪ませて低い高台状に仕上げている。擂目は10本、口縁帯の外面には凹線が２条施される。体部は口縁下までヘラケズリされ、砂粒の移動方向は、正位に置いて、向かって右である。外面の塗り土はいたるところで膜状に剝げ落ちている。18世紀中頃～後半。

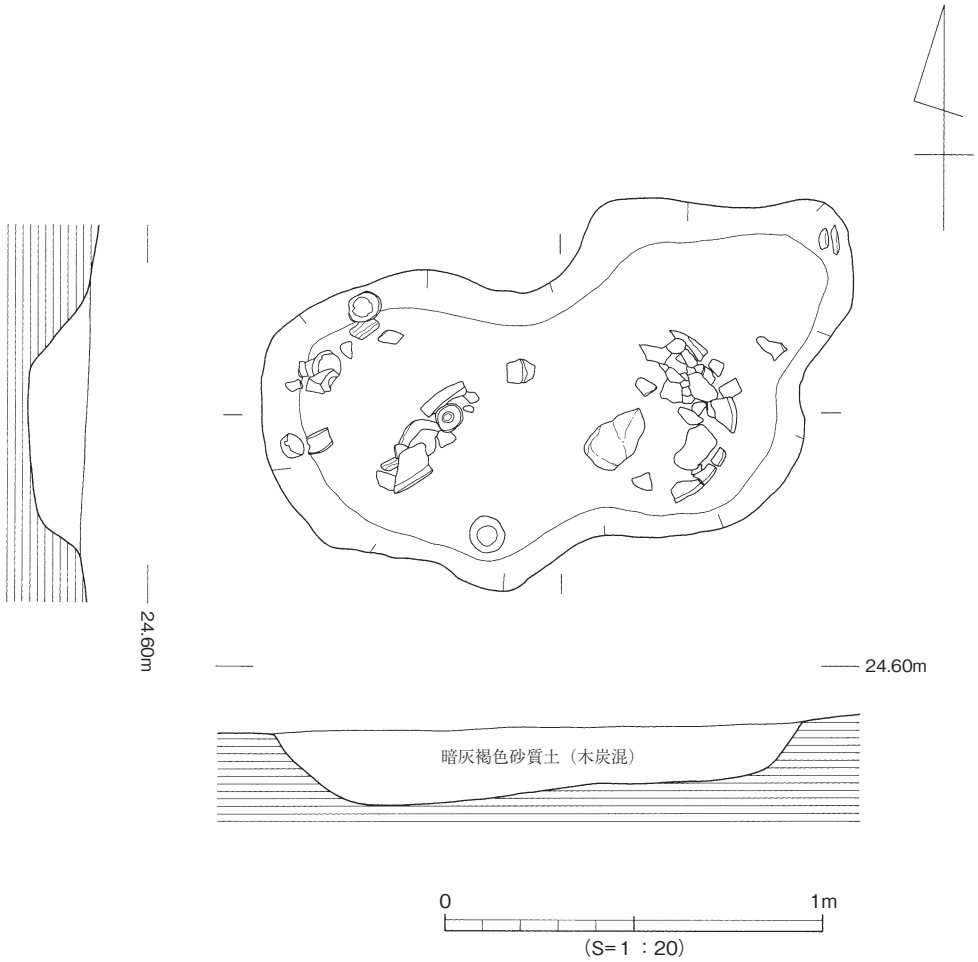


図40　土坑 SK4

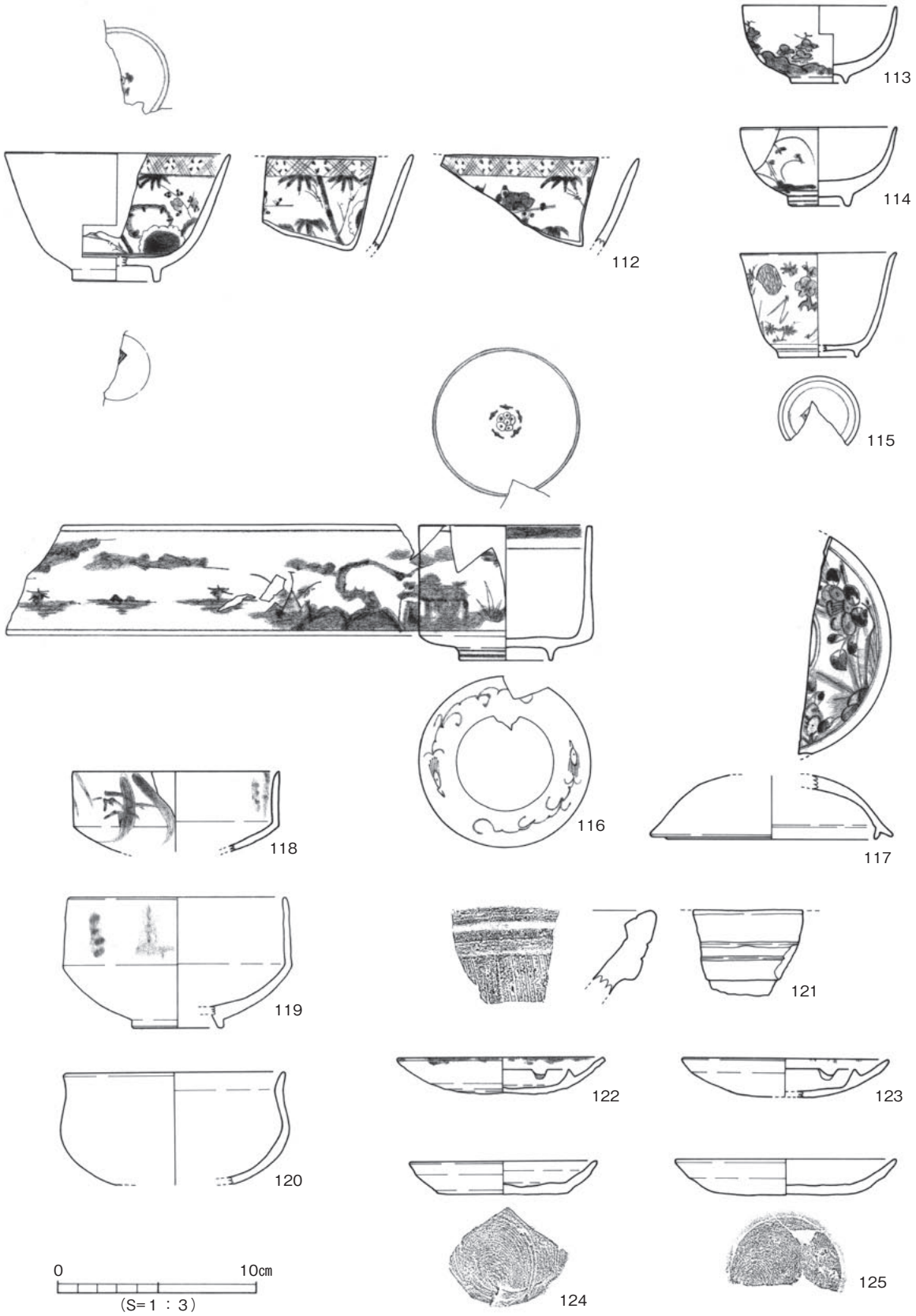


図41　SK4出土遺物(1)

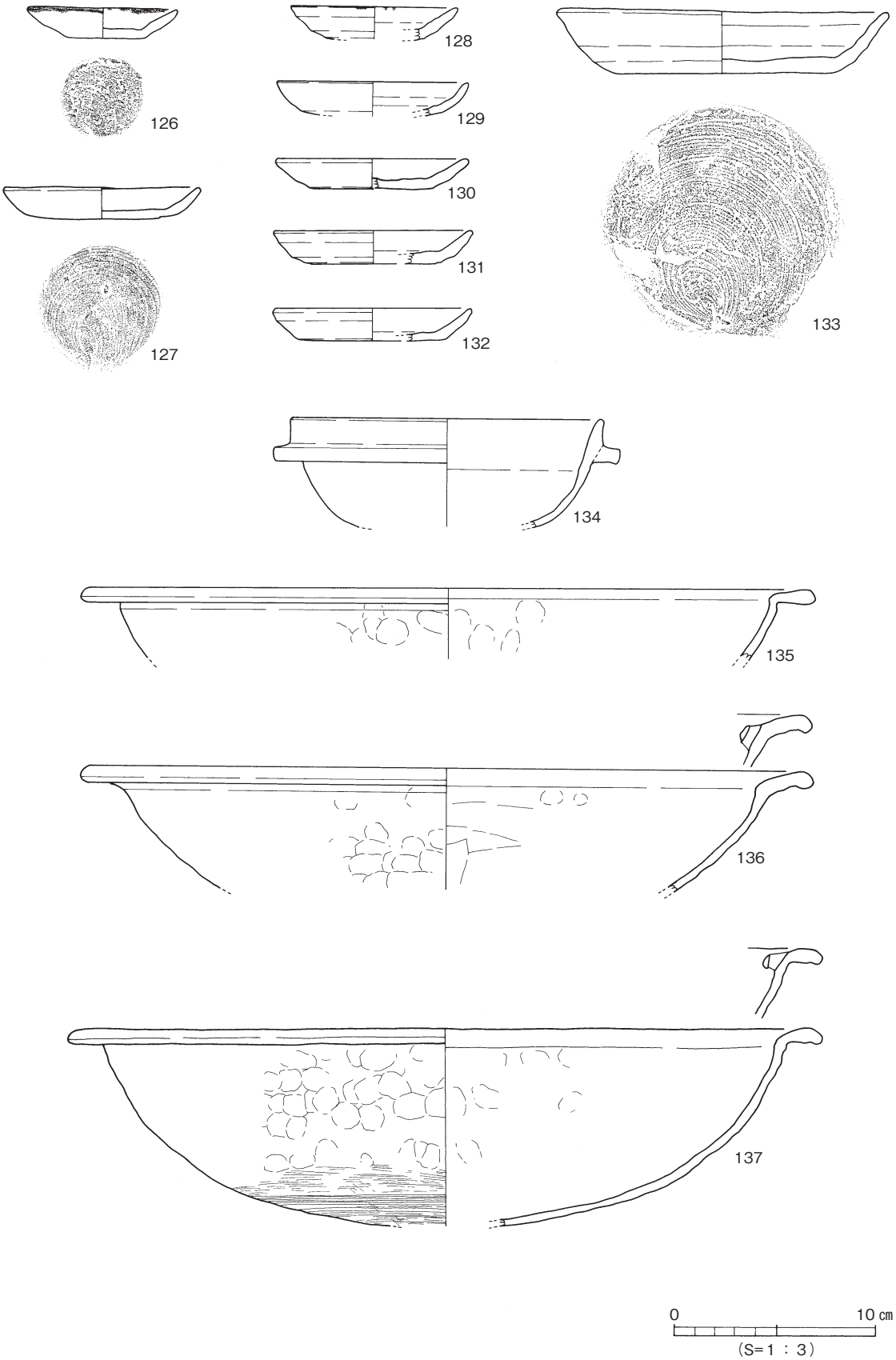


図42　SK4出土遺物(2)

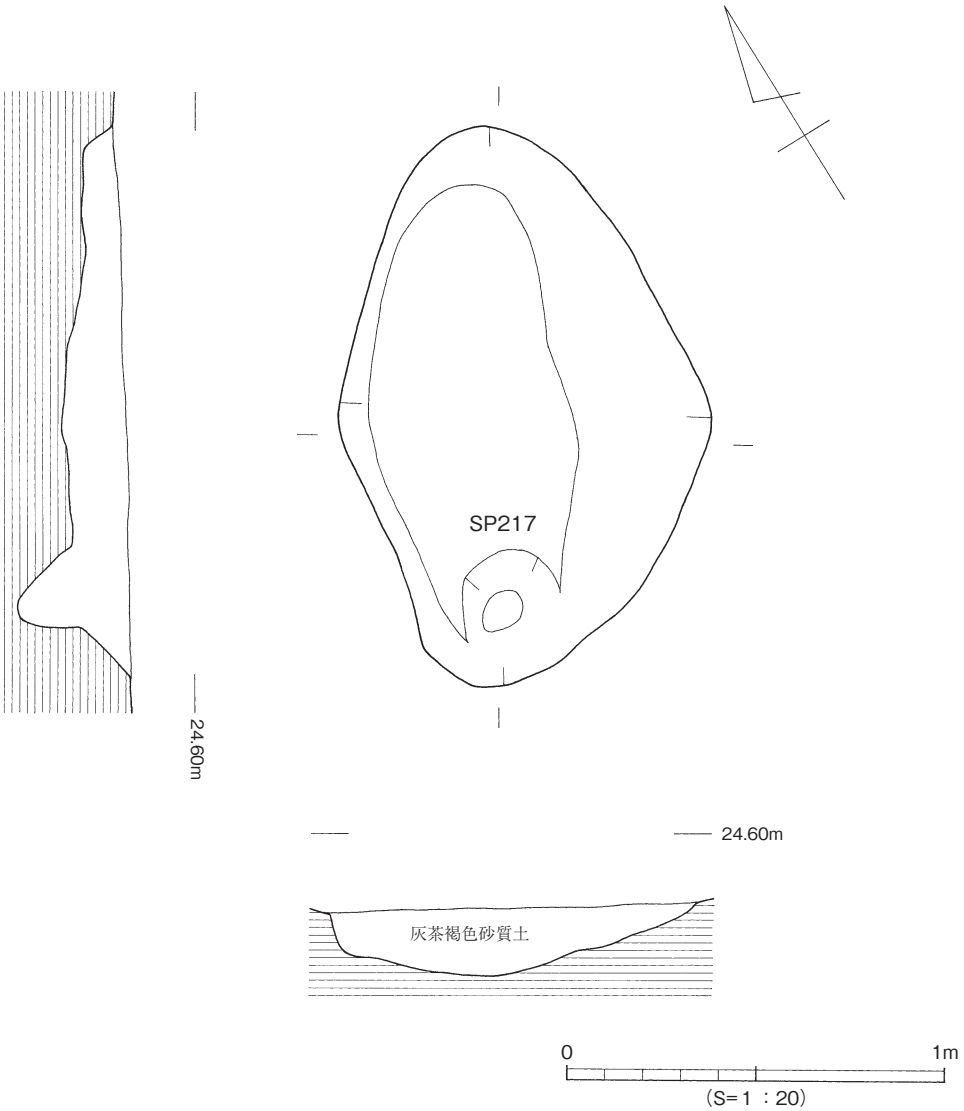


図43　土坑 SK5

ＳＫ８（図45）

Ｓ１Ｗ３区検出の土坑で、攪乱１と埋甕１に切られる。現況では幅0.7m、長さ0.9mの浅い溝状のプランとして検出されている。18世紀後半頃のものであろう。

ＳＫ８出土遺物（図46）

145は肥前系陶胎染付碗で、器高6.5㎝、口径10.0㎝、高台径4.7㎝を測る厚手の半球形碗。灰色の胎土に不鮮明な発色の呉須で唐草文や圏線を描き透明釉をかけている。高台畳付は釉剝ぎしている。波佐見、18世紀前半～中頃。146は肥前系磁器染付蓋、高台外面に２条、天井部の内外面に１条の圏線、外面には草花文らしき施文がわずかに確認できる。全体的に濁った感じで、呉須も緑がかった発色になっている。波佐見、18世紀後半。

ＳＫ９（図47）

Ｎ１Ｗ３区とＳ１Ｗ３区にまたがる遺構で、ＳＫ10、ＳＫ34やＳＰ72・75と切り合う土坑で、これ

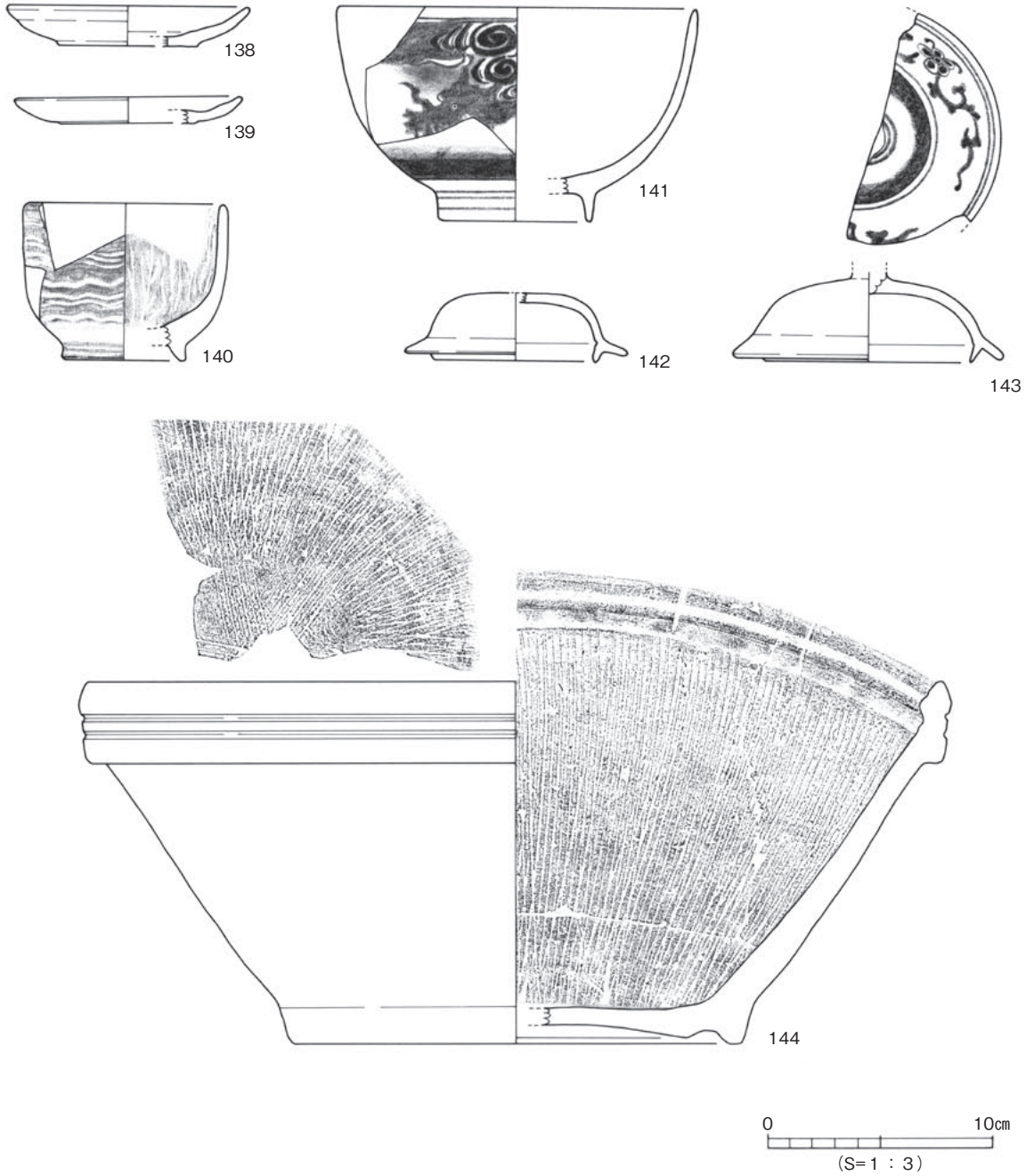


図44　SK5出土遺物

らのすべてを切っている。2.1×1.3m程度の隅丸方形に近いプランをなし、深さは20cmを測る。陶磁器、土師器、瓦質製品などとともにサザエ、イガイ、アサリ、ハマグリなどの貝殻が出土している。19世紀前半から幕末頃の遺構である。

ＳＫ９出土遺物（図48・49）

147～149は18世紀代の京信楽系陶器碗である。147は腰部で一旦くびれたあと、内湾しながら上方に口縁が立ち上がる。外面に銹絵が施されている。流水の表現であろうか。高台そのものは遺存していないが、露胎である。148、149ともに同型の碗、148は小杉碗で銹絵の下端が僅かに認められる。

図45　土坑 SK8

両者ともに高台は露胎である。150の端反碗は萩か。

151～155は肥前系の磁器である。151は端反碗、外面には花唐草が、内面口唇部には二重圏線が施されている。152は碗の口縁部で、外面の口唇部に１条の圏線、それから垂直に下る縦縞の区画文が２条まで確認できる。内面口唇部の釉は剝ぎ取られている。153の碗は、灰色の胎土、発色の悪い呉須で底部の高台外面と、高台脇のそれぞれに圏線が１条巡っている。154、155は器高2.5cm、口径10.6cm、高台径6.1cm程度のいわゆる手塩皿である。型打によって輪花に成形された口唇部には口銹を施し、見込み一杯に網干海浜風景を描く。これら肥前磁器はおおよそ19世紀前半から幕末までにおさまるものである。

156は肥前系陶器刷毛目皿、器高5.7cm、口径17.0cm、高台径7.4cmを測る。赤褐色の胎土をした器体の外面体部中位以下を除いた部分に鉄釉をかけ、さらに口縁部内面に白土で波状の刷毛目文様、見込に薄く白土を

図46　SK8出土遺物

回しかけている。18世紀末～19世紀前半。157は産地不詳の陶器行平蓋、器高3.5cm、口径15.0cm、つまみ径4.0cmを測る。口唇部内面を除くすべての部位に藁灰釉がかかっている。外面には陰刻による圏線が同心円状に７条巡っている。158は備前人形徳利の下半部で、体部の三方向に設けられた窪みの一箇所に型打の大黒天を貼り付けている。18世紀後半～19世紀。159～166は灯明皿、うち159、160が備前、161が産地不明の無釉陶器、ほかが土師器である。備前の２点159、160は底部を含めた外面を回転ヘラケズリされている。２点ともに内面に塗り土され、暗紫色～暗茶褐色に発色している。口唇部に煤の付着がある。18世紀～19世紀。161も備前風の無釉陶器であるが、回転糸切りされた後、体部を手持ちで削られており、発色もやや赤っぽい。これも口唇部に煤の付着がある。167は焼塩壺、器高6.9～7.2cm、口径6.6cm、底径4.7～5.5cmを測る。体部を一枚の粘土板で製作し、底部を粘土塊で埋めるものである。口縁部は平坦な面をなし、蓋受け状には作り出されていない。内面には芯の布痕が口縁部から底部のやや上位にまで残っており、これ以下の部分とは段がつく恰好になっている。胎土には金雲母を含んでいる。19世紀代か。

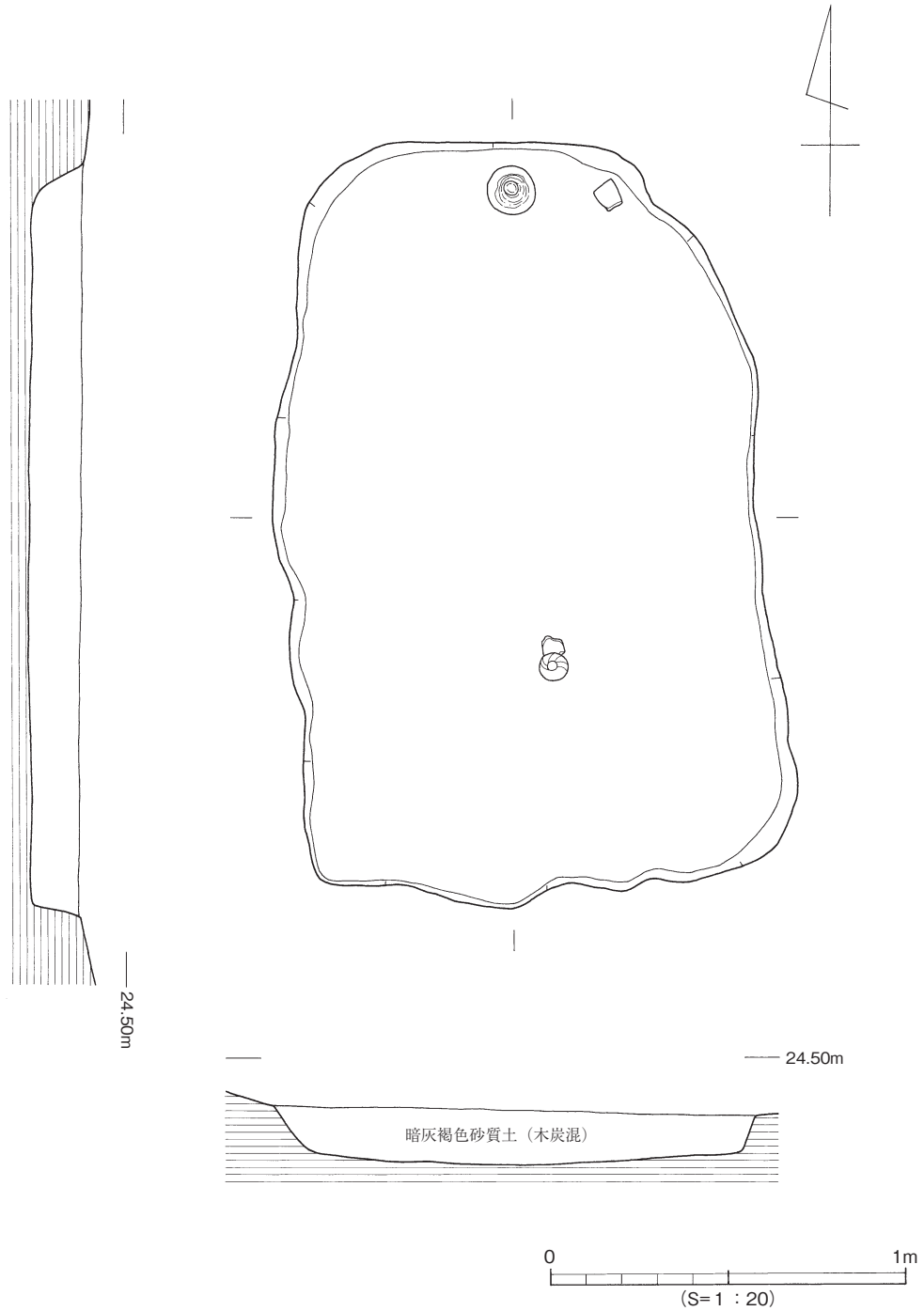


図47　土坑 SK9

168は土師質、焜炉のサナである。直径8.5cm、厚さ1.0cmの土板に直径１cm強の孔を７箇所設けている。169は瓦質の火入れ、口径11.0cmを測る。口縁部をやや下った位置に直径2.0cmの円孔が１箇所だけ確認できる。内面の特に下位の部分は二次的被熱により乳白色に変色している。170は火消し壺の蓋、口径21.6cm、器高4.3cmを測る。鈕は粘土板を熨斗形に貼り付けたものである。171は瓦質の焙烙で、形態は土師器の瀬戸内系のものと同様である。172は瓦質の風炉、器高19.7cm、口径は内法の差し渡しで22.2cm、高台径21.4cmを測る。正面に切り欠き、体部側面には背面寄りに２箇所、空気の取り入

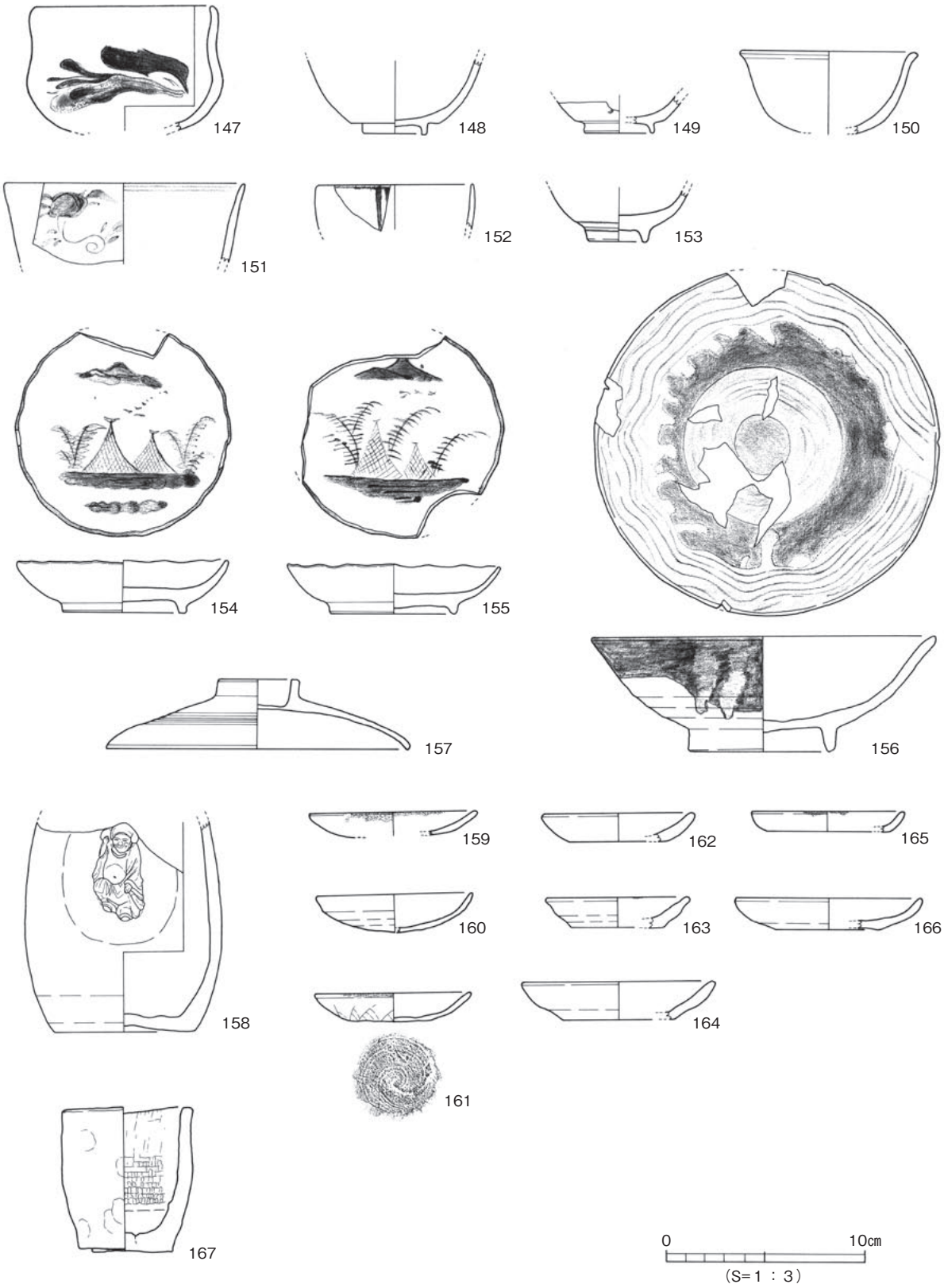


図48　SK9出土遺物(1)

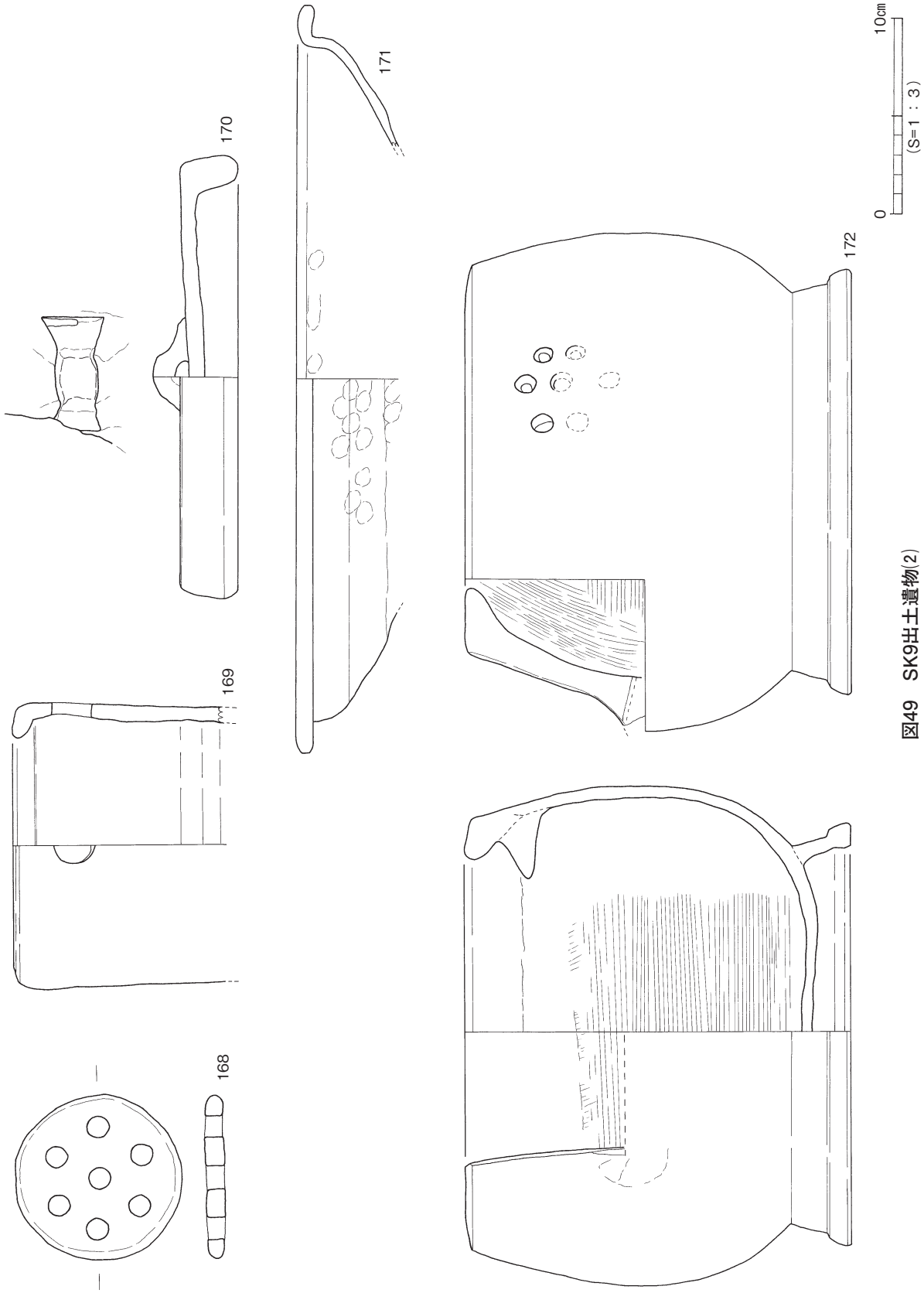


図49　SK9出土遺物(2)

れ孔があり、内面の口縁部直下には角状の突起が３箇所設けられている。

ＳＫ10（図50）

Ｎ１Ｗ３区とＳ１Ｗ３区にまたがって検出された。不整形、1.7×1.8m程度の台形に近いプランをなす。深さ20cmの遺存である。磁器や陶器の碗、皿、土師器皿などが主な出土遺物である。18世紀後半頃の遺構であろう。

ＳＫ10出土遺物（図51）

173～176は陶器の碗、皿である。173は肥前系刷毛目碗、やや赤味を帯びた褐色の胎土に白土で刷

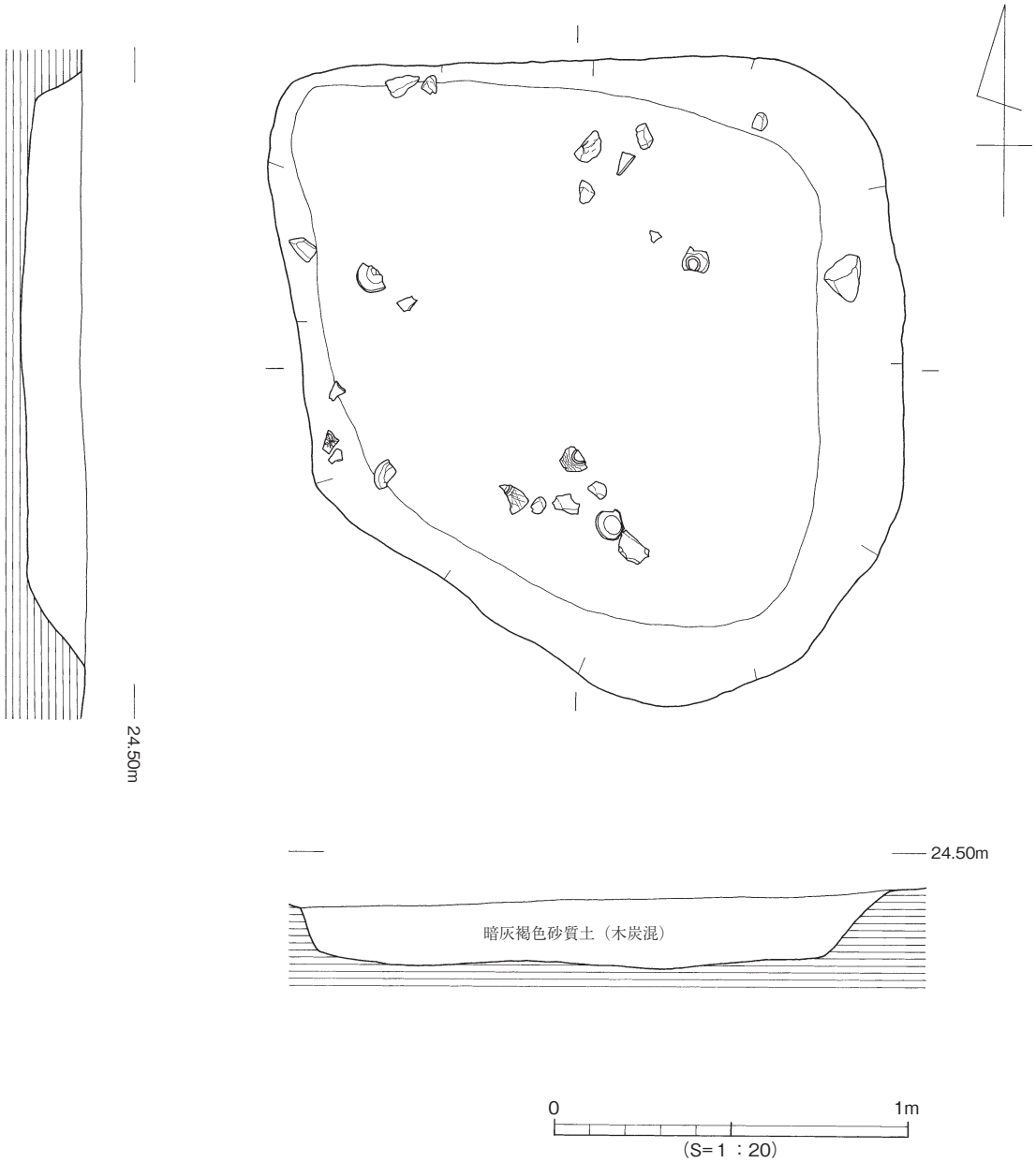


図50　土坑 SK10

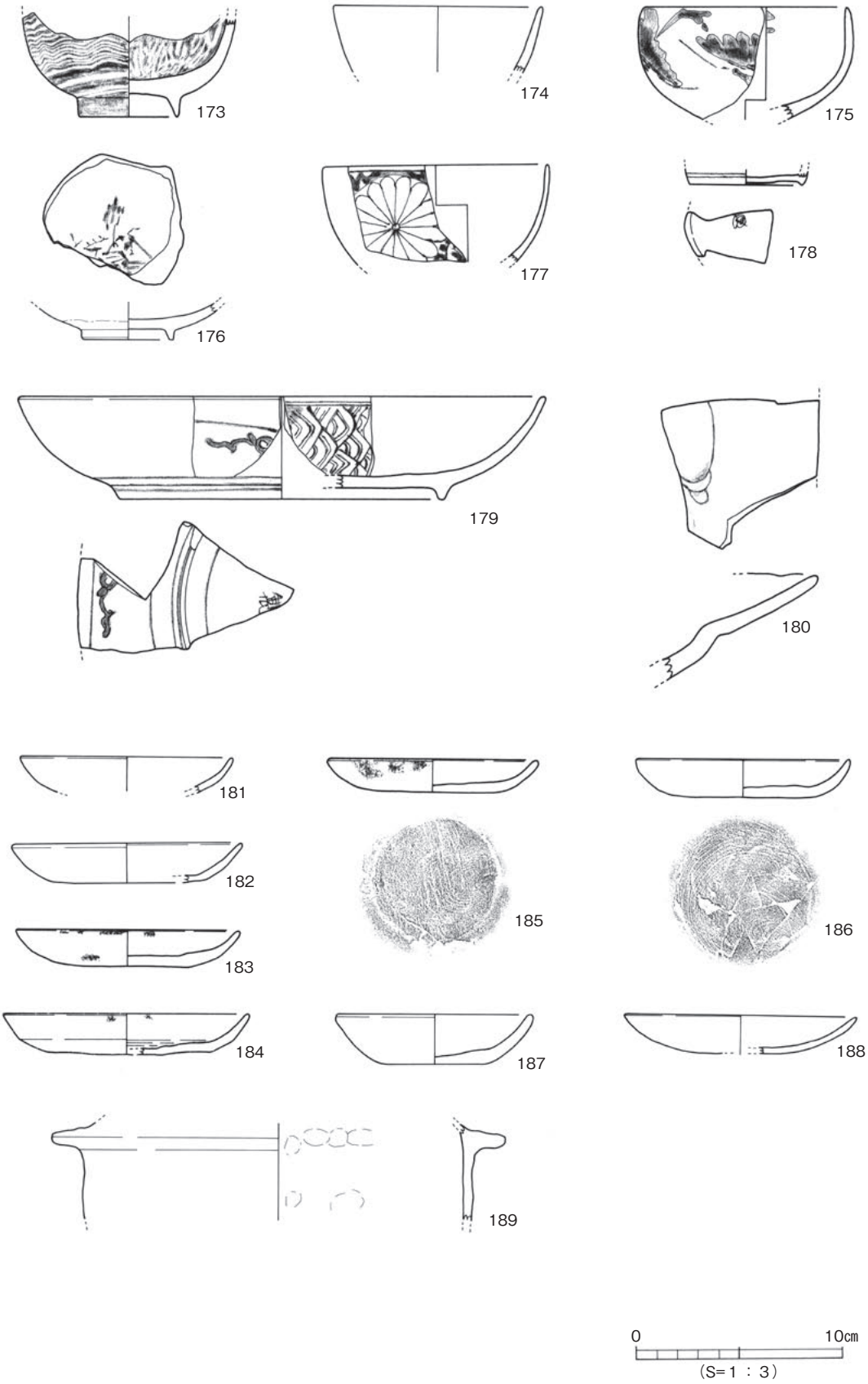


図51　SK10出土遺物

毛目文様を施し、透明釉をかけている。17世紀後半～18世紀。174、175は京信楽系の陶器碗で、175は灰釉をかけた上に松文を上絵付けしているが、ほとんどが剝落している。高台は露胎である。18世紀。176は、肥前系の京焼風陶器皿である。見込に呉須絵で山水楼閣図を描いている。露胎の高台内面に刻印はない。18世紀。

177～180は肥前系の染付磁器である。177は碗、外面には唐草地に菊花散らし文を施す。18世紀後半。178は蕎麦猪口底部で、崩れた渦福の銘款がある。18世紀前半～中頃。179は染付皿で口縁部から見込にかけて青海波文を縦方向に施している。見込に不自然な空白部分があるので、あるいは色絵素地であるのかもしれない。また、足付きハマによるとみられる重ね焼きの痕跡がある。裏文様は唐草文、高台内に一重圏線と「製」という銘款の一部が確認できる。18世紀後半。180は青磁染付の大型折縁皿、貫入のある青磁釉に呉須で草文かと思われる染付を施している。波佐見、17世紀末～18世紀前半。

181～187は土師器灯明皿で、いずれも底部回転糸切りによる。なかでも183～186には使用痕がよく残っている。188は無釉陶器灯明皿。器型、成形は備前に似るが塗り土は施されず、須恵器のように灰色に堅緻に焼成されている。口唇部に煤が付着する。189は土師器土釜の片である。

ＳＫ11（図52）

Ｓ１Ｗ３区検出、1.1×0.8mの楕円形プラン、深さ20cmを測り、ＳＫ44を切る。18世紀前半代の遺構か。

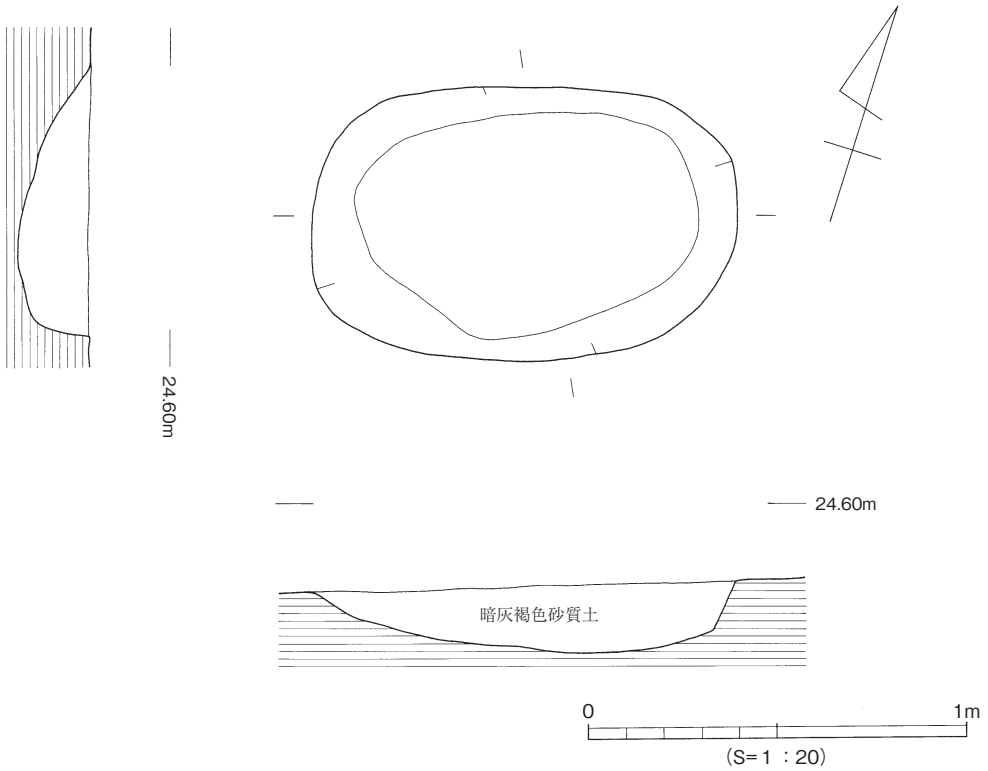


図52　土坑 SK11

ＳＫ11出土遺物（図53）

190は肥前系染付碗、器高4.0cm、口径8.2cm、高台径3.3cmを測る。外面にはコンニャク印判による楓文を呉須で施し、高台外面に２条の圏線、高台脇に１条の圏線を巡らせる。胎土は明灰色で、呉須は暗い紺色に発色している。器面の内外面に焼け焦げがみられる。波佐見、17世紀末～18世紀前半。191、192は土師器灯明皿、191は器高1.4cm、口径6.4cmを測る小型のもので、底部は糸切り離しによる。内面や口唇部に煤の付着がある。192はやや大ぶりのものの小破片であるが、外面を丁寧に磨かれている。

ＳＫ12・13（図54）

Ｓ１Ｗ２区の検出である。おおよそ1.7×1.1mの楕円形プランを呈するＳＫ12と同規模のＳＫ13とが切り合っているものと考えられるが、明確な切りあいが確認できなかった。遺物は平面位置からいずれかに属すると考えるものを区別して扱った。切りあいが明確でないところから考えると、近接し

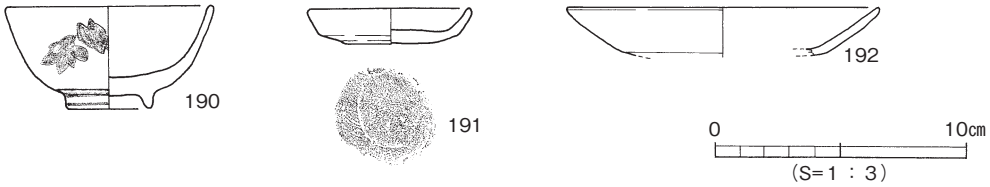


図53　SK11出土遺物

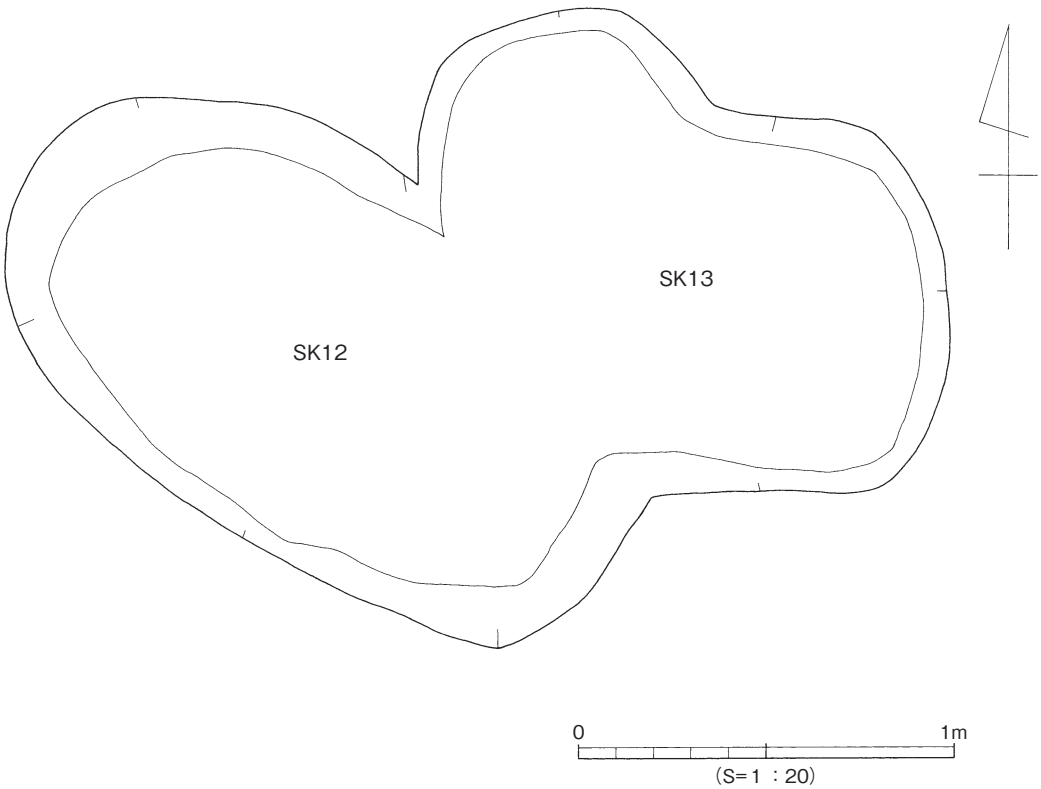


図54　土坑 SK12・13

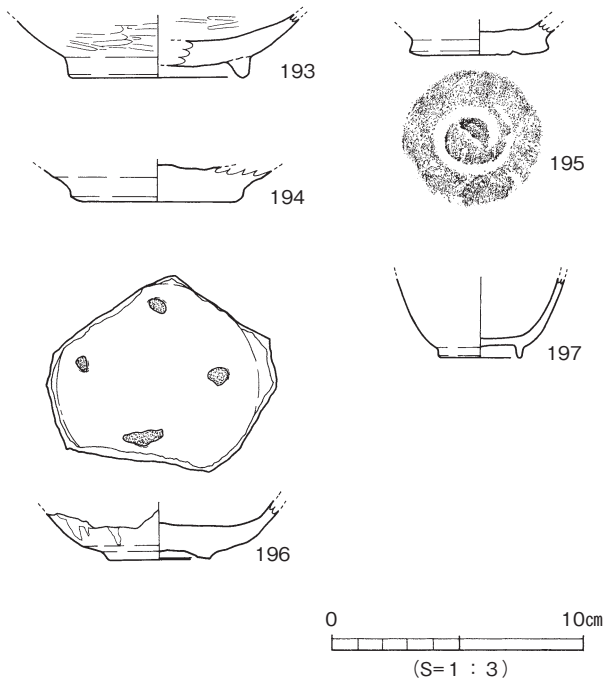


図55　SK12出土遺物

た時期の遺構であると思われる。18世紀前半頃か。なお、明らかに古い遺物が混入しているが、これらはベースの包含層からの遺物であろう。

ＳＫ12出土遺物（図55）

193～195は包含層の混入遺物である。193は在地の黒色土器Ａ類椀底部片、分厚い底部に断面三角形状の高台が貼り付けられている。194は回転糸切りの土師器底部片、ヘラ起こしの痕がある。195は土師器円盤高台坏の底部片である。

196は肥前系陶器の皿底部である。露胎の高台は低く、畳付は平坦な面をなす。外面の腰部以上と内面には灰釉がかけられ、緑灰色に発色している。見込には胎土目の痕が残っている。17世紀前半。

197は肥前系白磁の小坏である。

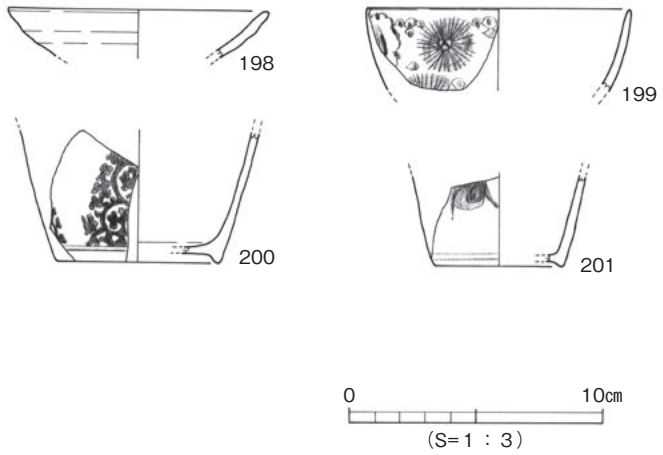


図56　SK13出土遺物

ＳＫ13出土遺物（図56）

198は土師器灯明皿の口縁部片で、煤の付着がある。199～201は肥前系の染付磁器である。199は碗、主文様として雪輪に松を散らし、地文に梅を描いている。18世紀前半。200、201は蕎麦猪口、200は外面高台立ち上がりに二重圏線を描き、これをベースに型紙による光背形の唐草を施すもので、高台内にも１条の圏線が確認できる。18世紀前半。201は200よりもやや小ぶりなもので、外面高台立ち上がりに二重圏線、体部に描かれた文様は不詳。

ＳＫ14（図57）

Ｓ１Ｗ３区検出、1.2×0.9mのほぼ楕円形を呈するプラン、深さ10cmを測る。18～19世紀の遺構である。

ＳＫ14出土遺物（図58）

202、203は土師器、202は焙烙、203は灯明皿のそれぞれ小片である。204は備前の灯明皿で返りを持つタイプ、器高1.4cm、口径9.8cmを測る。暗茶褐色の焼成で、口唇部に煤が付着する。18～19世紀。205は須恵質に焼成された轆轤成形による無釉焼締陶器灯明皿で、外面は茶系の灰色、内面は黒灰色、

断面は薄い紫である。これも口唇部に使用痕がある。206は、備前風の塗り土を施して赤褐色に焼成された宝珠形の鈕を持つ蓋で、器高0.9㎝、直径4.0㎝を測る。

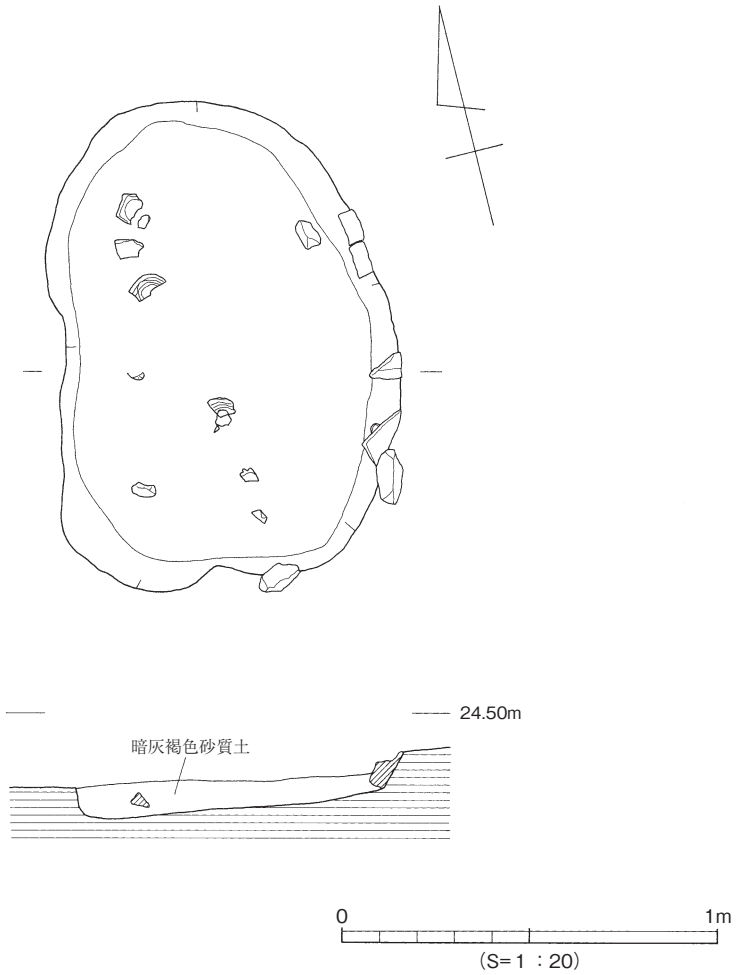


図57　土坑 SK14

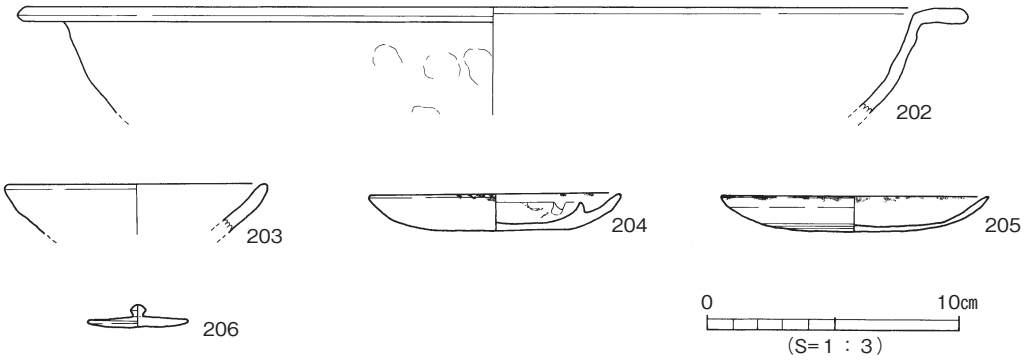


図58　SK14出土遺物

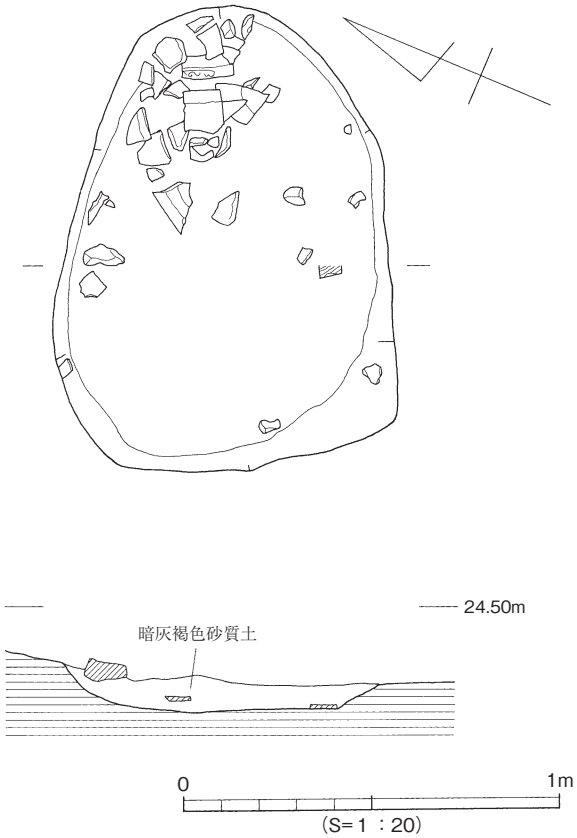


図59　土坑 SK15

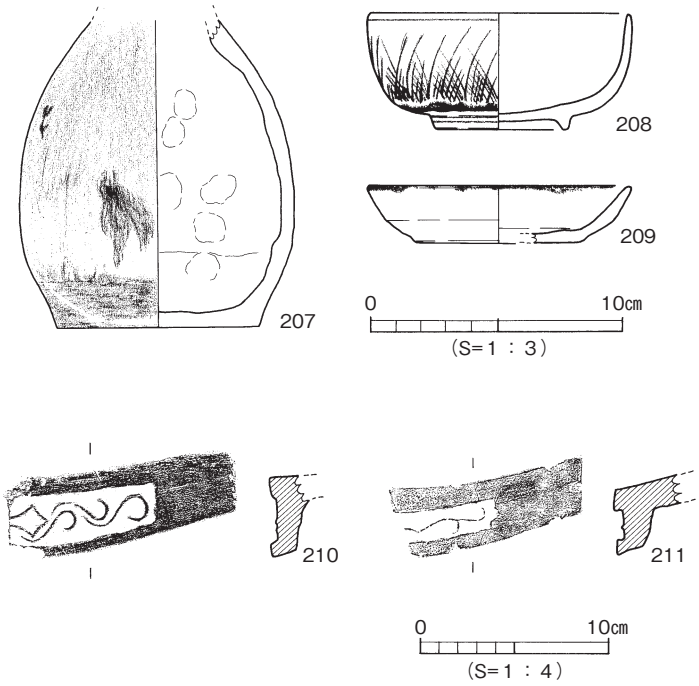


図60　SK15出土遺物

ＳＫ15（図59）

Ｓ１Ｗ３区でＳＸ２を切って検出された。長径1.2m、最大幅0.9mの台形から楕円形に近いプラン、深さ15cmを測る18世紀後半頃の遺構であろう。

ＳＫ15出土遺物（図60）

207は陶器徳利、底径8.0cm、残存高12.2cmを測る。暗黄灰色の胎土に飴釉、藁灰釉をかけわけたもので、藁灰釉は濁った白色や青灰色に発色している。上野、高取に近い技法で、在地の西岡焼の可能性が高い。208は肥前系染付磁器鉢である。器高4.6cm、口径10.2cm、高台径5.0cmを測る。檜垣状に意匠化した連続草文を描く。外面の口唇部に１条、高台に２条の圏線、また高台内面にも１条の圏線を施す。口唇部内面の釉は剝ぎとられているので、蓋付きの鉢である。18世紀後半。209は底部回転糸切りによる土師器灯明皿、口唇部の内外面に煤の付着がある。

210、211は軒平瓦。210は中央飾りの四つ剣菱下端から細い唐草が３転して延びるもので、それぞれが接点を持たず独立し、上下に重複している。211はおそらく３転する細い唐草が連続しているものである。

ＳＫ17・18（図61）

両者ともに調査地南西コーナーで、その一部が検出された。ＳＫ17は不整形プランで深さ30～40cm、18世紀末～19世紀初頭の遺構である。

ＳＫ18はＳＫ17の北に隣接して検出された。ＳＫ５や攪乱４に切られる不整形プランのもので、18世紀代

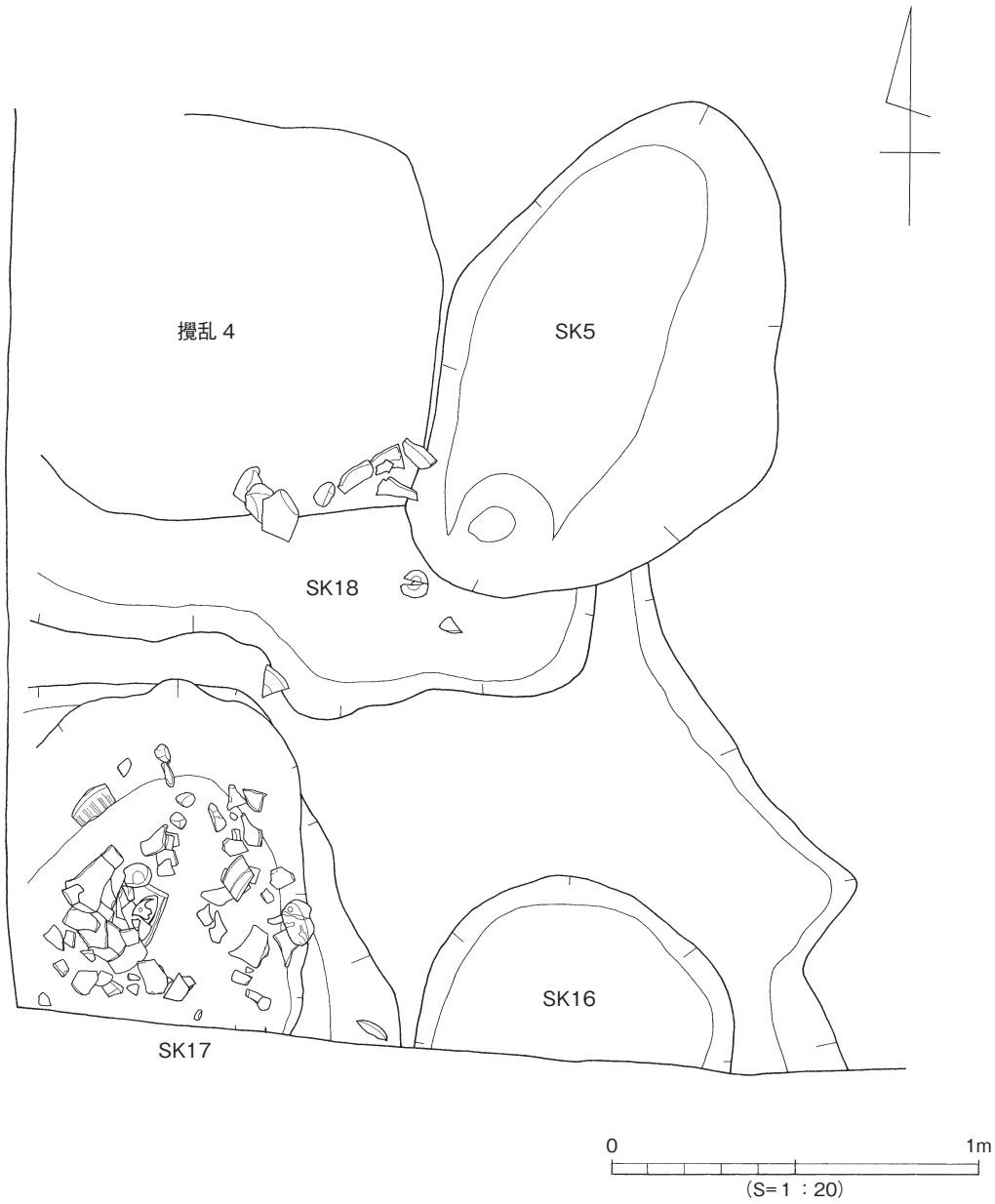


図61　土坑 SK17・18

の遺構である。

ＳＫ17出土遺物（図62・63）

212～217は陶器碗である。212は肥前系の刷毛目碗、17世紀後半～18世紀前半。213～215は、18世紀後半頃の京信楽系碗、213で器高5.9cm、口径10.0cm、高台径3.8cmを測る。白っぽい胎土に透明釉をかけ、高台は露胎としている。214、215は小杉碗、214で器高5.4cm、口径9.2cm、高台径3.2cmを測る。やや黄色味を帯びた胎土に鉄絵の施文を行い透明釉をかける。高台は露胎である。これにくらべて、215はやや灰色がかった胎土に鉄絵を施している。216、217は萩の端反碗、いずれも貫入のある透明釉をかけ、高台は露胎としている。216で器高5.2cm、口径9.4cm、高台径3.5cmを測る。

218～223は肥前系の磁器である。218の小坏の外面は無文であるが、内面には色絵付けされていた

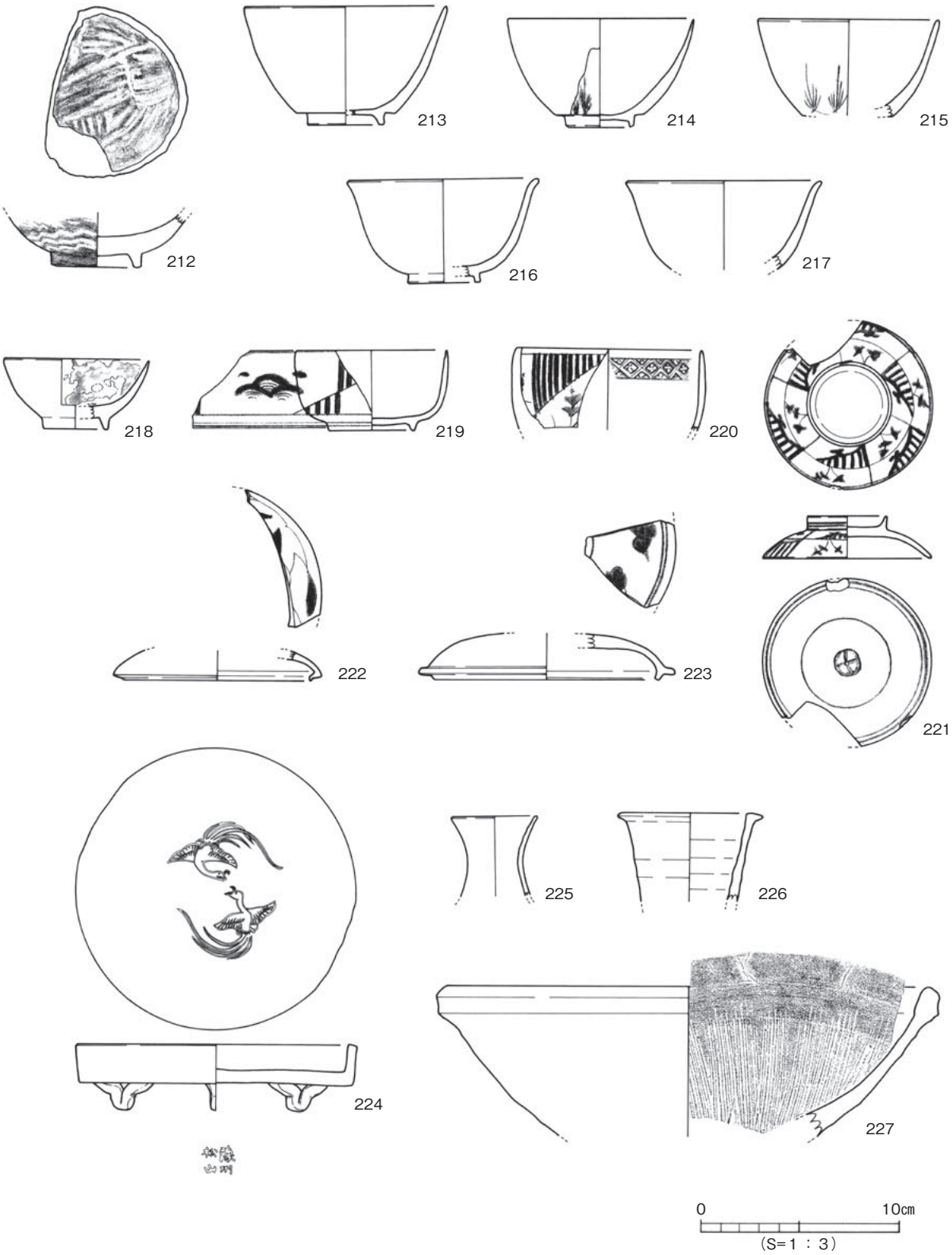


図62　SK17出土遺物(1)

ような痕跡が看取されるが、何を描いていたものかはわからない。219は器高4.0cm、口径7.4cm、高台径4.2cmを測る小型の鉢である。口唇部内面の釉が剝ぎとられていることから、蓋付きの鉢である。外面の圏線や縦縞を用いて区画したスペースに青海波と島を描く。高台外面には二重圏線が施されている。また、この鉢には焼き継ぎが行われている。220は染付碗である。やはりこれも外面を圏線や縦縞で区画したスペースに羊歯文を描いている。内面口縁部には四方襷が描かれる。221は碗蓋、器高2.1cm、口径8.4cm、鈕径4.0cmを測る。鈕外面に２条の圏線、天井部外面を圏線や直線で区画し、市松状に羊歯文と縦縞を基調とした幾何文を配する。内面口唇部には二重圏線、天井部の一重圏線内に

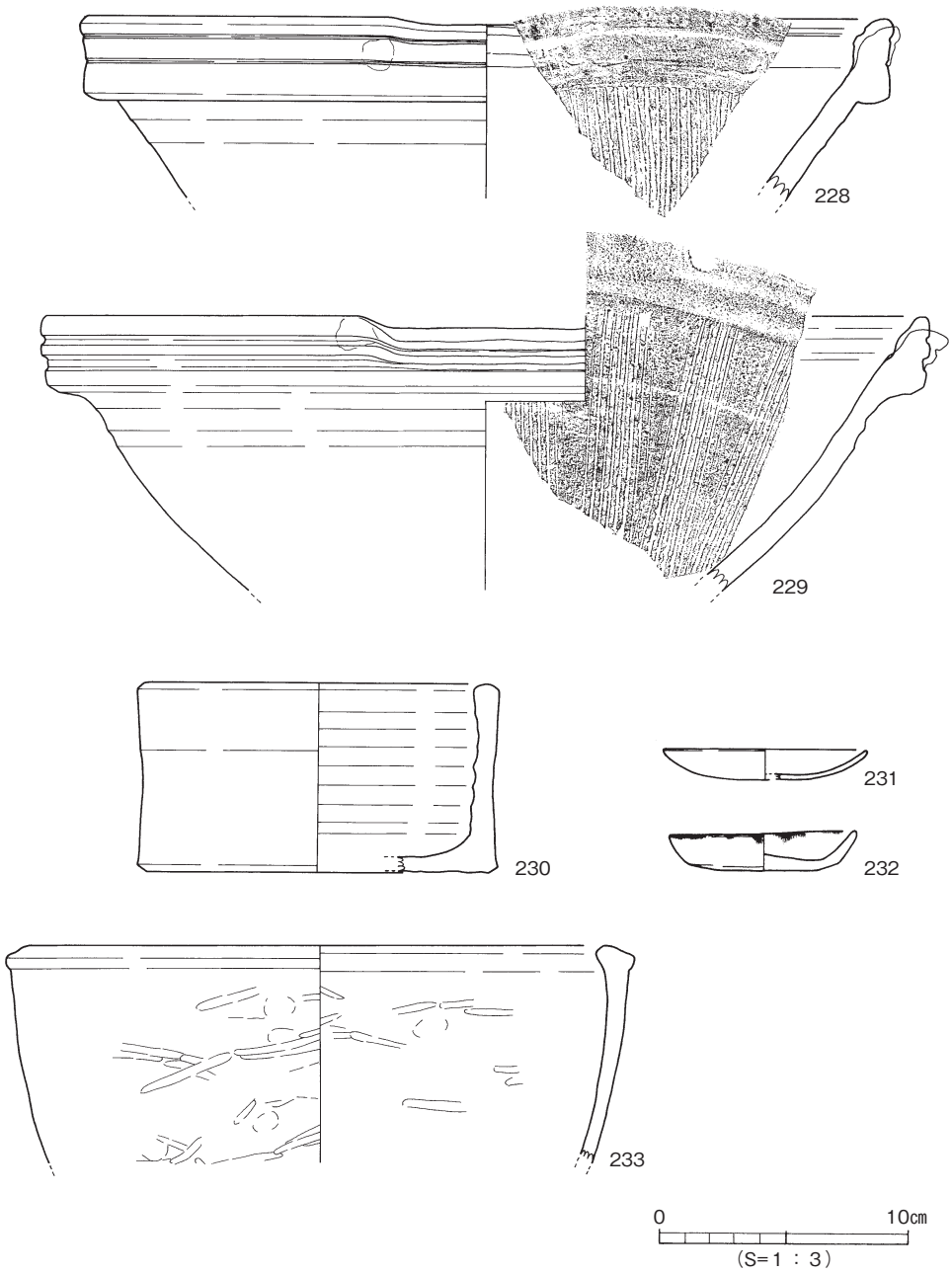


図63　SK17出土遺物(2)

十字花文を施している。これら３点の類似した文様パターンを持つものは、18世紀後半～19世紀初頭に属するものである。222、223は鉢蓋、222の外面には細線と濃みで蔓草が、223に描かれているのは水鳥であろうか。

224～231は陶器である。224は西岡焼の無釉陶器皿で、器高3.3cm、口径13.8cmを測る。底部の３箇所に高さ1.3cmの粘土紐による脚を貼り付けられ、口縁は垂直に1.3cmの高さに立ち上がる。表面の中央に刻印による鳳凰文、裏面にはこれも刻印による銘款「豫州松山」印が刻まれている。18世紀末～19世紀前半。225は徳利口頸部、器壁を薄く仕上げられ、外面は無釉だが、確認できる範囲の内面には薄い飴釉がかかる。これも西岡の製品か。226は小型の植木鉢、土師質の焼きの器体外面上位から口縁部上面に透明釉がかけられている。227は口径24.0cmを測る擂鉢で、ボウル状の体部と外面に肥厚する口縁部を持つ。口唇部内面から外面には藁灰釉がかけられ、擂目は５本単位で施されている。産地は不詳。228、229は備前擂鉢で、両者ともに注口部の破片である。228では２条の凹線を持つ口縁帯の顎が張り断面が三角形に近く、擂目は８本単位で太く深い。胎土は暗灰色で、口縁帯や内面は暗紫色に、外面体部は茶褐色に焼成されている。17世紀後半頃のものか。229は228ほど口縁帯の顎が張らず、体部外面には轆轤目が目立っている。９本単位の擂目は228にくらべると細く浅い。明茶褐

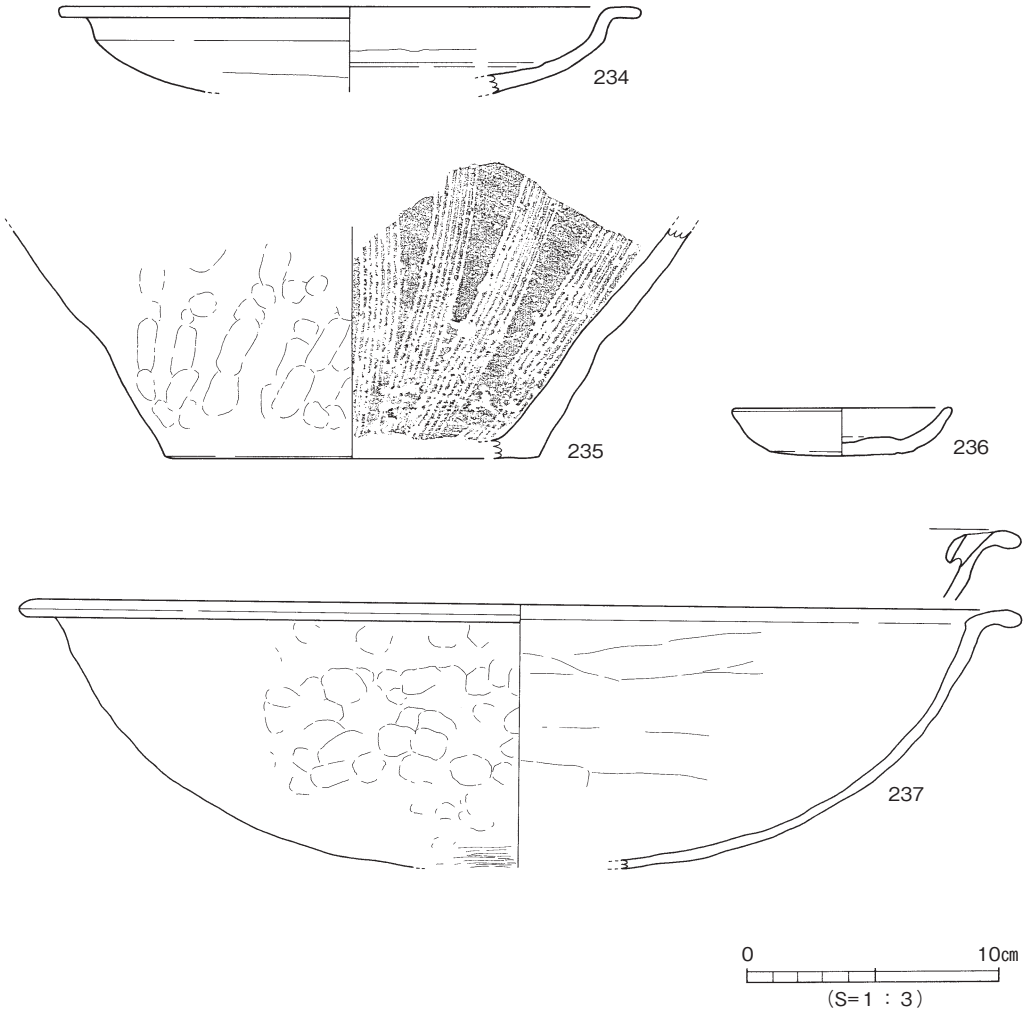


図64　SK18出土遺物

色の胎土で、やはり明るい茶系統に焼成されている。18世紀。230は備前サヤ形鉢である。器高7.6cm、口径13.6cm、底径13.8cmを測る。胎土は明茶褐色で内面も同様、外面は暗茶褐色の焼成である。18～19世紀。231は須恵質の無釉焼締陶器灯明皿、232は土師器の灯明皿で、口唇部の内外面に煤の付着が著しい。233は土師器の甕片で、埋甕に用いられるものである。

ＳＫ18出土遺物（図64）

234は肥前系陶器皿で、口縁部を水平に折り返した形態である。暗灰色の胎土で、外面の底部寄りには鉄釉、その他の内外面には透明釉をかける。内面体部の屈曲部には白土が回しかけられている。235の無釉陶器擂鉢は平底の底部で、体部の外面には指頭圧痕が顕著に残る。擂目は７本単位で、単位ごとに間隔をあけて施される。胎土には石英や長石粒を多く含んでいる。丹波か。226は土師器灯明皿、底部は回転糸切り後、撫で調整を施される。237は土師器の焙烙である。

ＳＫ19（図65）

Ｓ１Ｗ２区検出、長径1.6m、最大幅1.2mの不整形プラン、深さ10cmを測る。

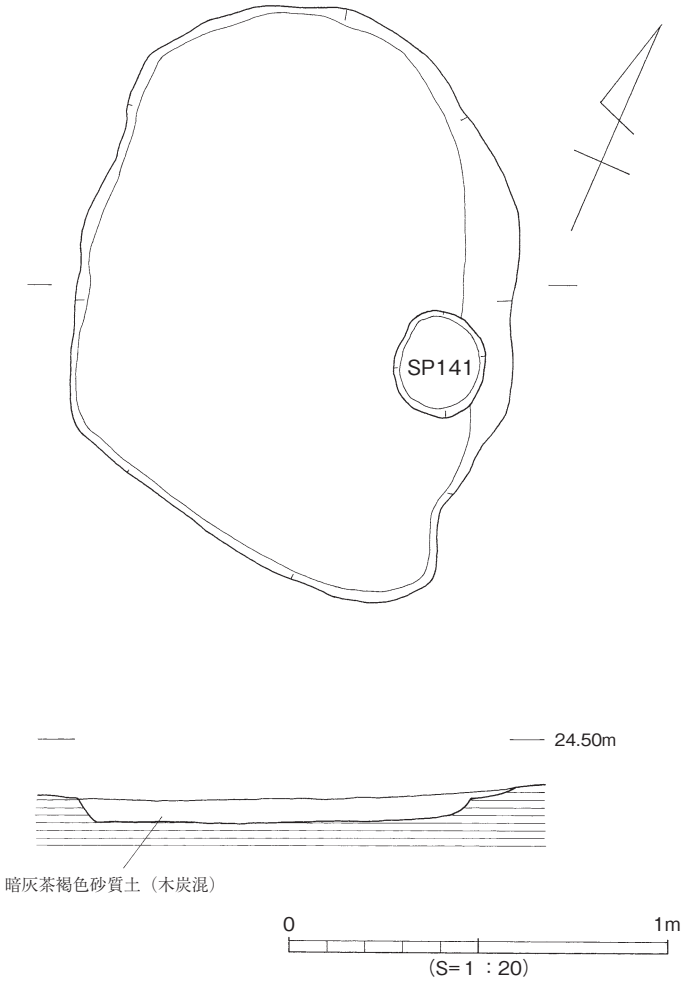


図65　土坑 SK19

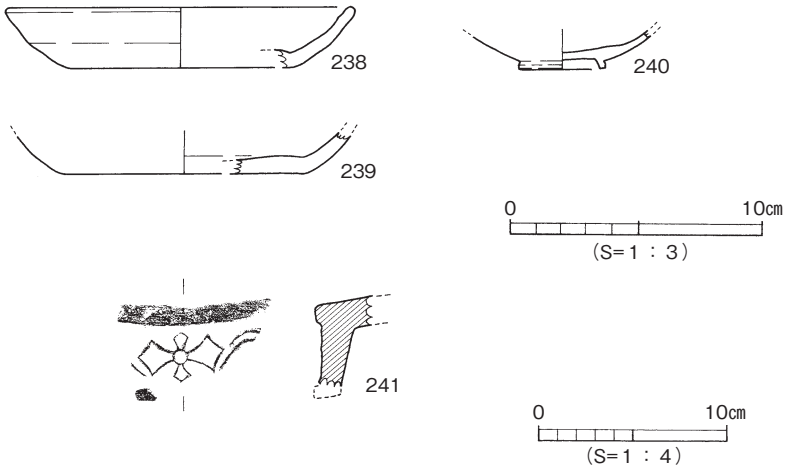


図66　SK19出土遺物

ＳＫ19出土遺物（図66）

238、239は土師器皿で、このての皿としては堅緻な焼成である。同一個体かもしれない。239でみてみると、底部の切り離しは回転糸切りによっている。240は京焼風肥前陶器碗の底部、高台内面中央部に円形の削り込みがある。241は軒平瓦、四つ剣菱の中心飾り部分である。

ＳＫ34（図67）

Ｓ１Ｗ３区、調査区西端にあってＳＫ９に切られる遺構で、2.0×0.5m程度の範囲が検出された。

ＳＫ34出土遺物（図68）

242は肥前系磁器染付皿で、二重圏線で区画された見込は蛇の目釉剝ぎされ、同じく釉剝ぎされた高台畳付とともに細砂が熔着している。見込にはコンニャク印判による五弁花と思われる施文が行われている。主文様は花唐草であろう。18世紀前半～中頃。243、244は土師器灯明皿で、両者ともに底部切り離しは回転糸切りによる。243の内面には使用痕が確認できる。

ＳＫ36（図69）

Ｎ２Ｗ３区検出、雨水排水用暗渠があるため、このＳＫ36と後に述べるＳＫ38は１／２程度しか掘ることができなかった。ＳＫ36は直径1.2m程度の円形プランになるものと思われる。深さ30cmの遺存であった。地山の角礫や瓦片が多く入っている。幕末頃の遺構であろう。

ＳＫ36出土遺物（図70）

245は砥部の磁器染付端反碗である。器高6.2cm、口径11.0cm、高台径4.4cmを測る。外面高台と腰部に１条ずつの圏線を引き、雪輪に松文を描いている。内面口唇部にはボカシの横帯、見込に１条の圏線を施す。高台畳付は釉剝ぎされている。高台内面中央から敲打により穿孔して植木鉢に転用している。このための剝離により見込文様は不明である。幕末頃の製品か。246は備前灯明皿、外底面に回転糸切り痕が残る。塗り土は口唇部外面と内面にのみ施され、赤茶褐色に焼成されている。内外面に使用痕がある。18～19世紀。

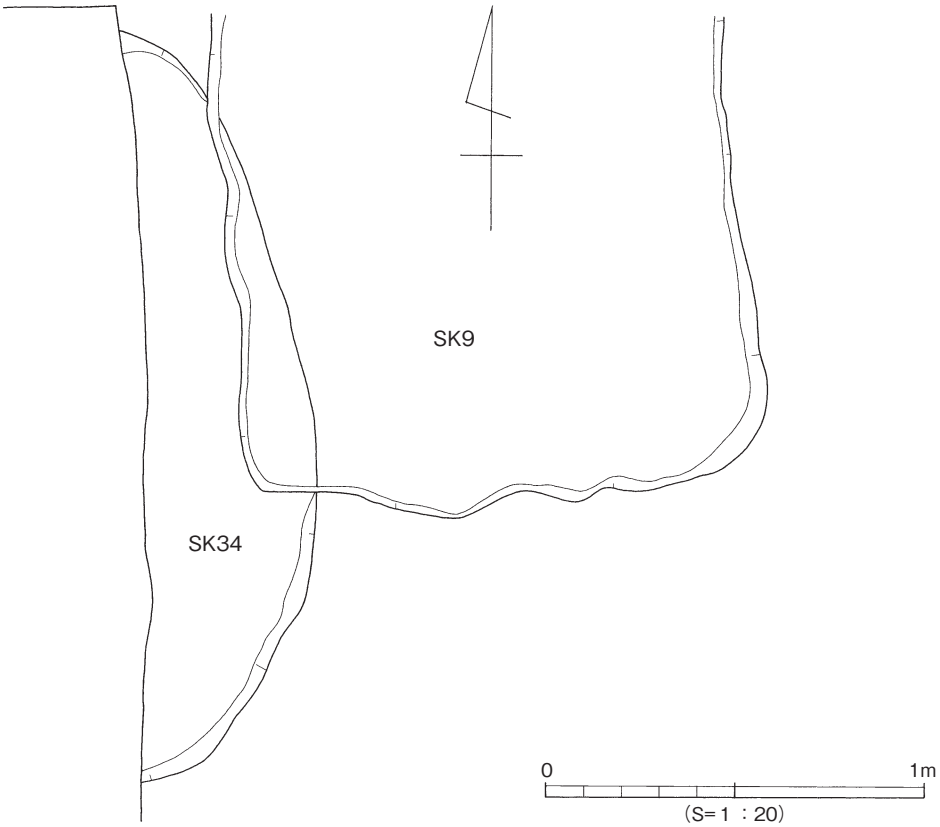


図67　土坑 SK34

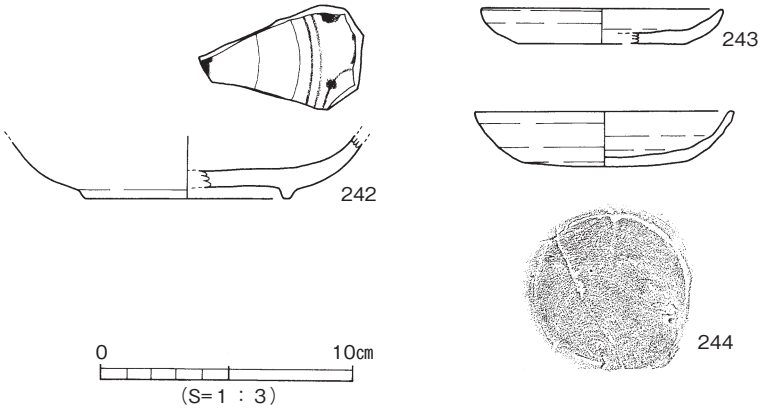


図68　SK34出土遺物

ＳＫ37（図71）

Ｎ１Ｗ２区で検出された、長径1.0m、短径0.6mの楕円形プランのもので、深さ15cm程度の遺存である。川原石、地山の小礫や瓦片とともに土師器の出土があった。

ＳＫ37出土遺物（図72）

247は土師器羽釜で、口径20.0cmを測る。内湾気味に立ち上がる口縁部には２箇所に把手が付く。248は土師器の焜炉。底部立ち上がりの外面に１条の沈線、底部には３箇所に足が付くが、この足の

外面には丸に五弁花の刻印が施されている。249は土師器焙烙の口縁部片である。

250は軒平瓦、中心飾りは四つ剣菱である。この中心飾りの下方から発して、３転する唐草は連続している。251も、同じく中心飾り四つ剣菱の軒平瓦であるが、唐草が２転するものである。

ＳＫ38（図73）

Ｎ２Ｗ４区で検出された。長径1.4m程度の楕円形になるものと思われるが、ＳＫ36同様現況排水暗渠のため１／２程度の検出、木炭混じりの灰褐色土で埋まっている。幕末の遺構である。

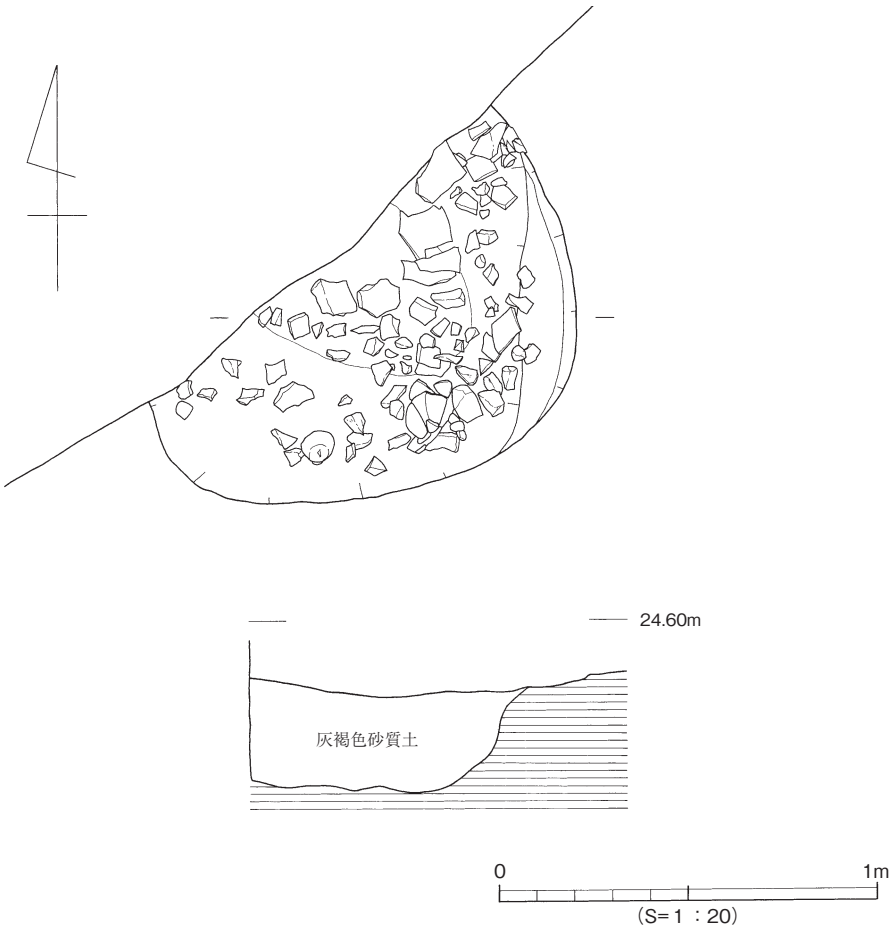


図69　土坑 SK36

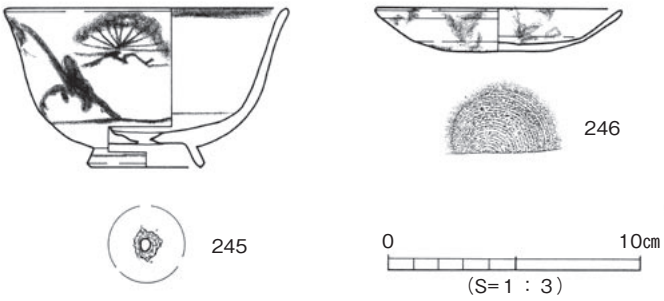


図70　SK36出土遺物

ＳＫ38出土遺物（図74・75）

252～257は磁器である。252は肥前系染付碗蓋で、器高2.6cm、口径9.5cm、鈕径3.6cmを測る。鈕立ち上がりの内外面を除いたすべての部位に網目文が施されている。253も肥前系磁器端反碗で染付の網目文を描かれるもの。器高5.7cm、口径10.7cm、高台径4.4cmを測る。高台内面には白玉描きで「上・九」と記されている。252とともに18世紀前半のものであろう。254も網目文の磁器染付碗であるが、幕末頃の砥部と思われるものである。器高5.5cm、口径10.0cm、高台径4.2cm。外面口唇部と腰部にそれぞれ１条の圏線を施し、この圏線間の区画に直線的な網目を描き、高台外面には二重圏線を施す。内面は口唇部にボカシの横帯、見込を圏線で区画し、岩波文を見込文様として施す。255は肥前系の染付碗で、外面の文様は蝶文、内面には口唇部に二重圏線、見込に圏線が１条確認できる。256は瀬戸美濃系の磁器染付端反碗で、器高5.1cm、口径8.7cm、高台径4.6cmを測る。外面口唇部と腰部に１条ずつ、高台に２条の圏線を施し、体部の主文様として花唐草を描く。内面口唇部にも花唐草とおぼしき施文、見込は二重圏線で区画し、見込文様を施しているようだが、詳細は確認できない。高台畳付は比較的広い面をなし、釉剝ぎされている。19世紀。257は肥前系白磁端反碗で、器高4.8cm、口径8.5cm、高台径3.7cmを測るものである。

258は陶器、萩の端反碗、器高4.8cm、口径9.0cm、高台径3.0cm。露胎の高台を除くすべての部位に藁灰釉がかけられる。高台内面には判読不能な墨書がある。259は瀬戸美濃系陶器の腰折碗、器高5.5cm、口径8.3cm、高台径4.1cmを測る。露胎の高台以外の部分に灰釉をかけ、内面に鉄絵の圏線を施す。

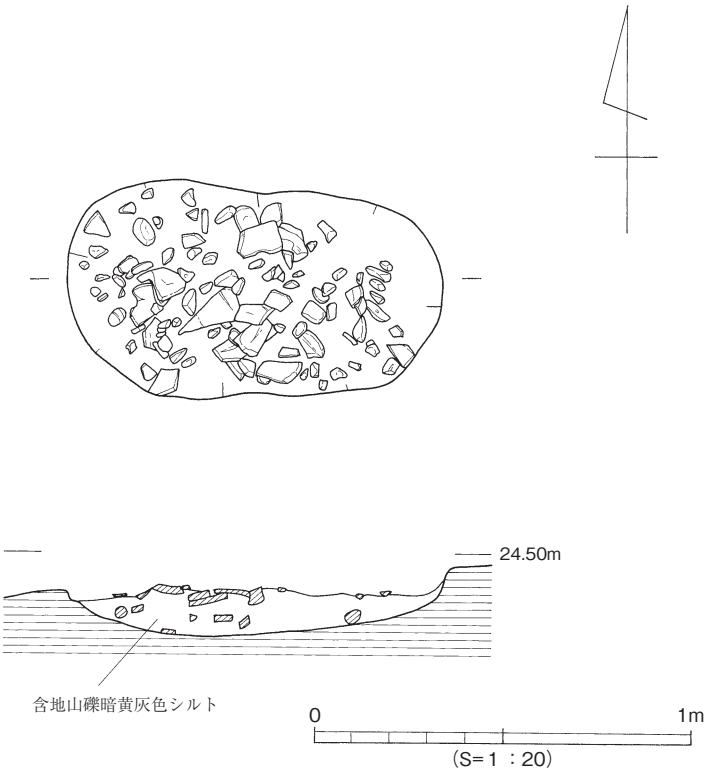


図71　土坑 SK37

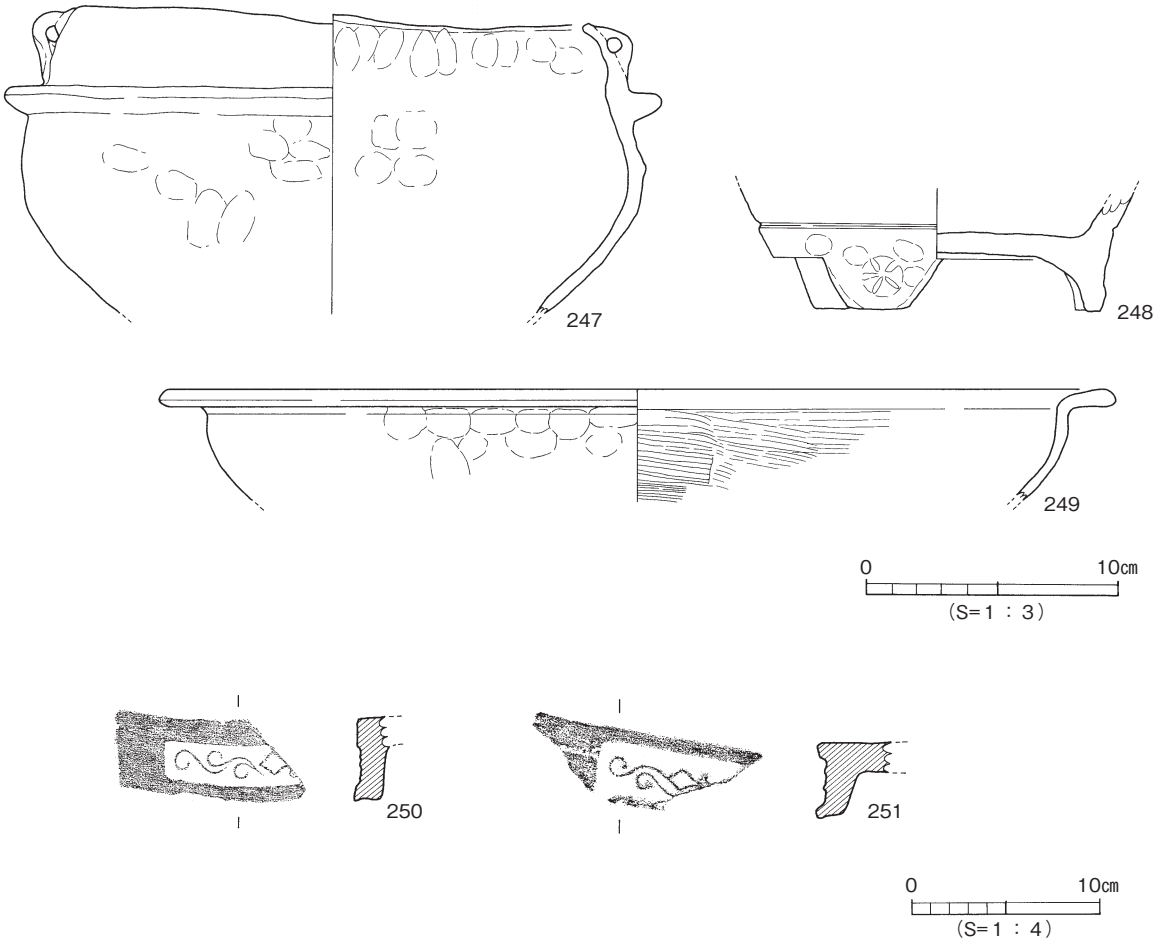


図72　SK37出土遺物

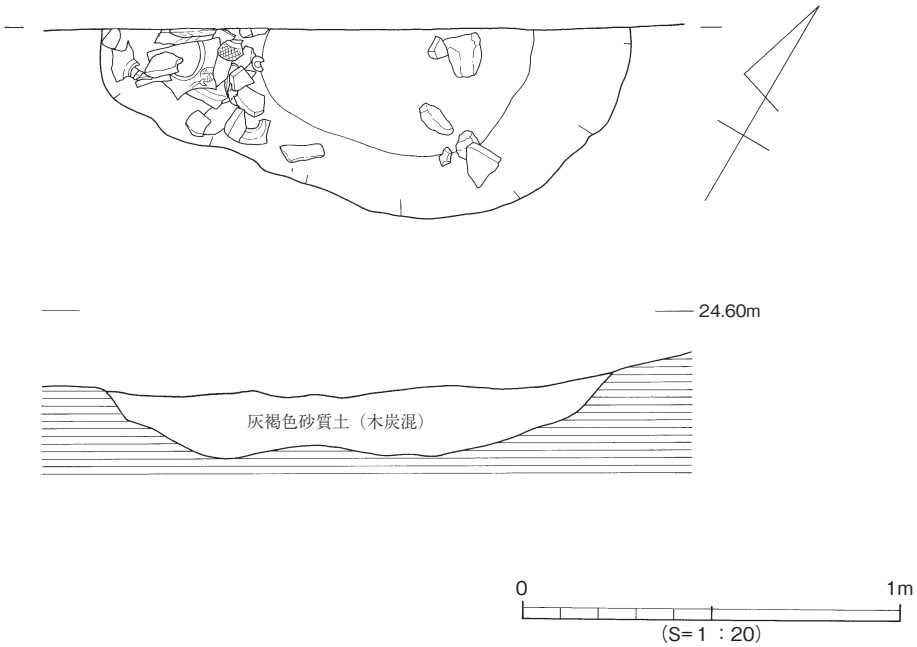


図73　土坑 SK38

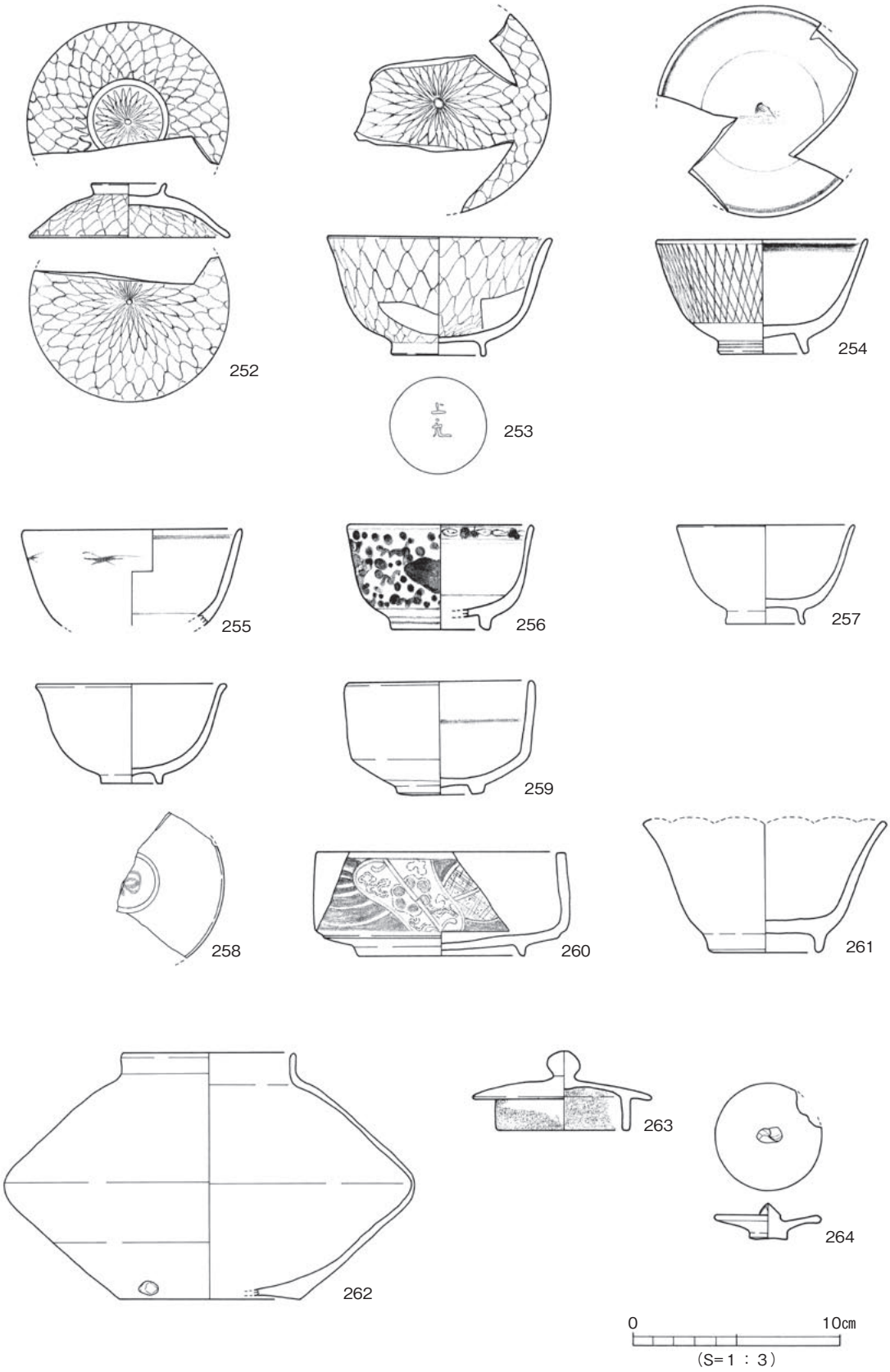


図74　SK38出土遺物(1)

260は肥前系色絵の段重である。器高5.0㎝、口径11.9㎝、高台径8.0㎝。口唇部と腰部に呉須で圏線を描き、その間に赤地に白抜きの重弧文、また赤の四方襷で埋めた窓を配し、主文様の軍配文を描く。おの軍配の輪郭も赤を用いる。軍配内の文様は剝落している部分が多いが、中心に黒の梅、その他の部位には緑で松を描いていたようである。口端面と口唇部内面、および、腰部の段重ねにあたる部分の釉は剝ぎ取られている。18世紀。261は肥前系磁器、瑠璃釉端反輪花の鉢である。高台畳付以外のすべての部位に瑠璃釉がかけられる。19世紀のものか。262、263は産地不詳の陶器土瓶。白っぽい胎土の262の腰部以上の外面には灰釉がかけられている。底部から腰部の露胎の部分には煤の付着や焼け焦げがみられる。263も胎土や釉には262と同様の特徴がみられる。施釉されるのは外面のみである。内面の返りの１／３程度の範囲には内外に煤がべったり付着しており、灯明皿として転用されていたことがわかる。264も産地不詳の陶器蓋で、粘土を捻った先細りの鈕が貼り付けられている。外面のみにかけた灰釉が内面の一部まで薄く流れている。

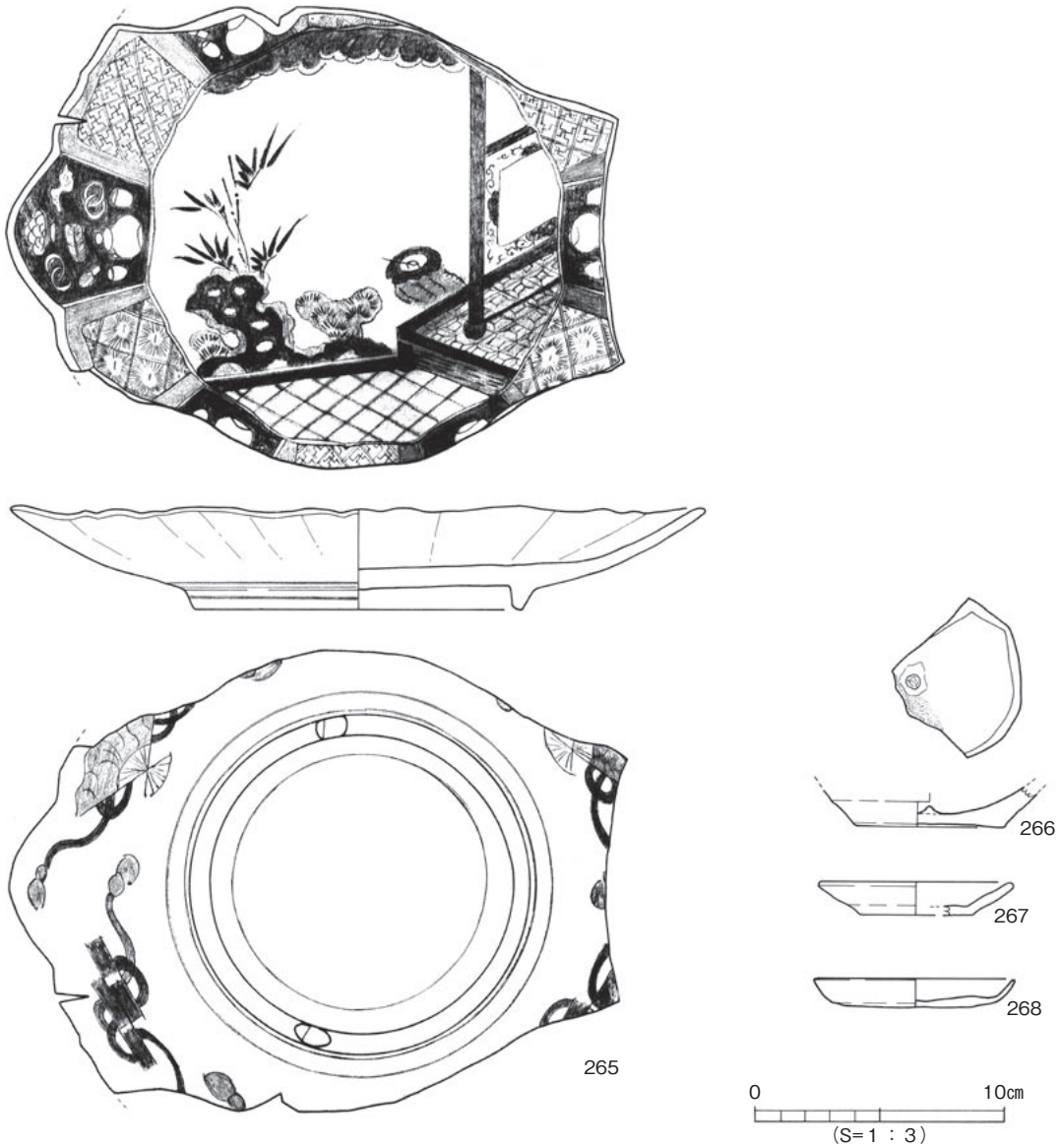


図75　SK38出土遺物(2)

265は肥前系磁器芙蓉手染付皿である。器高4.1cm、口径27.7cm、高台径13.3cmの大型品で、口縁部を輪花に成形する。縁文様には濃み地に白抜きの宝尽し文と線描きの幾何文とを交互に配置する。見込の主文様は雲文に中国風のテラスと庭の松竹、さらに手水鉢を描いている。区画の縁取りや、縁文様の幾何文など、細線で描かれる部分の呉須は他と異なりやや緑がかった発色になっている。裏文様は、扇、巻物を交互に配した宝文である。高台内面と高台脇に１条、高台外面に２条の圏線が巡る。19世紀。

266～268は底部回転糸切りによる土師器皿である。266の底部内面中央には粘土塊を貼り付けて円錐状の小突起を設けている。この266と268の内面には煤の付着がある。

ＳＫ44（図76）

Ｓ２Ｗ３区検出で、ＳＫ11と攪乱１に切られているのでプランは不詳、深さ10～20cmの遺存、18世紀後半の遺構である。

ＳＫ44出土遺物（図77）

269～271は肥前系染付磁器である。269は碗、外面に花唐草を描く18世紀前半のもの。270、271は小坏、残りのよい271で、器高2.3cm、口径5.9cm、高台径2.7cmを測る。外面に笹文、また270には追羽根が描かれている。17世紀末～18世紀。272は波佐見の陶胎染付小坏底部と思われるもの。

273は土師器灯明皿口縁部片で、全体的に煤けている。274は無釉焼締陶器の灯明皿で須恵質に焼成されており、内外面ともに煤けているが、特に口唇部の煤付着が顕著である。

275は産地不明の瓶底部で、外底面を除く外面に鉄釉が塗られている。276は堺擂鉢で、底部の形態はＳＫ５出土の144同様の特徴を持つ。擂目は13本単位の細く浅いもので密に詰まっている。見込斜面部に重ね焼きの熔着痕がある。

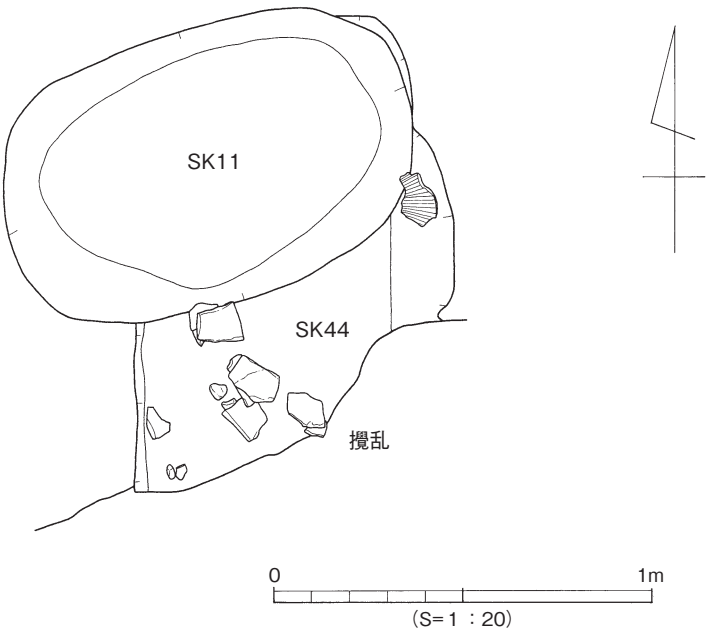


図76　土坑 SK44

ＳＫ45（図78）

Ｓ２Ｗ３区、西壁近くで検出された。攪乱１・４やＳＰ36・70に切られる不整形の窪みである。

ＳＫ45出土遺物（図79－277）

土師器の関西系焙烙で、内傾して立ち上がる口縁部外面に左上がりの刷毛目を持つ。口端部外面の

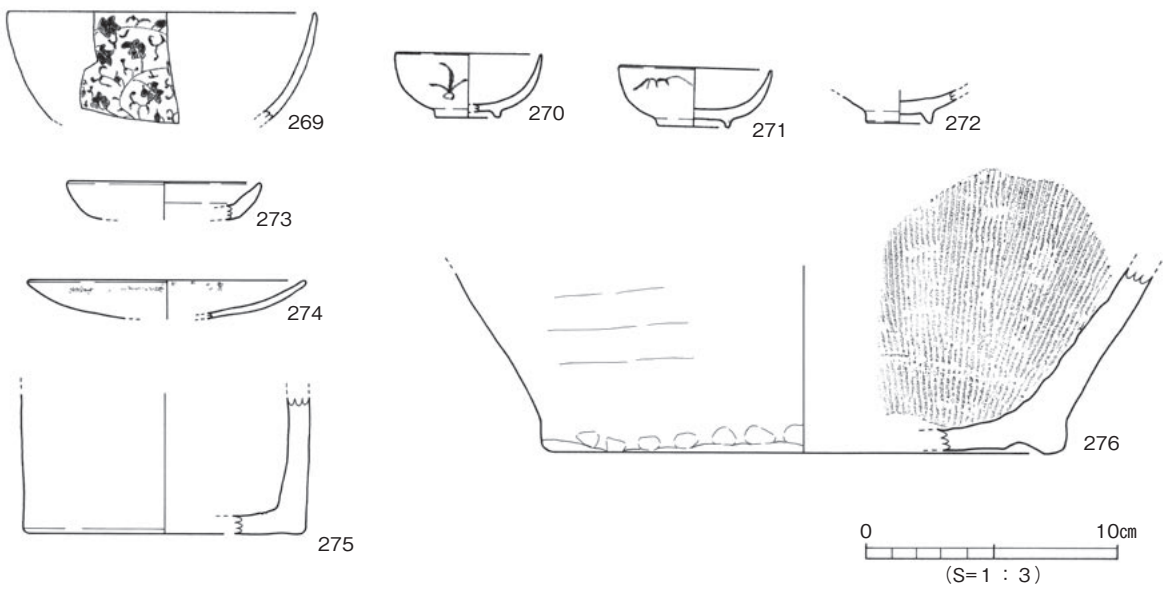


図77　SK44出土遺物

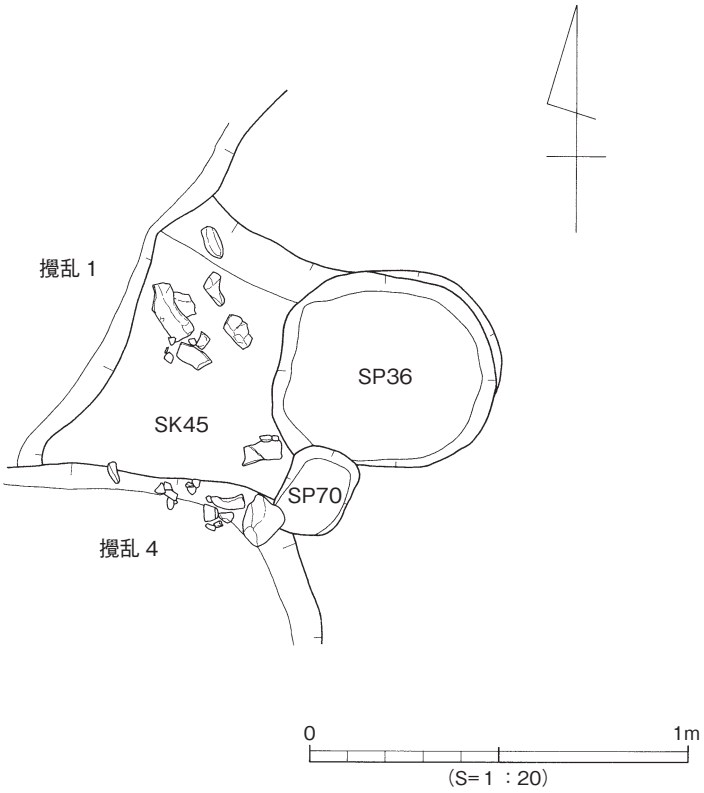


図78　土坑 SK45

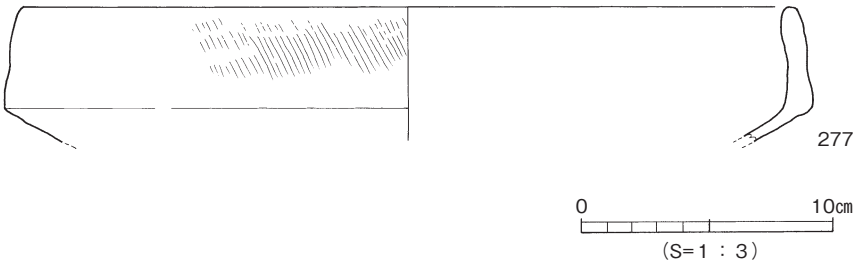


図79　SK45出土遺物

刷毛目は横撫でによって撫で消されている。胎土に金雲母を多く含む。17世紀後半～18世紀初頭。

ＳＫ46（図80）

Ｎ１Ｗ３区でＳＸ３を切って検出された。直径0.8m程度の円形に近いプランをなす。深さ15cmの窪みに、拳大の河原石や瓦片や若干の遺物が溜まっている。

ＳＫ46出土遺物（図81）

278は肥前系磁器染付碗である。比較的高い高台を持つ碗で、外面に菊花散らし文が施されている。幕末か。279は合わせ型づくりによる素焼きの土人形、狛犬である。

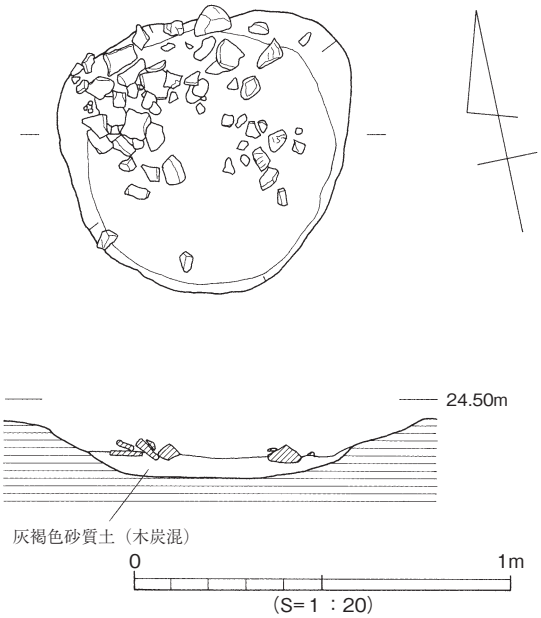


図80　土坑 SK46

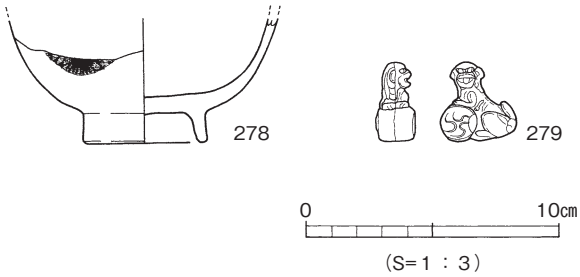


図81　SK46出土遺物

５）不明遺構・埋甕

土坑群と同様の埋土ではあるが、不整形で規模の大きいものを不明遺構ＳＸとして扱ったが、土坑群と同じく廃棄遺構であることにかわりはない。

ＳＸ１（図39）

Ｎ１Ｗ３区からＷ４区にかけて検出されたもので、土坑の集まりかと考えて精査を行ったが切りあい等把握できなかったので不整形の不明遺構として扱った。18世紀代の遺構であろう。

ＳＸ１出土遺物（図82）

280は肥前系磁器染付皿で、器高3.2cm、口径11.6cm、高台径4.0cmを測る。見込蛇の目釉剝ぎ、外面体部下半無釉の皿で、見込釉剝ぎ部には薄くアルミナが塗布されている。釉は白く濁っており、内面

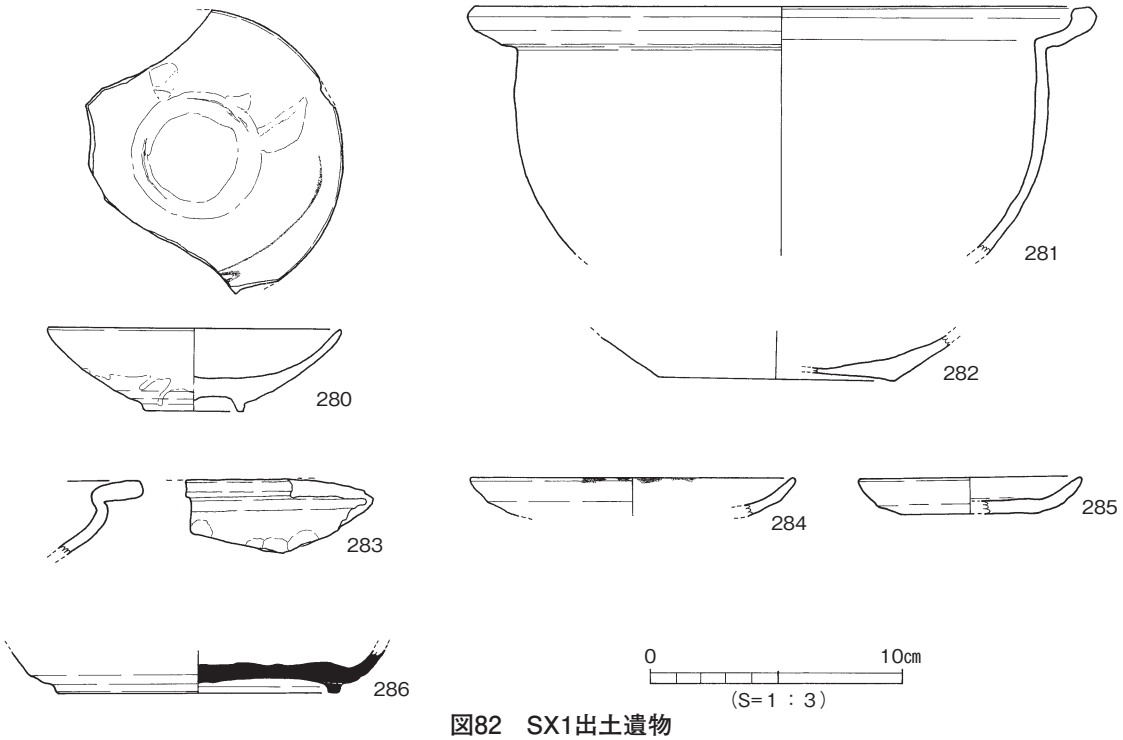


図82　SX1出土遺物

には流水文と思われる文様が呉須で描かれているが、発色は悪い。波佐見、18世紀前半。

281は鉄釉の陶器土鍋、282は陶器土瓶もしくは鍋の底部で、無釉の外面は煤けている。283は瓦質焙烙の口縁部小片で、284、285は土師器灯明皿である。284の口唇部には煤が付着、285では底部の糸切り痕が確認できる。286は包含層からの混入の須恵器で、８世紀代の坏底部である。

ＳＸ２（図39）

Ｓ１Ｗ３区でＳＫ９・10、ＳＫ34などに切られて検出されたものであるが、位置関係からいってＳＸ１の南東方向への延長部分であるかもしれない。18世紀後半。

ＳＸ２出土遺物（図83・84）

287は京信楽系の陶器碗、器高6.9cm、口径10.8cm、高台径5.0cmを測る。淡黄色の精良な胎土に鉄絵で草花文を施し、薄い灰釉をかける。高台は露胎で、畳付は幅広の面を持つ。288は産地不詳の陶器碗底部である。灰色の胎土で、外面に鉄釉、内面に天目釉を施している。289は三島手の陶器碗、器高6.9cm、口径11.4cmで、高台径5.0cmを測る高台は３方向の割高台となっている。内外面に白土で象嵌が施される。外面は二重の圏線で体部を３区画し、上位の口縁部区画に花文、中位の区画に暦手と花文、下位の腰部に施されているのは銀杏か。また、象嵌後に高台の割り付近の腰部器面を削り取っている。内面は口唇部に二重圏線、腰部に一重の圏線を印刻し、その間に花文と花菱唐草を施す。また見込外周に二重圏線を施し、腰部の一重圏線との間に花文、見込には十字文を中心に三つ葉文様を散らしている。見込には砂目痕が残っている。なお、兜巾が残る高台内面まで施釉されている。肥前の製品であるのか他地域で製作された写しであるのか判然としない。290は鉄釉陶器玩具のミニチュア瓢箪徳利である。

291は肥前系磁器染付小坏で端反の器型になるもの、外面口唇部と腰部に圏線を引き、その間に山

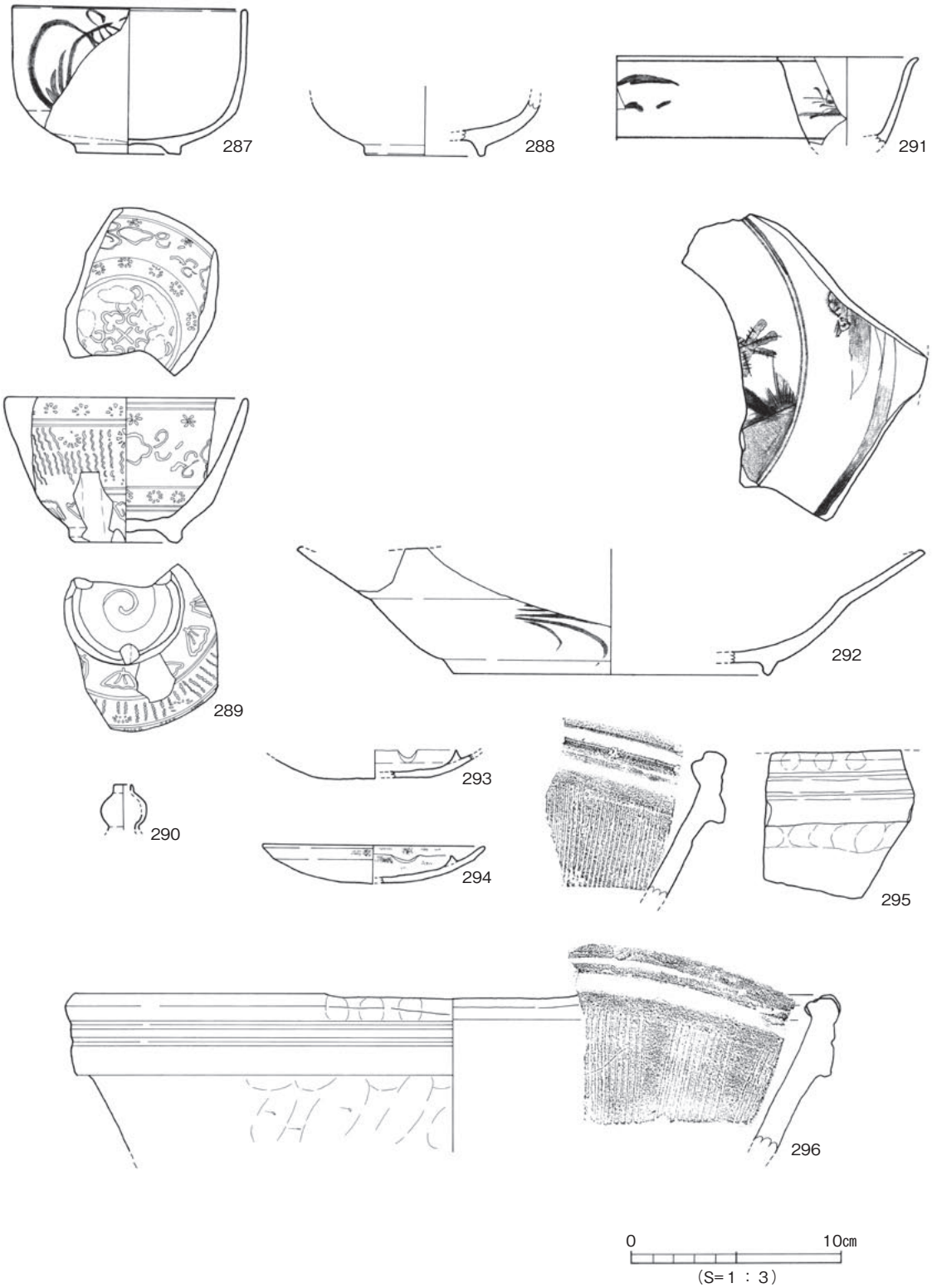


図83　SX2出土遺物(1)

水図を描く。292は磁器染付皿。大型で折縁の口縁が輪花になるものである。口縁部に飛翔する鳥、二重圏線で区画された見込に松文が確認できる。裏文様は草文、18世紀後半頃の砥部の製品か。

293、294は備前灯明皿で、返りを持つタイプのもの。294では外面を底部まで入念に回転ヘラケズリされるが、293では底部が歪み、ケズリが及んでいない。294には使用痕が顕著である。295～298はいずれも堺産と思われる擂鉢で、18世紀前半から後半までのものがある。299は瀬戸内系の土師器焙烙の口縁部小片、300～302は土師器灯明皿、底部回転糸切りで300の口唇部、302の内面に使用痕がある。

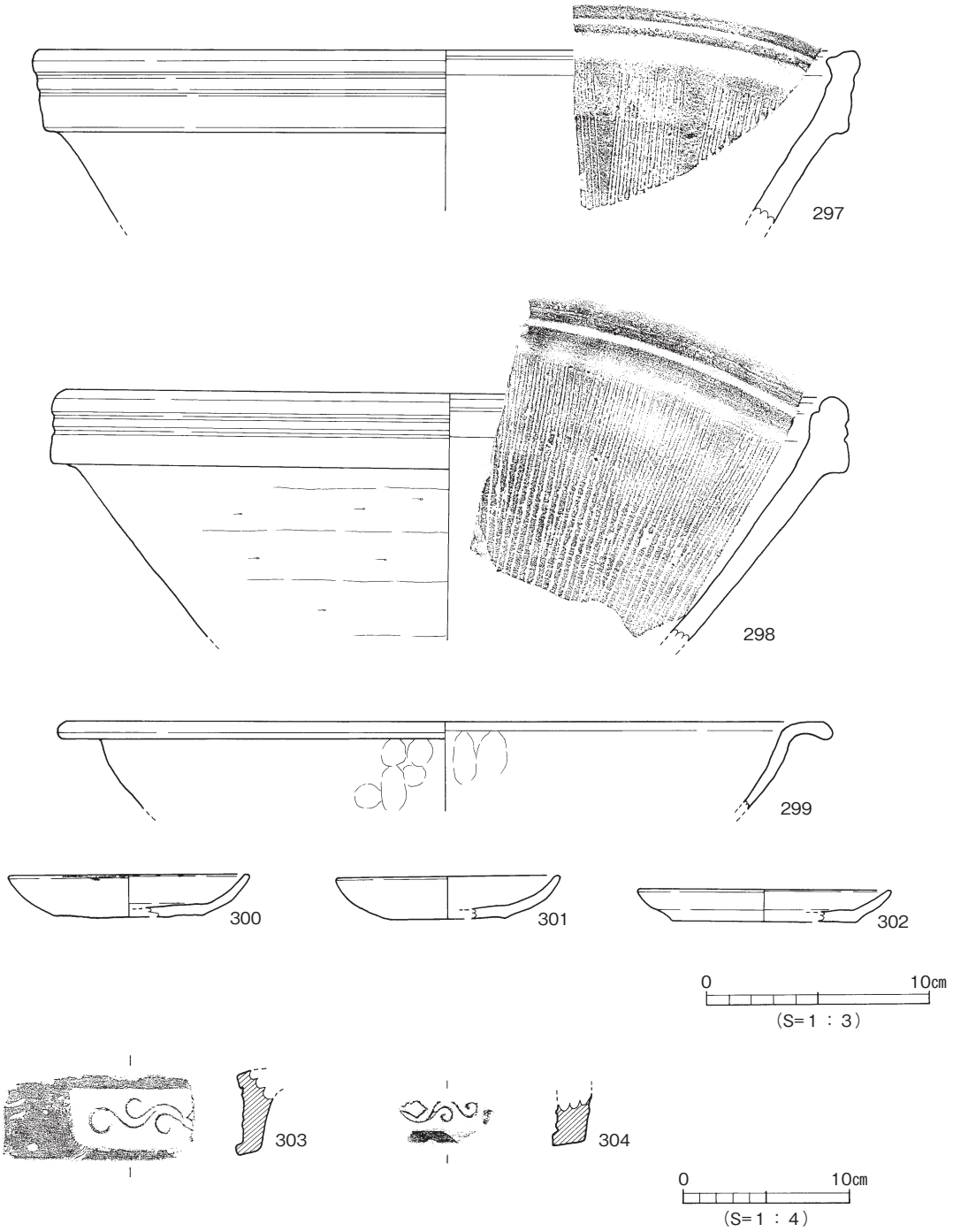


図84　SX2出土遺物(2)

303、304は軒平瓦の片で、いずれも四つ剣菱を中心飾りに持つもので、303では中心飾り下端から３転する唐草が延びる。瓦当面にはキラコの付着がある。304では２転する唐草が確認できる。

ＳＸ３（図39）

Ｎ１Ｗ３区からＮ２Ｗ３区にまたがって長さ３ｍ、幅１ｍの浅い溝状に検出されたもので、土坑ＳＫ46に切られている。

ＳＸ３出土遺物（図85）

305としたのは、同一個体の接合しないふたつのパーツで、肥前系の白磁染付碗である。灰色の胎土の碗外面に、線彫りによる花蝶文を施す。花は椿か。内面には口端部をやや下がった位置に二重圏線、体部中位に一重圏線を施し、その間に松や竹を呉須で描いている。口唇部には口銹が施されている。胎土や呉須の発色から波佐見の製品と思われる。

306は肥前系の陶器擂鉢である。口縁上端にやや内傾する面を持ち、内面に突出させている。６本単位の粗い擂目が、間隔をあけながら斜めに施されている。口縁部外面から口縁上面にまでの範囲に鉄釉がかけられている。17世紀中頃のものか。307は底部回転糸切りの土師器灯明皿、内面が煤けている。

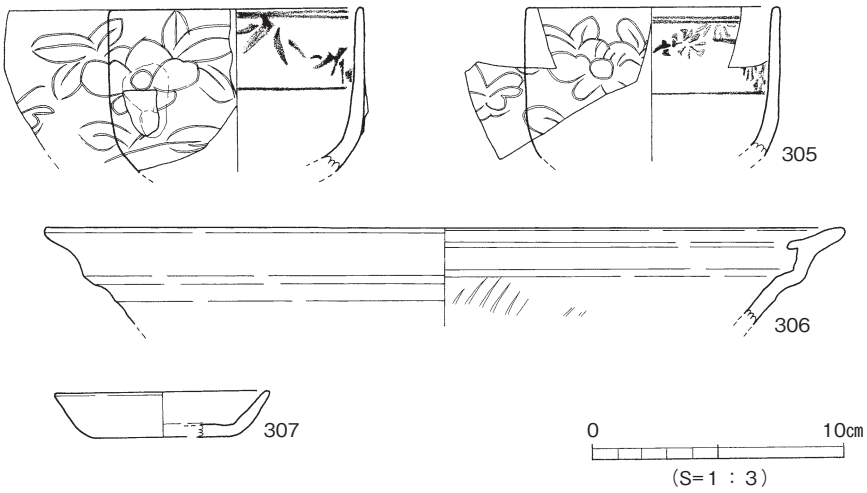


図85　SX3出土遺物

埋甕１（図45、図86－308）

埋甕は計４基検出されたが、うち３基は明治以降のトイレと考えられるもので、江戸期まで遡るものはＳ１Ｗ３区でＳＫ８を切って検出されたこの１基のみである。甕は土師質の素焼きで平底の底部径は18.4cmを測る。外面は刷毛目の後撫でられており、底部付近には刷毛目の痕跡を確認することができる。内面の底部寄りは横刷毛目で調整されているが、これより上位にはタタキに用いられた同心円状の当て具痕跡がある。ＳＫ17での口縁部片の出土例や愛媛県美術館用地での武家屋敷調査例などからみると、やや背の高いボウル状の器型になるものと考えられる。内面に付着物はみられないので、便糟以外の目的で据えられたものと考えられる。ＳＫ８を切るので18世紀後半以降のものである。

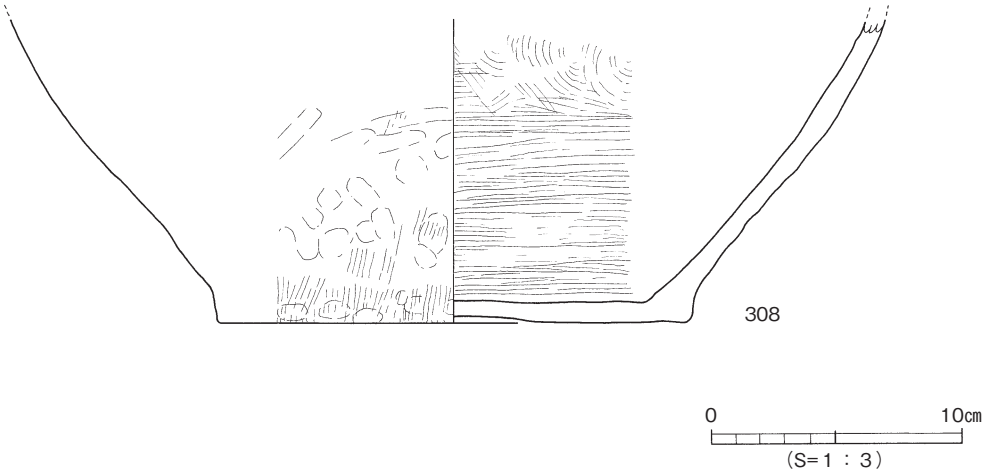


図86　埋甕１

６）柱穴出土遺物（図87）

柱穴から若干の図化可能な遺物の出土がある。これらの柱穴のうちには建物を構成するものもいくつか含まれるが、出土遺物は建物の時期に直接関係ない遺物であるので、ここで、他の柱穴遺物と一緒に扱う。

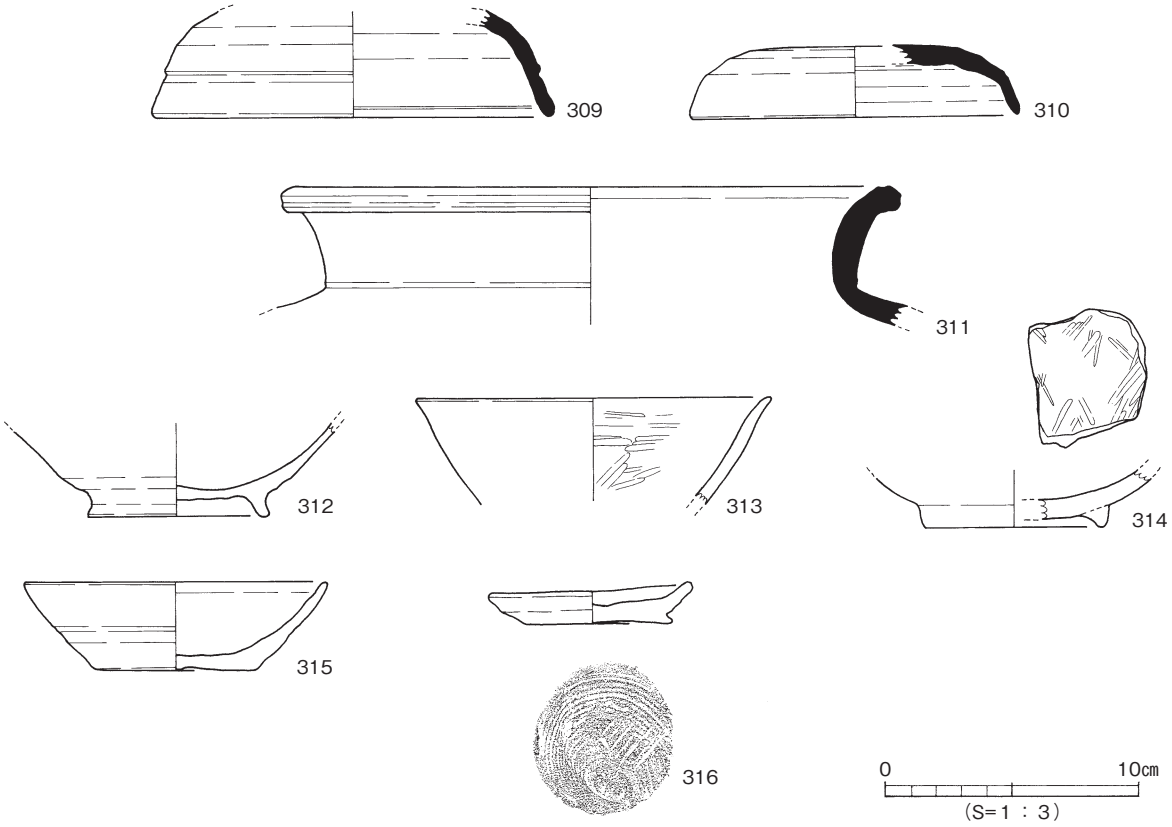


図87　柱穴出土遺物

309はＳ２Ｅ３区検出のＳＰ191出土の須恵器坏蓋、ＭＴ85段階のものである。柱穴埋土は最も新しい青味を帯びた黄色系の土であるので、包含層からの混入遺物である。310はやはりＮ１Ｅ１区で検出の、やはり同様の埋土を持つＳＰ181出土のもの、ＴＫ209段階の須恵器坏蓋である。311はＳＢ３を構成する柱穴ＳＰ19出土の須恵器甕口頸部片である。

312はＳ１Ｅ２区検出のＳＰ56出土の土師器椀である。この柱穴埋土は本調査においては最も古い土、暗茶褐色シルトであり、江戸時代以前の遺構と判断しているので、柱穴の時期に近い遺物と考えられる。回転ヘラ切りの底部に断面長方形に近い高台が貼り付けられている。内面は磨かれていたものと思われるが、器面の状態が悪く痕跡は残っていない。11世紀代のものである。313、314の黒色土器Ａ類を出土したＳ２Ｅ１区のＳＰ231や、Ｓ１Ｅ２区のＳＰ56も暗茶褐色系の埋土である。313は破片資料のため口径や傾きに若干の不安はあるが、314も含めて先ほどの土師器椀同様、11世紀代のものと考えられる。315の土師器坏を出土したＳＰ237は、Ｓ１Ｅ１区、ＳＢ１の基礎３下面検出の柱穴で、やはり暗茶褐色系のシルトを埋土に持つ。平底の底部はヘラ切り後、痕跡を撫で消されている。外面に赤色土を塗られる、赤色塗彩土器である。器高3.5㎝、口径11.8㎝、底径6.5㎝を測る。10世紀後半～11世紀前半頃のものであろう。316の土師器皿はＳ１Ｅ１区のＳＰ55出土で、やはりこの柱穴も茶褐色系の埋土である。器高1.6㎝、口径7.8㎝、底径5.6㎝の底部回転糸切りによるもので、底部にはスノコ痕がある。所属年代は12世紀以降というところまでしかわからないが、江戸時代の灯明皿などに比べると器型や製作技法、あるいは胎土に315の坏などに似た部分があり、回転糸切りのこの手のものとしては古い段階のものと考えられる。

７）園池遺構ＳＧ１

ａ．検出時の状況（図88～90）

遺構は調査地北半で検出されたが、護岸の石積みの多くが抜かれたり、池の中に落ち込んだりしていた。大規模な改修や部分的な改変が何度も施され、最終的な姿は、水をはる池本体とその東西に接続する２条の石組み水路、および池本体の南側に接して設けられた、敷石や飛び石を配した施設とで成り立った庭となっている。水路ＳＤ１は池ＳＧ１の東端に接続し、南東方向へ延びる水路で、その底レベルから判断すると、南東方向への排水のための水路であったものと考えられる。ＳＤ２も池の西端に接続する排水路である。水路底レベルや、池底レベルからみて、付属の水路でも大きな排水のための施設は西のＳＤ２で、東のＳＤ１はオーバーフローを流すための水位調節用の水路として機能していたものと考えられる。このＳＤ１は、最終的には池本体との接続部分にコンクリート製の堰を設置したり、小石を詰め込んで堰き止められ、排水施設としての機能を停止している。一方、西に排水をとる石組み水路ＳＤ２は土管を用いた暗渠排水との複合施設であるが、この水路も排水の用をたさなくなった後、最終的には池本体との接続部にコンクリート製の水門を設け、この部分で新たに南西方向への排水をとっている。

上述のように、検出時の池ＳＧ１の南には、これに接して設けられた敷石・飛び石部分がある。この部分は、図89に示したような北護岸と南護岸１からなる本来の池に新たに南護岸２を設け、南護岸１と南護岸２に囲まれた範囲を埋め立て、さらにこの埋め立て部分に敷石や飛び石を設置したものである。結果、最終的な池の姿は、現況のような北護岸と南護岸２とで構成される幅広の水路のような恰好となった。この際に池底も嵩上げされ、本来の池底よりも0.3m程度浅くなっている。飛び石に

は碾臼や珊瑚を使用した箇所が数ヶ所ある。この貼り石部分西寄りの貼り石直下には、給水施設として設けられた鉄管が埋設されているが、この鉄管は、敷石などの施設と同じ段階に設置されている。したがって、池の南２/３程を埋め立てて、この部分に敷石や飛び石を設置するといった大がかりな改修は、鉄管による給水開始と同時期に行われたものである。ＳＧ１への給水が、井戸からのポンプ給水にせよ上水道を用いたにせよ、少なくともこの改修は、どんなに遡っても松山市で電力供給が開始された明治後期までのことである。なお、この調査地は1961（昭和36）年以降、複数の所有者の手

図88　SG1・SD1接続部検出時の状況

図89　SG1検出状況

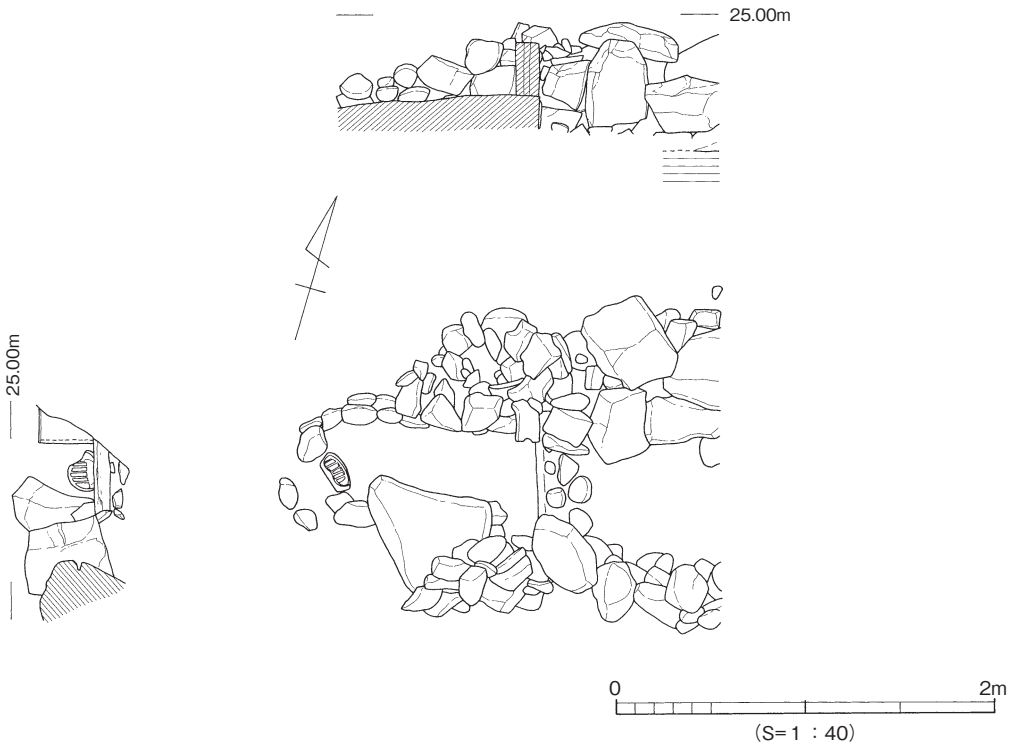


図90　SG1・SD2接続部検出時の状況

を経ながら駐車場として利用され続け、2001（平成13）年松山市の所有となったが、池の埋土中より清涼飲料水のアルミ缶やプラスチック製の氷菓の容器等を出土するところからみると、少なくとも昭和40年代の半ば頃までは埋め立て造成されることなく存続していたものであろう。

飛び石施設に利用された遺物（図91・92）

石臼317、318は最終段階の飛び石として利用されていたものである。両者ともに粉挽き臼で、317が上臼、318が下臼、石材はともに石英粒を多く含んだ砂岩で、セットであったものと考えられる。

改修後ＳＧ１埋土出土遺物（図93～95）

319～333は最終段階の池を埋め立てた土、あるいはその段階の池底から出土した遺物群である。先述のように、この埋め立て土からは、アルミ缶や氷菓のプラスチック容器なども混在しているが、ここではそれらとともに出土した明治頃までの遺物を扱う。

319は肥前系の青磁碗底部で、断面台形の高台は畳付や内面まで施釉される。高台内面には兜巾が認められる。畳付には砂目痕がある。胎土は灰色、釉は暗緑色の色調を呈する。17世紀後半。320～322は肥前系磁器染付碗である。320は器高6.1cm、口径10.3cm、高台径4.5cm、外面に描かれているのは庭風景。内外の器面に貫入が認められる。18世紀。321は、格子に菊花散らしの文様が内外面に描かれている。18世紀後半。322も碗底部で、高台外面には二重圏線、高台脇に蓮弁文がある。内面見込は二重圏線で区画され、手描きの五弁花を施されている。18世紀末～19世紀初頭。323は肥前系磁器染付鉢、型打ちで六角形に成形され、線描きによる青海波や格子文を施されている。胎土は明るい灰色で、呉須は緑がかった紺色に発色している。波佐見の製品であろう。324は窯道具のハマである。

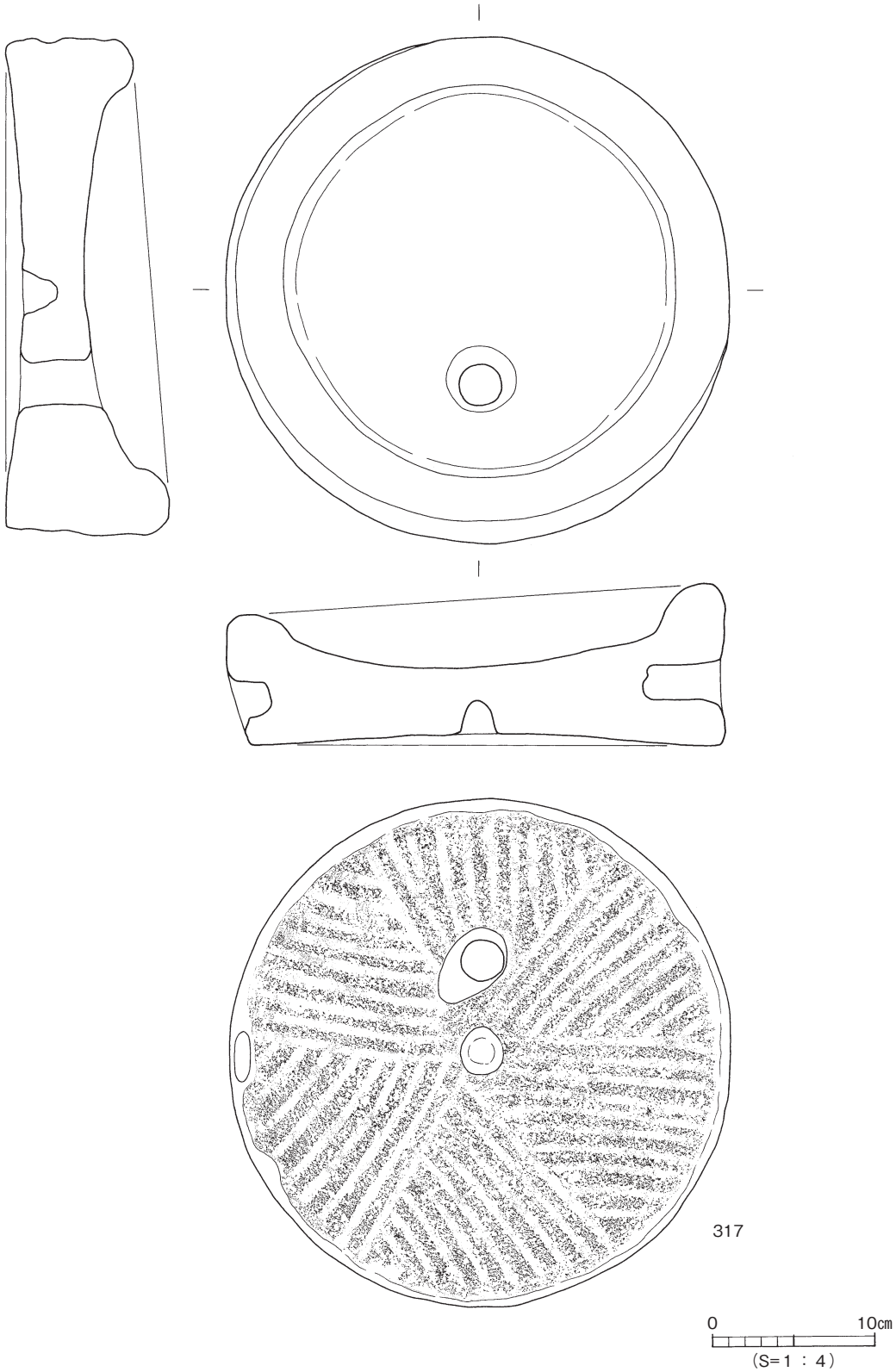


図91　改修後 SG1出土石臼(1)

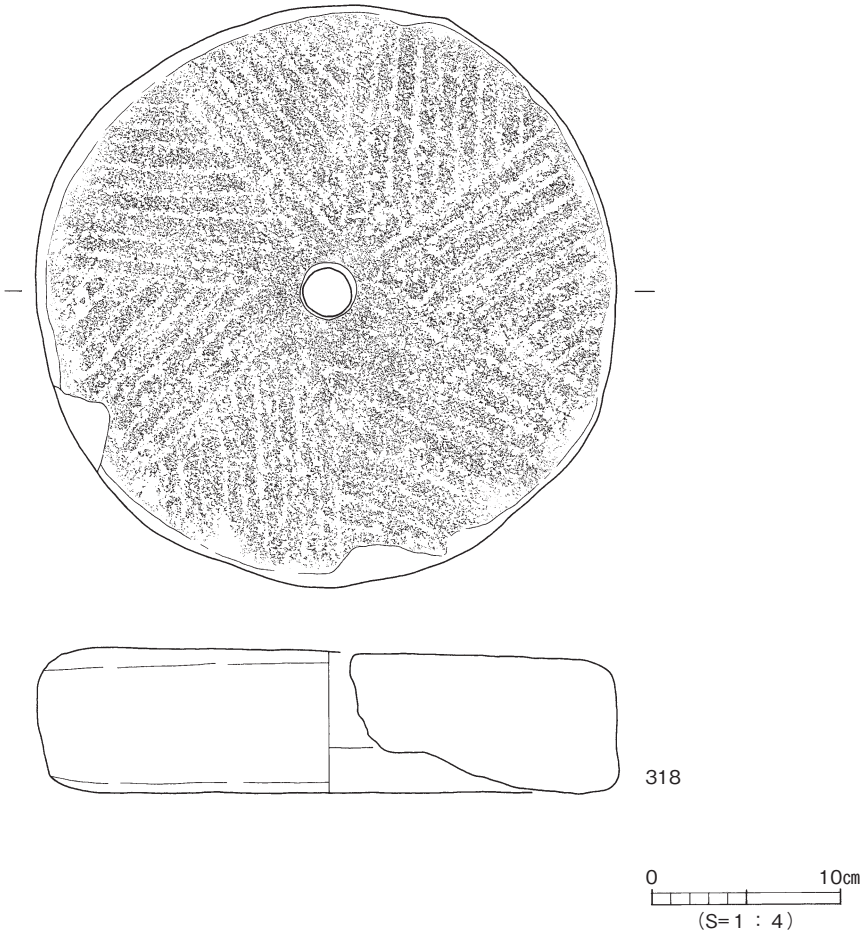


図92　改修後 SG1出土石臼(2)

325は染付皿で、合成コバルトを使った明治以降のもので、北護岸中央の岬状の池底で検出された。器高3.8cm、口径13.7～14.7cm、高台径6.2cmで、平面形は瓢箪形を意図したものと思われる。銅板転写による施文は、外面に杜若を、内面には梅、菊に萩もしくは稲穂と考えられる絵柄を描いている。また、かなりくずした字で「覚作」とも読めそうな字が染付けてあるが、定かではない。高台から高台脇は露胎でこの部分に流しかけたような墨痕がある。高台内面は一旦轆轤で輪状に削り出された後、カンナで花弁状に仕上げられている。

328、329は擂鉢である。328は備前で、口縁外面の沈線は３条である。体部の内外面には轆轤目が顕著に残り、内面の擂目は口縁をかなり下ったところまでしか施されないようである。斜め方向の太く深い擂目が２本だけ確認できる。17世紀前半代のものであろう。329は堺産と思われるもので、８本単位の間隔のあいた擂目が施されている。18世紀後半。330は明治以降と思われる産地不明の火鉢、キメの細かい胎土で、断面は赤紫から暗紫色を呈する。外面には長石粒などの砂粒を多く含んだ塗り土を施しており、内面や断面のキメの細かさとは対照的な焼成となっている。331は須恵器坏身ＴＫ209段階のもの、外面のヘラケズリは非常に甘い。332は土師器甑の把手である。333は真鍮製と思われる煙管の雁首で、脂返しとラウとの接続部に段を有するもの、江戸時代でも古いタイプのものである。

334～336は瓦製の煙突である。法量のわかる334、335で計測すると、長さ31.5cm、直径11.8cmの筒

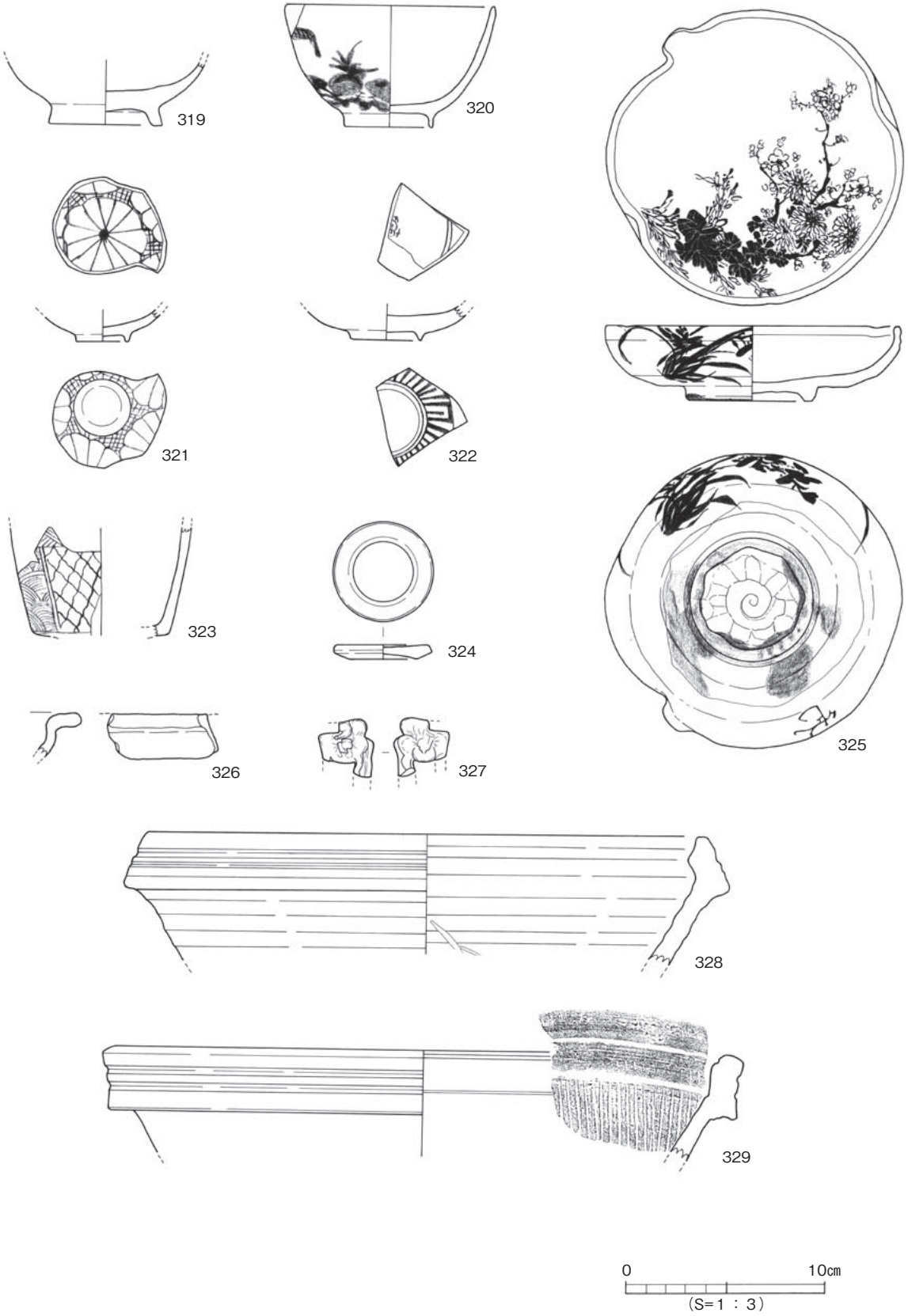


図93　改修後 SG1埋土出土遺物(1)

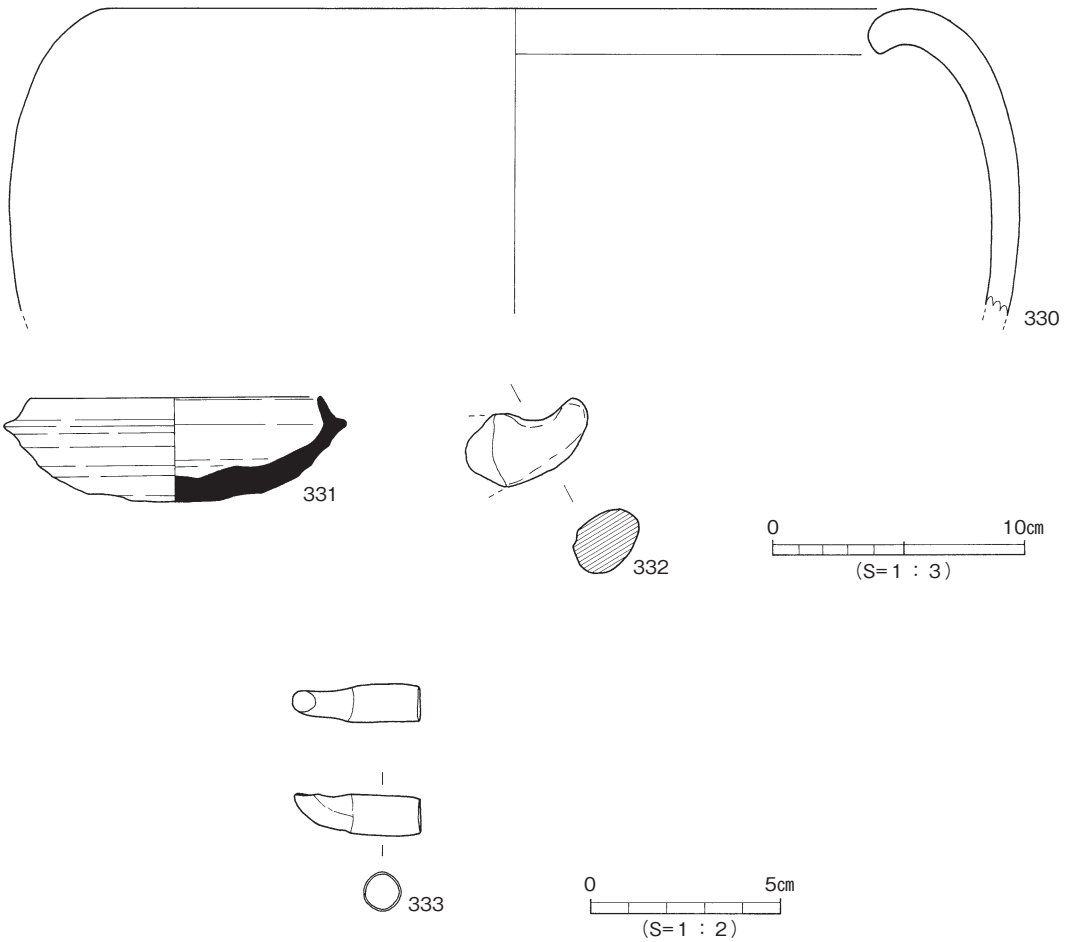


図94　改修後 SG1埋土出土遺物(2)

になる。丸瓦と同様に、鉄線で切り出した厚さ1.1cmの粘土板を巻いて一箇所で接合して製作している。いずれも一方の端部に被熱による器面の傷みがあり、また一方には煤の付着が顕著にみられる。焜炉による炭の着火の際に、上昇気流を発生させるための道具として使用されたものであろう。337は軒丸瓦、半時計回りの巴は頭部があまり鉤形に屈曲せず、緩やかに尾部に向かってすぼまるもので、尾部は隣接する巴からは離れている。やや小さめの珠点は20個に復元できる。

b．敷石・飛び石設置段階の池改修（図96）

先述のように、池ＳＧ１は本来、北護岸と南護岸１とで構成されていたところへ、明治後期以降のいずれかの段階で新たに南護岸２を設け、南護岸１と２の間のスペースを60cm程度造成して、この部分に敷石や飛び石施設を設けたものである。したがって、最終的な池のかたちは、北護岸と南護岸２で構成された幅広の水路のような形態になった。本来の池底面には貼り土や敷石・撒き石などの特別な造作は施されず、北東部では砂岩質の地山岩盤、それ以外の部分では、この遺跡の大部分の遺構の基盤面となっている暗褐色から黒褐色系のシルトである。この面に、砂岩質の地山を砕いた礫を主とする土を載せて埋め立て、上面に拳大から人頭大の河原石を敷いたり、飛び石を設置したものである。こうして改修され池として残った部分は、やはり砂岩礫で旧池底面から20～30cm嵩上げされ、さらに10cm程度乳白色のシルト質の土を貼って新たな池底としている。

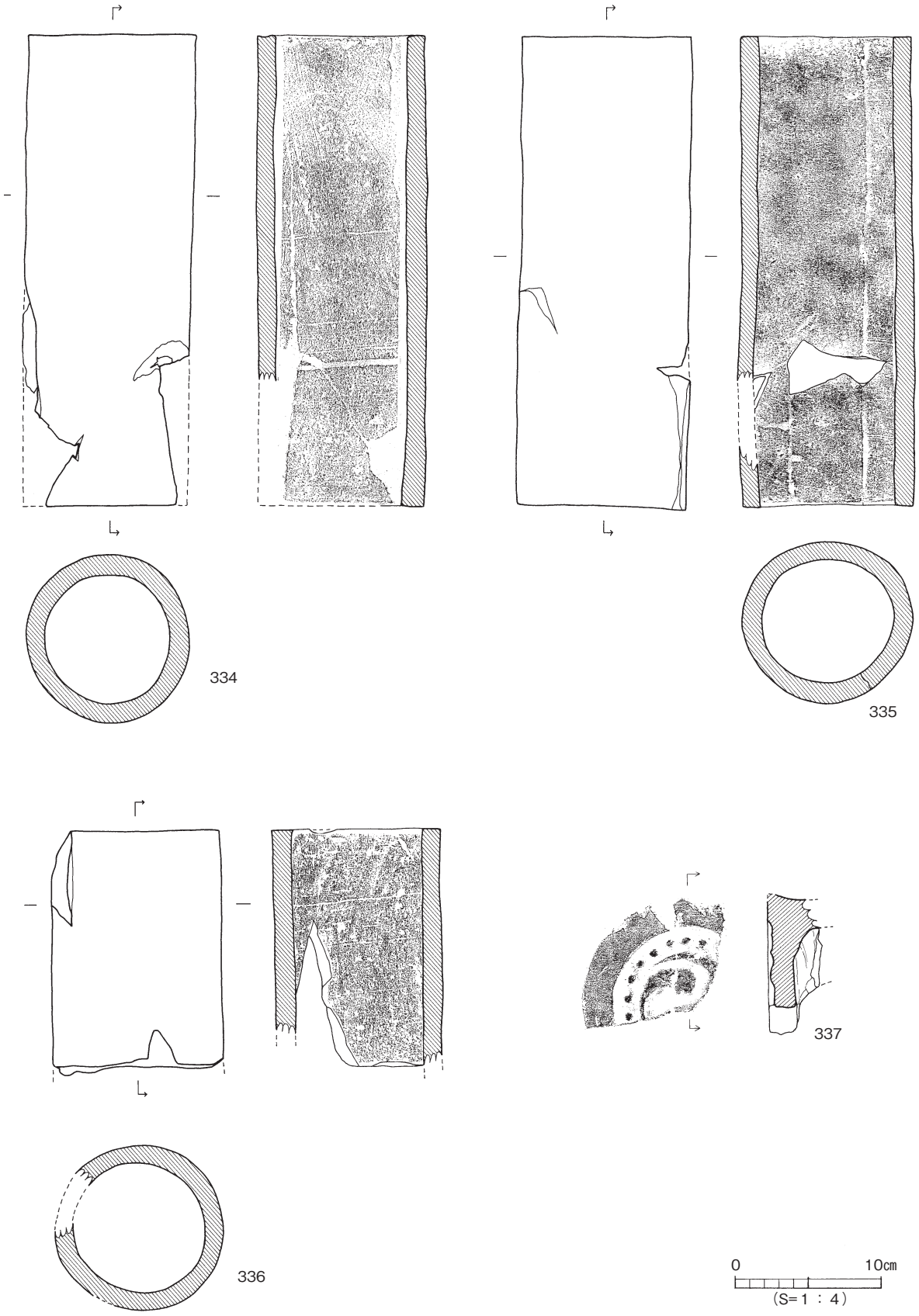
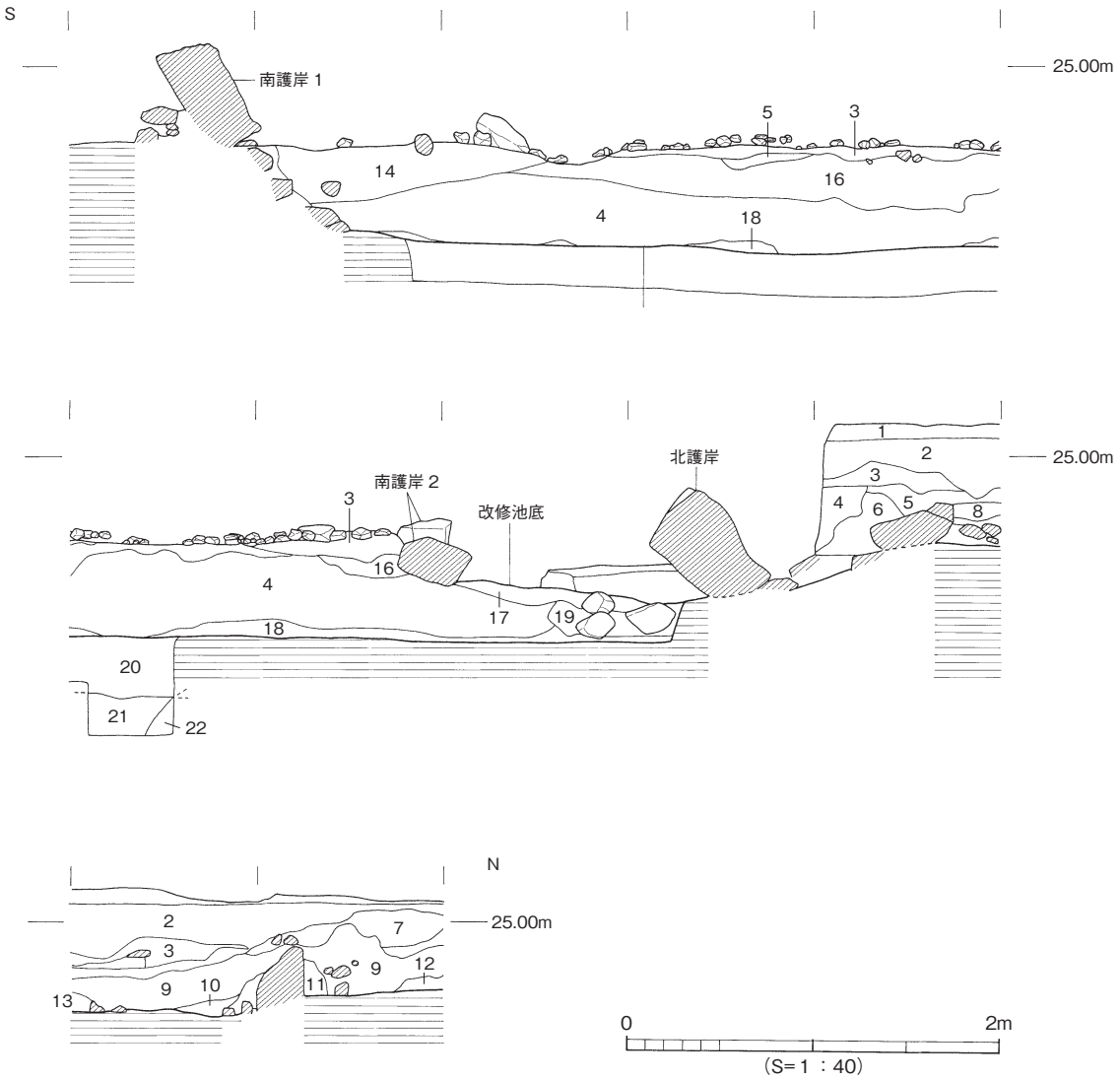


図95　改修後 SG1埋土出土遺物(3)



1．アスファルト
2．岩盤礫＋青黒色粘土（少量）
3．青黒色粘土＋岩盤礫（少量）
4．岩盤礫
5．岩盤礫多めの３
6．灰黒色粘質土＋岩盤礫小粒
7．灰色粘質土＋岩盤礫（少量）
8．黒色粘質土＋岩盤礫
9．暗めの６
10．青黒色粘土＋大きい岩盤礫（多量）
11．灰黒色粘土
12．黄灰色粘土
13．岩盤角礫
14．含小河原石暗灰褐色砂質土
15．８＋中粒砂
16．暗灰色シルト＋岩盤礫（多量）
17．乳白色シルト＋岩盤礫（改修後池底貼り土）
18．明青灰色粘土（旧池底堆積土）
19．18＋岩盤礫
20．暗褐色粘土
21．暗青色シルト
22．黒色粘土
（池底基盤面、弥生～中世包含層）

図96　SG1改修状況断面図

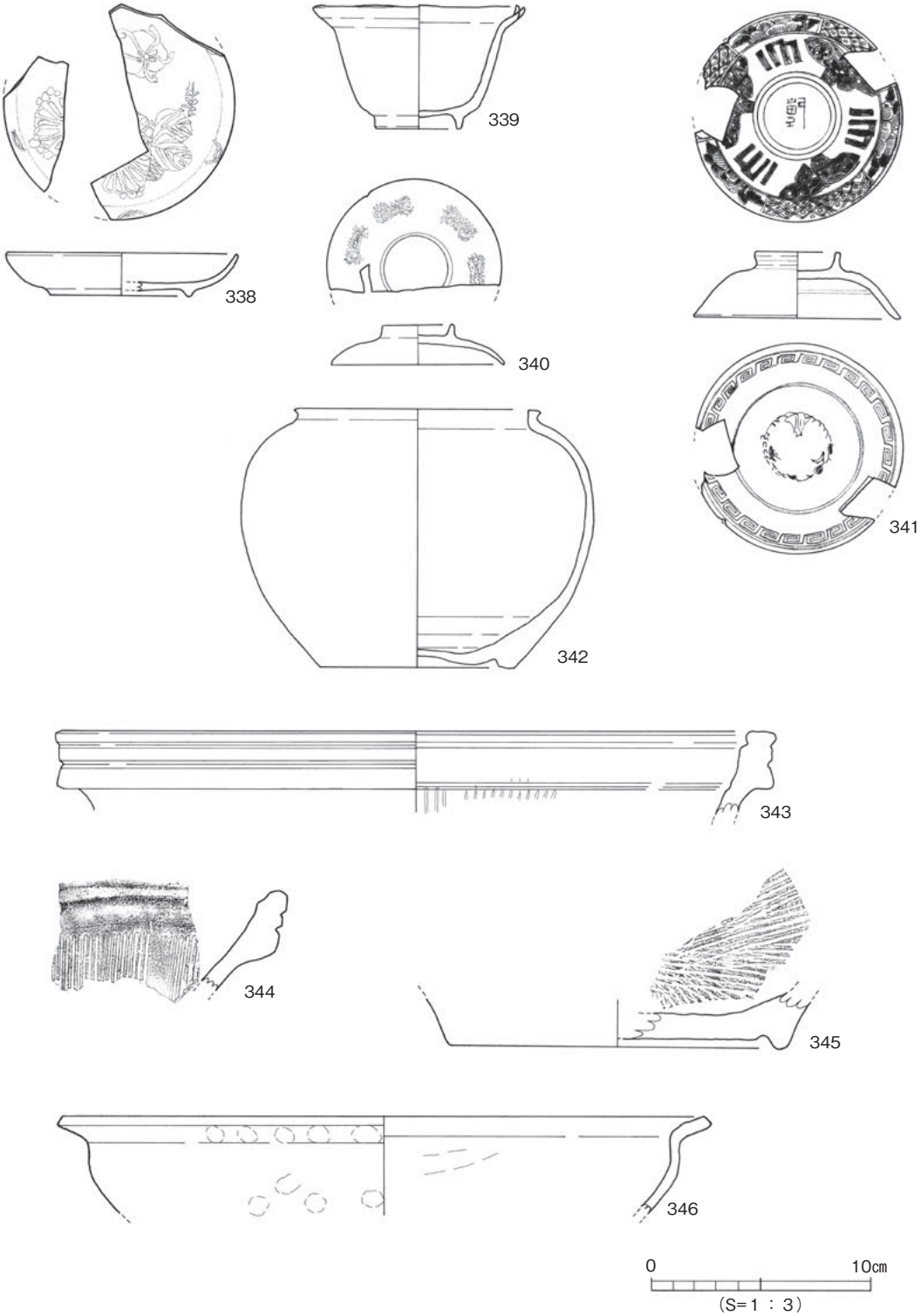
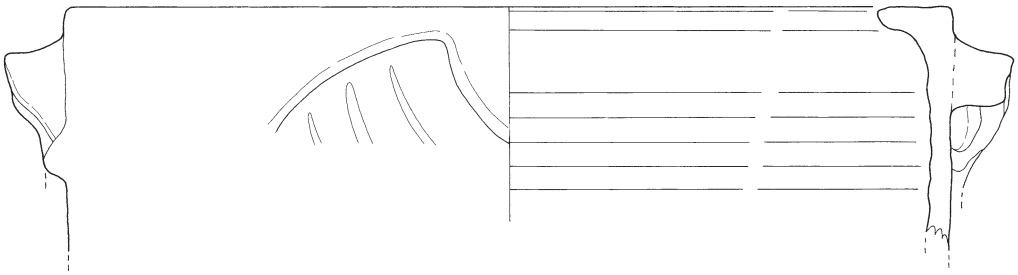


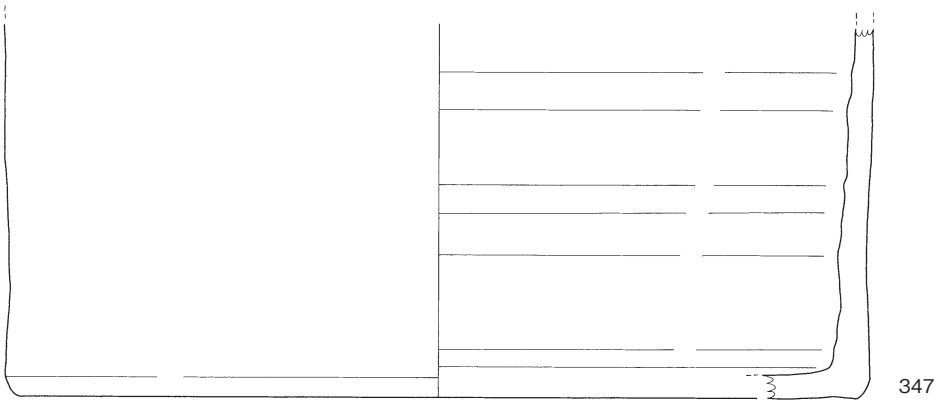
図97　改修時 SG1造成土出土遺物(1)

改修時ＳＧ１造成土出土遺物（図97～99）

338～341は肥前系の磁器である。338は色絵の皿であるが、絵の具はほとんど剝落しており、青、緑、赤の一部が僅かに残っているのみで、ほとんどが透明なガラス質の剝離痕である。残った青も染付ではなく、上絵付けによっている。口縁部と見込に青の圏線を巡らせ、口縁部に小さな文様を散らせているが、何を表現しているのかは不詳。見込の主文様は牡丹をはじめとする花文と思われる。339は白磁の猪口、器高5.6cm、口径8.8～9.6cm、高台径3.8cmを測る。口縁部は折縁状、輪花に成形している。17世紀末～18世紀前半。340は色絵の蓋で、外面に上絵付けを施しているが、これも絵の具は剝落してガラス質の痕跡だけが残っている。器高1.8cm、口径7.8cm、鈕径3.3cm、外面の文様は一対の雨龍を単位とした双龍文を巡らせているようである。341は染付蓋、器高3.0cm、口径9.4cm、鈕径4.0cmを測る。外面口縁部を６区画し、斜格子文と牡丹文を交互に施す。主文様の蝶は体部を線文で３区画して描く。この区画に描かれた線文は４本単位ではあるが、源氏香によく似た表現である。鈕内面には「乾」の銘款がある。内面は口縁部に雷文、二重圏線の内側にほとんど線描きのみの環状松竹梅文が施されている。19世紀前半。

342は産地不詳の陶器壺、淡黄色の胎土に暗黄色の釉がかけられている。碁笥状の高台のみ露胎である。器高11.7cm、口径10.6cm、胴部最大径16.0cm、高台径8.8cmを測る。343～345は陶器擂鉢で、343、345が堺、344は備前と考えられる。343の口端部は平坦な面をなし、口縁部内面には段がある。





0　10cm
（S=1：3）

図98　改修時 SG1造成土出土遺物(2)

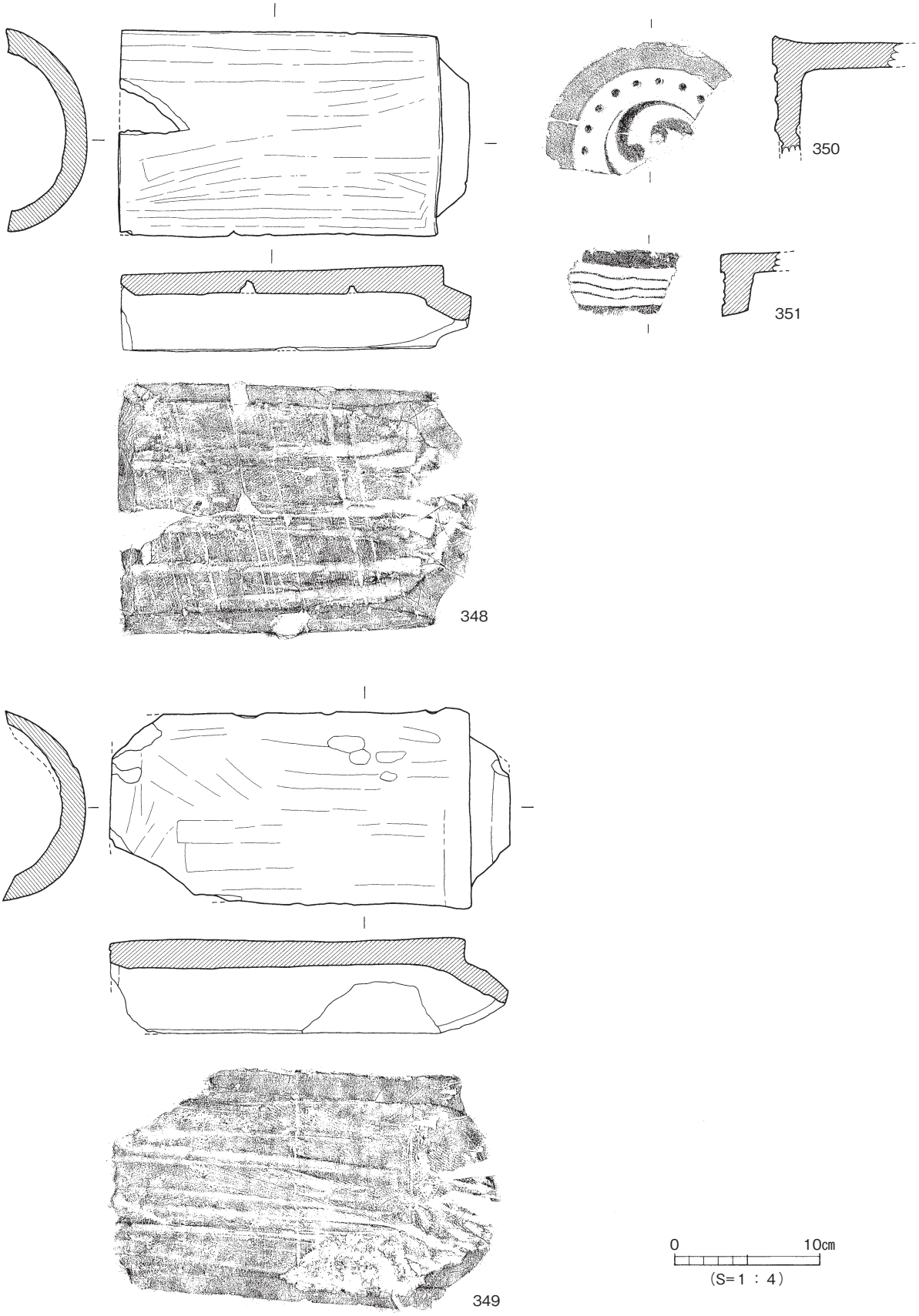


図99　改修時 SG1造成土出土遺物(3)

SD2
北護岸
SK55
SK54
SK53
石組み遺構 2
SK52
南護岸 1
石組み遺構 1
SD1
0
10m
(S=1：100)

図100　SG1全測図

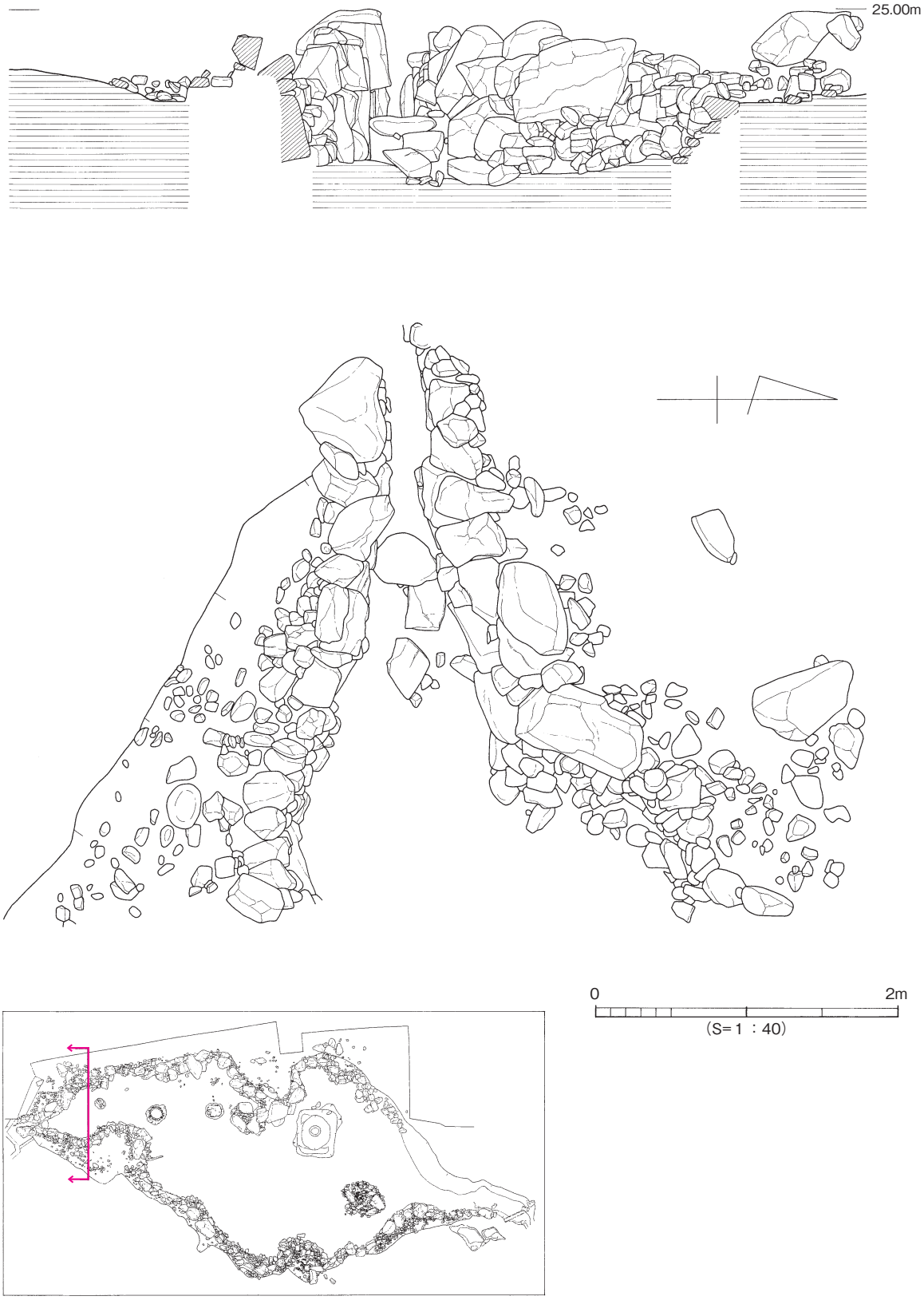


図101　SG1護岸測量図(1)

口縁帯はやや幅狭で、２条の凹線が巡る。擂目は間隔が広く深い。一旦口縁部に及んだ擂目は軽く撫で消されるが、部分的に痕跡は残っている。焼成は赤味を帯びている。18世紀後半～19世紀初頭。同じく堺と思われる底部345は、高台を持つもので、焼成も343同様の赤味を帯びたものである。備前と思われる口縁部343は、口縁帯に２条の凹線が巡り、顎は角が取れ丸みを持った成形になっている。この顎に重ね焼きの熔着痕が薄く残っている。擂目は10本単位、18世紀前半～中頃。346は瀬戸内系の瓦質焙烙である。347は瀬戸美濃系の火鉢、同一個体の口縁部と下半部である。筒型の器型で底部は平底、口縁部が内側に水平に延びる。外面の口縁部近くには庇形の把手が付き、全容は不明だが陽刻文が施されている。底部外面以外のすべての部位にアイボリー系の灰釉がかけられている。明治以降の製品であろう。

348、349は玉縁丸瓦である。348は全長24.1cm、玉縁長1.9cm、広端幅14.1cm、狭端幅13.6cmを測る。凹面には鉄線切り痕や布目痕がある。凸面は縦方向に撫でられている。349は全長27.5cm、中位での幅13.2cm、と348にくらべてやや細長いが、調整は同様である。350は軒丸瓦。時計回りの巴は頭部が鉤状に屈曲し、尾が細く長くほとんど隣接の巴に接続するところまで延びる。珠点は17個に復元できる。351は軒平瓦の小片で、瓦当は３本の波状隆起線文様である。

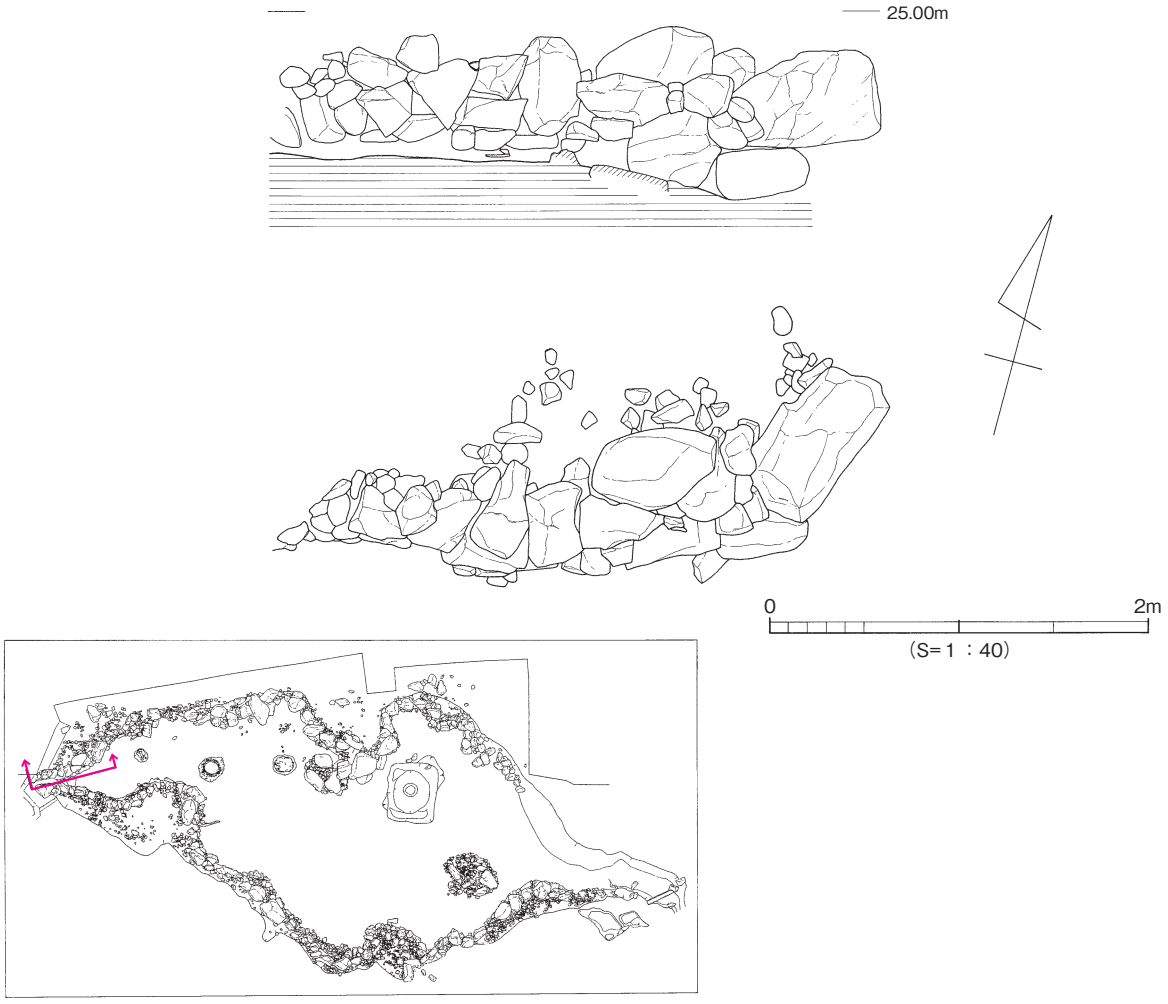


図102　SG1護岸測量図(2)

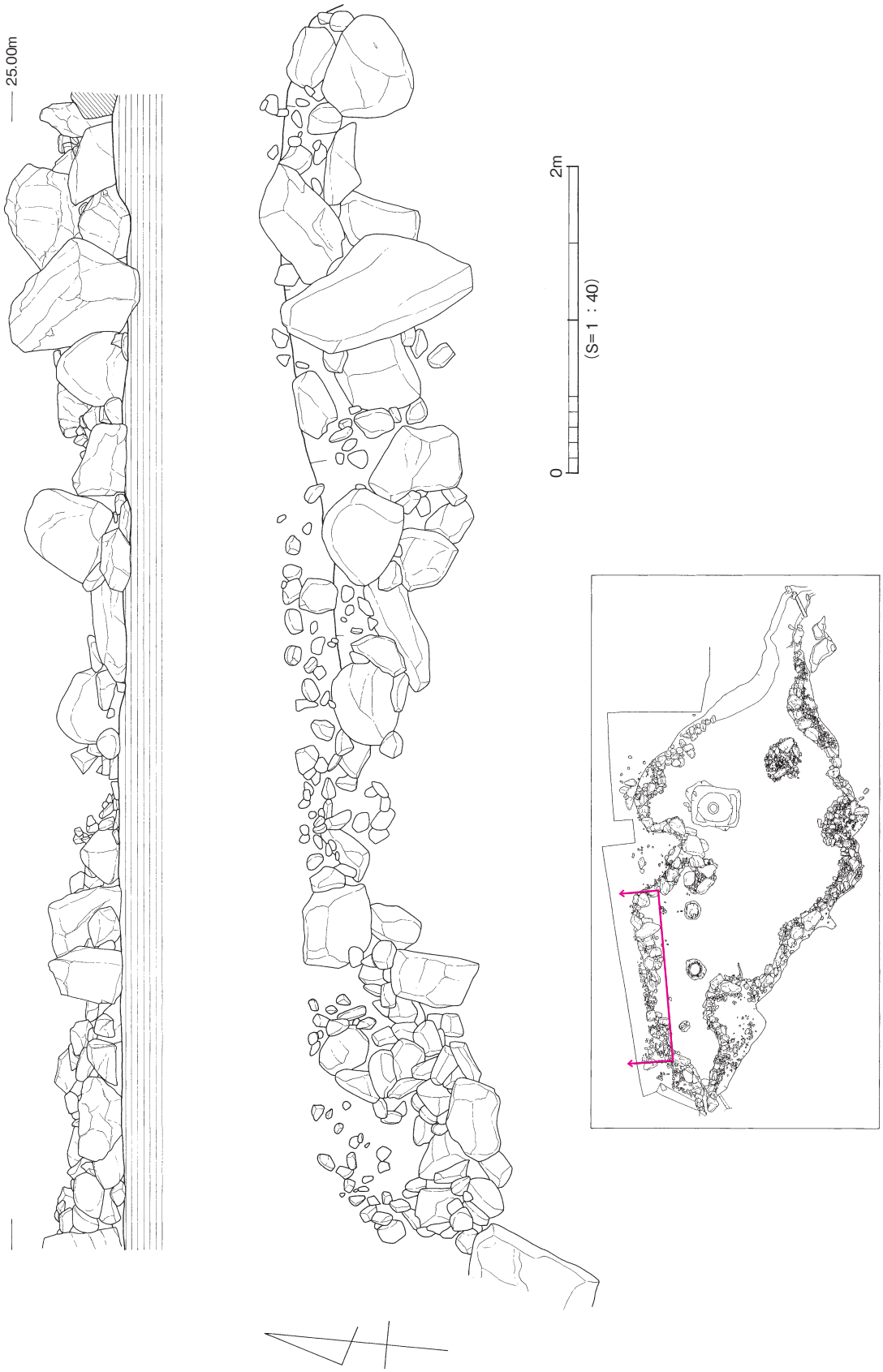


図103　SG1護岸測量図(3)

c．池の構造と各施設および出土遺物

護　岸（図100～113）

池ＳＧ１は、前述のように東西の水路を境に北側の北護岸と南側の南護岸１とからなる。北護岸は延長約31m、南護岸１の延長約30m、その平面プランは、東西に長い紡錘形がくびれたようなかたちを呈している。おおよそ東西長47m、南北最大幅22mで、東西の端部にそれぞれ石組みの水路がとりつく恰好である。北護岸の東端7.5m、南護岸東端の１mには、現在、護岸石は存在していないが、本来も地山露出の護岸であったものと考えられる。護岸に用いられている石材は、流紋岩、砂岩、花崗岩がほとんどで、明治以降の敷石や飛び石に多用されているホルンフェルスや蛇紋岩を主とした石材利用とは際立った違いを見せている。

護岸石材は、転落したり滑落していたりするものが多く、現況で護岸の高さは池底から0.5～１mの範囲で残存している。そのような中でも、数ヶ所天端を残していると考えられる部分が南護岸１に

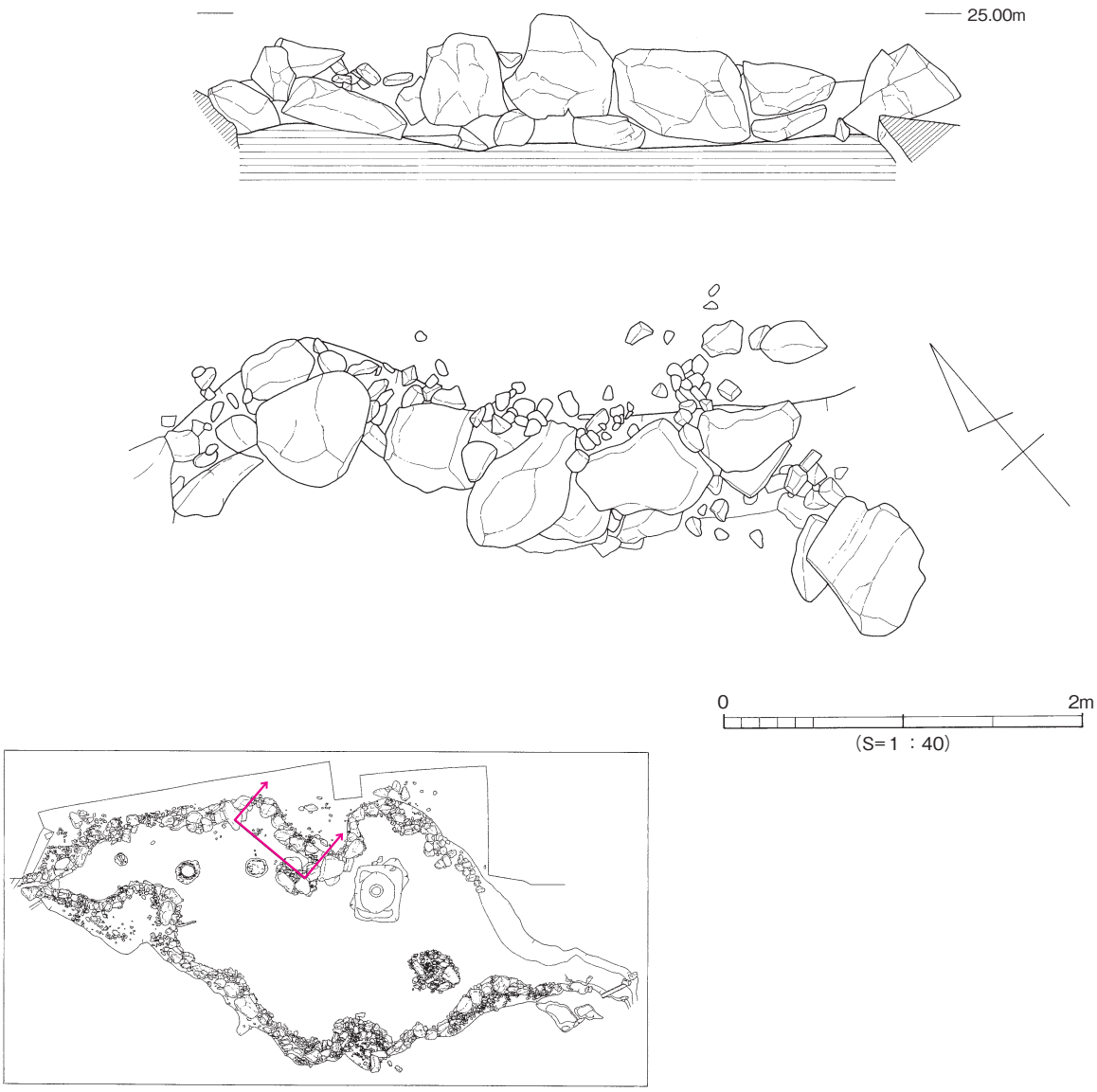


図104　SG1護岸測量図(4)

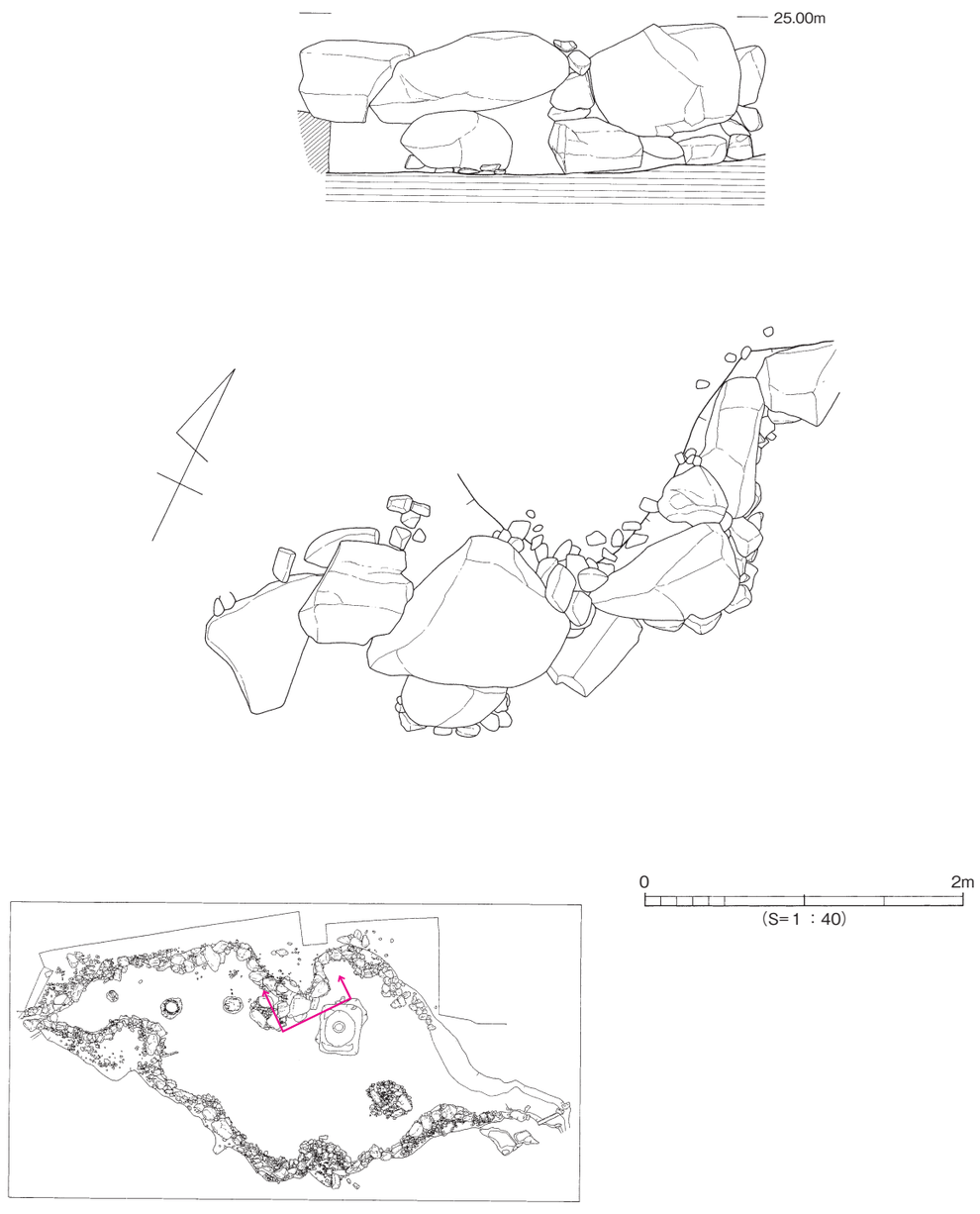


図105　SG1護岸測量図(5)

図106　SG1護岸測量図(6)

図107　SG1護岸測量図(7)

あり、その高さはおおよそ標高で25.0～25.2mを測る。これら天端残存部での天端石の据え方をみると、人頭大あるいはそれ以下の栗石で調整しながら、根石として30～50㎝大の石を置き、その上に50㎝を越える石材を天石として据えるのを基本としている。この根石の上端レベルがおおよそ24.3～24.4mにあり、このような状況はその他の根石残存部でも同様である。現在、護岸に水がかりの痕跡は残っていないが、後に述べる水路ＳＤ１の底レベルや石組み遺構の上面レベルも勘案すると、この根石上端を越えたあたりに往時の水面があったものと考えられる。

北護岸のほぼ中央に位置する張り出し部によって形成された入り江のうち、西側の入り江で長さ1.5mを越える細長い巨石が倒れ込むように遺存していた。西で入り江状になったこの部分に、この巨石を立石とした滝石組みを想定していたが、周辺の現状での護岸組みからでは滝を想定することは難しいとの造園側の意見である。本来、滝施設の一部であった石材を景石に転用したものか。ちなみにこの池には、発掘調査された範囲では導水用の水路等の施設は存在していない。この池の北直近の上方に現存する萬翠荘の池も江戸時代のものといわれ、城山斜面から滲出する雨水を集めて滝石組み

図108　SG1護岸測量図(8)

図109　SG1護岸測量図(9)

に落とす自然給水となっていることからみて、この池ＳＧ１も本来は同様の自然給水であったものと考えられる。

この池ＳＧ１には、先述の大規模な改修のほかにも、何ヶ所かの護岸改修を受けている痕跡がある。図113に示したＮ２Ｗ２区からＷ３区にかけての南護岸１の西端に近い部分は、一旦岬状に内側に張り出しているが、この部分の護岸石材の大きさ、積みともに他の部分とは明らかに異なっている。また、護岸掘り方は、他の部分が護岸裏直近にあるのに比べると、かなり離れて検出されている。本来

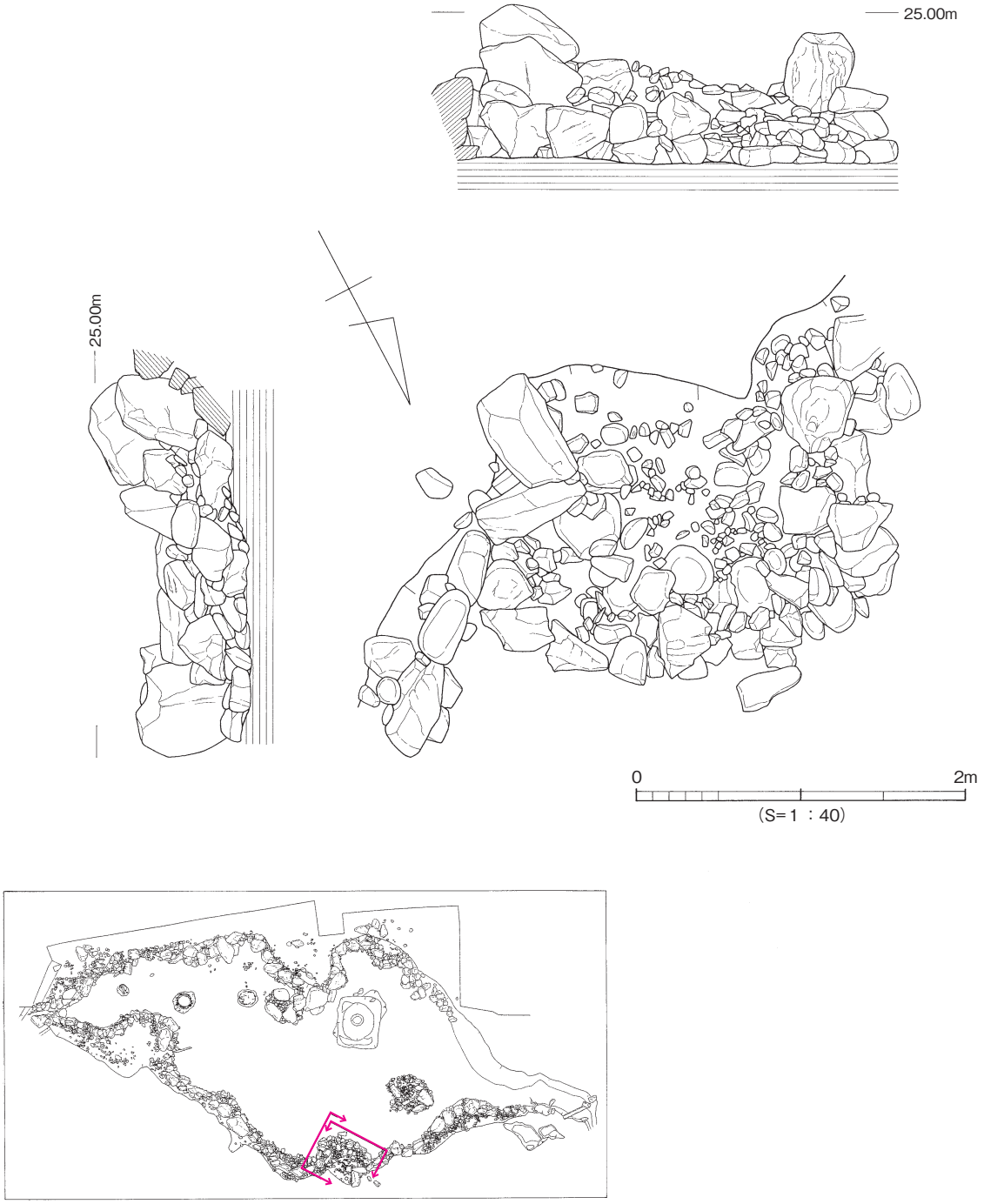


図110　SG1護岸測量図⑽

図111　SG1護岸測量図(11)

は、現況のように張り出しを持たず、この掘り方ラインに示されたように、直線的に西水門に向かっていたものと考えられる。この部分の改修は、敷石施設の設置などと同じタイミングで行われた可能性が高い。さて、この南護岸１にはもう１ヶ所改修と思われる部分がある。図110、中央やや東寄りの部分がそれで、天端石がなく根石や栗石がやや張り出して岬状に集まっている。この岬状張り出し部分の裏側には、本来の護岸と考えられる石材が面を揃えて列んでいる。したがって、この張り出しも後に加えられた可能性が高い。

池底堆積土、池底包含層出土遺物（図114）

352は明治以降の銅板転写による染付碗。明るいブルーに発色するコバルトで、蝶と戯れる唐子文様が細かい筆致で描かれている。353は砥部染付碗の破片であるが、若干歪んでいるので、口径や高台の開き等、図には若干不安定な部分がある。外面には高台に１条の圏線、体部に簾状の格子文が二

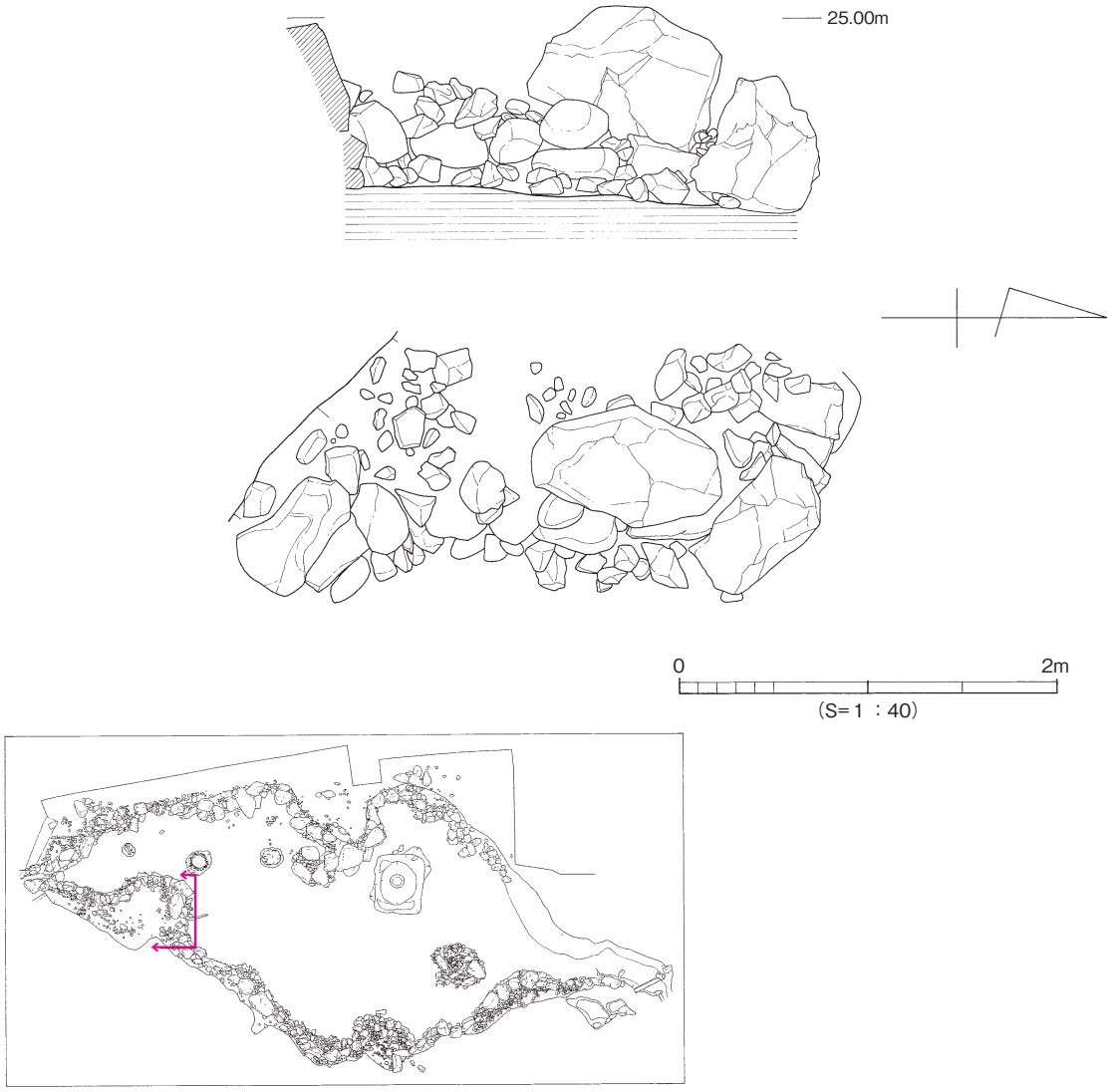
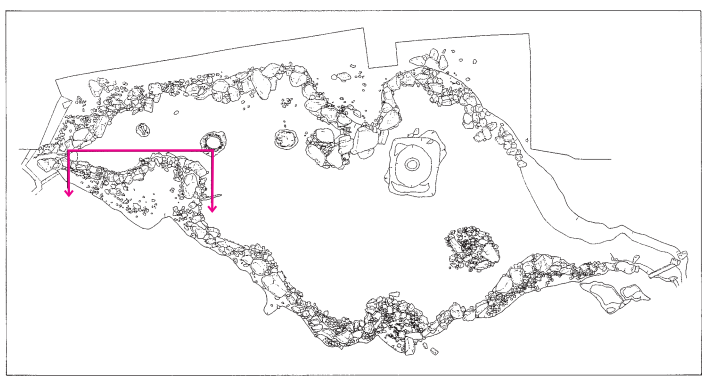


図112　SG1護岸測量図⑫



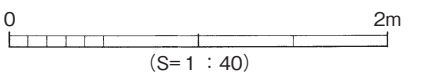


図113　SG1護岸測量図(13)

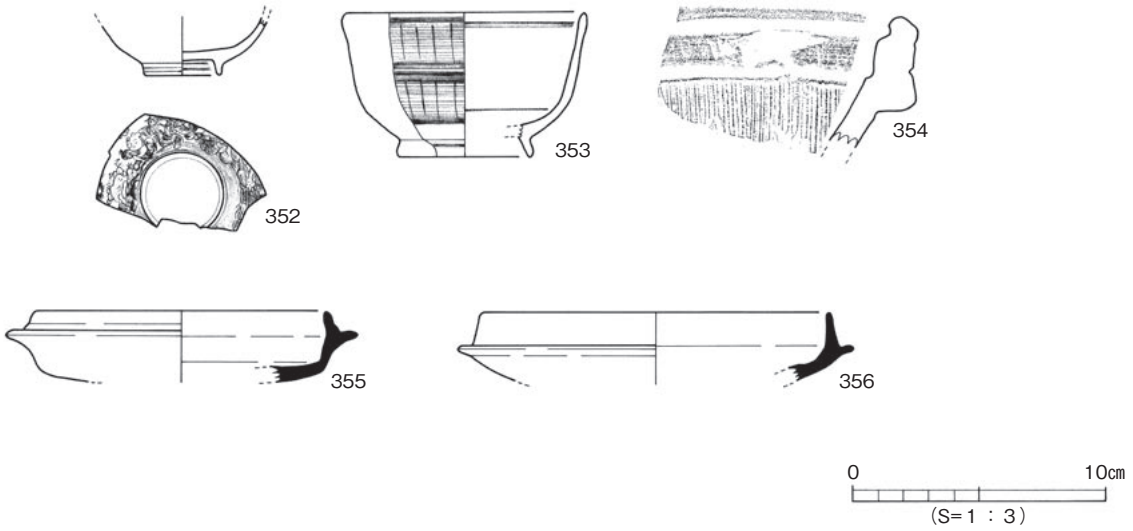


図114　SG1池底堆積土、池底包含層出土遺物

段にわたって施され、内面には口縁部、見込に１条ずつの圏線が巡っている。幕末。354は堺の擂鉢口縁部、顎の張った口縁帯には２条の凹線、口縁部内面には段がある。また、体部と口縁部との境の擂目上端の部分も段状になっている。18世紀後半～19世紀初頭。355､356はＴＫ209段階の須恵器坏身、355はやや下るかもしれない。

池ＳＧ１内で検出された施設

石組み遺構１（図115）

池南東部の埋め立て土下層から検出されたもので、若干崩れたり石を抜かれたりしている。2.2×1.8m程度の楕円形プランを呈しており、岩島の基礎であると思われる。基本的には、後述する石組み遺構２と同様で、大ぶりの石数個を上面の平坦面を揃えるように配置するために人頭大から拳大の川原石を敷いたり詰めたりして調整している。最も大きく安定している石材の上面レベルは24.5mである。

石組み遺構２（図116）

北側の岬状の張り出し部護岸直近に配置された施設で、護岸石材が落ち込んで一部のしかかったような状況で検出された。おおよそ、1.8×1.4m規模の楕円形に近いプランに石材が集中している。主となる部材は長さ１m近い３石で、上面が平坦に面を揃えるよう三角形に近い配置で据えられ、人頭大から拳大の川原石を詰めたり敷いたりして、高さと傾きを調整している。石組み遺構１同様、上面のレベルは24.5mにあり、灯籠台のような役割を果たしていたものと考えられる。

魚溜ＳＫ52（図117）

貼り土や敷石・撒き石などの特別な床面施設を持たない池底は、中央より北半分が北方丘陵から続く砂岩質の地山を平坦にカットした面、これより南は斜面堆積あるいは氾濫堆積による小礫混じりの黒色シルトからなっている。この床面から１基の魚溜と考えられる施設が検出された。検出面のプラ

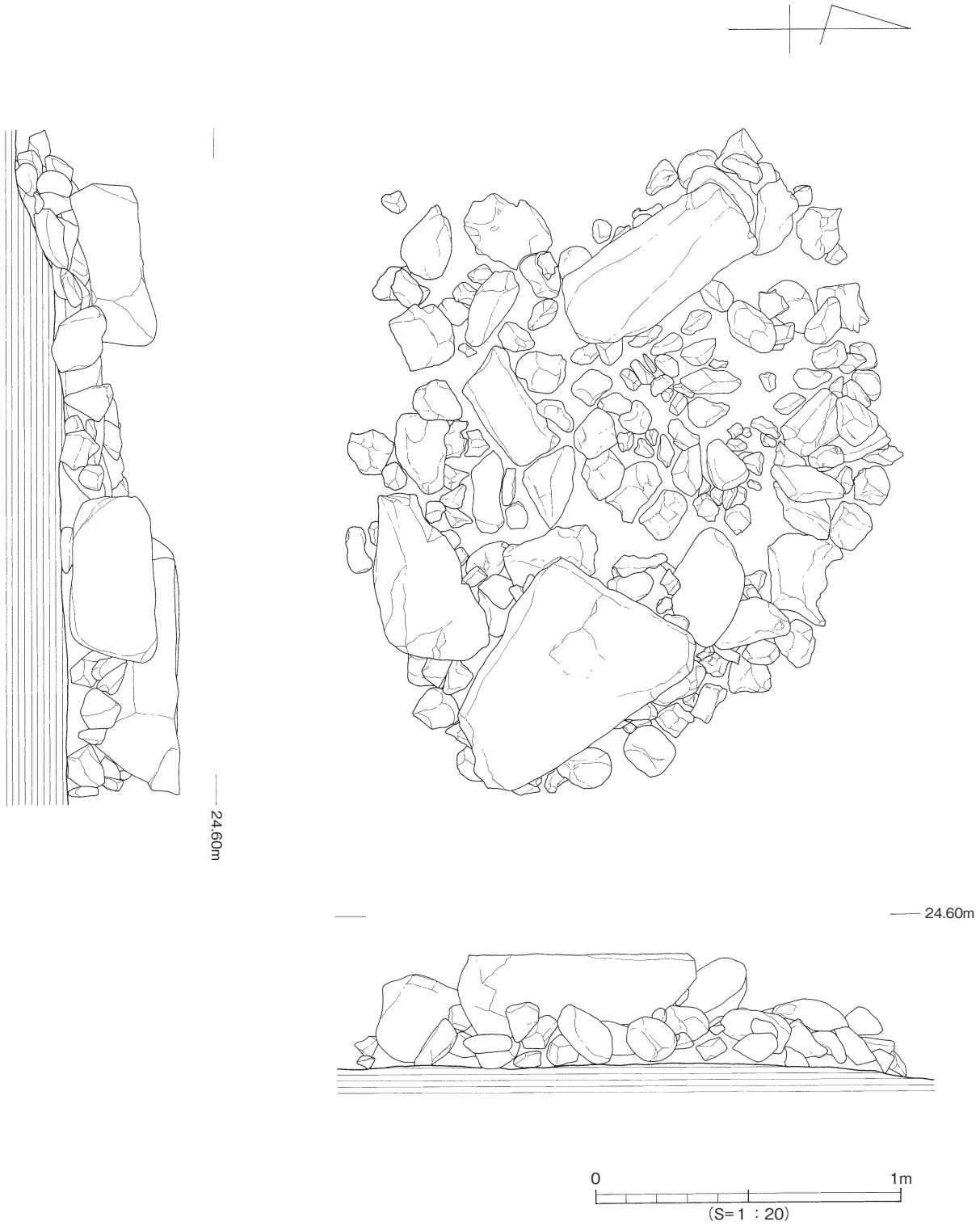


図115　SG1石組み遺構 1

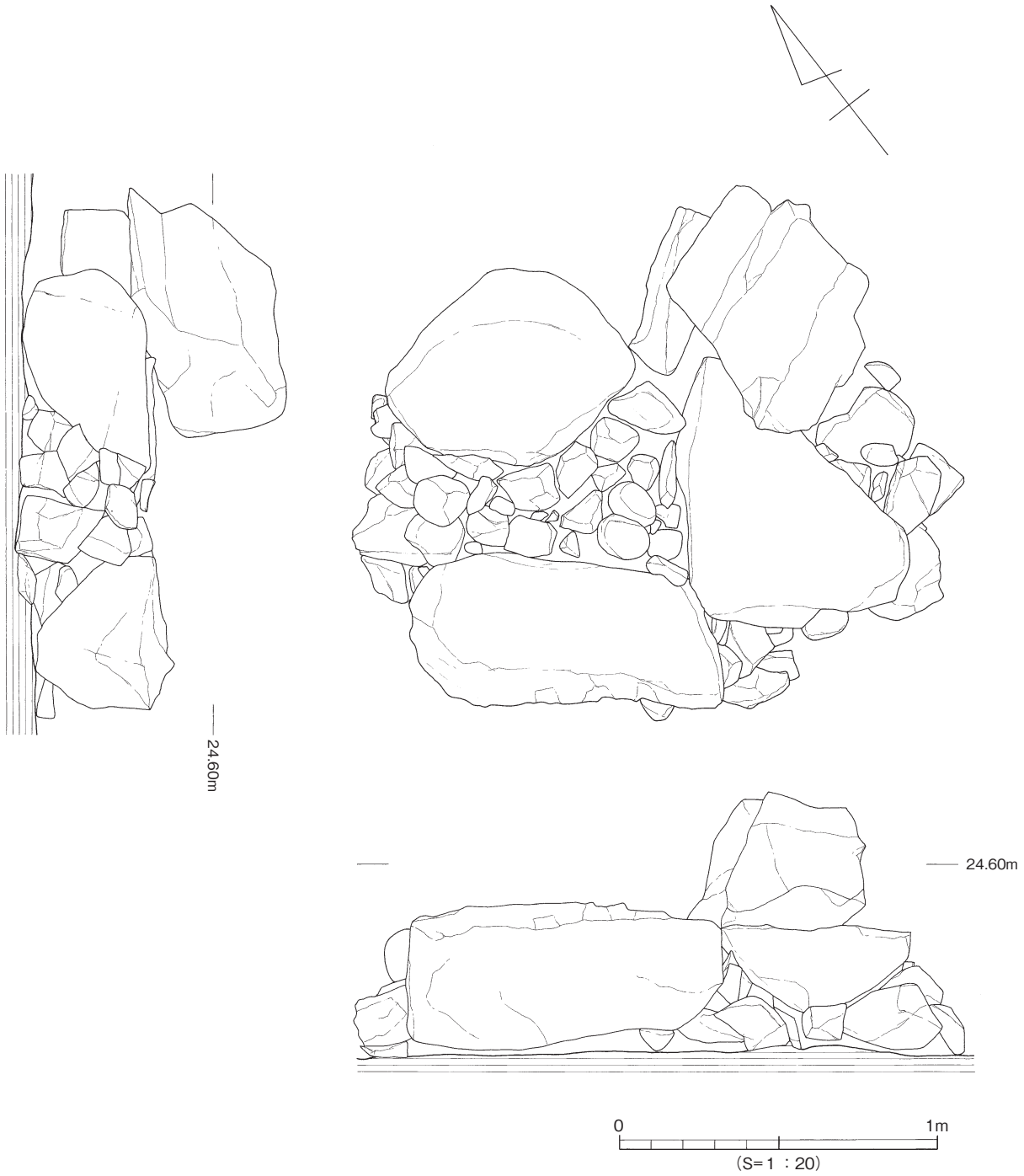
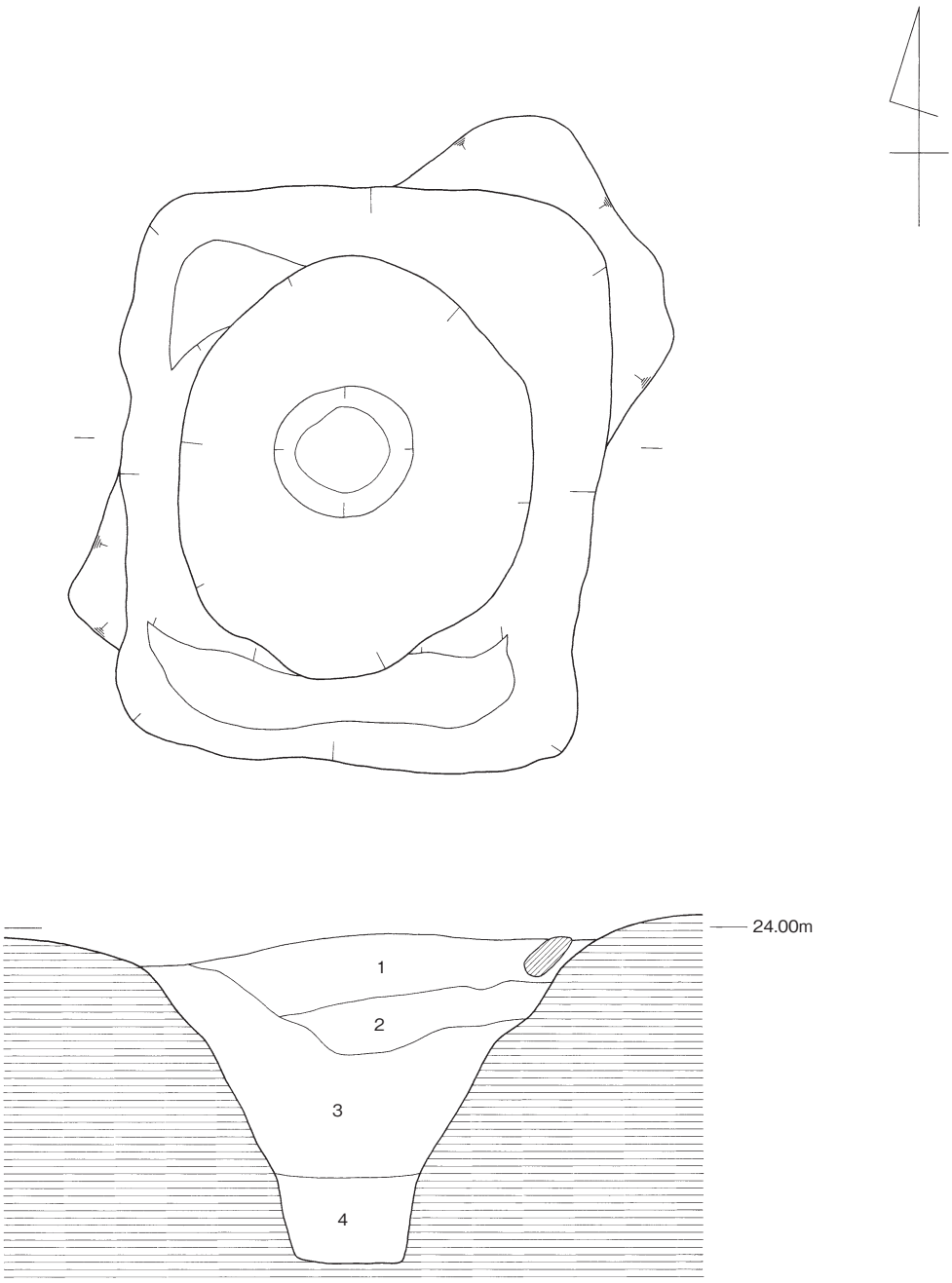


図116　SG1石組み遺構２



1．地山崩壊礫（砂岩）
2．地山礫がとりわけ大きい（人頭大）層
3．黒灰色汚泥
4．黒灰色汚泥＋砂（地山風化砂）

0　1m
（S=1：30）

図117　SG1魚溜 SK52

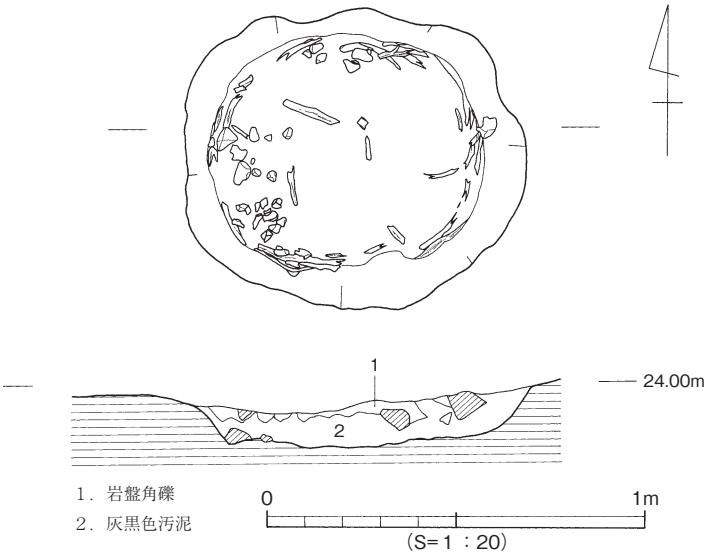


図118　SG1土坑 SK53

ンは2.3×2.0mの長方形で、0.5m程度下がったところで1.8×1.5mの楕円形平面に変わる。深さは1.4m、擂鉢状を呈する素掘りの竪穴である。

土　坑

ＳＫ52の西方で東西に一直線に並ぶように、３基の施設が検出された。それぞれ形態は異なるが、蓮や睡蓮などの水生植物の植栽に用いられた施設と考えられる。

ＳＫ53（図118）

0.9×0.8mの楕円形プランで、深さ

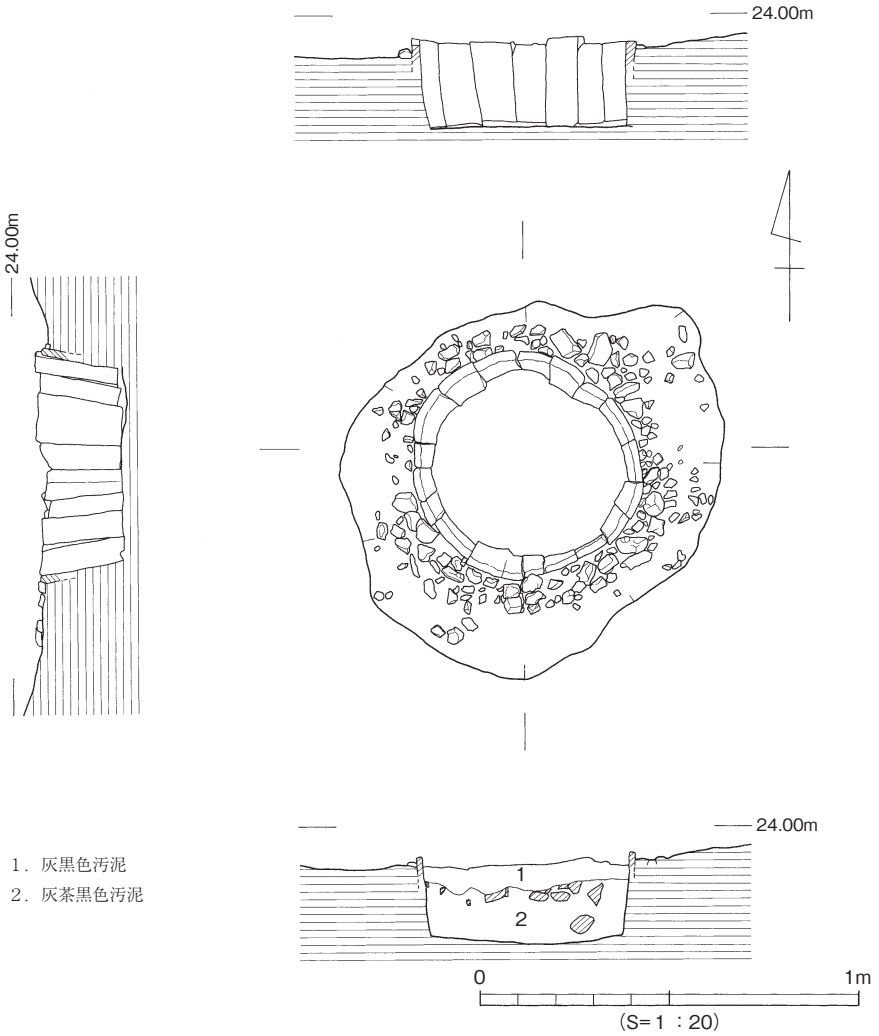


図119　SG1土坑 SK54

0.1mの非常に浅い竪穴である。単子葉植物の葉と思われる植物遺体が坑底に貼りついていたが、状態が悪く採り上げにはいたらなかった。

ＳＫ54（図119）

直径0.5m、0.23mの桶の底を抜いたものを直径１mの掘り方の中に据え、裏込めに小礫や瓦片を混ぜた黒色シルトを入れて固めている。桶の外面には竹製のタガが２段にわたって残っていた。

ＳＫ55（図120）

直径0.5m、深さ0.20mの円形に近い平面プランの竪穴に陶器の甕の上半を埋めていたものと考えられ、その一部が壁面に貼りついた状況で検出された。破片の一部は竪穴の中に残り、また一部は、直近の北護岸裏の攪乱土から出土している。これはおそらく、池底を浚えた際にヘドロとともに打ち上げられたものであろう。

ＳＫ55出土遺物（図121－357）

肥前系の陶器甕である。口縁部は内外方、特に内側に拡張され、上端に水平な面を持つ。口径は内法で30.0㎝となっている。胴部最大径41.2㎝、残存高26.2㎝、内外面に鉄釉がかけられるが、口縁上端面の内寄り２/５程度の部分だけ釉剝ぎされている。胴張り部より上位から肩部にかけての外面には６本の沈線が施され、肩部には円形の浮文が貼り付けられているが、３方向に復元できる。外面の

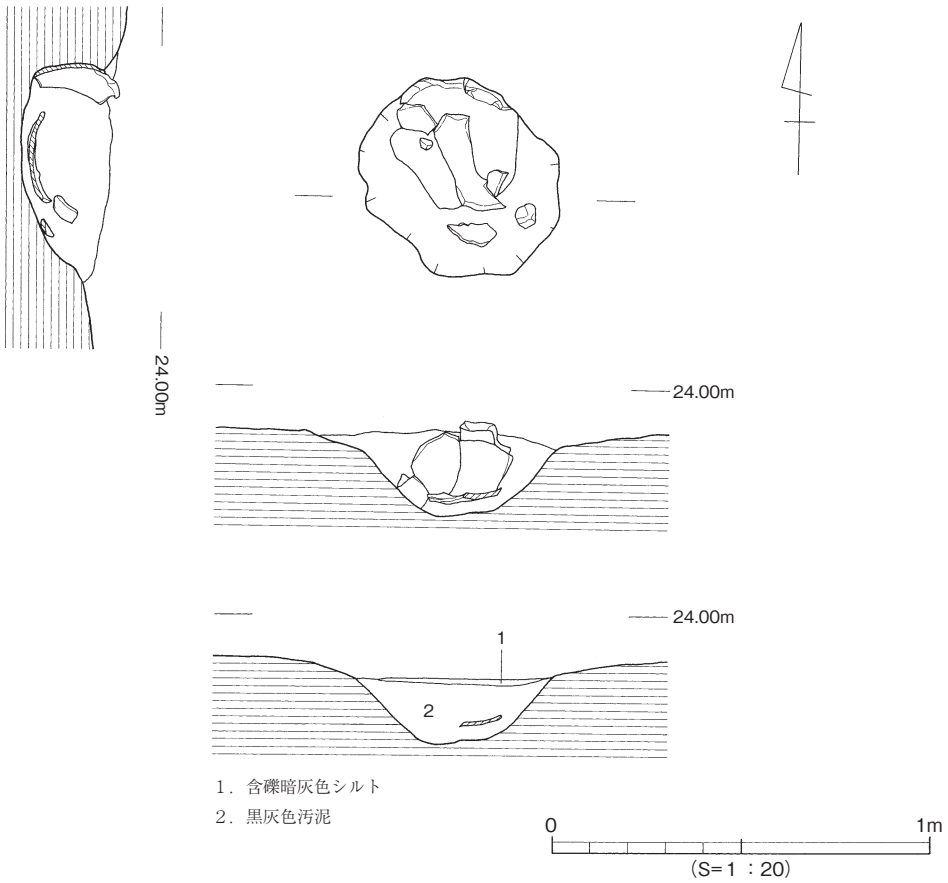


図120　SG1土坑 SK55

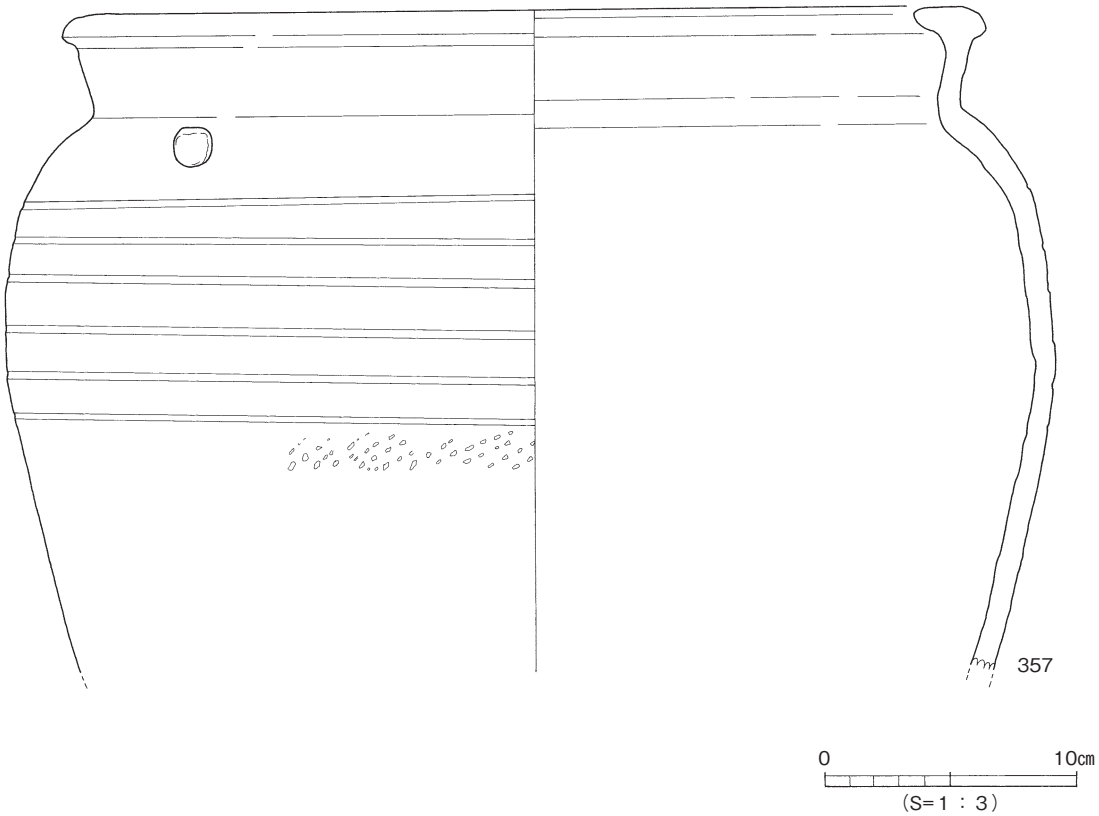


図121　SK55出土遺物

沈線より下位の部分、内面の頸部以下には格子目の叩き痕がある。17世紀後半。

水　路

ＳＤ１（図122）

ＳＧ１東端部の地山護岸に接続して、排水路とした石組み水路がＳＤ１である。埋め立て改修の際に新しく設けられた南護岸２とＳＤ１西壁とが連結する恰好になっている。最終的には、この連結部分からやや池本体に入った部分をコンクリートの堰で塞ぎ、さらにこの堰の両側に、小石を詰め込んで、排水の用を廃している。この水路の特徴は、東西両壁の組み方が異なっているところにある。東西ともに、基本的には一段の石組みで構成されるが、西側が転石を安定よく平積みし、天を揃えているのに対し、東の壁は花崗岩や砂岩の割石を立て内づらを揃えて列べ、内づらの面がやや外方に傾斜するように傾けており、上面は鋸歯状に凹凸があって不揃いである。このことから、東壁の石積みは、本来石垣の根石であって、このＳＤ１はその石垣の裾に転石を列べて水路としたものであると考えられる。東は本来石垣とはいっても、その石の大きさ、据え方からみてかなり低い簡便なものであったと推測される。水路の底レベルは24.4～24.5mで南東へ下っている。本来の池底レベルが24.0～24.1m程度、改修後の池底レベルが24.3m程度であるので、改修後のある段階までの排水を担っていたものであろう。

ＳＤ１出土遺物（図123）

358は合わせ型づくりによる素焼きの土人形で鯛である。波文様を入れた台上にシャチホコ状に尾

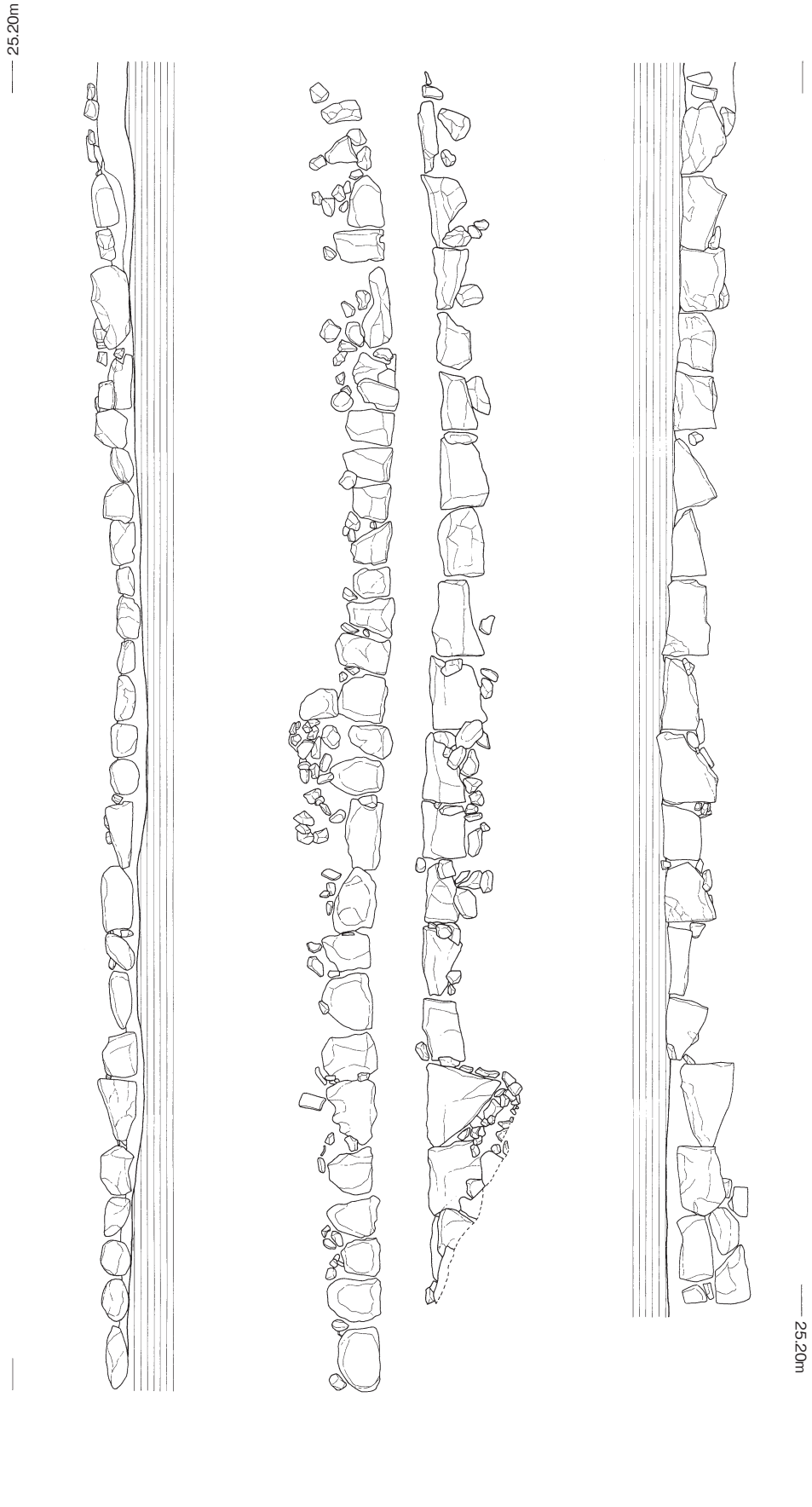


図122　水路 SD1

を上げて載っている。359は肥前系白磁の鉢、口縁部内面から口端面にかけて釉剝ぎし、アルミナを塗布している。18世紀末～19世紀。360は８世紀代の須恵器坏。また、361の寛永通宝が１枚出土している。

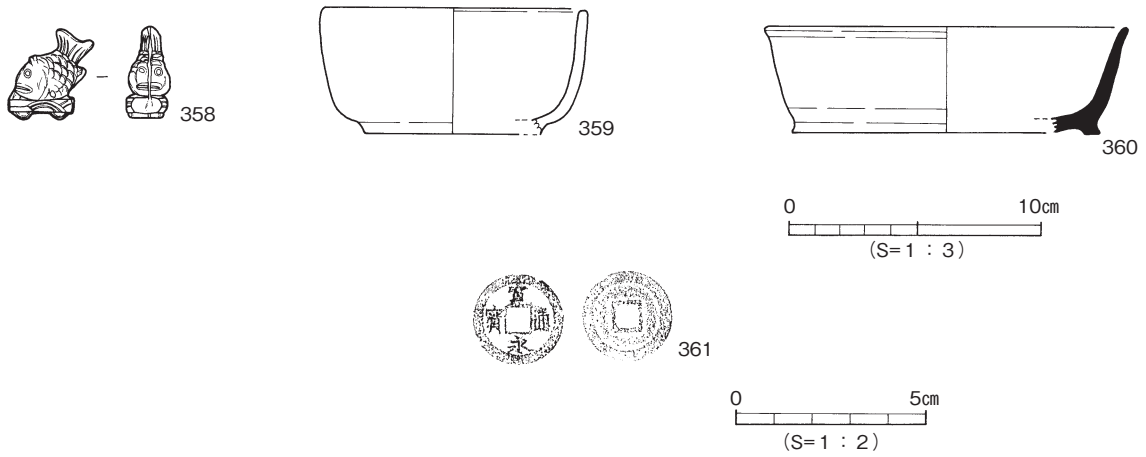


図123　SD1出土遺物

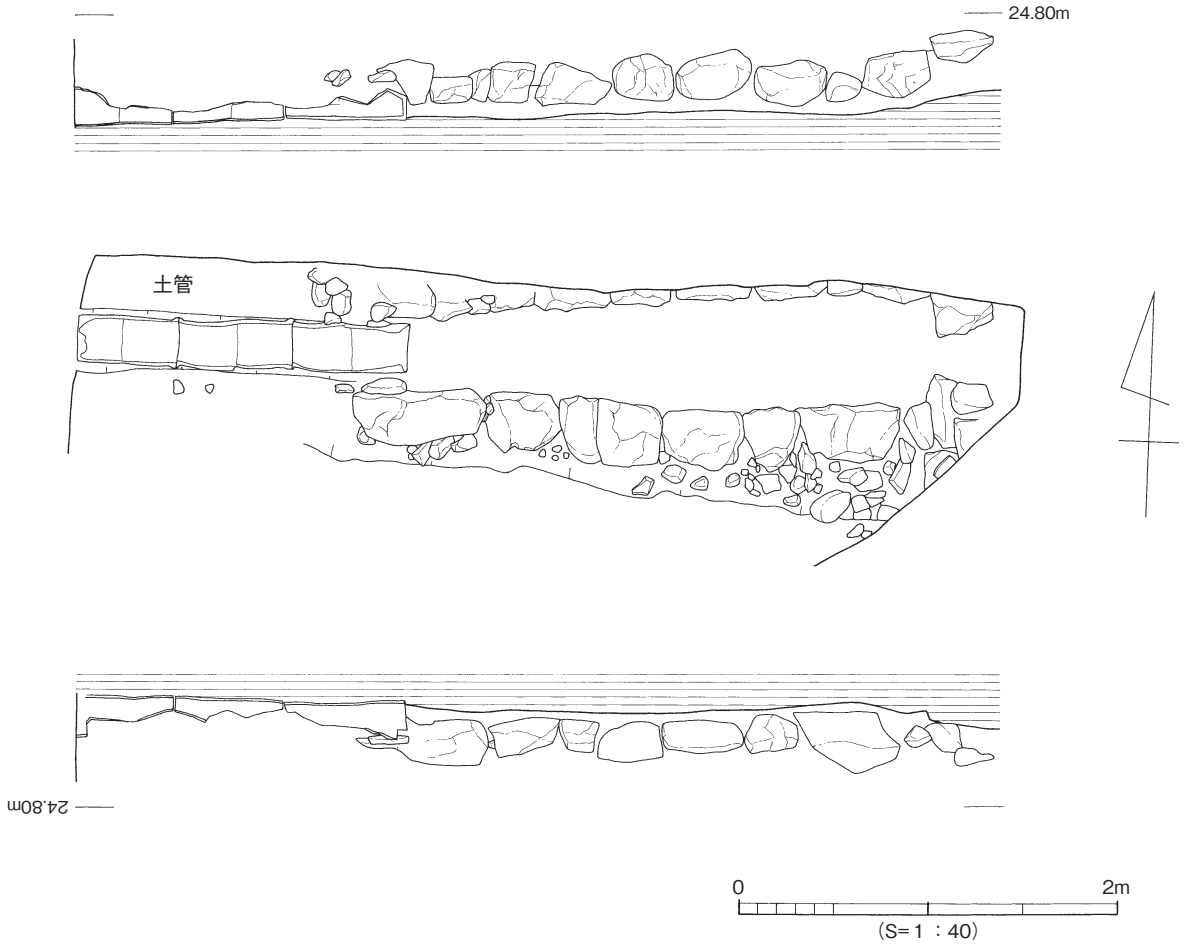


図124　水路 SD2

ＳＤ２（図124）

この池のメインの排水施設として築造当初から存在していた水路である。このことは、当初の池底レベルが西下がりに深くなっていることからもわかる。しかしながら、24.0～24.1ｍの池底に対して、24.2～24.1ｍの西下がりのレベルであるので、築造当初から、この池は底水一杯までを抜く機能を有した水路を持たない池であったといえる。この水路も石組みのもので、池本体から西へ約６ｍ延びて、土管に接続している。石組み水路内に土管を据えた形跡がないこと、水路がさらに西に延びていた痕跡がないことから考えると、この石組み水路と土管による排水は築造当初からこの形態であった可能性が高い。現況では、池本体との接続部分にはコンクリート製の水門施設があり、南西方向へ排水をとる施設となっている。この部分には、そのほかにも２基の暗渠による排水取り入れ口があり、近代以降も数度の改修が行われていることがわかる。

ＳＤ２出土遺物（図125～127）

362、363は京信楽系の陶器灯明皿で、363がひとまわり大きい。どちらも１/３程度の遺存で、363の返りには刳り込みが一箇所確認できる。いずれも内面のみに灰釉がかけられており、362では緑灰色、363では灰褐色の色調を呈している。18世紀後半～19世紀初頭。364は肥前系の白磁鉢、ボウル状の体部から短い口縁部が短く折り返されている。灰色の胎土で、発色も明灰色である。365、366はどちらも明治以降の染付である。皿365は口縁部を明るい青で帯状に染め、見込には「圓」の銘款や帆掛け船・波をはじめとする海浜風景を型押しし、その後濃淡の濃みを載せている。口唇部には口銹を施す。裏文様は線描の唐草か。高台脇には三重の圏線が巡る。366の蓋外面には、雲竜かとも思える不詳の染付が描かれている。367は肥前系の磁器染付猪口、器高3.5㎝、口径6.2㎝、高台径2.0㎝を測る。外面高台に２条、腰部に４条の圏線、口縁部にコンニャク印判による楓の連続文を施している。楓文様は３個を薄く、続く４個目を濃くと、濃淡でアクセントをつける。胎土は僅かに灰色で、呉須は緑がかった発色である。18世紀。

368、369は土師器皿底部、回転糸切りの後撫でられている。369は焼成前に穿孔されている。370は土師器焙烙口縁部小片。371、372はともに須恵器、371は壺もしくは横瓮の口頸部、372は坏身口縁部小片である。

373は前後で合わせる型づくりの素焼き土人形の童子。薄手のつくりで、内外面に雲母の付着が顕著である。374も土人形、素焼きの上に白と茶で彩色している。白の帽子、上半身に白地に茶の水玉の衣装、阿蘭陀人を表現したものと思われる。

375～379は瓦で、うち379は細縄叩きの古い瓦である。375、376は軒桟瓦で、肉厚の陽刻文を持つ。中心飾りは宝珠、瓦当面上部外区に「和半」の刻印が375で確認できる。両者ともにキラコの付着がある。377は半菊文の軒平瓦、中心飾りは中窪みの陽刻で、唐草や子葉は細い隆起線で表現されている。378も軒平瓦の小片、波状隆起線文様のものである。

380、381はＳＤ２の西に接続する土管で、遺存状況の良好な２本を図化した。全長61.5～62.0㎝、直径22.5㎝、雌側の継ぎ手で径25.5㎝を測る。長さ30㎝、幅35㎝、厚さ1.2㎝程度の粘土板を鉄線で切り出し、４枚を使って１本の管をつくり出している。粘土板の切り取りや基本的な成形技法は瓦と同様であるが、瓦質には焼成されず、土師質の焼きである。

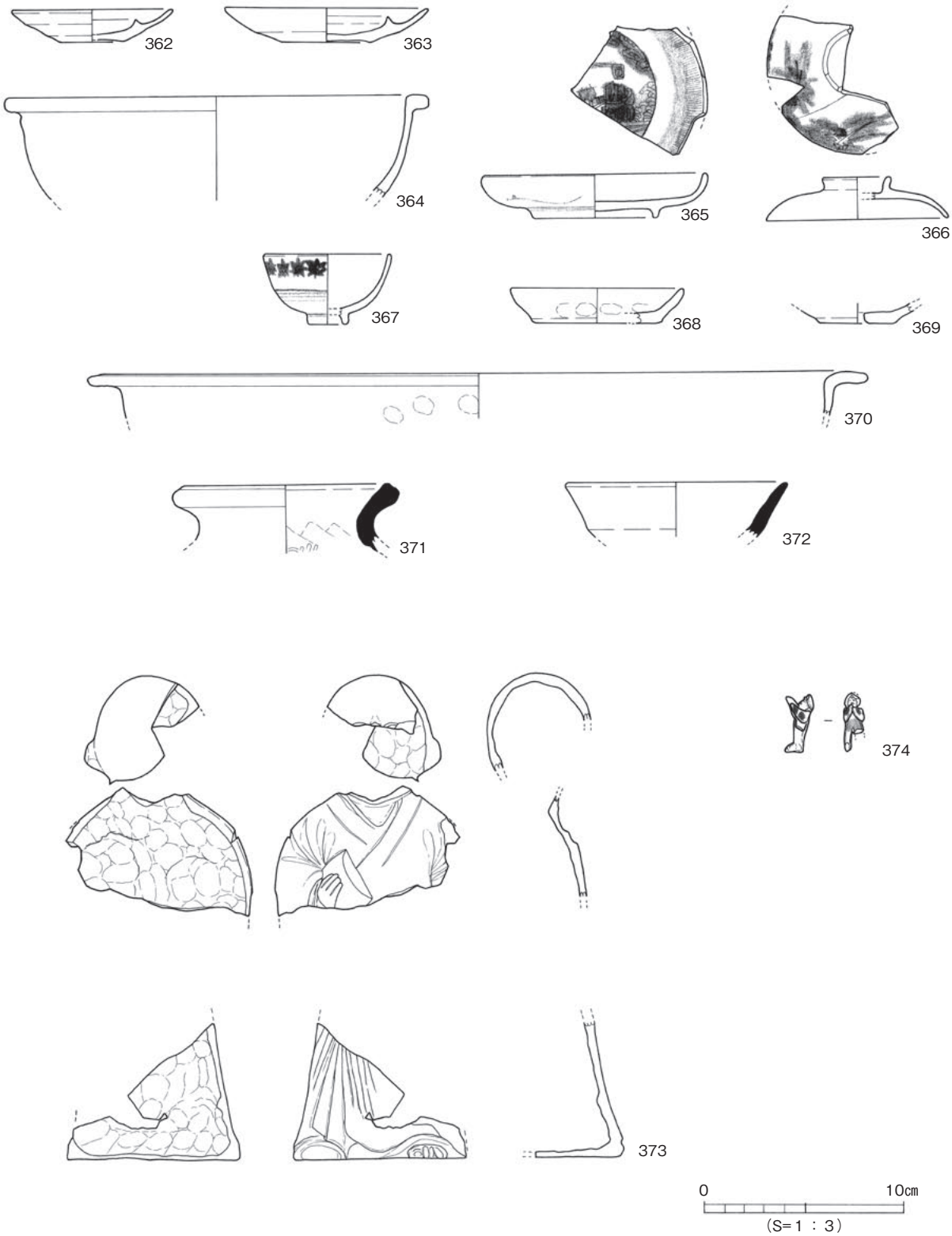


図125　SD2出土遺物(1)

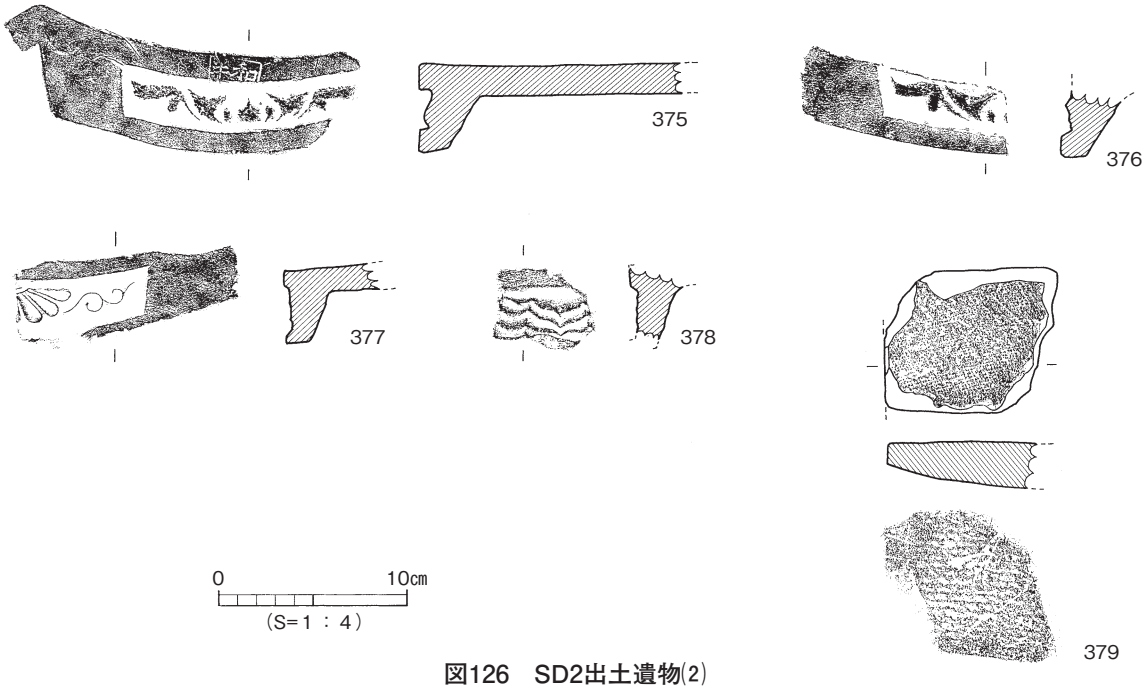


図126　SD2出土遺物(2)

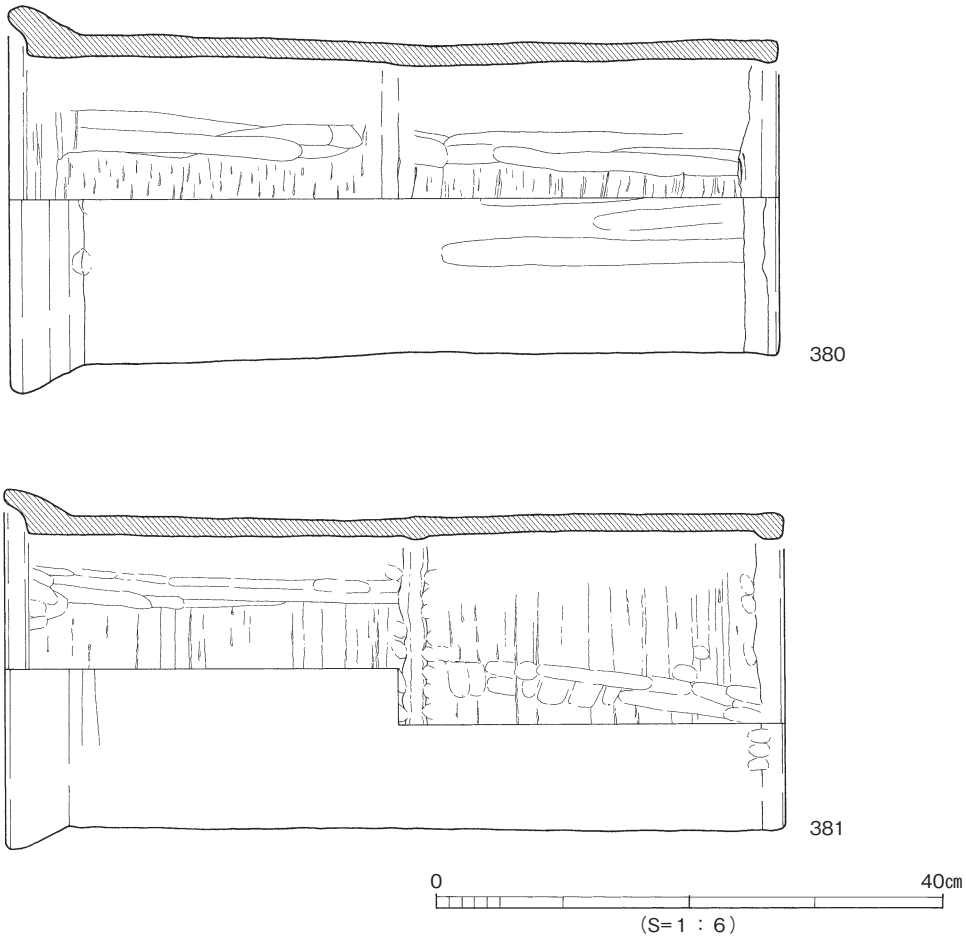


図127　SD2出土遺物(3)

ＳＧ１周辺の採集遺物（図128・129）

池の北護岸西端付近や、南護岸西部の改修部を中心に遺物が採集されているので、ここで扱っておく。

382、383は在地と考えられる擂鉢、382で器高7.6cm、口径18.6cm、底径8.6cmを測る。すわりのよい平底に直線的に開く体部、口端部は若干肥厚させて丸く仕上げる。外底面を除くすべての部位に鉄釉をかけている。383は片口近くの口縁部片で、382と同様の口端部形状をなすが、口縁部外面に２条の浅い凹線を施すところが異なる。愛媛県美術館用地で調査された武家屋敷の土坑に出土例があり、19世紀代の遺物と判断されている。384～386は堺産の擂鉢、口縁部384は比較的幅狭の口縁帯に２条の凹線を持つ。内面の段は凹線に近いところまで退化している。19世紀初頭のものか。385では384にくらべると口縁部内面や体部との境の段はしっかりしている。18世紀後半。386は平底の底部で、内面見込の擂目は放射状に施されるが交叉することはない。見込の外周部と外底面の外周部に焼き台の痕跡が明瞭に残っている。18世紀中頃。387は同じく堺産の鉢の底部から下半部である。平底の底部は径13.0cmを測る。胎土には長石粒を比較的多く含み、赤褐色に焼成されている。体部内面には粗い回転ナデ痕が残る。底面中央をややはずれた位置に、内外面からの敲打によって穿孔を行い、植木鉢に転用したものと考えられる。388は陶器鉢で、口縁部内外面と体部外面に鉄釉がかけられ、さらに体部には金色に近く発色する灰釉を流しかける。上野・高取系の製品であるが、在地西岡の製品の可能性もある。

389は肥前系外青磁の染付碗で、二重圏線で区画された見込には意味不明のコンニャク印判文、高台内面には二重方形枠内に渦福とおぼしき銘款があるが、これも崩れてしまって判読不能なものである。波佐見、19世紀初頭。390は砥部磁器染付碗、外面口縁部に横帯と多重圏線を施し、体部に草花文を描く。口縁部内面には二重圏線が巡る。幕末。391は肥前系磁器染付鉢で、外面に花卉文を描いている。392は京信楽系の陶器腰折れ碗、外面に鉄絵で草文を描き灰釉をかけている。393は瀬戸美濃系の灰釉輪花の皿で、器高2.6cm、口径12.8cm、高台径6.2cmを測る。高台は露胎。18世紀中頃のものか。

394は瓦質の植木鉢と思われるもの、外面口縁部をやや下った位置に低い隆起帯が巡り、部分的に刺突による斜線文を施している。395は土師器甕口縁部片、396は瀬戸内系の焙烙片である。

397は軒丸瓦、外区の幅が若干広い。巴は時計回りで鈎状に屈曲した頭部に細く長い尾部を持つ。尾部は隣接する巴に接続している。珠点は19個で、瓦当面にキラコの付着がある。398、399は軒瓦で、399は桟瓦、398は平瓦と桟瓦の区別がつかない。両者ともに細い隆起線で唐草が表現され、398は上向きに、399は下向きに反転して終わっている。

８）攪乱出土および採集遺物

ａ．攪乱１出土遺物（図130）

400は京信楽系の碗、器高5.6cm、口径9.3cm、高台径3.4cmを測る。明灰色の胎土に灰釉をかけ、淡緑灰色に発色している。高台は露胎である。401は産地不詳の陶器猪口、器高3.3cm、口径5.1cm、底径3.0cmで、轆轤成形後に型打ち成形によって外面を六角形に仕上げている。口縁部外面には幾何のスタンプ文が巡る。底部は蛇の目状、体部外面に暗灰色の灰釉をかけ、内面には透明釉がかかる。402は肥前系青磁皿、口径13.3cmを測る。内面は見込を蛇の目釉剝ぎされ、確認できる範囲の高台外面は施釉されている。釉は明るく淡い緑に発色している。17世紀後半。

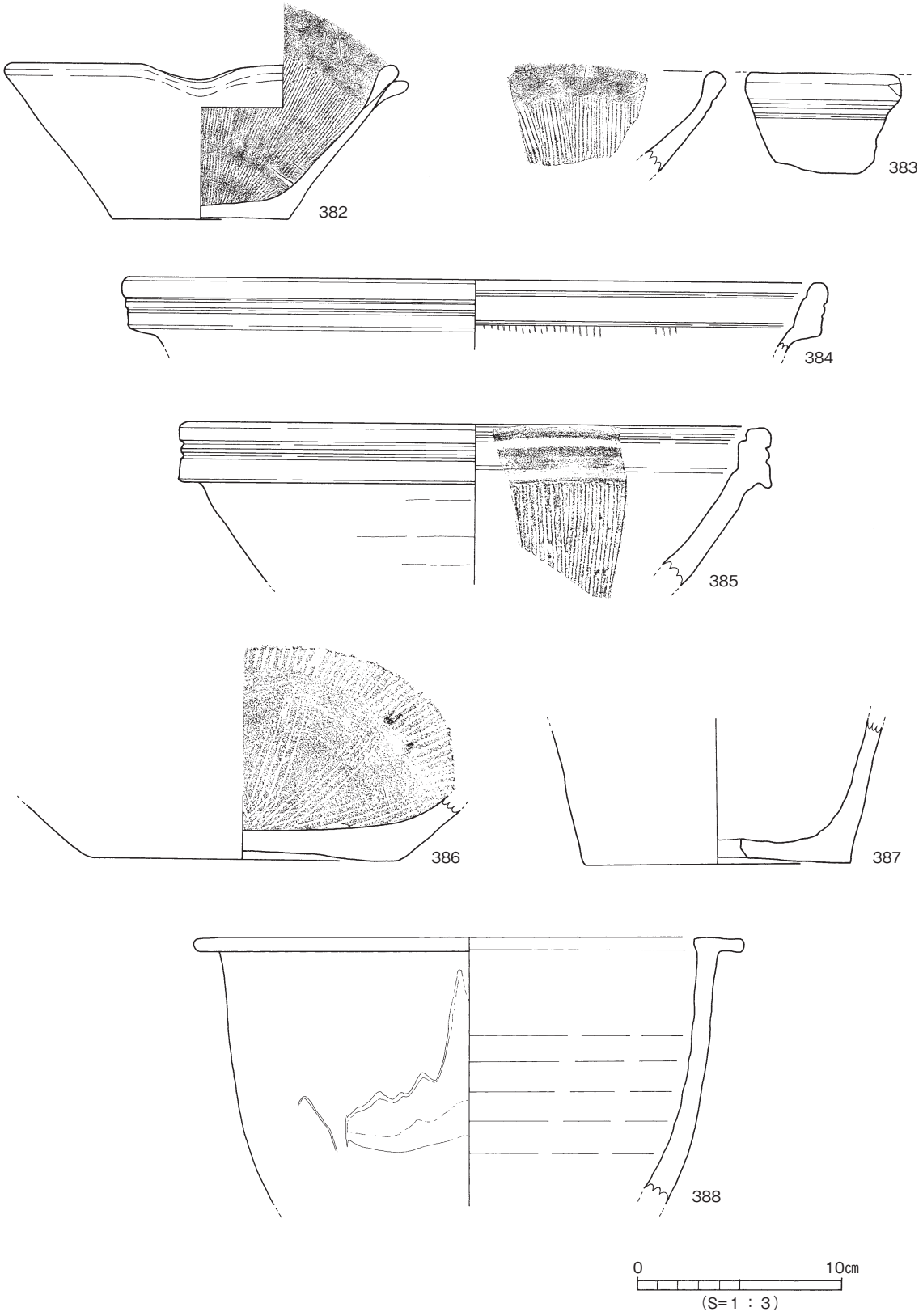


図128　SG1周辺採集遺物(1)

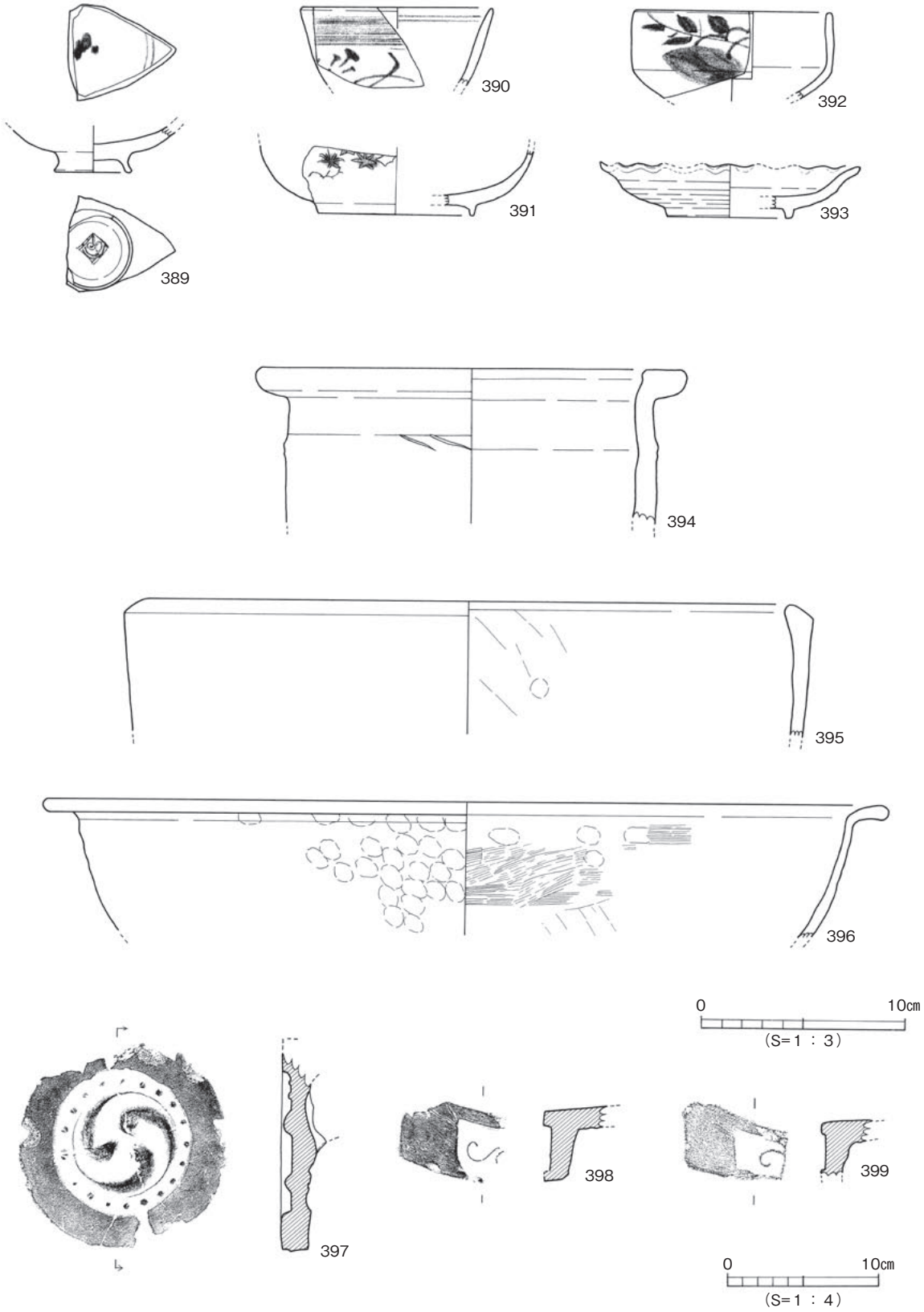


図129　SG1周辺採集遺物(2)

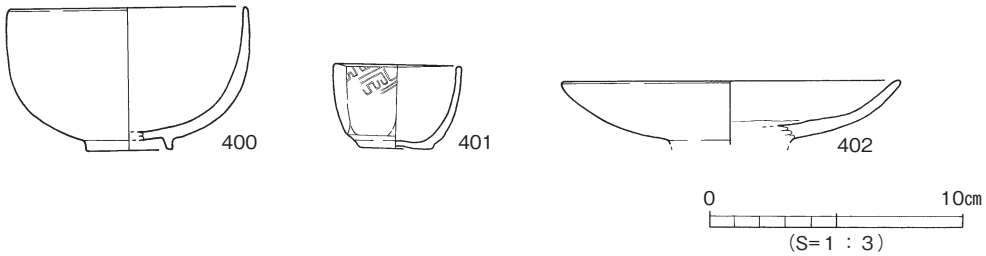


図130　攪乱１出土遺物

b．調査区西部採集遺物（図131～135）

重機による表土剝ぎの段階で採集された遺物のうち主に調査区西部で採集されたものである。403は萩の陶器端反碗で器高4.9cm、口径8.6cm、高台径3.4cmである。明灰色の胎土に貫入のある透明釉をかけている。高台は露胎である。19世紀初頭。404は京信楽系陶器の碗、淡黄色の胎土に透明釉をかけ、植物を上絵付けしている。葉の部分に載せられた赤茶系の絵の具だけが痕跡として確認できる。高台は露胎である。405は肥前系の京焼風陶器碗であるが、高台を除く部分にかけられた釉はほとんどガラス質がとんでいる。器高6.0cm、口径9.4cm、高台径5.4cmを測る。高台内には「小」の一部かと思われる刻印が僅かに残っている。406は肥前系陶器刷毛目の碗である。外面は波状、内面には横縞の刷毛目文様を施す。18世紀。

407、408は肥前系陶胎染付碗、波佐見の製品である。408で器高7.1cm、口径10.3cm、高台径5.2cmを測る。408では外面口縁部に２条の圏線、腰部に１条の圏線を引き、その間の体部に松文を描いている。高台にも２条の圏線が巡り、畳付は釉剝ぎする。407でも口縁部に２条の圏線を施す。体部に描かれているのは山水か。両者ともに18世紀。409～416は肥前系の磁器染付碗である。409、410は比較的器高の低いもので、409で器高4.7cm、口径10.0cm、高台径3.5cmである。高台や内面には施文を行わず、外面に樹木や帆掛け船、島等の海浜風景を描いている。18世紀前半。410は小片で口径には若干の不安がある。これも外面のみの施文で、宝文を描いているものと思われる。411、412は端反の器型になるもの、411の文様は不詳。412には外面に素描きで葉などの文様を、内面には口縁部にやはり素描きの帯文様を施す。19世紀前半。碗413は口縁部と腰部の圏線間に菊唐草文を太めの線と濃みで描く。17世紀末～18世紀前半。414、415は碗底部、両者ともに高台に２条、高台脇もしくは腰部に１条の圏線を持つ。414の主文様は蔓草であろうか。415の高台内には１条の圏線を引き「大明年製」の銘款を施している。18世紀。416の碗は腰が張り、口縁はおそらく端反になるものと思われる。外面高台に３条の圏線、腰部の１条の圏線とこれに垂直な２条の縦縞で体部を区画し、「寿」字を散らす区画とそれ以外の区画とに分ける。内面見込を２条の圏線で囲み、環状松竹梅文を施す。高台内には「製」の一字と、「・」をはさんでこれに並列した判読不能な文字の一部が確認できる。18世紀中頃。

417、418は瀬戸美濃系の磁器染付碗である。417は器高5.1cm、口径10.6cm、高台径4.2cmを測る。口縁部の横帯、腰部の二重圏線の間を弧状の濃みで区画し、区画された窓に松竹梅文様を描く。全体的に濃みを多用した施文であるが、最も濃い呉須を最後に用いるので、区画を形成する濃み文様は圏線、帯線や主文様のあと、一部これらを覆って描かれている。高台には二重圏線、高台脇には斜めの井桁

図131　調査区西部採集遺物(1)

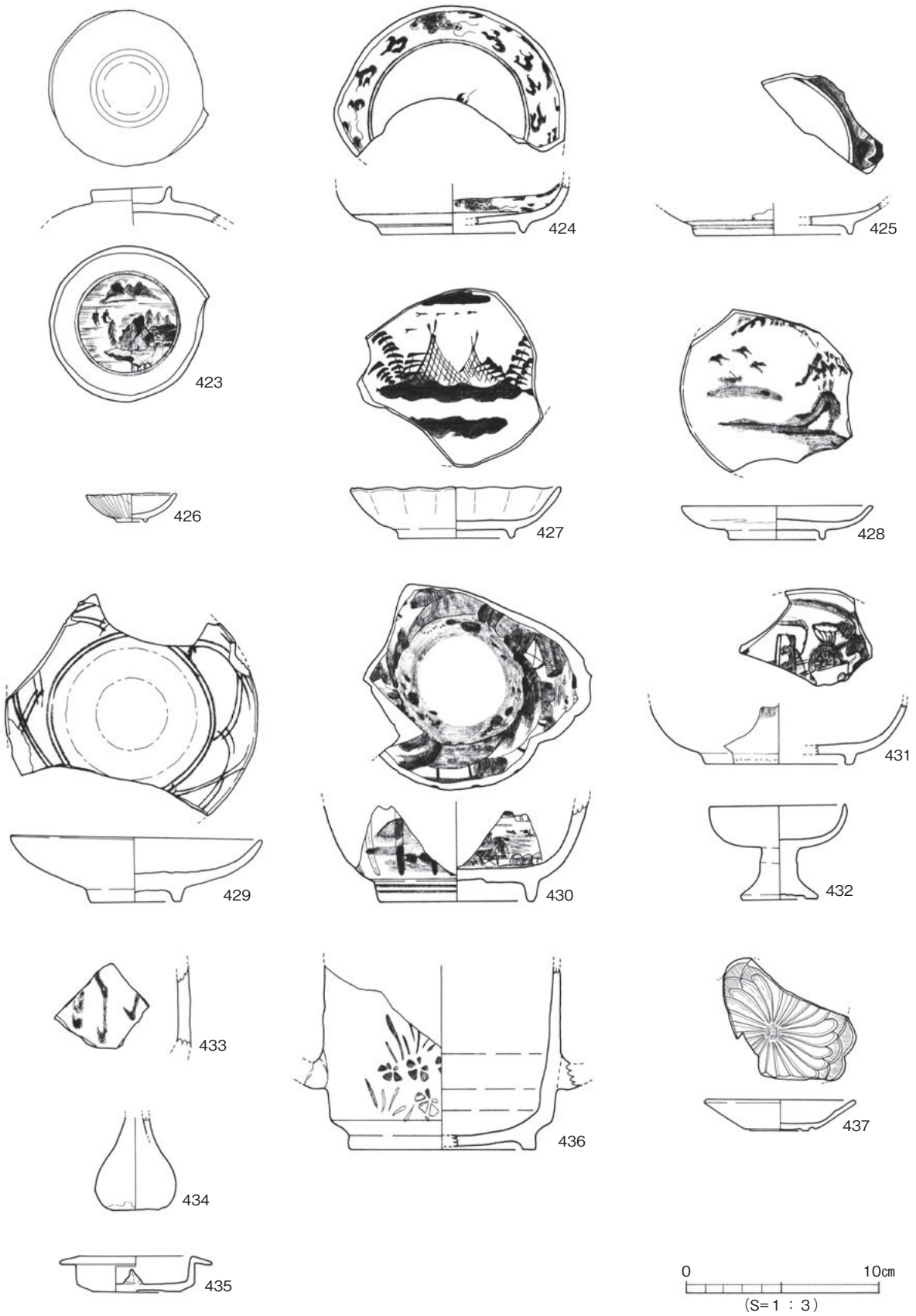


図132　調査区西部採集遺物(2)

と楕円文が交互に描かれる。内面口縁部には、横帯と圏線が、また見込を二重圏線で区画して、中央に岩波文が施されている。19世紀前半。底部418には見込文様として「寿」字が描かれている。

419～422は肥前系磁器の小坏・猪口である。419は色絵、内面に濃茶と金を用いた菊文を描き、赤で方形枠の篆書による「窯」という銘款を入れている。器壁はごく薄く成形される。19世紀の平戸の製品か。420、422は染付、420は外面の腰部に１条の圏線、体部に２棟の重なった家屋が確認できるので、主文様は家屋山水文と考えられる。422は碁笥底の底部から体部・口縁部が直立して立ち上がるもので、外面に草と遠方の鳥を描く。421は白磁端反の猪口、明るい灰色の発色になっている。

423は肥前系色絵の蓋である。外面の鈕や天井部は無文であるが、体部に赤の帯線が一部確認できる。天井部内面には染付で二重圏線区画内に網干海浜文を描いている。18世紀。424～429は肥前系の磁器染付皿である。424は内面の立ち上がりから口縁部に雲龍文を描く。見込を二重圏線で囲み、中央にも雲文の一部が確認できる。外面には腰部に圏線、高台外面には二重圏線、内面にも圏線が巡っている。17世紀後半。425は底部の小片であるが、高台を含め外面の圏線施文は424と同様である。内面の見込を二重圏線で囲む点も同様で、その外側には墨弾きによる施文があるが詳細は不明である。426は型押し成形による白磁菊花紅皿で、器高1.4㎝、口径4.6㎝、高台径1.4㎝のものである。18世紀から19世紀前半。427は器高2.6㎝、口径10.6㎝、高台径5.8㎝の輪花の皿で、内面に網干海浜風景文を描いている。口唇部には口銹が施されている。19世紀前半～中頃。428は器高1.7㎝、口径9.7㎝、高台径4.7㎝を測る。全体的にやや灰色がかった色調で、内面には海浜風景文を描く。裏文様は流水文か。429は内面に二重斜格子文が施される染付皿で、器高3.5㎝、口径12.7㎝、高台径4.6㎝を測る。二重圏線で囲まれた見込は蛇の目釉剝ぎされ、アルミナが塗布されている。18世紀前半、波佐見。430、431は肥前系磁器染付鉢である。430の高台は蛇の目凹形で、径7.8㎝を測る。高台外面には２条、高台脇に１条の圏線が巡る。体部には型打成形による縦方向の凹線が等間隔に施されるが、復元すると17方向となる。端反の器型で口縁部は輪花の形状をなすものと思われる。内外面の文様ははっきりしないが、山水文であろうか。19世紀。431の内面には流水と水車と考えられる模様が描かれている。高台外面には２条の圏線、畳付および高台内は無釉で、畳付には砂粒の付着がある。17世紀。432は肥前系白磁の仏飯器、器高4.8㎝で、うち脚高2.6㎝、口径6.9㎝、脚裾径3.9㎝になるものである。器高のわりに坏部が浅く口径が広い器型である。脚部には竹節状の凸部がある。脚底部は高台状に浅く刳り込まれている。18世紀。

433～452は陶器である。433は志野の底部付近の破片である。四方入隅の向付と思われる。434は京信楽系の小壺。回転糸切りによる平底の底部には施釉されていない。435も京信楽系の蓋で、捻り円錐形状の鈕が特徴的なものである。436は瀬戸美濃系の汁注、把手部分しか出土していないので、反転実測してあるが、実際には把手の反対方向には注ぎ口が立ち上がるものである。高台と高台脇には施釉されない。鉄釉による摺絵で撫子文を描き、内外面に灰釉を施す。19世紀前半～中頃。437は備前、型打ち成形の菊花皿である。438は在地と思われる鍋で、外底部を除いたすべての部位に鉄釉がかけられている。439は産地不詳の土瓶底部片で、内外面ともに施釉されていない。440、441は備前焼、440は徳利または壺の底部。外面には底面にいたるまで塗り土が施されている。441はサヤ形鉢の底部片で、外底面に「田」の字状の刻印がある。19世紀。442～447は焼締陶器の灯明皿、442、443、446、447は赤褐色の焼きで備前と思われるもの、444、445は暗灰色に焼成されたものである。返りを持たない442～444の口唇部には煤の付着がある。448はままごと道具、釜蓋である。外面のみに鉄釉

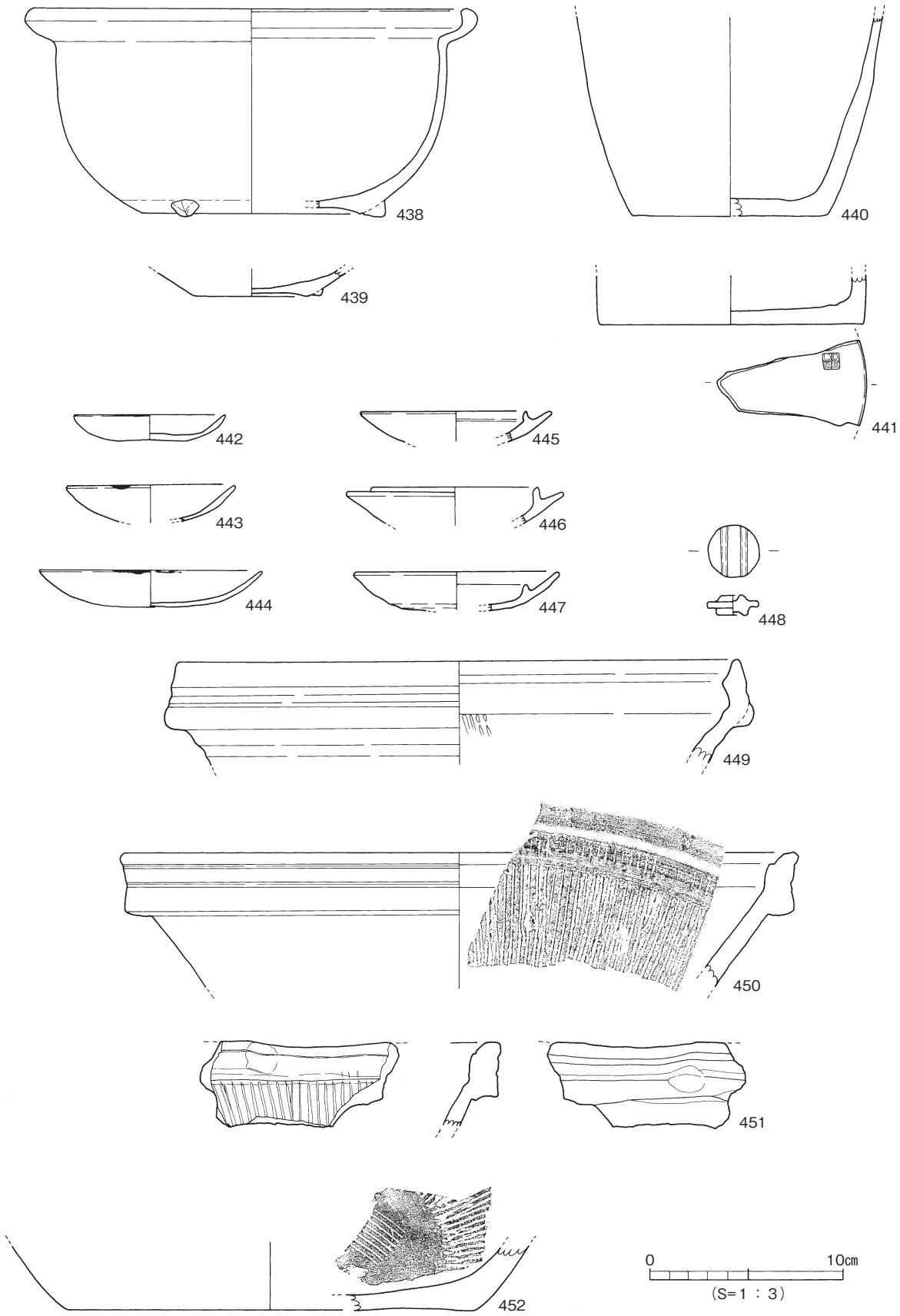


図133　調査区西部採集遺物(3)

が施されている。擂鉢449～452のうち、449、450は備前である。449の外面口縁帯には２条の凹線、内面には突帯が１条巡る。左上がり斜め方向の擂目の上端が僅かに確認できる。16世紀末～17世紀前半。450も口縁帯に２条の凹線を持つ。内面の突帯は段状になっている。比較的間隔のあいた深い擂

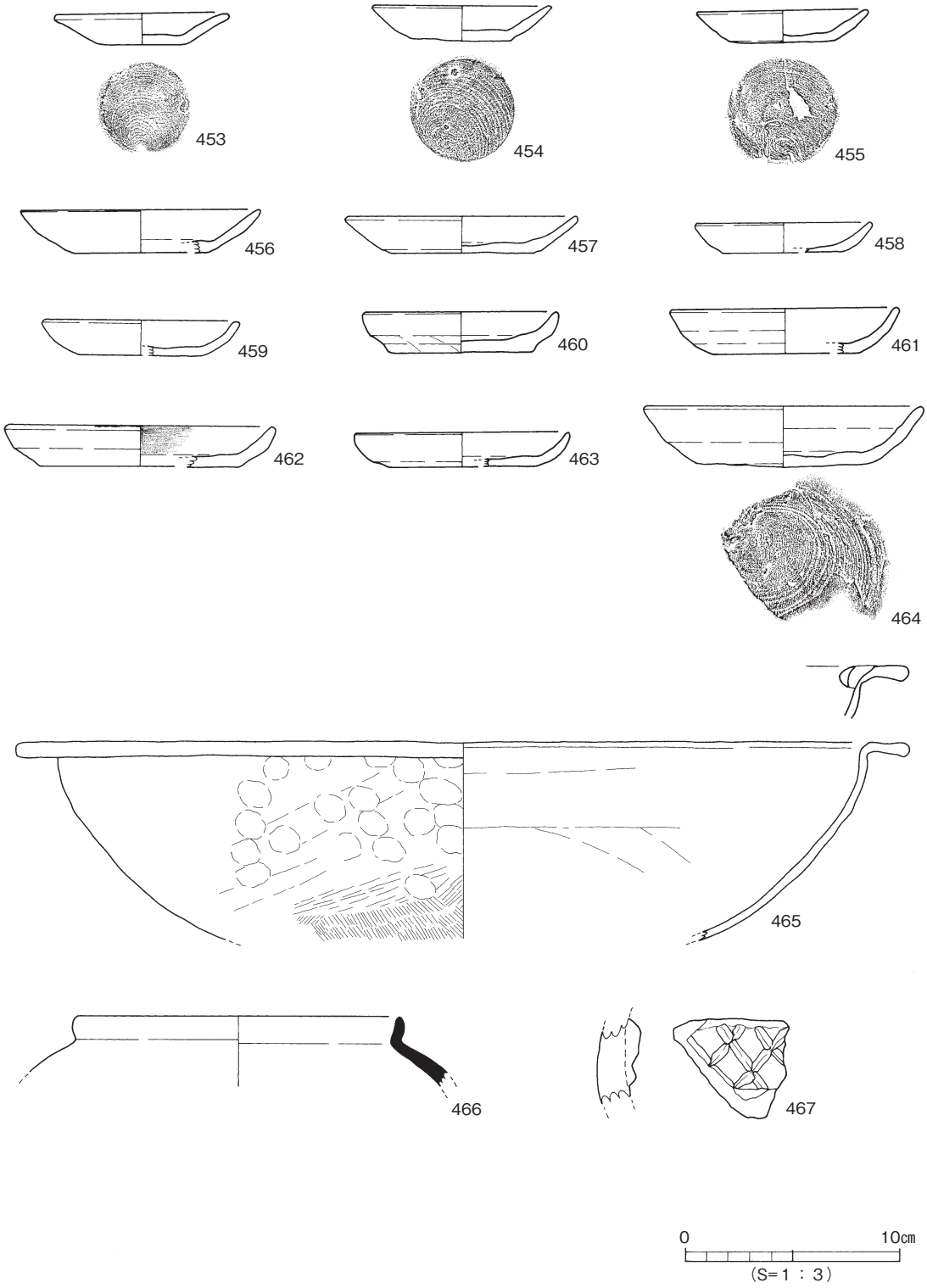


図134　調査区西部採集遺物(4)

目が詰まって施され、口縁部突帯にまで及んでいる。軽く撫でているが撫で消すところまではいっていない。口縁部上端に重ね焼きの熔着痕がある。18世紀前半。451は堺と思われる注口部の片、口縁部内面の段は、ほとんど沈線のようになっている。452はやはり堺の平底底部片。見込の擂目が一部確認できるが、ウールマーク状になるものと思われる。これらは18世紀後半～19世紀前半の間におさまるものである。

453～464は土師器皿ですべて底部回転糸切り離しによるもの。これらのうち灯明皿としての使用痕があるものは462の１点のみである。460は器壁が厚く、そのぶん口縁部の立ち上がりも短い。他のものにくらべて遡るものと思われる。465は口径41.6cmを測る瀬戸内型の土師器焙烙である。ほぼ水平に延びる口縁と、２孔を有する内耳を相対する２個所に持つ。外面底部付近には刷毛目、以上には指頭圧痕が顕著に残る。466は須恵器有蓋短頸壺の口縁部片、467は弥生後期の壺頸部突帯片である。

468～471は軒平瓦もしくは軒桟瓦である。468､469は下向き三葉文を中心飾りとする同系のもので、中心飾り上端から細隆起線による唐草が二転する。469は瓦当面の荒れのためはっきりはしないが、中心飾りは下位の珠文とその上のＶ字型の二葉、さらにその両脇に小さな三角形の子葉を配し、合わせるとちょうど王冠のような形になるもので、この中心飾りから唐草が二転する。桟瓦471は、四つ剣菱の中心飾り下端から三転する唐草が延びるものである。

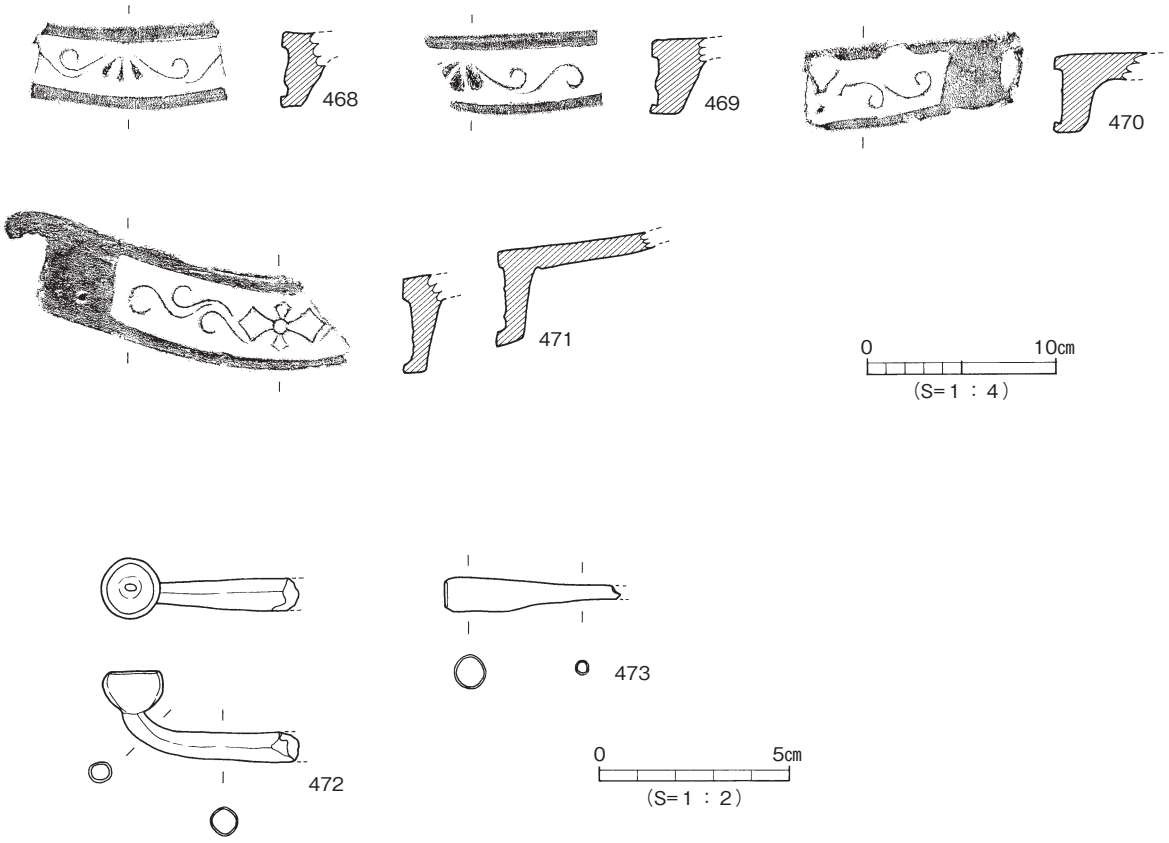


図135　調査区西部採集遺物(5)

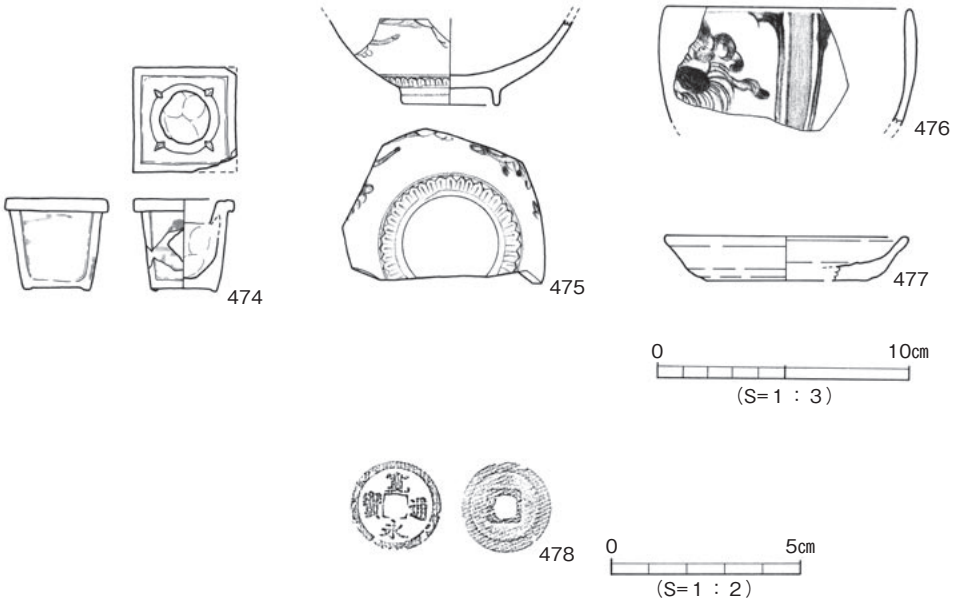


図136　調査区南部採集遺物

472、473は真鍮製の煙管、472は雁首部分で比較的大きな椀型の火皿に脂返しが補強帯を持たずに接続する。473は吸い口部分で、両者ともに18世紀後半頃のものと思われる。

c．調査区南部採集の遺物（図136）

474は陶器のままごと道具、焜炉である。緑や黒の絵の具が部分的に残っており、色絵付けされていたものである。475、476は肥前系の染付碗、内面は無文、外面の主文様は梅を描いたものか。高台外面に２条の圏線、高台脇には圏線と組み合わせた小さな蓮弁文が描かれている。476は外面に濃淡の濃みを用いた区画内に宝文が描かれる芙蓉手の碗である。19世紀。477は土師器皿、口縁部が外反する器型で、器壁は比較的厚い。底部の切り離し痕は撫で消されていて不明。中世に遡るものであろう。また、478の寛永通宝が１点採集されている。

d．調査区北東部採集の遺物（図137）

479、480は陶器碗、うち479は端反の口縁部片で萩の製品と思われる。淡緑黄色釉には貫入がある。480は肥前系の呉器手碗、明灰色の胎土に黄味がかった灰色の釉がかけられている。施釉は高台畳付を除くすべての部位に施される。17世紀後半～18世紀初頭。

481～483は肥前系の磁器である。481は染付の広東碗底部であるが、外面の文様は不詳、内面見込には１条の圏線が巡る。19世紀前半。482の皿の主文様も不詳である。裏文様は如意頭文崩れの唐草文である。18世紀。483は白磁の皿で、内面に型打ちによる菊花文を施されるものである。19世紀。

484は軒丸瓦である。器面の荒れが激しく、全体的に灰白色の色調にまで剝落している。瓦当面径12.9cmで、内区の直径9.6cmを測る。瓦当文様は反時計回りの三つ巴で、珠文は18個である。現況でみるかぎり、巴はやや細く、尾部は隣接の巴からは完全に離れ、外側の珠文に接する個所もみられる。丸瓦部の凹面には鉄線切りの痕跡がある。

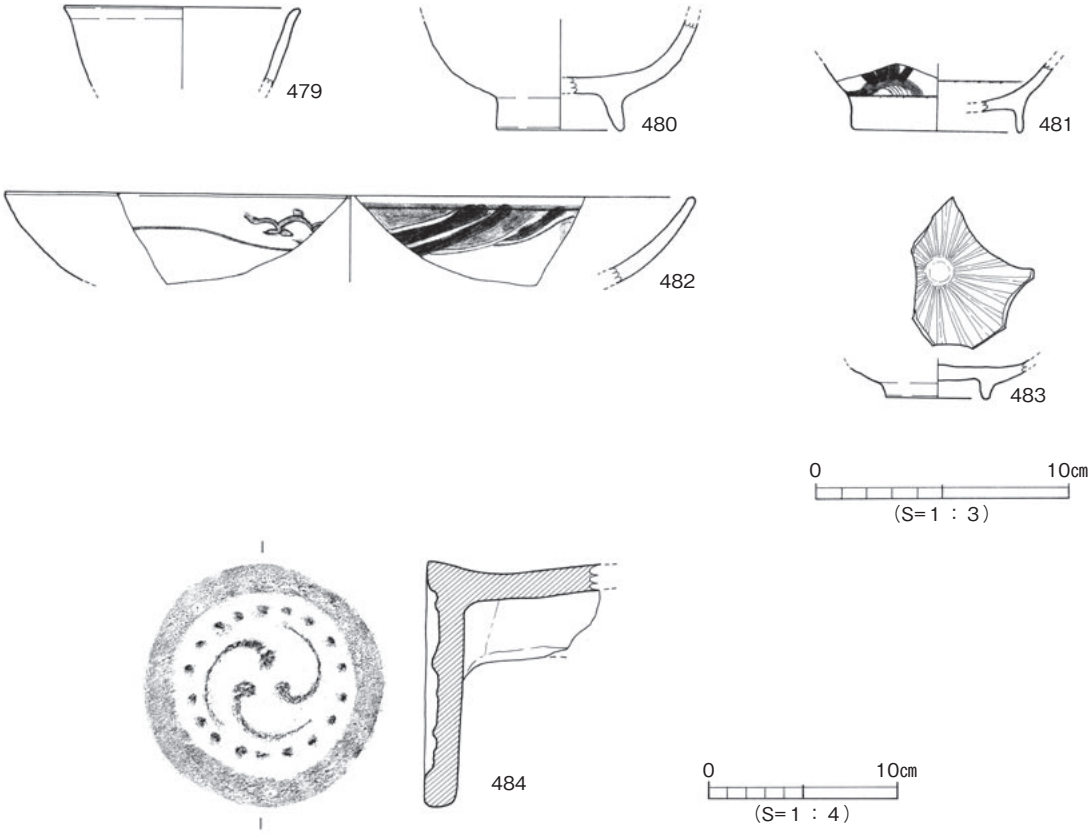


図137　調査区北東部採集遺物

e．調査区東部採集の遺物（図138）

485～489は陶器、485は瀬戸美濃系の茶入れである。体部中位をややくびれさせる下ぶくれの器型で、外面底部周縁を露胎とし、その他の外面に鉄釉をかけ分けている。内面には施釉されない。17世紀後半～18世紀前半。486は肥前系天目碗の底部。外面は露胎で、内面には黒色に発色する鉄釉がかけられている。16世紀末～17世紀初頭。487は京信楽系の碗底部で、灰白色の胎土、露胎の高台を除く部分に淡い緑灰色の灰釉がかけられている。488は肥前系京焼風陶器碗の底部。乳白色の胎土に乳白色の施釉が高台脇まで行われている。高台内面には中央部に小さな円形の削り痕、その脇に「清水」の刻印がある。17世紀後半～18世紀初頭。489は銹絵染付の端反碗、明灰色の胎土の碗体部に草花文を描き、灰色に発色する灰釉を高台脇までかけている。高台は内面を断面アーチ状に削られている。産地は不詳。

490～492は肥前系の磁器である。490は蓋付鉢の身、筒形の器型になるもので、器高7.0cm、口径9.4cm、高台径5.4cmを測る。体部外面に上から３、４、５本単位の三組の横線文を施す。高台外面にも２本の横線が巡る。内面口唇部は釉剝ぎされている。17世紀末～18世紀前半。491は色絵の碗、施文は赤で彩色された一部が僅かに残るのみである。高台脇に確認できる二重圏線も赤を用いている。492は仏飯器、平坦な坏底部から稜を持って体部が直線的に立ち上がる器型である。坏底部には２条の圏線が巡り、体部外面には濃みで潰された細かい格子文が施される。見込には手描きによる五弁花が施されている。脚裾部には対向する２方向に施文があるが、詳細は不明である。確認できる範囲では裾部内面にも施釉されている。18世紀後半。

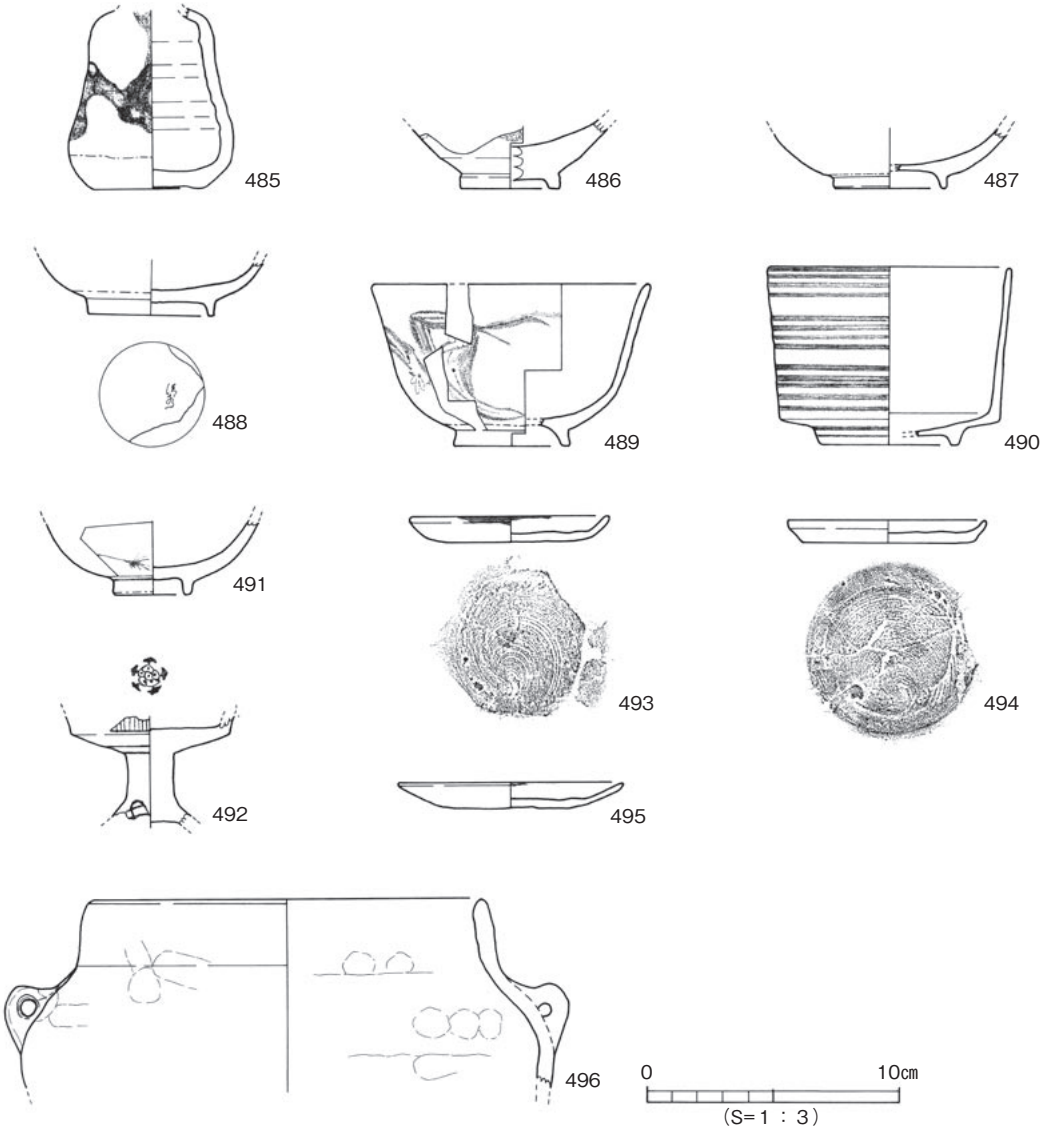


図138　調査区東部採集遺物

493～495は土師器灯明皿で、いずれも使用痕がある。底部は回転糸切りされている。496も土師器で、茶釜の破片である。

f．その他の表採遺物（図139）

出土地点が特定できない表採遺物がいくつかある。497は陶器土瓶蓋で、外面に釦状の鈕を付け、トビカンナによる施文を施して飴色の鉄釉をかける。内面は無釉である。498は肥前系京焼風陶器碗である。器高6.2cm、口径10.5cm、高台径5.6cmを測る。露胎の高台内面に比較的大きな円形の削り痕、その中に「清水」の印銘がある。暗黄灰色の施釉が高台脇まで施される。体部の文様の全体は不詳であるが、山水楼閣図の一部と思われる横方向に引かれた淡い鉄絵が口縁部近くに確認できる。17世紀後半～18世紀初頭。

499～502は肥前系染付磁器で、18世紀後半から幕末の間のものである。499は蓋、外面鈕の周囲に２条、口縁部に１条の圏線を引き、その間に牡丹と思われる花文を描いている。破片であるが、その

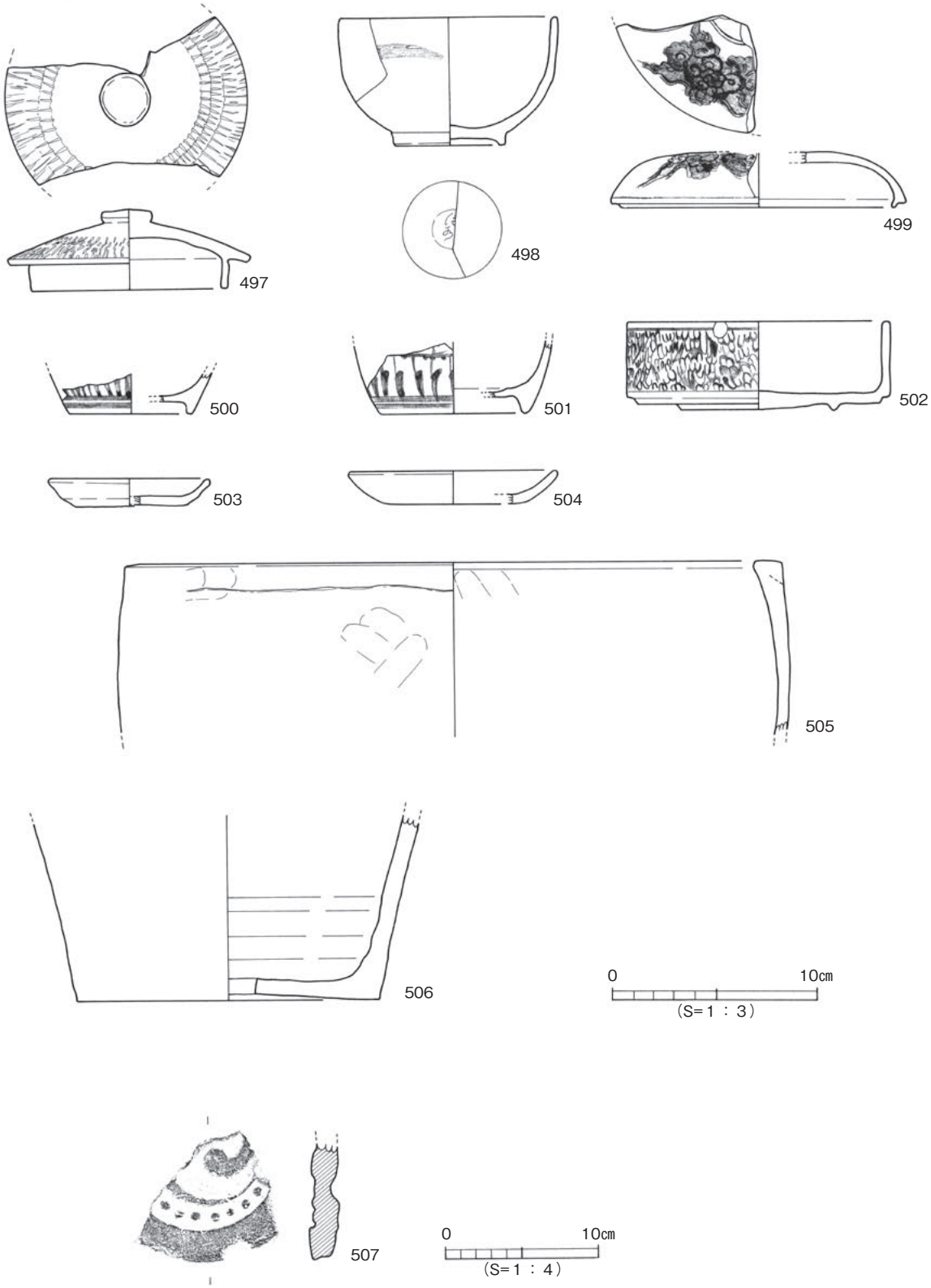


図139　表採遺物

破断面に焼き継ぎ痕がある。500、501は鶴首壺の底部と思われる片である。いずれも底部は碁笥底につくられ、立ち上がりに二重圏線を引き、500では縦縞文、また501では連弁文が描かれる。内面は無釉である。502は段重、器高4.3cm、口径12.4cm、高台径7.4cmを測る。外面には退化した花唐草が描かれている。

503～505は土師器で、皿504の口唇部には煤の付着がある。505は甕の口縁である。506の植木鉢は瓦質の製品である。507は軒丸瓦片、反時計回りの三つ巴、珠文は21個に復元される。

9）包含層出土の遺物

遺構が載ったり、切りこんだりしている包含層からは、先述のように氾濫やその他の要因によって堆積した土砂とともに、若干の遺物が含まれている。出土したものには、弥生土器、古墳時代から古代の須恵器、土師器、円筒埴輪・形象埴輪片、紡錘車、碧玉製管玉、耳環などがある。また、近世の灯明皿なども包含層資料として何点か採り上げられているが、実際には採り上げの際の混入と考えられるものである。以下、簡単に概要を述べる。

a．弥生土器（図140）

508、509は後期の複合口縁壺口縁部片。508の口縁部片の外面には櫛描き直線文が施され、509ではタガの外面に２条の凹線、上面には櫛描き波状文、口縁部は縦方向の櫛描き直線文で区画したスペースに横方向の直線文を描いている。510は後期の壺口頸部、511は高坏脚部のそれぞれ小片である。

b．土師器・黒色土器・瓦器（図141～144）

512～519は古墳時代の遺物である。512～514が甑の口縁部あるいは把手、515～519は甕の口縁部、５～６世紀代の遺物である。

520～541は皿で、各時期のものがある。すべて轆轤成形によっている。520～526は古代、８～10世紀のものである。うち、520、524、526には塗り土による赤色塗彩が施されている。526の底部は、ヘラ切りの後撫でられ、焼成後に細い陰刻線で斜格子状の施文が行われている。小型の皿527～548のうち、527、528は底部ヘラ切りによるもので11世紀以前のものである。529～536は切り離し痕をナデ消されていて不詳であるが、その器壁の厚いこと、特に内面において底部と口縁部の境が曖昧なことな

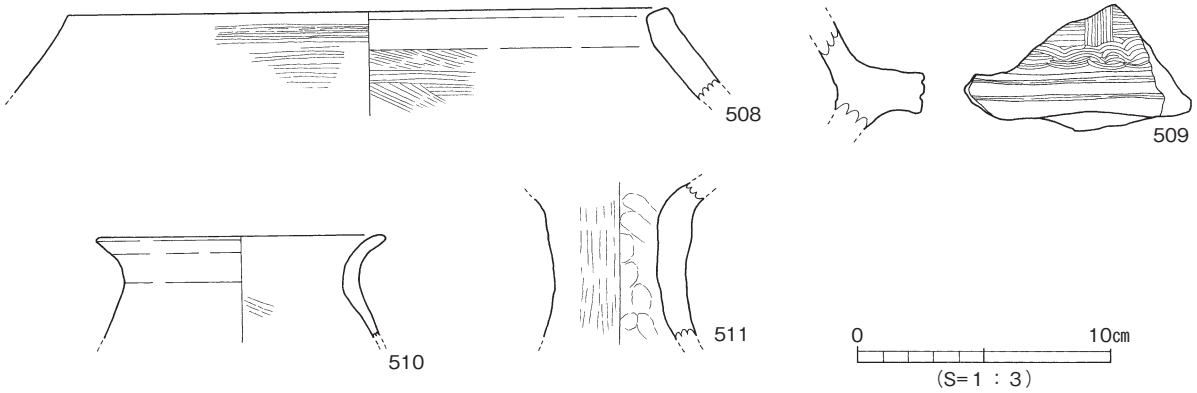


図140　包含層出土弥生土器

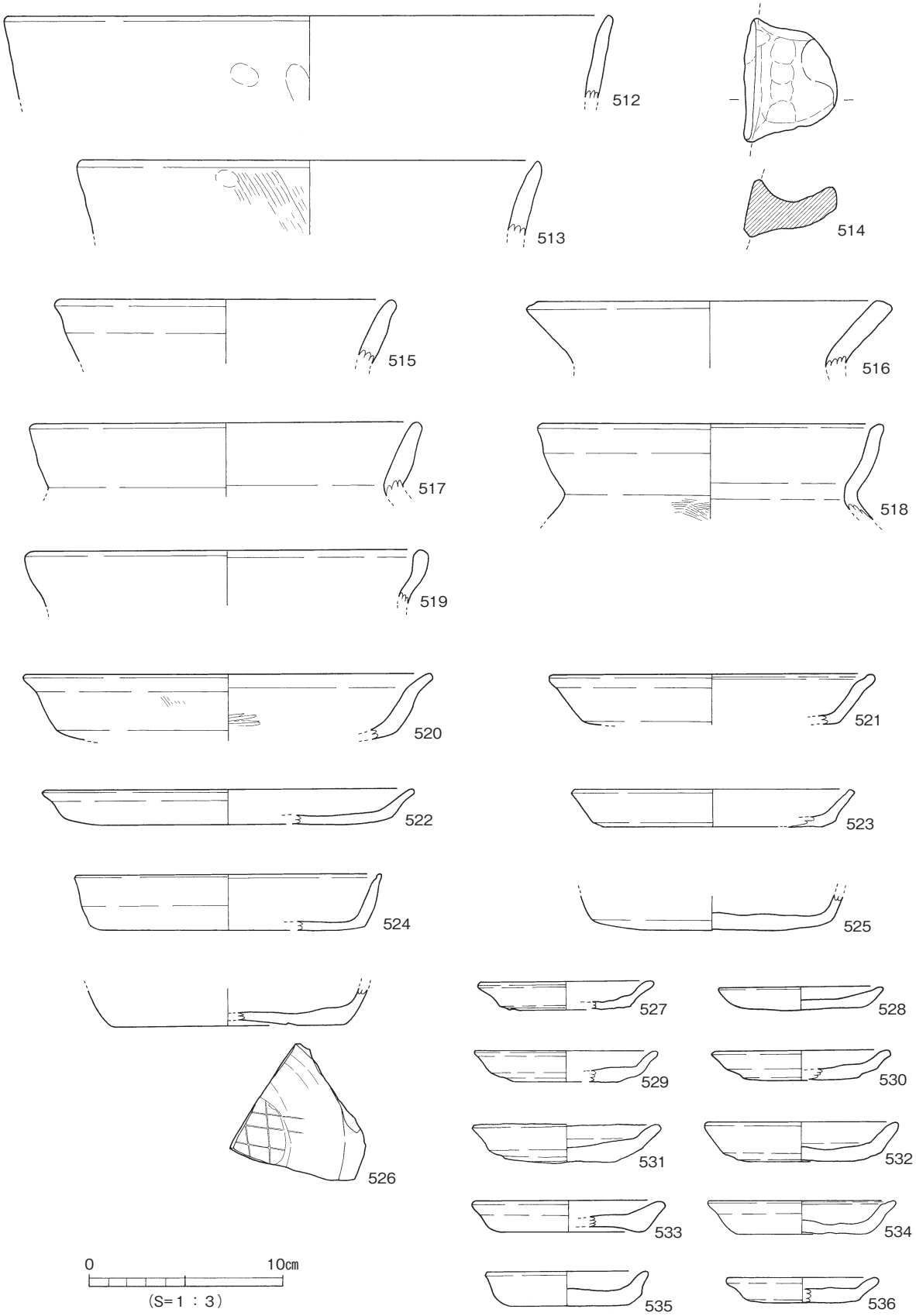


図141　包含層出土土師器(1)

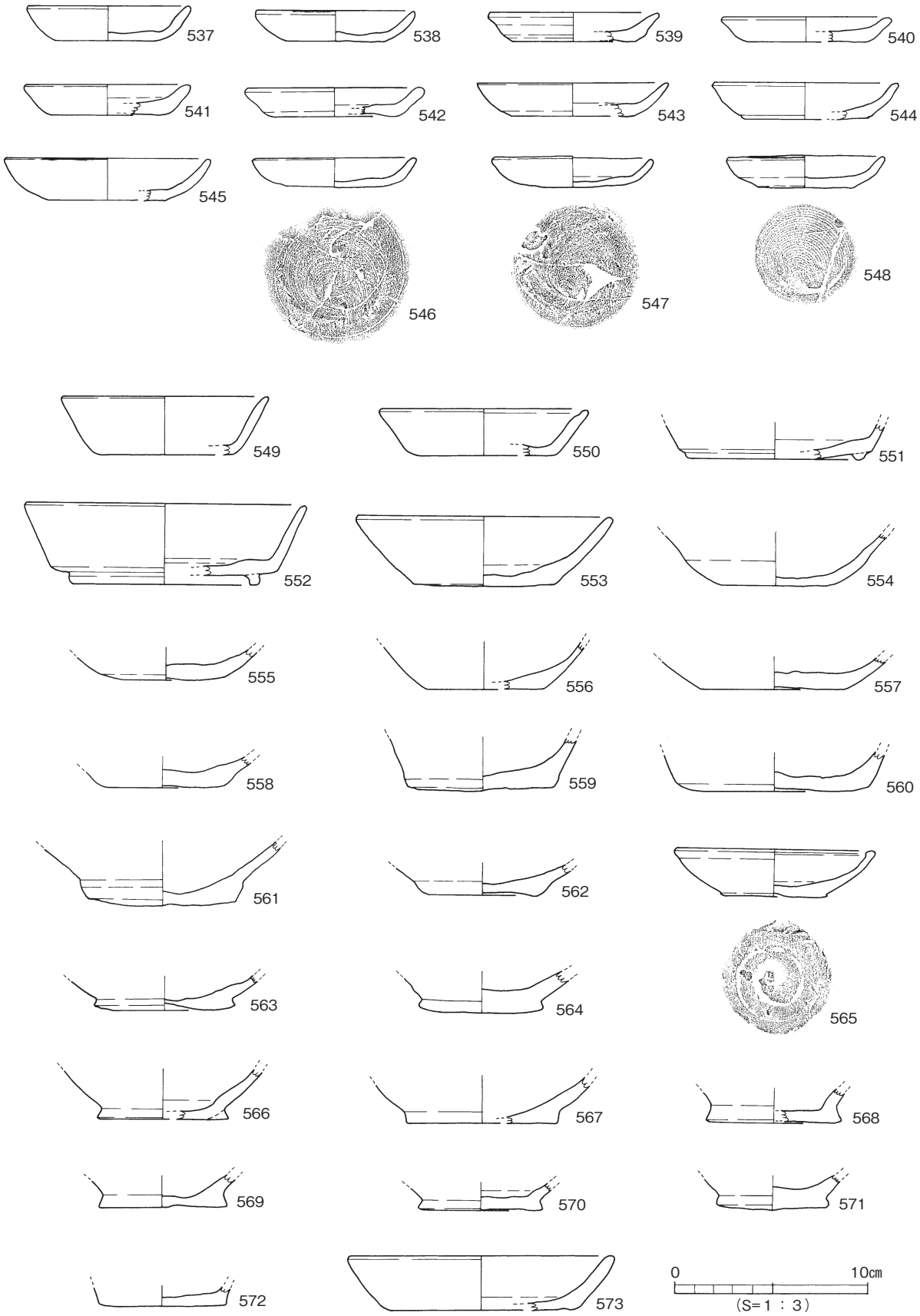


図142　包含層出土土師器(2)

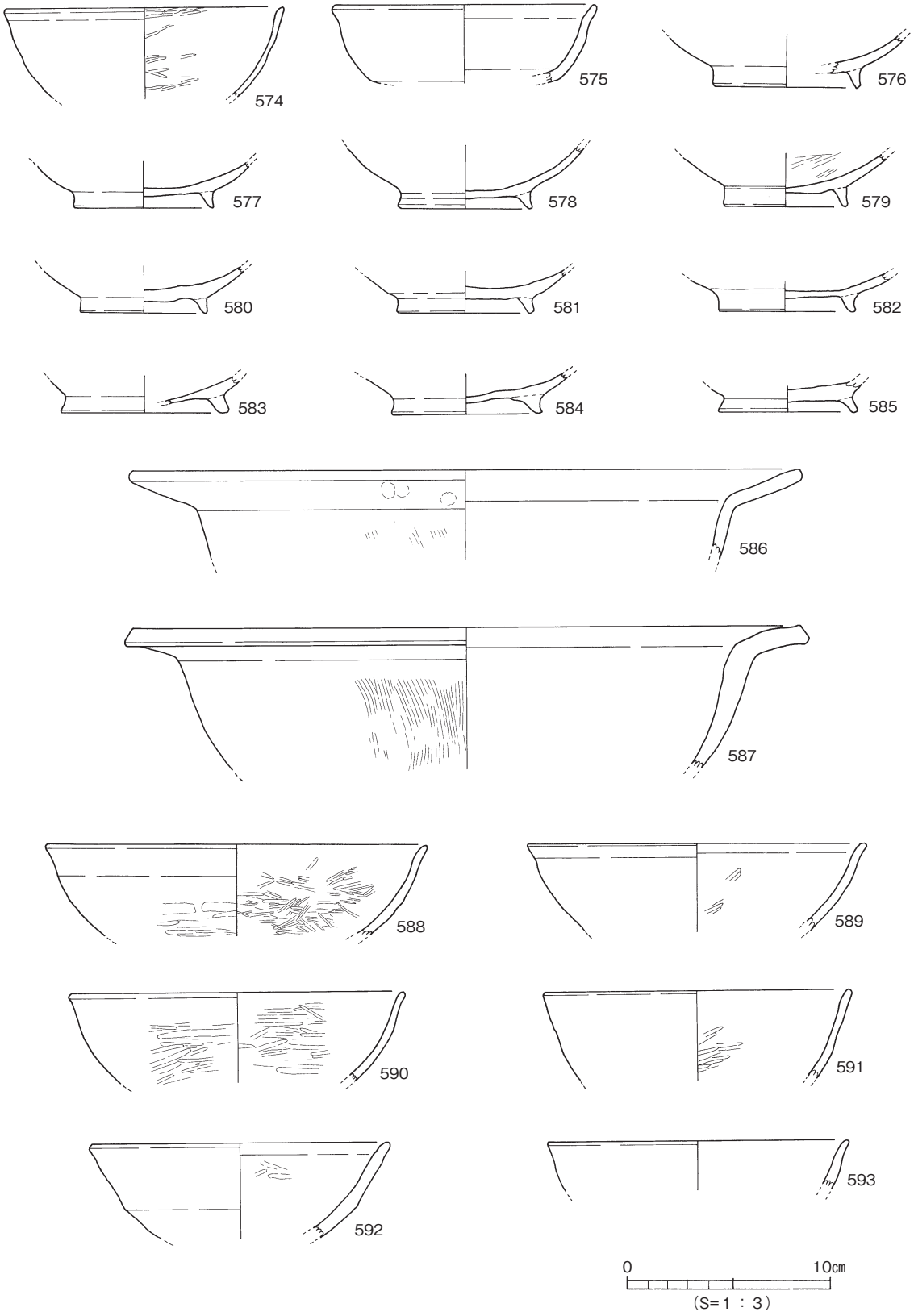


図143　包含層出土土師器・黒色土器

どを考慮すると、後の537以降のものよりは古いものと考えられる。537～541は静止糸切りによるもので、14～16世紀代のものである。542の切り離し痕は不詳。17世紀以降の新しい段階の回転糸切りのものが543～548である。

549～573は坏である。549～572が古代、８～10世紀代に属するもので、549、554、556、558、567には皿の一部と同様赤色塗彩の痕跡を認めることができる。高台を持った552には二次的な被熱痕跡が認められるので、８世紀前半頃の須恵器が酸化したものかもしれない。549、550が９世紀前半頃、553～572が底部ヘラ切りによる９世紀後半から10世紀前半代の、いわゆる回転台土師器坏、円盤高台坏と呼ばれているものである。573は底部静止糸切りによる、14～16世紀代のものである。

574～585は椀。ボウル状の器型、底部に輪高台を貼り付けられるものである。高台は、概ね断面三

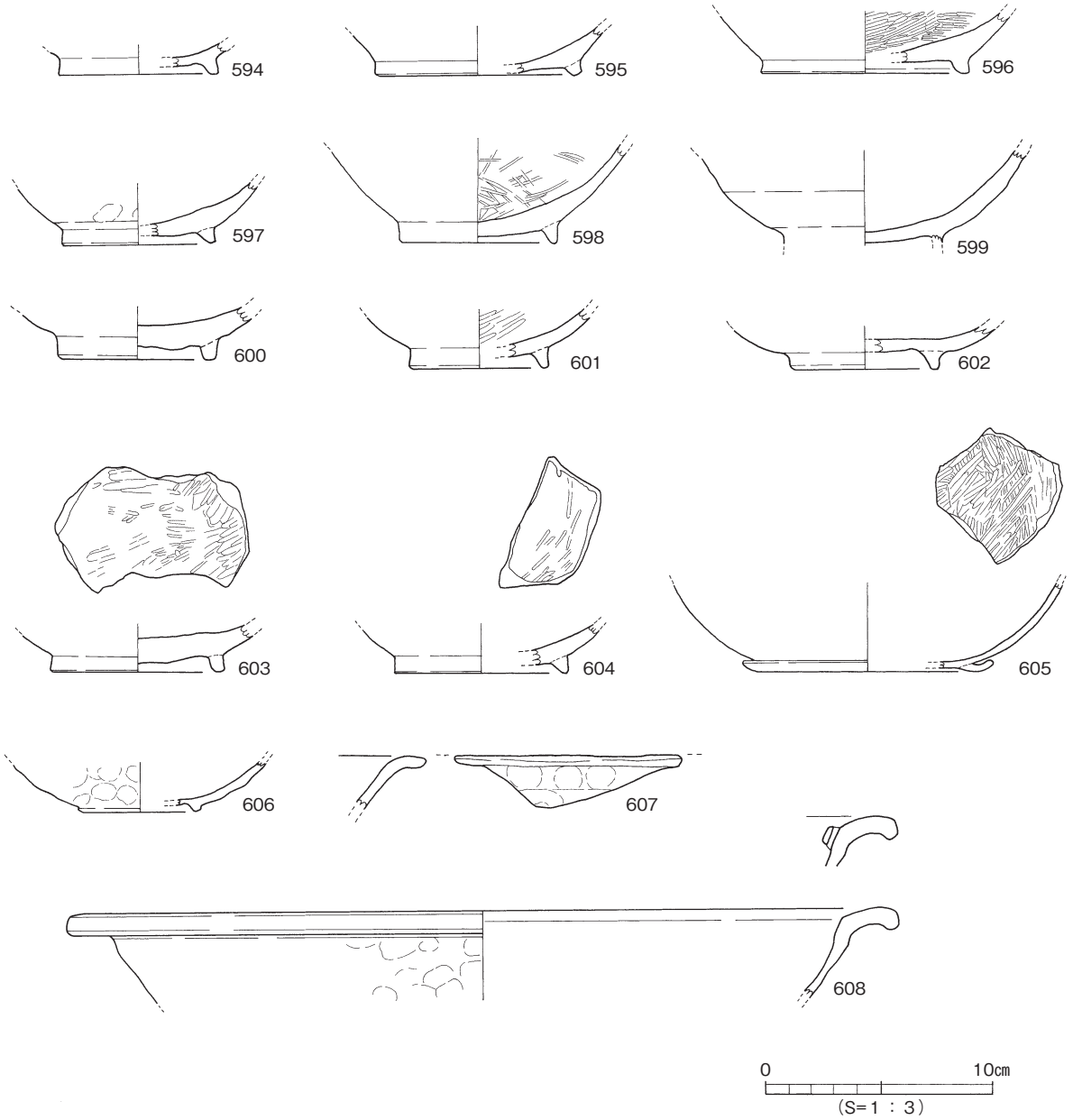


図144　包含層出土黒色土器・瓦器・土師器

角形もしくは台形に近い形状で、比較的しっかりしたものが多い。584では高台貼り付け前の底部に糸切り痕がみられ、これらの椀が回転台成形によるものであることがわかる。574や579では内面の磨きも観察できる。12世紀代を中心とした遺物群である。586、587は鍋、12～13世紀のものか。

588～605は黒色土器椀で、600がＢ類、その他はすべてＡ類である。これらは在地の11世紀代を中心としたものである。これらのうち、605の底部は、幅１㎝の薄い粘土板を輪高台状に巡らせる特異な形態をなす。ちょうど薄い輪高台を外側に押しひろげたような形態である。托上椀の一種かとも思えるがよくわからない。いずれにしてもいずこからの搬入品であろう。胎土は精製され、内面の磨きは緻密、器型のわりに器壁は非常に薄く、黒色土器としては遡るものと思われる。606は和泉型の瓦器椀、13世紀前半代のものである。607、608は土師器、瀬戸内型の焙烙片である。

ｃ．須恵器（図145～151）

609～679は坏、うち609～649は古墳時代タイプのものである。TK10型式から TK217型式あたりまでのものがあるが、多いのは MT85、TK43、209型式のもので、６世紀の後半～７世紀初頭のものが中心となっている。古代、８～９世紀を中心としたものが651～679となっている。同様の時期の皿が680～682である。683～690は椀で、底部をヘラ切りされるものが684、687～689で、その他の底部は回転糸切りされている。10～12世紀代のものである。

691～700は高坏、692が有蓋のものである。脚部片696、697も有蓋のものの脚と思われる。６世紀後半～７世紀前半のものが多いが、697は５世紀前半の非陶邑系高坏の脚である。696は７世紀中頃の高盤であるかもしれない。701～716は壺で、時期、器型はさまざまである。701、702は５・６世紀代の直口壺、703は６世紀代の小型壺、704、705は６～７世紀前半代の有蓋短頸壺である。706～709は７～８世紀の長頸壺と考えられるが、709は広口壺であるかもしれない。710～715は８～９世紀代の底部である。716は器高7.2㎝、口径4.7㎝、底径5.0㎝、胴部最大径9.1㎝を測るほぼ完形の小型壺で、白色に焼成されるものである。平底の底部には回転糸切り痕が残っている。11～12世紀のものか。717、718は𤮊で、どちらも長頸タイプの６世紀後半代のものである。719は平瓶もしくは提瓶の口頸部片、６世紀末～７世紀前半頃のものであろう。720は鉢、７世紀前半～中頃のものである。

721～726は甕、これらも６～７世紀代のものである。725の頸部には、ヘラ記号が刻まれている。727～739は器台、うち728～732が坏部、その他が脚部片である。これらも６世紀代のものが中心と思われる。

ｄ．緑釉陶器（図152）

緑釉陶器底部片が２点出土している。740が碗、741は小型の碗もしくは皿である。740は９世紀代、畿内産の底部で、削り出しの蛇の目高台、軟質の焼成のものである。淡緑色に発色する釉が外底面まで施釉されている。741は10世紀後半頃の近江産底部、低い高台には内側に段がある。硬質の焼成で、濃緑色の釉が施されるが高台内面には施釉されていない。

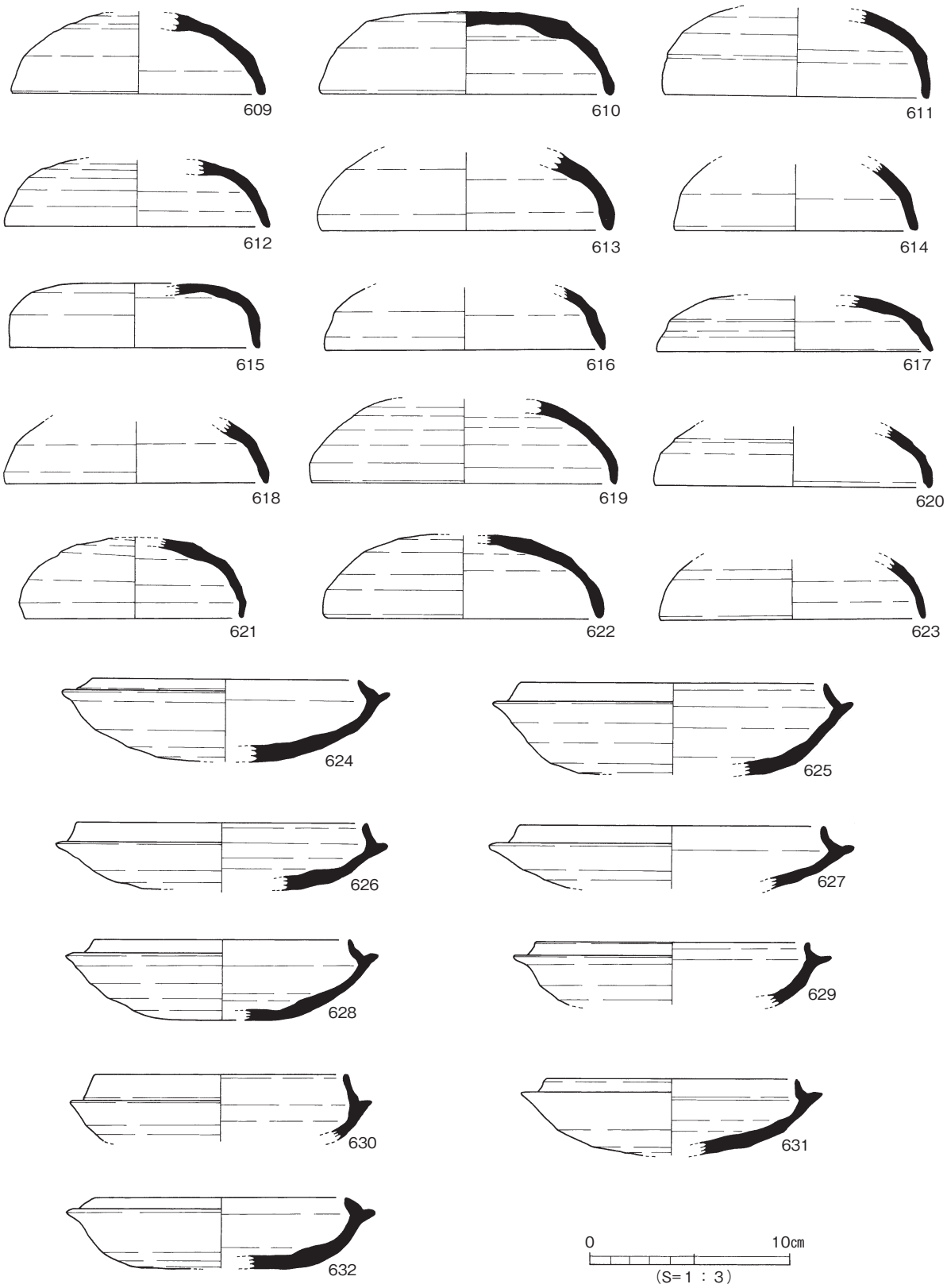


図145　包含層出土須恵器(1)

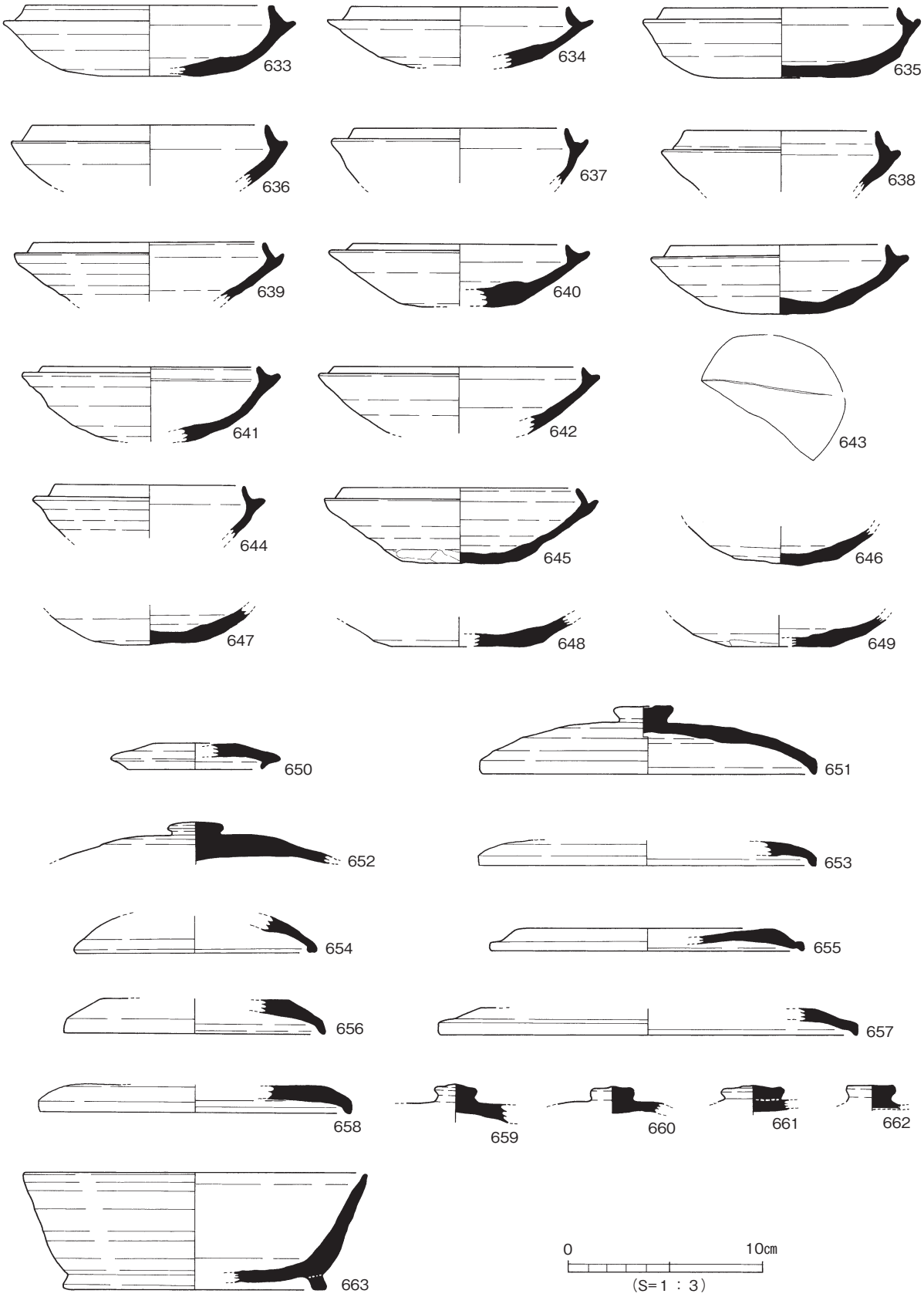


図146　包含層出土須恵器(2)

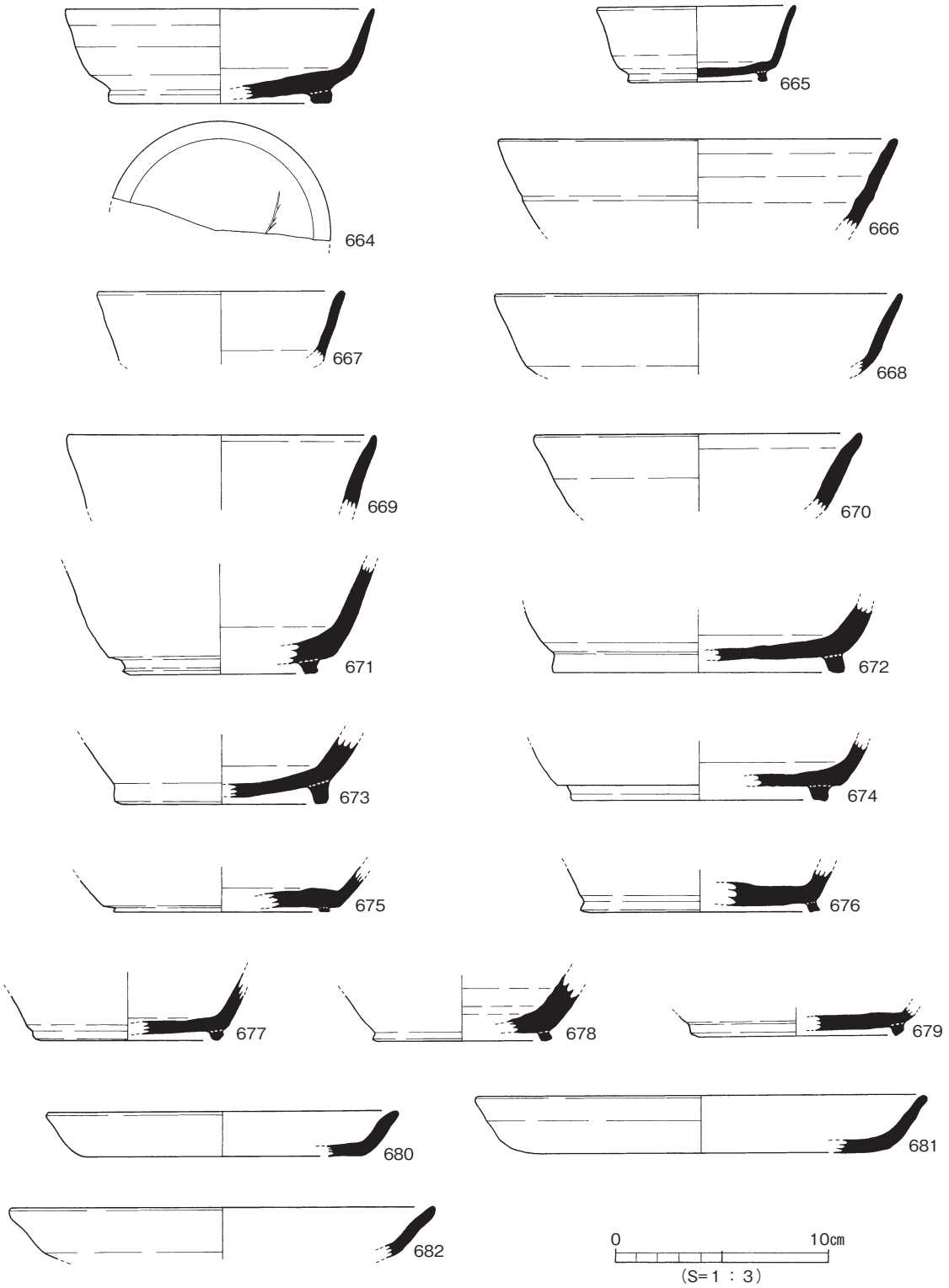


図147　包含層出土須恵器(3)

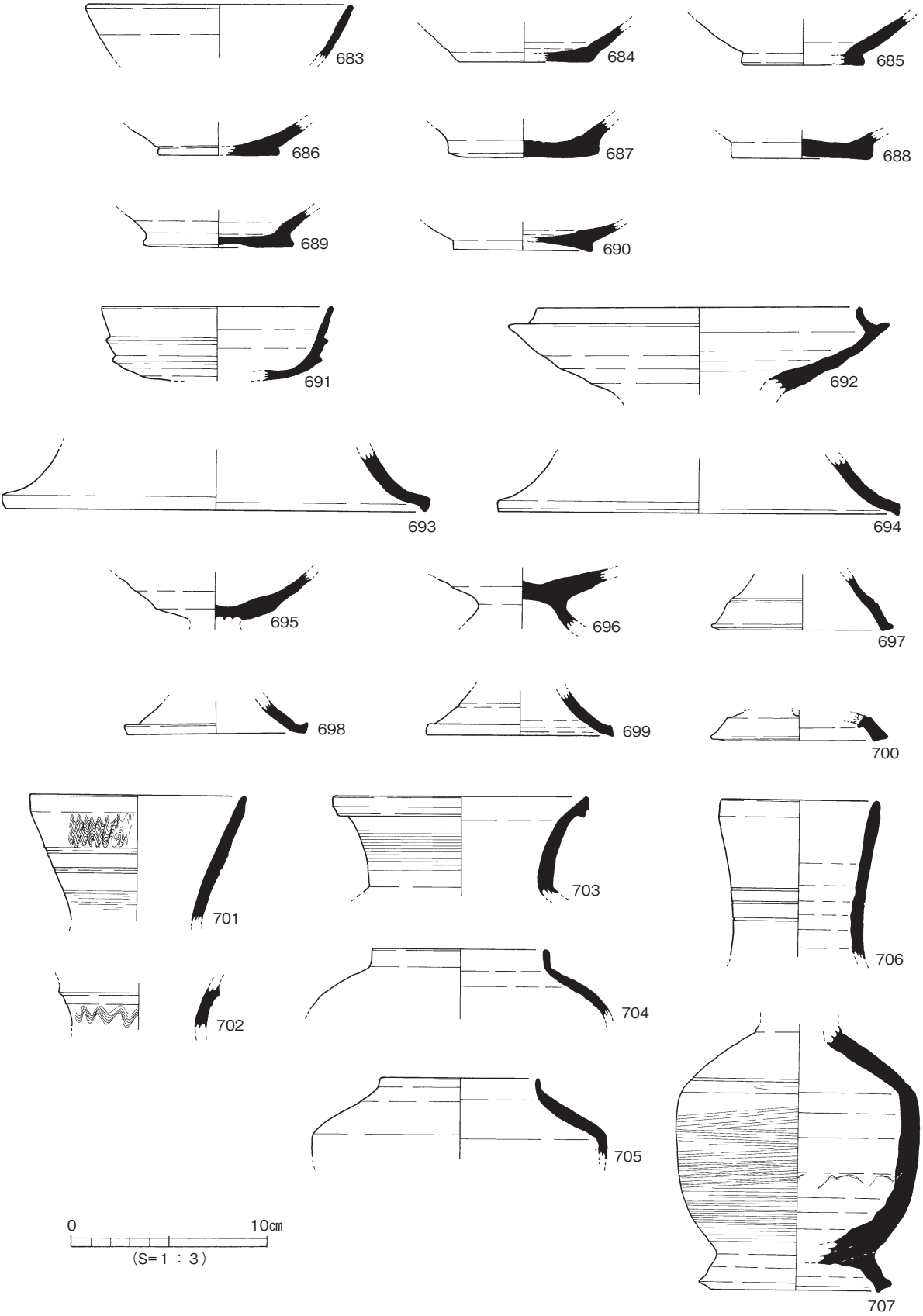


図148　包含層出土須恵器(4)

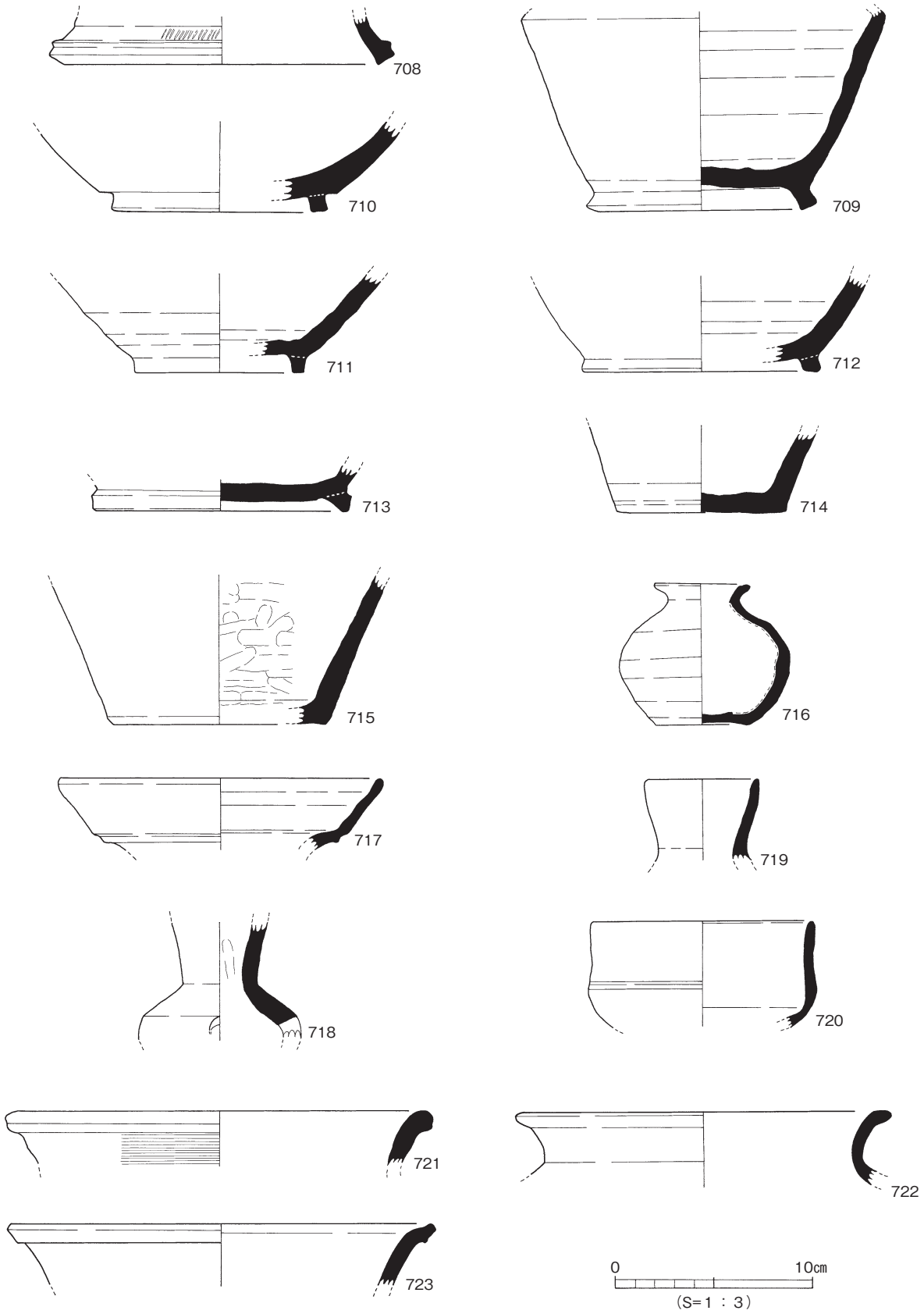


図149　包含層出土須恵器(5)

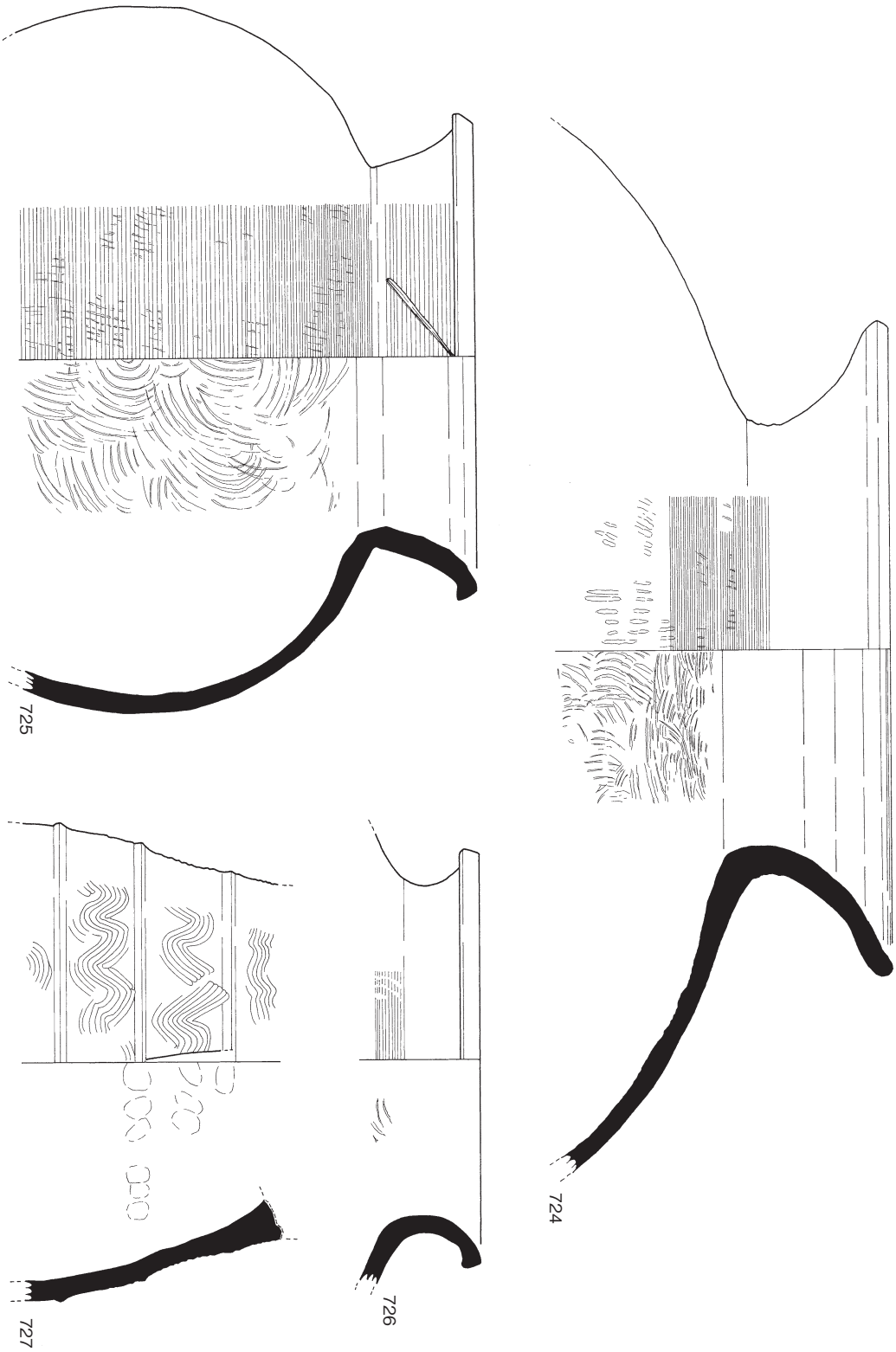


図150　包含層出土須恵器(6)

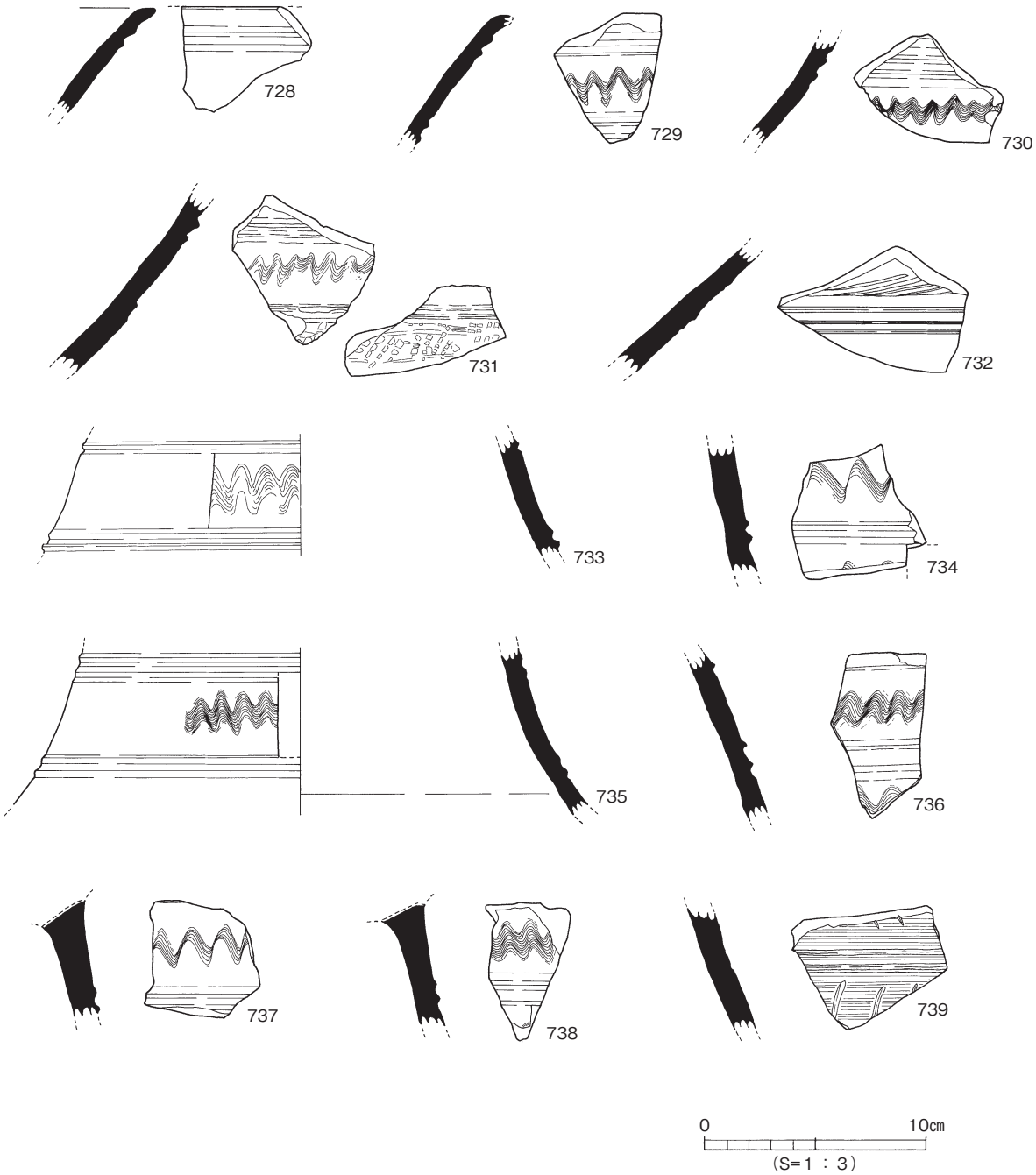


図151　包含層出土須恵器(7)

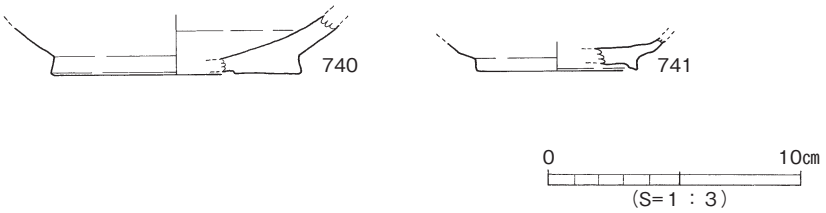


図152　包含層出土緑釉陶器

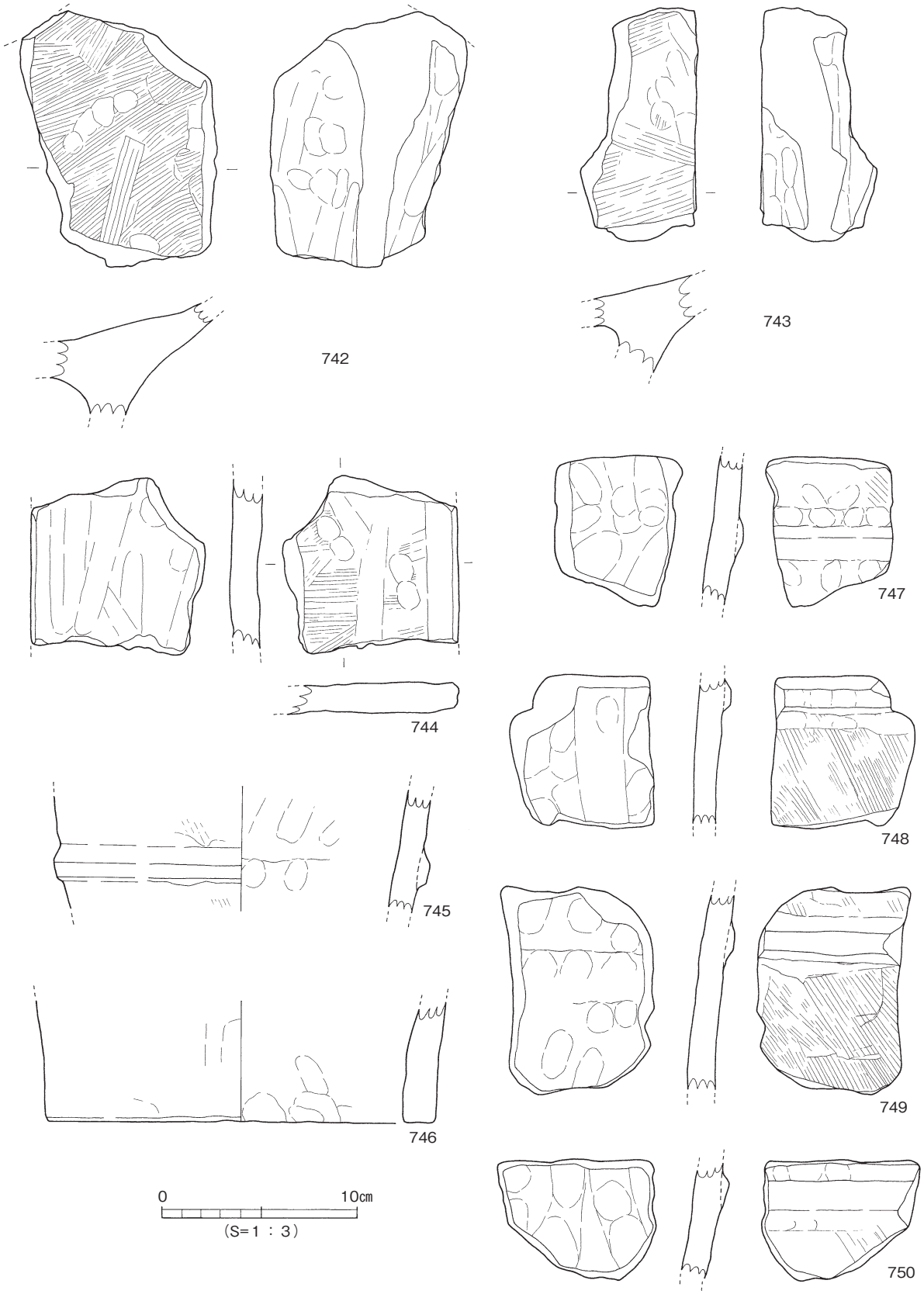


図153　包含層出土埴輪

e．埴輪（図153）

形象埴輪742～744は盾形である。742、743は前面の円筒部と盾の接合部分、744は盾本体の側縁端部の破片で、三者とも表面に刷毛目があるのみで施文は施されていない。６世紀前半代のこのての埴輪としては最終末のものである。円筒の破片745～750のうちで、確認できるタガの断面はいずれも薄い台形もしくは蒲鉾状で、これらも６世紀に下る埴輪と思われる。

f．土製品・金属製品・石製品（図154・155）

751、752は土製紡錘車。751は一部を欠いており、現況で74.6ｇを量る。最大厚1.4㎝、直径6.2～7.1㎝の円形粘土板の中心に、最大径1.0㎝の焼成前円孔を施されている。完形品752は厚さ2.5㎝、最大径3.9㎝の縦断面俵形を呈するもので、平面位置の中心をややはずれた位置に直径0.7㎝の焼成前円孔を持つ。重量46.0ｇを量る。

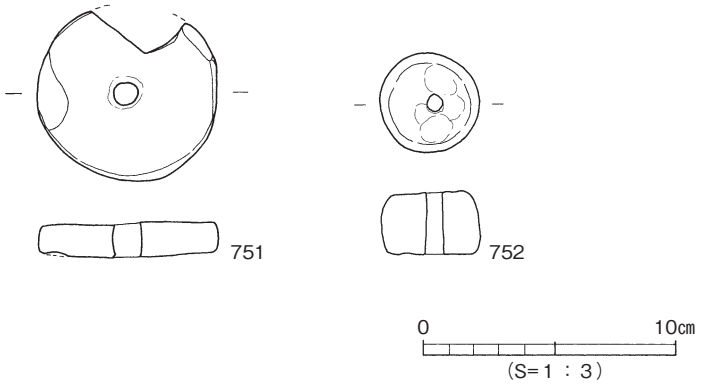


図154　包含層出土土製品

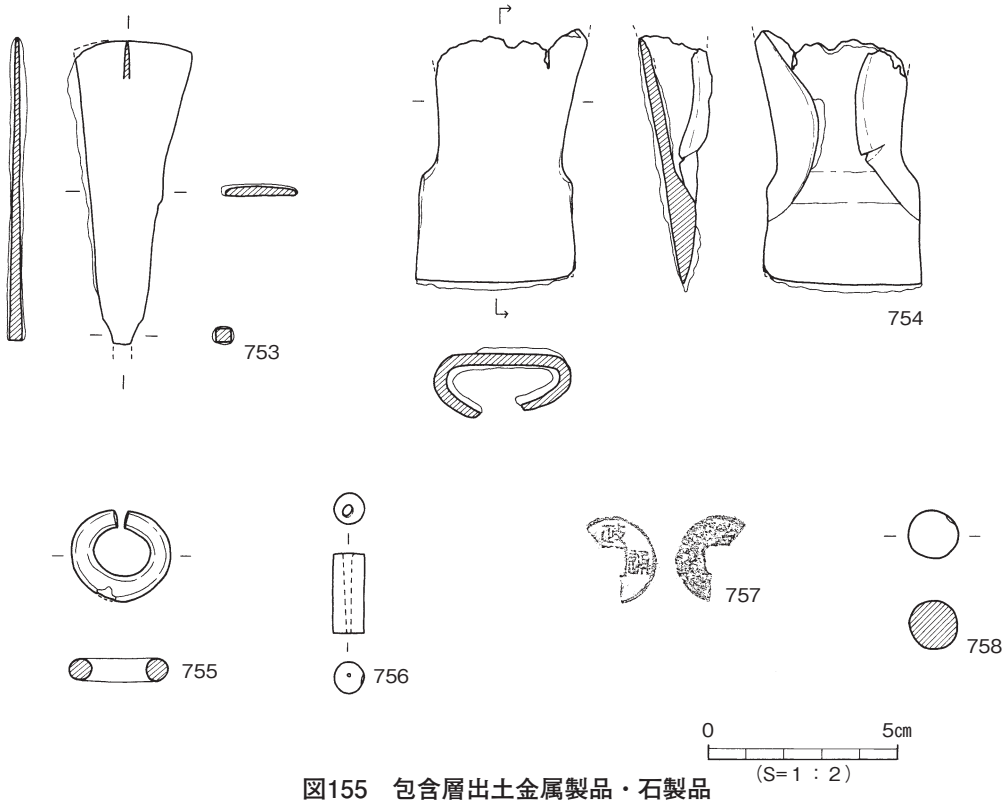


図155　包含層出土金属製品・石製品

古墳時代の武具、工具、装身具がいくつかある。753は鑿形の鉄鏃で茎を欠いている。鏃身長8.0cm、最大幅3.1cmを測る。現況重量15.2ｇである。754は有肩の袋状鉄斧で袋状の基端部を欠いている。刃部幅4.3cm、現況重量46.8ｇである。装身具としては、755の耳環と756の管玉がある。耳環755は、2.4×2.6cm、重量7.34ｇであるが、腐蝕が激しく、銅芯のみしか残っていない。管玉756は碧玉製、長さ2.1cm、直径0.82cm、重量2.5ｇで、片側からの穿孔が行われている。

銭貨757は、政和元（1111）年初鋳の宋銭、政和通宝である。758は火縄銃の銃弾、直径1.3cmの球体で重量11.54ｇを量る。

【主要参考文献】

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000

『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984

大橋　康二　　『古伊万里の文様』理工学社 1994

『波佐見古陶磁文様集』長崎県立窯業試験場 1982

『有田町史　古窯編』有田町史編纂委員会 1988

角谷江津子　　「肥前京焼風陶器と京焼－新島開館出土資料を中心として－」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会 1992

「京焼－消費地出土の様相－」『'99徳島城下町研究会発表要旨』1999

真壁　忠彦　　『備前焼』ニューサイエンス社 1991

乗岡　　実　　『史跡岡山城本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 2001

「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会 2002

白神　典之　　「堺擂鉢と明石擂鉢」『江戸遺跡研究会第３回大会　江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会 1990

難波　洋三　　「徳川大阪城期の焙烙」『難波宮址の研究　第９』大阪市文化財協会 1992

古泉　　弘　　『江戸の考古学』ニューサイエンス社 1987

山本　典夫　　『松山藩ゆかりの西岡焼』重信町教育委員会　愛媛県 2001

小野　健吉　　『日本庭園辞典』岩波書店　重信町教育委員会　愛媛県 2004

『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』㈶山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 2002

『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』㈶山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 2004

佐藤　竜馬　　『高松城跡（西の丸地区）Ⅱ』香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター 2003

森田　克之　　『摂津　高槻城　本丸跡発掘調査報告』高槻市教育委員会 1984

遠藤　才文ほか『名古屋城三之丸遺跡Ⅳ』㈶愛知県埋蔵文化財センター 1993

松田　　訓ほか『名古屋城三之丸遺跡Ⅴ』㈶愛知県埋蔵文化財センター 1995

『江戸時代の瀬戸窯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター 2002

『江戸時代の瀬戸・美濃窯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター 2004

土井光一郎　　『史跡「松山城跡」内県民館跡地』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000

第３章　ま　と　め

今回の調査では、弥生時代から近世までの遺構・遺物が調査された。これらのうちでも江戸時代の遺構・遺物は今回の調査の中核をなすものである。後述するように、歴代の絵図からみると、調査地は、蒲生・松平の代を通じてひと区画の屋敷地として存在しており、概ね300石、400石程度の比較的上級クラスの家臣屋敷地として利用されてきたようである。

松山城を中心とした松山城下図は、確認されているところでは、寛永年間から始まり、天保年間にいたるまで20点近く現存している。寛永12（1635）年頃描かれた絵図には松山城を中心に城下の区画割りと、その区画の居住者名が記載されている。それぞれの区画には、蒲生段階の住人の姓名が朱書で、松平入府時の住人の姓名が墨書され、さらにそれぞれの石高まで記載されている。この絵図によれば、調査地の当時の状況は、南の一番町通りまで一筆の広い屋敷地で、蒲生段階の住人が津田五右衛門（300石）、松平に代わって新延六左衛門（400石）という人物の居住地であったことが記載されている。ちなみに、道路を挟んだ西向かいの区画には、蒲生段階で梅原弥左衛門（2,700石）、松平に移って山本権兵衛（1,500石）という名がみえる。降って、宝暦８（1758）年頃の絵図では、この区画は南北のふた区画に二分され、調査地にあたる北の区画に遠山伝七なる名前が確認できる。また、幕末嘉永６～７（1853～54）年頃の絵図では、二分された北区画に青木覚左衛門という住人の名が記載されている。さて、「文久２（1862）年改之」と記された、『松山御家家中古今屋敷図附』なる書物は、松山武家屋敷住宅説明書ともいうべきもので、明治４（1871）年までの書き入れがある史料である。調査地は代官町一番町というエリアの一角に相当するが、この書物の代官町一番町を説明した段は、現在の愛媛県庁議会棟の位置にあたる「北側西ノ端」から始まり、「其次、其次、其次角、其次東奥･･･」といった具合に、西から東の区画へと進み、それぞれの区画の住人を歴代記している。この資料でも、さきの寛永の絵図同様に、蒲生段階、松平入府段階双方の住人の姓名をやはり朱書と墨書で表し、この２名に関してはやはり石高も記載してある。調査地に居住した蒲生段階の津田五右衛門、松平の新延六郎右衛門（絵図では六左衛門）以降、記載されている住人を列挙していくと、橘降徹、木脇猶右衛門、和久十右衛門、水野与三兵衛、大河原三郎太夫、福富祐元、原田弥之右衛門、遠山伝七、片桐十太夫、渡部多宮、宮城左五兵衛、青木兵右衛門となっている。ちなみに、道路を挟んだ西向かいの区画には、梅原弥左衛門、山本権兵衛の後、代々家老クラスの住人が居住している。これらの絵図や文献から共通して読み取れるのは、勝山麓の本城周辺、特に城南、城西、城東のエリアには広く家臣団の居住域を配し、中でも上・中級の家臣団をより本城近辺に配しているということである。

図156に示した絵図は、近年までその存在があまりよく知られていなかった絵図で、製作年の書き込みもないものであるが、調査地に該当する区画に池の表現があることがこの絵図の特徴である。先にも述べたとおり、現在知られている藩政時代松山城下の絵図は20点近く存在するが、この区画に池の表現のある絵図はこの１点のみである。この絵図では、城下の町並みは、主だった屋敷を除いては屋敷地の区画もなく、ところどころ誤った箇所を胡粉で消して訂正するなど、比較的大雑把に描かれている。これに対して、本城、二之丸、三之丸、北郭、東雲神社等、藩主直轄の施設は念入りに描かれている。このことから、印象的には未完成のまま終わった図のようにも見受けられる。さて、松山

城下の古絵図の年代鑑定に際してはいくつかの判定基準となりうる指標がある。この絵図について主だった事項を年代順に挙げていくと、まず、二之丸の完成が寛永４（1627）年、本丸天守が五層から三層に改築されたのが寛永19（1642）年、本来佃郭と呼ばれていた城北の施設が源左輪という呼称を経て北郭と改名されたのが天和２（1682）年、三之丸邸の完成が貞享４（1687）年のことである。さらに最も新しい事項としては天保11（1840）年の東雲神社の完成がある。したがって、この絵図が何の描き込みも施されずオリジナルの状態で伝世してきたものとすると、1840年以降の製作ということになる。さて、この絵図の天守の北東、図のほとんど上端、中央よりやや右よりの城下の部分の道路に「日野町筋」なる地名が描き込んであるのが読みとれる。この日野町という地名は、もともと近江の国の日野町に所領を有していた蒲生忠知が、彼の地の住人を伴って着任し、この界隈に住まわせたことに由来する地名である。ところが、17世紀後半、この町に火災が頻発したことから「ヒノ」の町名を嫌って「水口町」と改称された。これが、寛文４（1664）年から元禄７（1694）年の間のこととされ、この日野町改称といった事項も古絵図年代鑑定の大きな指標のひとつとなっている。このようにこの絵図は比較的古い要素と新しい要素を併せ持ったものといえ、この史料のみでは、池の存在が実際に江戸時代のいつ頃まで遡るのかをたどることはできない。さて、この絵図の東雲神社の部分をみると、神馬の位置まで詳細に描かれるなど入念に描かれている。このような神社表現の入念さは他の絵図にはみられないこの絵図の特徴的な部分であり、東雲神社との因縁がかなり深い絵図である可能性が考えられる。先述のように､年代として150年もの開きのある指標を併せ持っていることから、さらに想像をたくましくすると、この絵図は、本来神社に伝世したものに、あるいはその模写を行う際に新しく神社を描き込んだ可能性も考えられるのではなかろうか。特に、その筆致や筆跡に複数の手の痕跡がないことからみると後者の可能性が高い。そうであるとするならば、この絵図のオリジナルの製作年代は1600年代の終わり頃まで遡るものとなる。いずれにしても、確定的な証拠はひとつもなく、製作年代不詳の絵図としか言いようがない。

さて、この絵図には池が４箇所描かれている。西から見ていくと、濠に囲われた堀之内の南西隅の杉馬場の南に１箇所、二之丸に１箇所、調査地に１箇所、さらにその東の東郭の北に１箇所認められる。二之丸の池とされているのは、二之丸築造当初から存在し、明治以降、陸軍衛戍病院建設とともに埋め戻され、一旦は姿を消したが、昭和60（1985）年の発掘調査によって再び陽の目を見、その後修復整備された大井戸であって、公的な施設である。堀之内の池も、その位置から言えば公的な性格が高いものと思われる。東郭北側の大きな池は湧水で、舛洗い池と呼ばれ、城の堀の水源のひとつとなっていたもので、これもある意味公的な性格が強い。こうやってみてくると、この絵図は、未完成図というよりも、公的な施設の配置に重きを置いた絵図であると考えられる。したがって、調査地に描かれた池は、この絵図のオリジナルというものが存在すると仮定して、それが描かれた少なくともその一時期には、公共的な施設であった可能性がある。ちなみに、現在、松山地方裁判所となっている調査地西隣の家老屋敷には、江戸初期作庭とされる池泉、「翠水園」が残っているほか、北側の萬翠荘敷地内にも同様の池が存在しているが、これらについては空白である。こういったことを総合すると、この絵図に描かれた池というのは、湧水を水源とするもので、他の屋敷地内の園池とは性格を異にした存在であった可能性を推定することができる。ところで、19世紀初頭、日下部維岳の手になる『古今記聞』には、足立重信による改修以前の石手川についての記載がある。この中に「往古は石手川、御城山へ添いて流れたりという、水野の添屋敷ならびに渡部多宮座敷の庭に淵あり、これ皆そ

図156　調査地に池の描かれた古絵図（藤村悌氏蔵）

の川の淵也という‥‥」。これらの淵が、石手川旧流路の名残であるのかどうかは別として、水野は東郭に居を構えた家老屋敷のことであるので、前者は絵図に描かれた舛洗い池をさすものと考えられる。また、渡部多宮は先述の「松山御家中古今屋敷図附」に登場する人物で、まさにこの調査地の住人のひとりであることから、この記述は湧水を水源としていた絵図の池を指しているものと考えられる。

さて、この絵図でも城南の調査地近辺、一番町通り北側のエリアにも家老屋敷の記載が散見され、先述のようにこのエリアが上位の家臣団の居住地であったことがわかる。ちなみに、このエリアの西端、現在の愛媛県議会棟の位置に塀や門構えの描かれた広い区画を持つ家老屋敷が存在しているが、この場所は、代々松山藩筆頭家老の居宅であった。調査地は、こういったエリアの東端に位置し、城山の南から南西に形成された武家屋敷エリアの北東隅に近い部分にあたり、これより東には町屋や下級武士の居宅が配されるという位置関係にある。

上述のように、この屋敷地から検出されたメインの遺構は園池遺構ＳＧ１である。池底からは植栽施設と考えられる３基の土坑状施設が検出され、そのうちＳＫ55としたものに用いられた陶器の甕は唐津焼、17世紀後半頃の特徴を備えたものであった。これらの３基がそれぞれが素掘り、桶枠、陶器甕と異なった形式を持つことから、３基のすべてが築造時に時を同じくして設けられたということは考えにくい。そうすると、ＳＫ55の設置年代は池の築造時もしくはそれ以降のことである。したがって、この池の築造は17世紀後半あるいはそれ以前ということになる。一方、この屋敷地から出土する江戸時代の遺物としては、17世紀後半のものが最も古く、これより前段階のものは16世紀後半まで遡ることから判断すると、やはり築造年代は17世紀後半代におさまる可能性が高い。ちなみに17世紀後半代といえば、先述の新延六郎右衛門（持筒頭200石、後に200石加増）、橘降徹（本道医300石、後に木脇と改名）が居住した年代であった。以上のような、本調査によって得られた知見は、近隣に現存する築造年代不詳の２基の園池の築造年代についても重要な示唆を与えるとともに、城下町松山にとって大きな成果であったといえよう。

【文献】

『松山城』松山市 1970

村上節太郎「重信の計画した松山城下町の変容－古地図からみた－」『足立重信と松山』松山市 1974

『松山市史料集　第三巻　近世編２』松山市 1986

『松山市史料集　第一三巻　付図』松山市 1987

『松山の歴史』松山市 1989

『松山市史　第二巻　近世』松山市 1997

『愛媛の古庭園－鑑賞編－』愛媛県造園緑化事業協同組合 2003

日下部維岳「古今記聞」『伊予史談会双書第21集』伊予史談会 1991

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45Ａ	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100Ｆ		

2．遺物は、４×５判で撮影した。すべてカラーリバーサルフィルム･白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45Ｇ
レンズ	ジンマーＳ　240㎜Ｆ5.6他
ストロボ	コメット／ＣＡ32・ＣＢ2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム	カラー　アスティア100Ｆ
	白　黒　ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸器	ラッキーＭＤ・90ＭＳ
レンズ	エル・ニッコール135㎜Ｆ　5.6Ａ・50㎜Ｆ　2.8Ｎ
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ　ＲＣペーパー

4．製　版　写真図版175線
印　刷　オフセット印刷
用　紙　マットコート
製　本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.１～16　『報告書作成ガイド』

［大西朋子］

調査地調査前全景(1)（西より）

調査地調査前全景(2)（南東より）

遺構検出状況（東より）

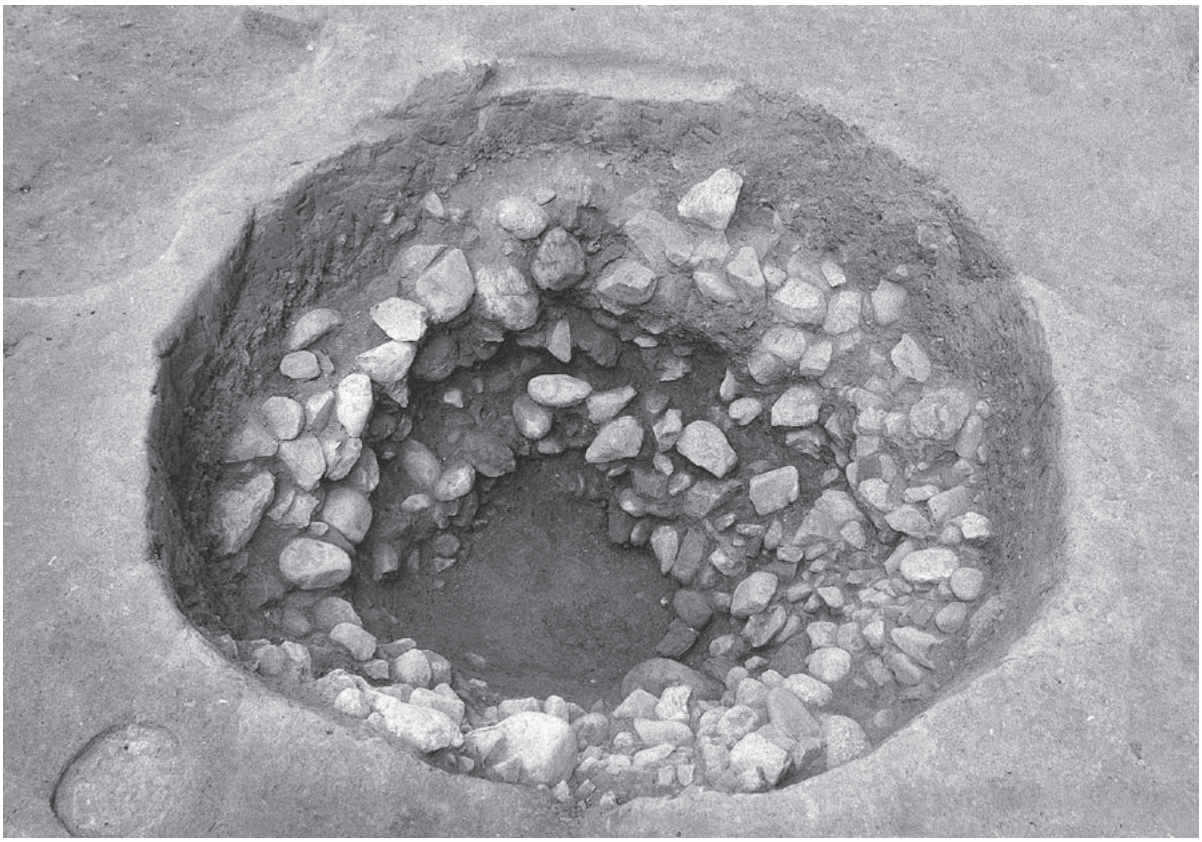
調査状況（東より）

遺構完掘状況（東より）

調査区南西部土坑群（北西より）

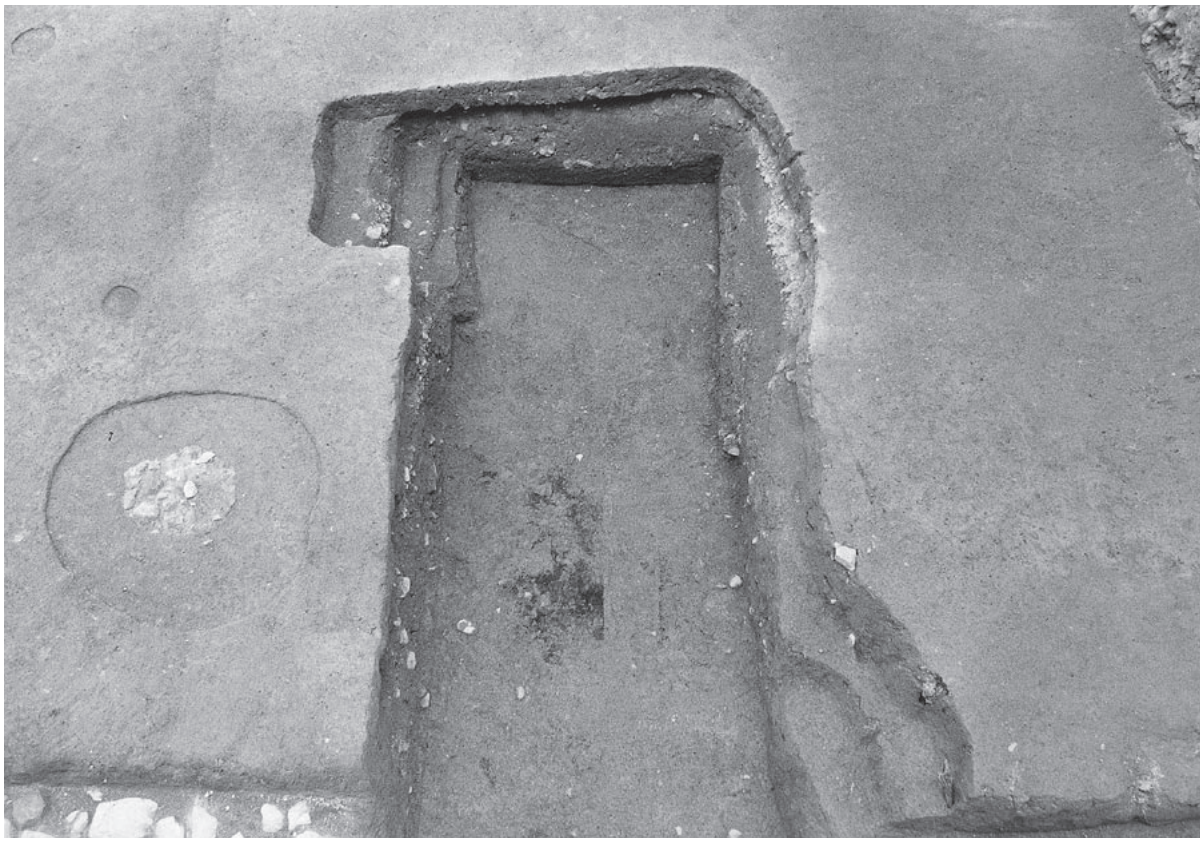
SK6遺物出土状況(1)（北より）

SK6遺物出土状況(2)



SE1完掘状況（東より）

SE1半裁状況（東より）



地下蔵SK3完掘状況(1)（南より）

地下蔵SK3完掘状況(2)（北東より）

SK4遺物出土状況（東より）

SK17遺物出土状況（東より）

SK36遺物出土状況（東より）

SK38遺物出土状況（南西より）

SX1遺物出土状況（南東より）

SX2遺物出土状況（南より）

包含層遺物出土状況(1)

包含層遺物出土状況(2)

包含層遺物出土状況(3)

SG1検出状況(1)（西より）

SG1検出状況(2)（南東より）

SG1検出状況(3)（西より）

検出時のSG1とSD1接続部（西より）

SD2検出状況（西より）

SD2調査状況近景（西より）

SG1とSD2接続部（東より）

SG1敷石施設近景（北西より）

改修後のSG1完掘状況（西より）

改修後SG1池底遺物出土状況

改修後SG1雨後の滞水状況（西より）

SG1改修部の断ち割り（北東より）

SG1敷石施設下面給水管検出状況（南より）

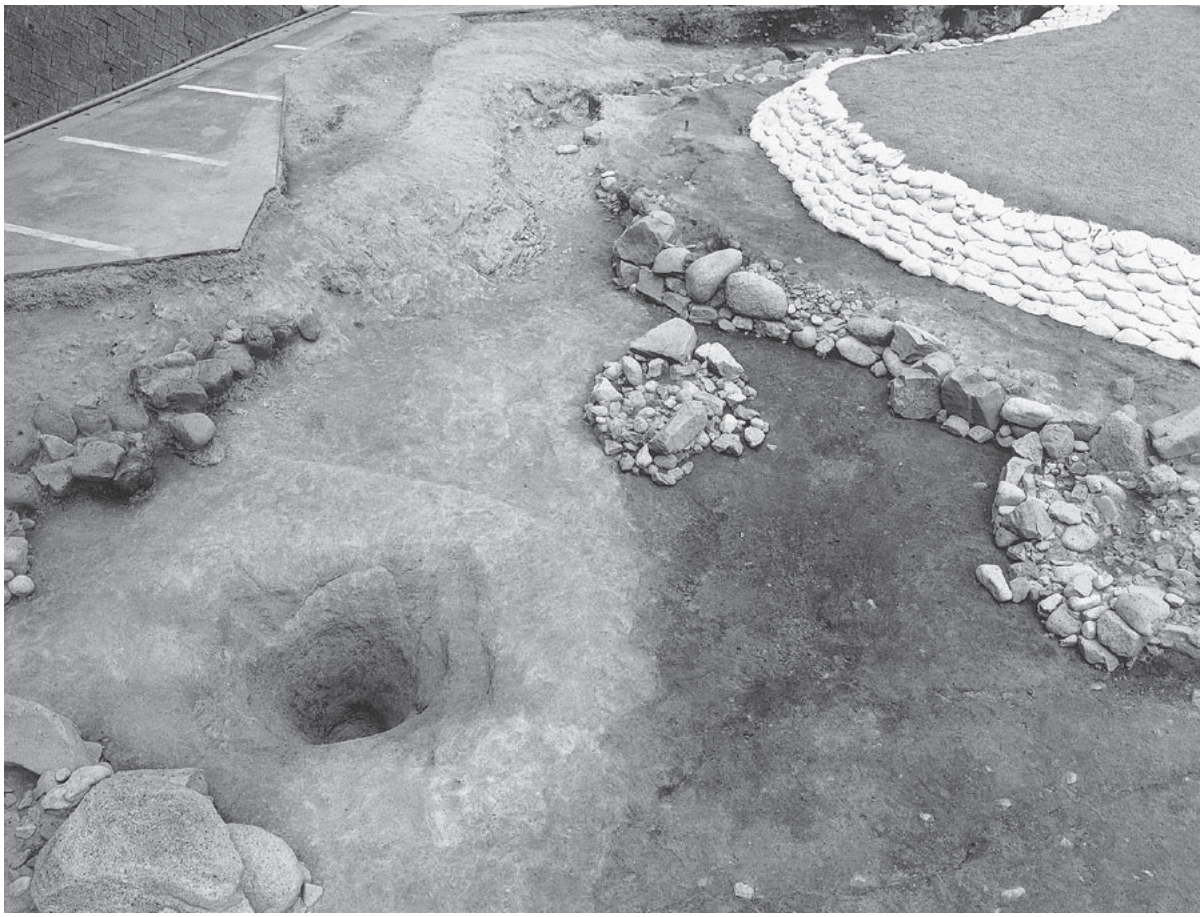
SG1改修埋め立て土遺物出土状況

SG1敷石施設撤去後の護岸(1)（南東より）

SG1敷石施設撤去後の護岸(2)（東より）

SG1完掘状況(1)（南上空より）

SG1完掘状況(2)（南西上空より）



SG1石組み遺構１と魚溜 SK52（北西より）

SG1石組み遺構１近景（南西より）

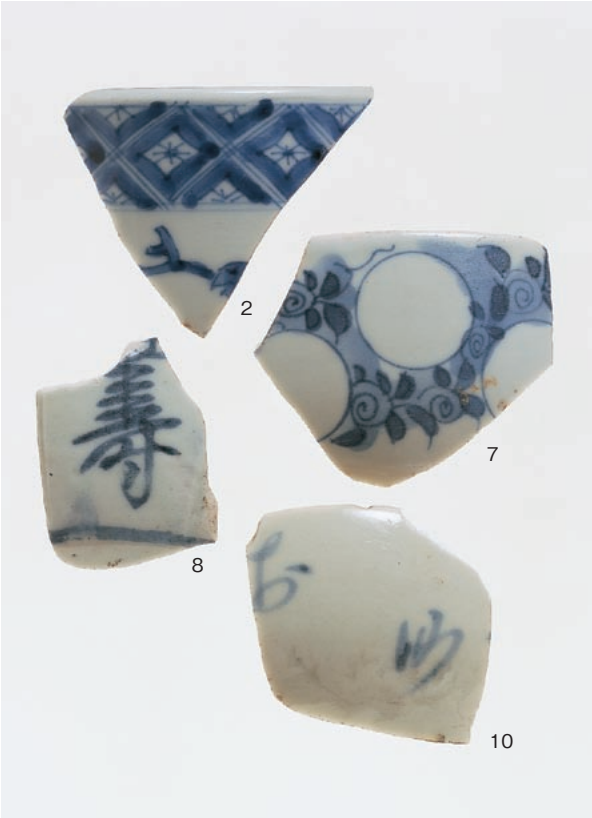
SG1北護岸とSK53・54（南西より）

SG1SK53完掘状況（南より）

SG1SK54完掘状況（南西より）

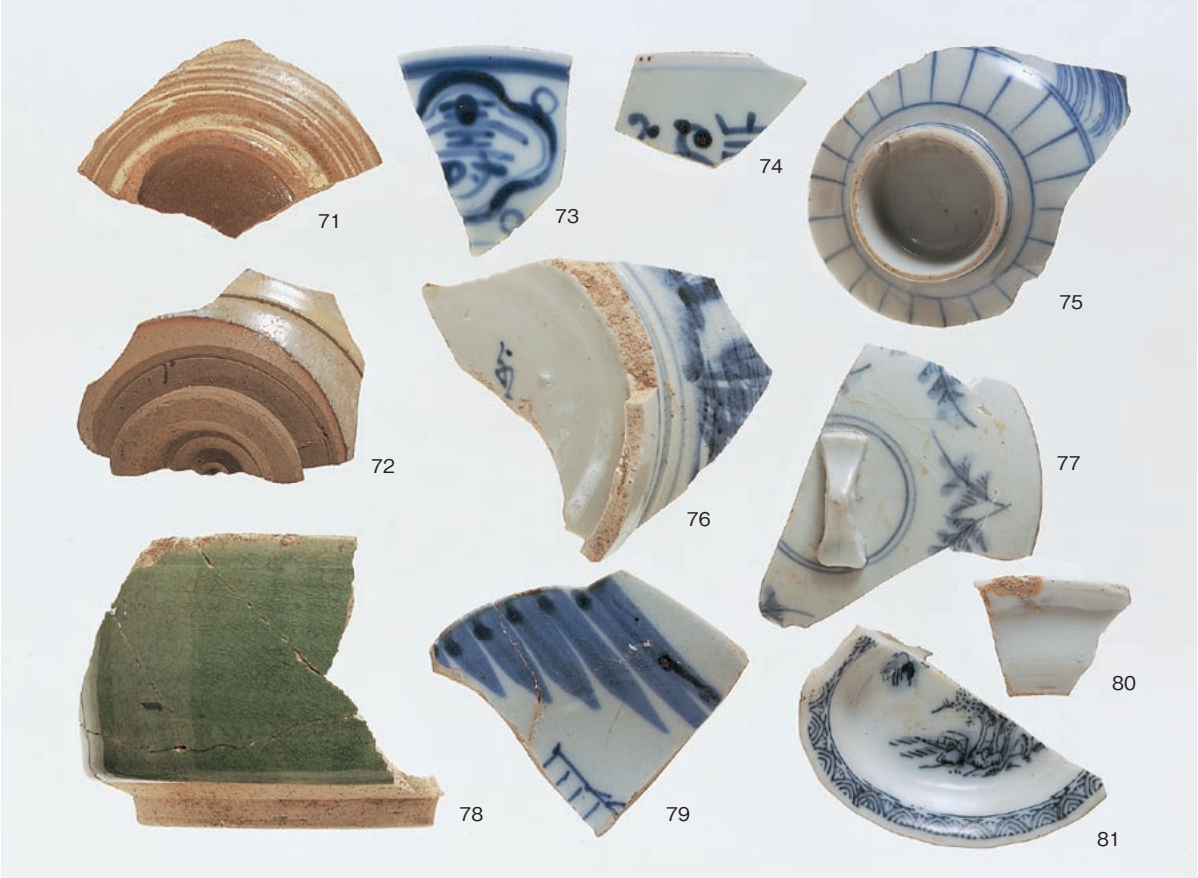
SG1SK55甕出土状況

SG1完掘状況(3)（南東より）



試掘調査出土遺物(1)

試掘調査出土遺物(2)



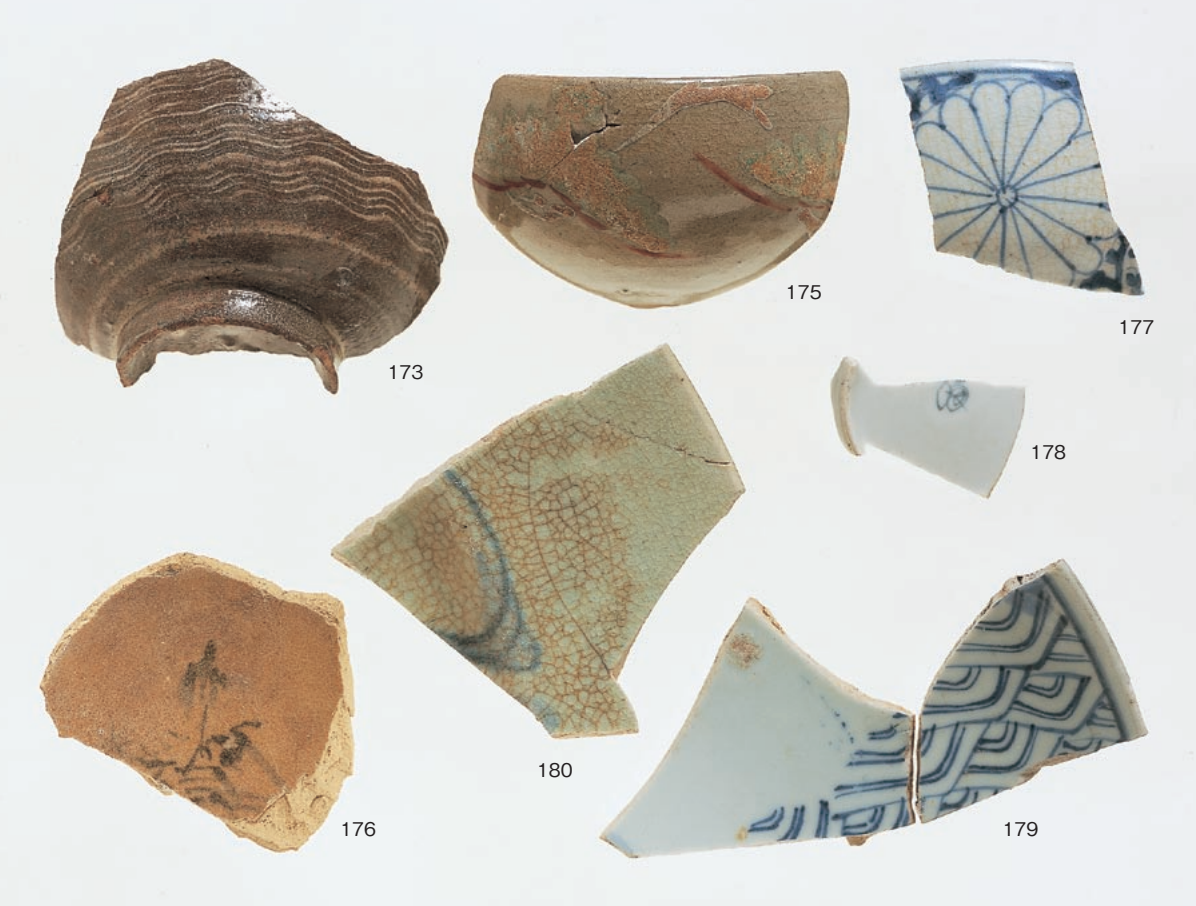
SK6、地下蔵SK3出土遺物

地下蔵 SK3、SK1・2出土遺物

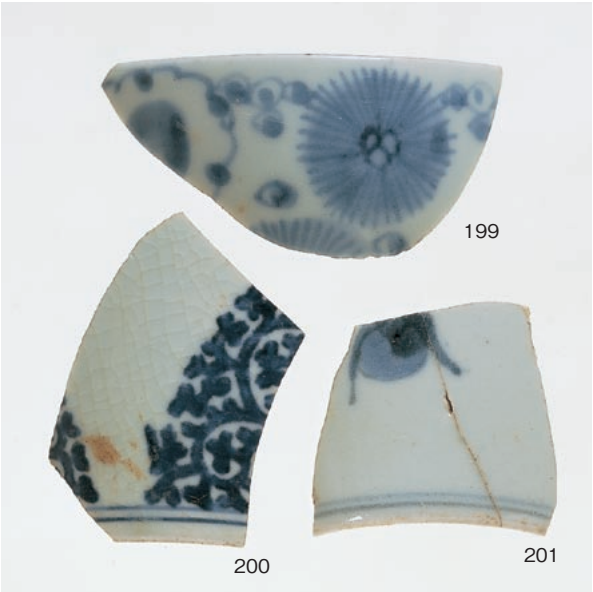
SK4出土遺物

SK4・5出土遺物

SK8・9出土遺物



SK9・10出土遺物



SK10・11・13・14・15出土遺物

SK17出土遺物

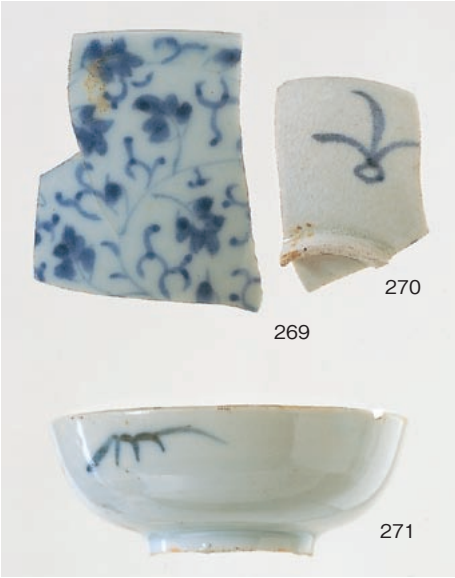
SK17・19・21・36・37出土遺物

SK38出土遺物(1)

SK38出土遺物(2)

279

110


270
269
271

280

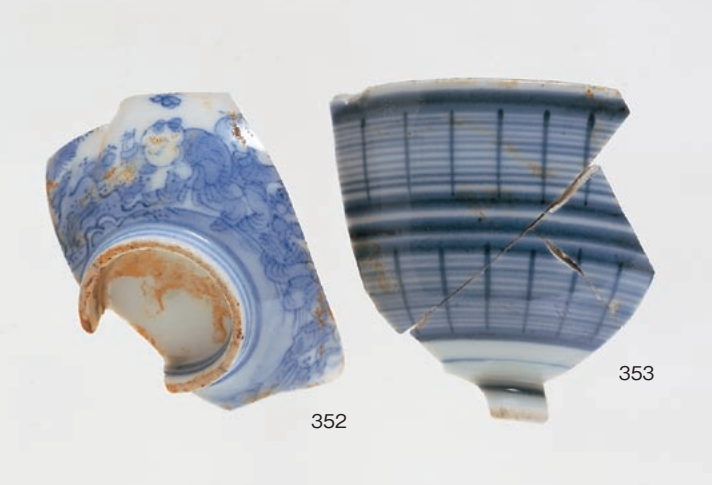
306

305

SK44・46・51、SX1・3出土遺物

SX2出土遺物

埋甕１、改修時SG1造成土出土遺物



SG1池底、改修時SG1造成土、改修後SG1埋土出土遺物

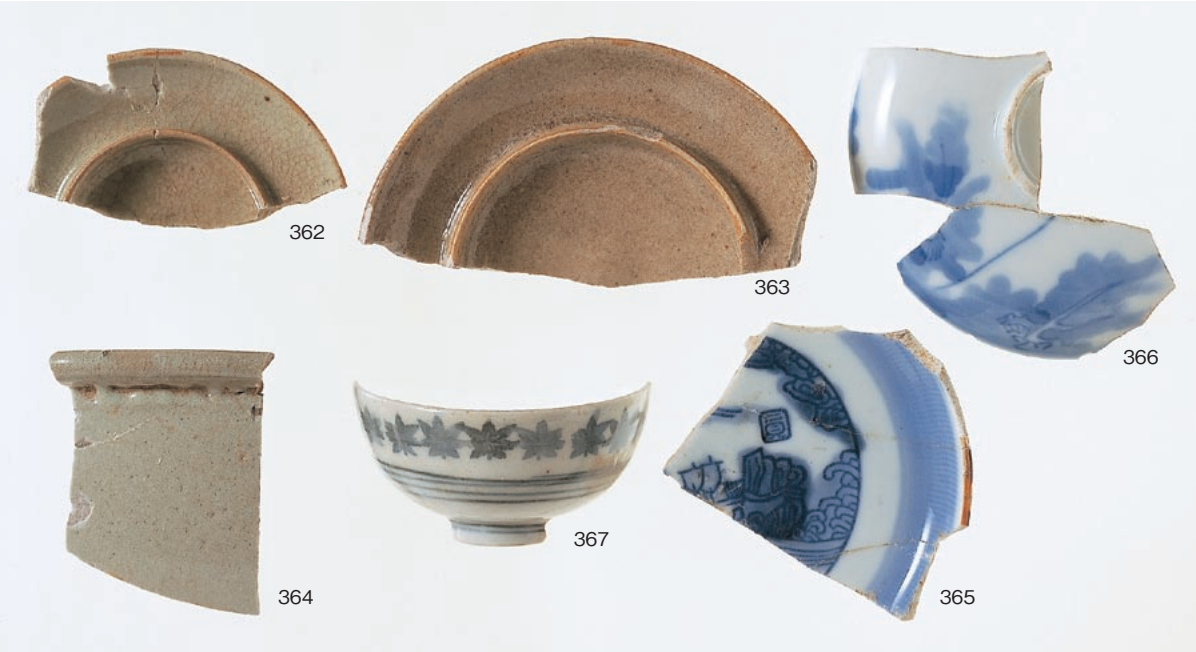
SG1周辺採集遺物

357

374
358

373

SG1SK55、SD1・2出土遺物



SD2出土遺物

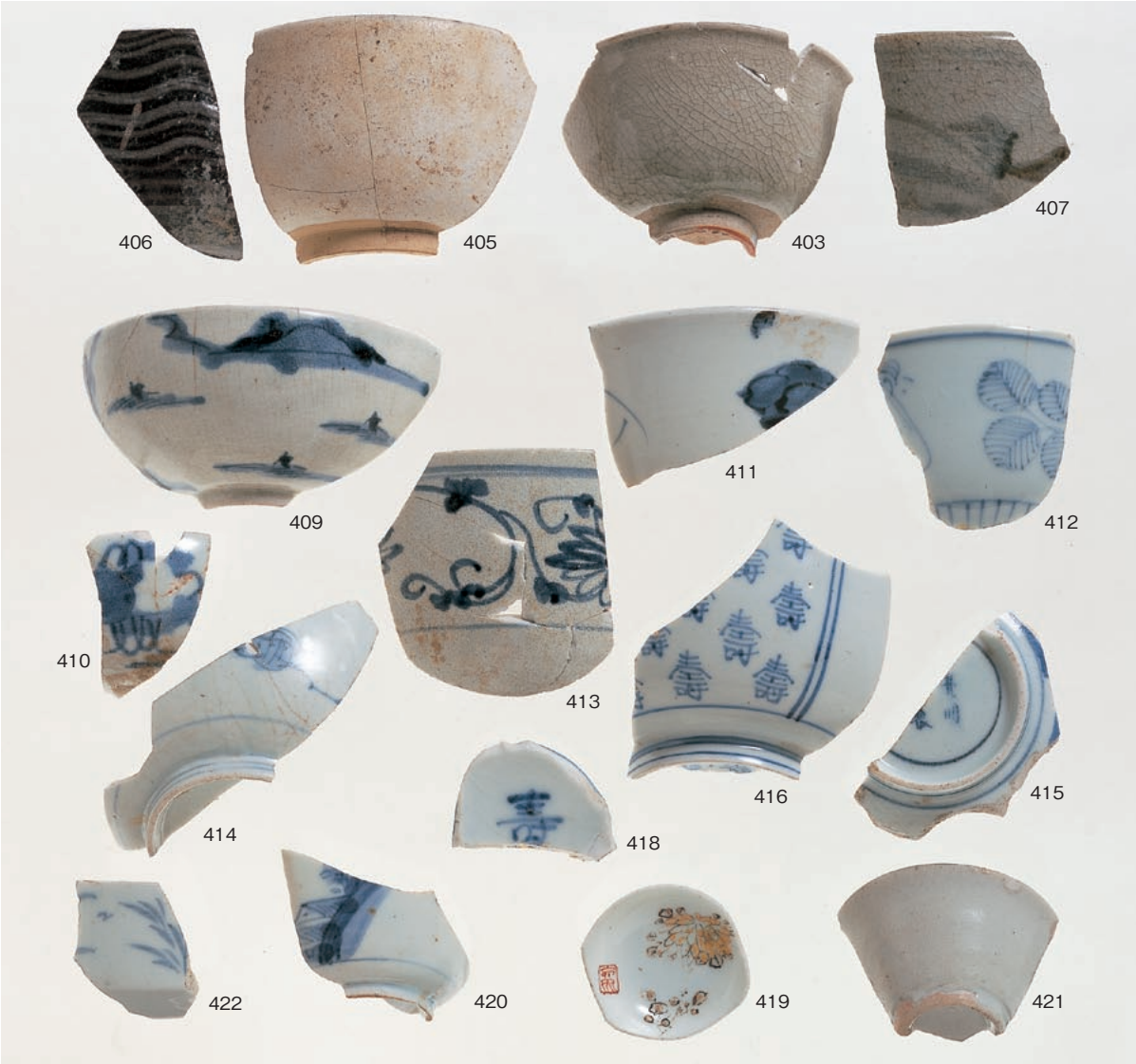
調査区東部・北東部採集遺物

攪乱 1 出土、出土地点不明表採遺物

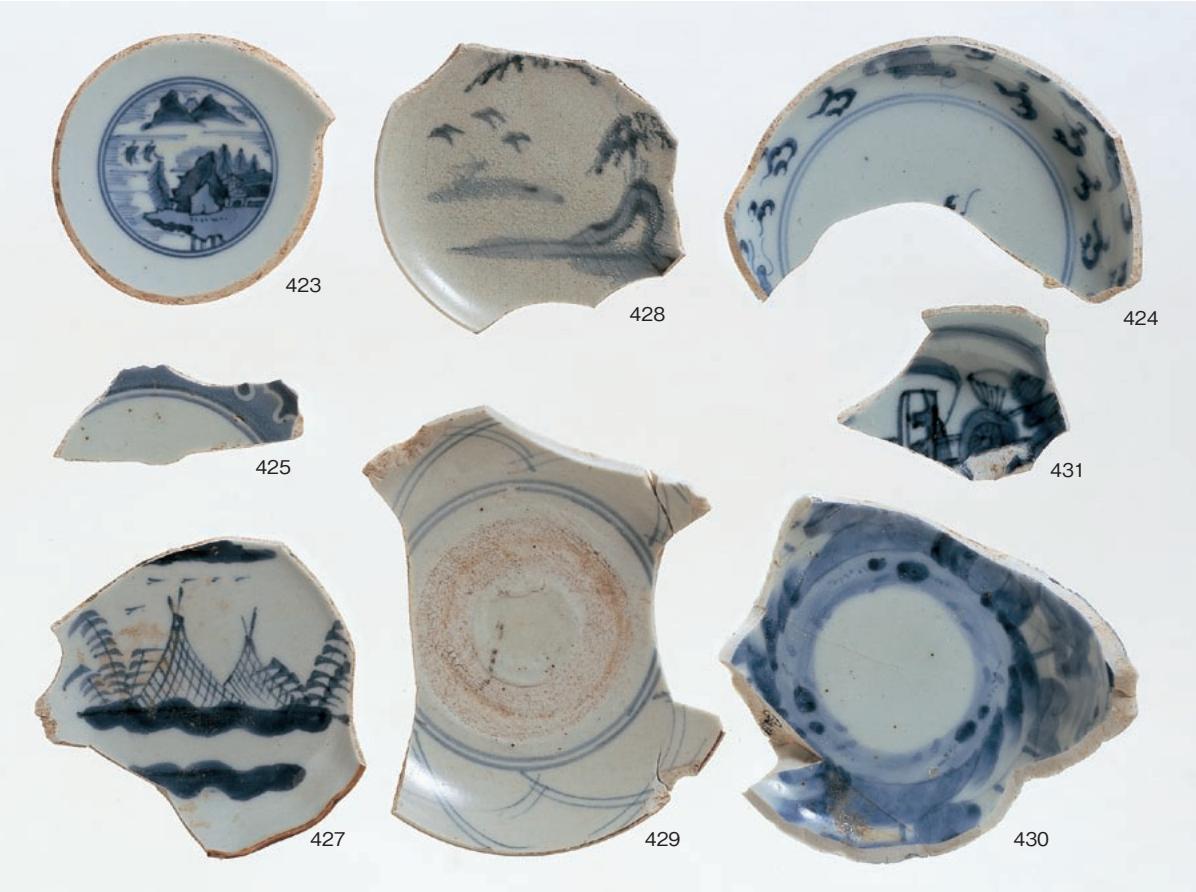
404

417

408


406
405
403
407
409
411
412
410
413
414
416
415
418
422
420
419
421

調査区西部採集遺物(1)



調査区西部採集遺物(2)

調査区南部・西部採集遺物(3)、金属製品

報告書抄録

ふりがな	ばんちょういせき
書名	番町遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第109集
編著者名	栗田茂敏
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１　TEL(089)948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67－６　TEL(089)923-6363
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばんちょういせき 番町遺跡	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 いちばんちょう 一番町	38201		33° 50′ 18″	132° 46′ 17″	20040801～ 20050630	1017.5㎡	公共施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
番町遺跡	武家屋敷	江戸時代	建物跡、井戸、土坑、地下蔵、園池	陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、銭貨、金属製品	

松山市文化財調査報告書 第109集

番　町　遺　跡

平成18年３月31日　発行

編・集
発　行　松　山　市　教　育　委　員　会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６-１
ＴＥＬ（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（089）923-6363

印　刷　セ　キ　株　式　会　社
〒790-8686　松山市湊町７丁目７番地１
ＴＥＬ（089）945-0111